

鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (18)

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

IX

山崎 B 遺跡

1982. 3

鹿兒島県教育委員会



山 崎 B 遺 跡 全 景

序 文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う始良郡栗野町山崎B遺跡の発掘調査は、昭和53年4月10日から昭和54年10月12日までの間実施し貴重な発見をしました。

その後、昭和56年度に整理を行い、ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ 第18集」として発刊することになりました。

県教育委員会では、この報告書が文化財保護のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり、日本道路公団はじめ栗野町教育委員会及び調査に協力していただいた地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

昭和57年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄

調査の現況

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の経緯は、それぞれ「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－」で述べた。昭和46年、始良郡始良町小瀬戸遺跡で調査を開始して以来すでに10年間にも及んでいる。

この間、調査については、年度毎に日本道路公団福岡建設局との間に「発掘調査の委託契約」を行い、これに基づいて実施してきた。この間発掘調査の対象とした遺跡は38箇所であったが、昭和55年2月21日、木場A遺跡を最後にすべてを終了した。

一方、調査の整理・報告については、第Ⅰ～第Ⅷ集で27遺跡、第Ⅸ集で本遺跡と28遺跡を発表したことになる。残された遺跡についても、今後、ひきつづき報告してゆく計画である。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

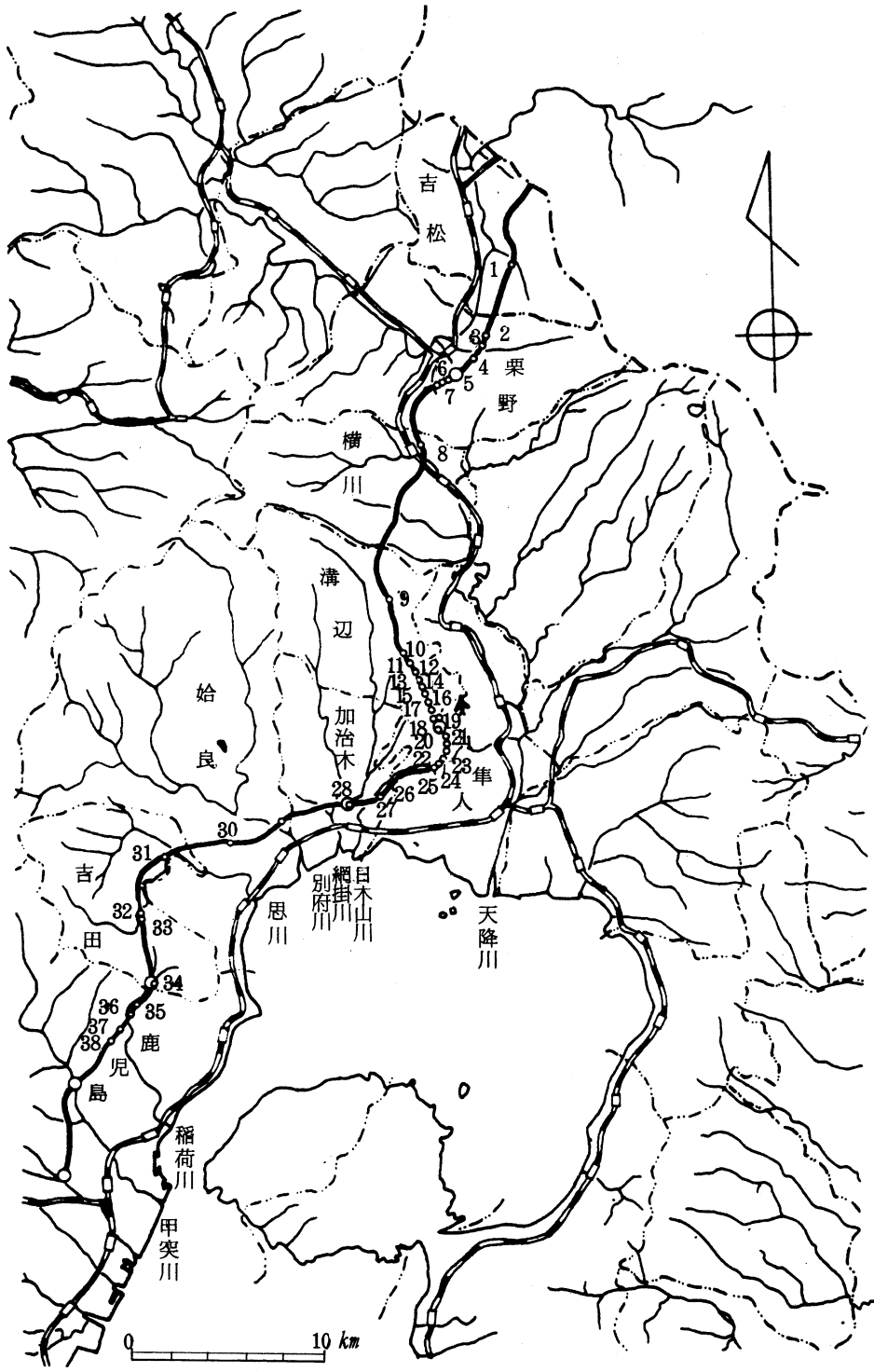
(昭和46年～昭和56年3月)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	調査員	概要
1	堀之内B	吉松町川添	54.9.10 } 54.9.27	500	立神 青崎	○土師式土器の散布
2	木場A	栗野町木場	一次 53.12.11 } 54.3.31 二次 54.8.28 } 55.2.22	14,000	牛ノ浜 新宮東 宮池田 池長畑 中野島	①旧石器時代(ナイフ形石器, 細石器 剥片)集石遺構 ②縄文時代(早期～前期)土器, 石器 集石遺構 ③土師式土器散布
3	木場B	〃	54.8.28 } 54.11.24	4,500	新出東 弥口 中柴 島	○土師式土器の散布 ○中世溝状遺構
4	木場C	〃	53.11.27 } 54.1.13	2,700	長野 出野 中口 村	①縄文時代(集石遺構・土器・石器) ②古墳時代(土器) ③中世(土器・土錘・砥石)
5	山崎A	〃	52.12.13 } 53.3.26	6,000	吉永 牛ノ浜	①縄文時代土器片 ②古墳時代土器片・集石遺構 ③奈良～平安時代, 土師器, 須恵器, 建物跡
6	山崎B	〃 米永	53.4.10 } 54.10.12	21,800	牛ノ浜 西田東 中島 出口	①旧石器時代 ②縄文時代(早～後期)土器, 石器, 集石遺構, 土坑 ③中世(堀, 建物跡, 土器, 土錘, 砥石)

7	山崎 C	栗野町米永	52.12.13 } 53.3.26	3,000	中西 村田	•土師器, 須恵器, 青磁片の散布	
8	中尾田	横川町中野	53.5.15 } 54.10.6	9,800	新東 中島 井ノ上	•①縄文時代, 早, 前, 中期土器 (前平, 手向山, 阿高) 石器 集石遺構 ②中世山城, 建物遺構, 陶磁器	
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51.2.6 } 52.11.31	17,000	吉永 牛ノ浜	•①縄文時代(前期・後期)土器片 ②土師器片	
10	石峰	溝辺町麓	一次 50.10.2 } 50.12.19 二次 51.11.24 } 53.5.15	20,000	河出 西戸 青池	口口 田田 崎崎 畑畑	•①縄文式土器(前期~晩期)石器 住居址 I, 集石遺構 ②弥生式土器 ③土師器, 溝状遺構 ④陶磁器
11	柳ヶ迫	〃	51.3.22 } 51.5.17	700	長野 西田	•①旧石器時代(細石器) ②縄文時代(後期)土器片	
12	長ヶ原	〃	50.10.1 } 50.11.28	1,140	新東 中村	•①旧石器時代(細石刀器) ②縄文時代(前期)土器片 ③弥生時代(後期)土器片	
13	松木原	〃	50.9.18 } 50.9.26	420	新東 池中 畑村	•弥生時代(後期)土器片, 黒曜石	
14	葛根塚	〃	50.9.8 } 50.9.26	790	新東 池中 畑村	•①弥生時代(後期)土器片, 石鏃 (黒曜石)	
15	七ツ次	〃	50.8.5 } 50.9.18	2,700	弥池 中	栄畑 村	•①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片
16	松ヶ迫	〃	50.7.14 } 50.8.11	600	弥池 立	栄畑 村	•①弥生時代(後期)土器片
17	木屋原	〃	50.4.7 } 51.3.31	4,520	弥池 立	栄畑 村	•①縄文時代(前期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片
18	山神	〃	49.6.13 } 50.4.28	6,950	平田 牛ノ 吉立 永神	•①縄文時代(前・後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③平安時代・建物遺構, 溝状遺構, 須恵器, 土師器, 墨書土器 (甕, 廣~坏2, 破片15)	

19	曲 迫	溝辺町 麓	50.1.27 } 50.3.31	4,000	諏 弥	訪 栄	•①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③土師器片
20	栢 場	〃	49.6.5 } 50.3.27	2,500	平 牛 吉	田 浜 永	•①縄文時代(前・後期)土器片
21	西 免	隼人町西光寺	49.5.25 } 50.2.8	1,500	平 吉	田 永	•①弥生時代(後期)土器片 ②玉髓, 黒曜石 ③土師器片
22	中 尾	〃	49.9.25 } 50.2.10	2,500	出 吉	口 永	•①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(終末期)土器片, 磨製 石鏃 ③土師器片
23	入 道	〃	49.8.5 } 50.3.31	1,720	〃	〃	•古墳時代(終末期)土器片, 石鏃, 土師器, 溝状遺構, 古道跡
24	南十三塚	溝辺町崎森	49.7.16 } 49.9.20	600	出 中	口 村	•弥生時代(終末期)土器片
25	東 原	〃	49.9.17 } 50.1.24	8,700	諏 弥 中	訪 栄 村	•①縄文時代(早期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片, 住居跡 1基 ③土師器片
26	桑ノ丸	〃	49.8.1 } 50.4.25	8,750	新 牛 中	東 浜 村	•①縄文時代(早・前・後期)土器片 石斧, 石鏃
27	三代寺	加治木町 日 木 山	49.3.15 } 49.7.31	2,300	河 新 弥 牛	口 東 栄 浜	•①縄文時代(早・前期)土器片, 石 斧, 石鏃, 集石遺構 ②弥生時代(終末期)土器片 ③土師器, 土壇, ピット群
28	建馬場	加治木町反土	46.12.8 } 46.12.12	180	盛 立	園 神	①弥生時代(後期)土器片
29	松木田	始良町鍋倉	46.12.12 } 46.12.15	42	〃	〃	①柱穴-22個
30	小瀬戸	始良町 西 餅 田	46.8.20 } 46.11.2	3,050	河 戸 立 尾 中 有	口 崎 神 上 間 元	①縄文時代(前期)土器片(塞, 神) ②弥生時代(中期)土器片 ③墨書土師器(伴, 大伴, 原仲家)青 磁, 白磁, 緑釉陶器, 須恵器, 防錘 車, 土錘, 井戸棹, 木製品, 柱穴群 井戸, 溝状遺構

31	小山	吉田町 東佐多町	46.11.6 } 47.2.10	1,050	河戸立尾中有	口崎神上間元	①縄文時代(早・前期)土器片 (吉田, 塞ノ神)集石 ②弥生時代土器片 ③土師器, 須恵器片, 青磁, 白磁緑釉陶器, 滑石製石鍋
32	谷口	吉田町本城	46.11.10 } 46.11.18	124	盛立	園神	①縄文時代(後期)土器片, 黒曜石剥片 ②弥生時代土器片 ③土師器, 白磁, 滑石製石鍋
33	上城城址	〃	47.1.14 } 47.1.18	20,000 現地踏査	盛田	園野辺	①中世~山城, 青磁, 白磁, 瓦器
34	宮後	吉田町 宮ノ浦	46.11.10 } 46.11.18	44	〃	〃	①縄文時代(晩期)土器片, 石鏃(黒曜石) ②土師器
35	木の迫	鹿児島市 川上町	50.12.9 } 50.12.11	300	立牛吉	神浜永	•①弥生時代(後期)土器片
36	加治屋園	〃	50.11.26 } 51.7.31	1,200	弥新長中	柴東野村	•①旧石器~細石刃, 細石刃核, 同時期土器片(有文) ②縄文時代前期土器片(塞ノ神式)集石遺構 ③縄文時代中期~後期土器片
37	加栗山	〃	50.2.15 } 51.10.16	30,600	戸青立吉牛中	崎崎神永浜村	•①旧石器~細石刃, 細石刃核, 石鏃13, 局部磨製石斧1, 大型台形加工石1 ②縄文時代(早期)土器片(吉田式前平式), 住居跡17, 土壇72, 集石遺構14, 石鏃, 陰陽石(軽石製) ③中世~山城, 棚列跡, 空堀, 柱穴青磁, 瓦器
38	神の木山	〃	50.5.12 } 50.5.15	20	戸青	崎崎	•①耕作土の下部はシラス層で遺物なし



遺跡名

1. 堀之内 B
2. 木場 A
3. 木場 B
4. 木場 C
5. 山崎 A
6. 山崎 B
7. 山崎 C
8. 中尾田原
9. 木佐貫原
10. 石峰
11. 柳ヶ迫原
12. 長ヶ原
13. 松木原塚
14. 葛根次
15. 七ツヶ迫
16. 松ヶ屋原
17. 木山神
18. 山曲迫場
19. 曲免尾道
20. 杉免尾道
21. 西入尾道
22. 中入尾道
23. 入南十三塚
24. 南十三塚
25. 東原丸
26. 桑ノ丸
27. 三代寺場
28. 建馬場
29. 松木田戸
30. 小瀬戸山口
31. 小谷ノ口
32. 谷上城址
33. 上宮後
34. 宮の迫
35. 木の迫
36. 加治屋園
37. 加栗山
38. 神の木山

縦貫道全遺跡地図

本文目次

序文	
調査の現況	1
例言	11
第1章	12
第1節 調査に至る経過	12
第2節 調査の組織	12
第3節 調査の経過	13
第2章 遺跡の位置及び環境	16
第3章 調査の概要	20
第4章 層位	21
第5章 遺構と出土遺物	26
第1節 旧石器時代	26
第2節 縄文時代	32
1. 遺構	32
2. 遺物(土器)	41
3. 遺物(石器)	68
第3節 弥生時代	95
第4節 古墳時代	95
第5節 古代～中世	96
1. 遺構	96
2. 遺物	116
第6章 まとめ	141

挿 図 目 次

第1図 山崎B遺跡の位置及び周辺遺跡	17
第2図 周辺地域の出土遺物	19
第3図 出土地点	19
第4～7図 地層断面図	22
第8図 旧石器時代石器実測図	27
第9図 縄文時代地形図	28
第10図 集石1・2・3 実測図	29
第11図 集石5・6 実測図	30
第12図 集石7・8・9 実測図	31
第13図 集石10 実測図	32
第14図 集石11・12 実測図	33
第15図 集石14 実測図	34
第16図 集石16 実測図	35
第17図 集石17 I—O区 4b層 №. 146土器出土状況	36
第18図 №. 159土器出土状況	37
第19～20図 縄文時代土壇実測図	38
第21図 縄文式土器出土分布図	39
第22～42図 縄文式土器実測図	47
第43図 縄文時代石鏃出土分布図	69
第44～47図 V層出土の石器	74
第48～51図 Mb層出土の石器	81
第52図 Na層出土の石器	85
第53～55図 III層出土の石器	87
第56～57図 I・II層出土の石器	92
第58図 縄文時代層位より出土の旧石器時代遺物	94
第59図 弥生時代・古墳時代の遺物	95
第60図 中世遺構配置図	97
第61図 堀実測図	99
第62図 堀1の出土遺物	96
第63～64図 堀2の出土遺物	101
第65～70図 掘立柱建物跡実測図	108
第71図 遺構内出土遺物	114
第72図 土壇出土の土師器甕	115

第73図	土壇出土の遺物	115
第74図	土師器(1) 皿	116
第75図	土師器(2) 坏	117
第76図	土師器(3) 埴, 蓋	118
第77図	土師器(4) なべ	119
第78図	土師器(5) 甕, すり鉢	120
第79図	土師器(6) 墨書土器, 線刻土器	121
第80, 81図	黒色土器	123
第82, 83図	須恵器	126
第84図	白磁	129
第85, 86図	青磁	131
第87図	染付	134
第88図	青白磁, 天目	134
第89図	陶器	135
第90図	土製品	136
第91図	石製品	137
第92図	古銭	138
第93図	塚状遺構コンタ図	139
第94図	遺構図	139
第95図	塚状遺構断面図	140

表 目 次

第 1 表	山崎B遺跡周辺の遺跡一覧表	18
第 2 表	旧石器時代遺物一覧表	26
第 3 表	縄文式土器一覧表	42
第 4 表	石鏃分類表	68
第 5 表	V a 層出土の石鏃一覧表	72
第 6 表	V a 層出土の石器一覧表	73
第 7 表	M b 層出土の石鏃一覧表	79
第 8 表	M b 層出土の石器一覧表	80
第 9 表	M a 層出土の石鏃一覧表	85
第10表	Ⅲ層出土の石鏃一覧表	86
第11表	Ⅲ層出土の石器一覧表	89
第12表	I・Ⅱ層出土の石鏃一覧表	91
第13表	I・Ⅱ層出土の石器一覧表	91
第14表	掘立柱建物跡 1 計測表	104
第15表	掘立柱建物跡 3 計測表	104
第16表	掘立柱建物跡 4 計測表	105
第17表	掘立柱建物跡 5 計測表	106
第18表	掘立柱建物跡 6 計測表	106
第19表	掘立柱建物跡 7 計測表	107
第20表	甕出土地区一覧表	119
第21表	墨書土器・線刻土器一覧表	121
第22表	白磁・青磁出土地一覧表	133
第23表	染付の出土地一覧表	134
第24表	土錘一覧表	136

図 版 目 次

図版 1	山崎 B 遺跡全景	143
2	1. 遺跡遠景 (航空撮影) 2. 同	143
3	1. 調査前遺跡近景 (東から) 2. 確認調査風景 (西から)	144
4~5	層 序	145
6	1. 調査風景 2. 調査風景と層序	147
7	1. 第 IVb 層炭化物出土状況 2. 同断面	148
8	1. 集石 3 2. 集石 5	149
9	1. 集石 14 2. №146 土器出土状況	150
10	1. №159 土器出土状況 2. 160 土器出土状況	151
11	1. 土壇 2. 同	152
12	1. 旧石器時代石器 2. 同	153
13~22	縄文式土器	154
23	1. 縄文式土器 2. V 層出土の石器 (石鏃)	164
24	V 層出土の石器	165
26	1. Mb 層出土の石器 2. 同	167
27	1. Mb 層出土の石器 2. 3 層出土の石器	168
28	1. Ma 層出土の石器 2. III 層出土の石器 3. 同	169
29	1. I、II 層出土の石器 2. 同 3. 同	170
30	1. 堀出土状況 2. 堀検出作業	171
31	1. 堀出土状況 2. 堀 1 断面	172
32	1. ピット群 2. 掘立柱建物跡 2	173
33	1. 掘立柱建物跡 3 2. 同竪穴状遺構	174
34	1. 土師器甕出土状況 (平面) 2. 同 (側面)	175
35	1. ピット出土遺物 2. 塚状遺構	176
36	1. 古墳時代の遺物 2. 同 3~4 同土師器 5 同 4 の底 6 土壇出土の遺物	177
37	1. 土壇出土の土師器 2. 同口縁内面拡大 3. 土壇出土の土師器	178
38	1. 土師器 (皿と底) 2. 3. 同 (皿) 4. 同 (皿、糸切り底)	179
39	1. 土師器 (坏) 2. 580 の内面拡大 3. 土師器 (坏) 4. 同 (埴)	180
40	1. 土師器 (坏、糸切り底) 2. 土師器 (蓋) 3. 同 (なべ)	181
41	1. 土師器 (線刻土器) 2. 同黒色土器 3. 須恵器	182
42~44	白 磁	183
45~47	青 磁	186
48~49	染 付	189
50	1. 土製品 (土錘) 2. 土製品 (紡錘車)	191
51	1. 石製品 2. 古銭	192

例 言

- 1 .この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設によって消滅する遺跡について行った事前調査のうち、昭和53年～昭和54年度に発掘した山崎B遺跡の調査報告書である。
- 2 .発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 .発掘調査実施について栗野町役場・教育委員会の協力、援助を得た。
報告書作成に当って、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳・五味克夫・石川秀雄氏・故加治木工業教諭池水寛治氏の指導を得た。
- 4 .本書の執筆は、つぎのとおりである。

第1 . 2 . 3 . 4 章, 第5 章第2 . 5 節, 第6 章	牛ノ浜
第5 章第1 節	長 野
第5 章第2 節	弥 栄
第5 章第2 . 5 節	中 島
第5 章第3 . 4 . 5 節, 第6 章	池 畑・中 村・峯 崎

なお、現場写真、実測図等は調査担当者が主として行ない、掲載図の実測図、製図、写真図版は各担当者が分担した。石器実測図、トレースは中島が行ない、文化課職員 吉永正史 中村耕治、繁昌正幸、同調査員川畑昭光、峯崎幸清の協力を得た。
- 5 ..出土品は、文化課収蔵庫に保管している。整理・復元作業は、収蔵庫の整理作業員が行った。
- 6 .本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 7 .本書で用いた挿図中の縄文および弥生以降の土器、石器の通し番号は図版中の番号と同一である。

第1章

第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団は、昭和47年2月23日「日本道路公団の建設事業等、工事施行に伴う埋蔵文化財包含地の取り扱いに関する覚書」に基づき、鹿児島線（吉松～加治木線）の埋蔵文化財についての協議を求めた。これに対し、鹿児島県教育委員会文化室（当時）は、昭和47年8月2日～10日、同月18日～26日までの2回にわたり、延長38km、幅2kmにわたって分布調査を行った。この結果に基づいて、文化室は路線の決定については、埋蔵文化財の保護の上から十分配慮されることを要望した。

さらに昭和49年1月～2月、河口貞徳氏の協力を得て、再確認のための分布調査を実施し、これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め、道路公団と協議した。そして保存する遺跡1ヶ所（吉松町堂迫地下式横穴）、記録保存する遺跡10ヶ所（当遺跡等）が決定した。

発掘調査は、昭和53年7月17日より昭和54年9月29日までの約15カ月間行った。

第2節 調査の組織

調査責任者	文化課長	谷崎哲夫	(昭和53年度)
	文化課長	山下典夫	(昭和54・55年度)
	文化課長	猿渡侯昭	(昭和56年度)
	課長補佐	荒田孝助	(昭和53年度)
	課長補佐	新時弘	(昭和54～56年度)
	課長補佐	本田武郎	(昭和56年度)
調査企画	専門員	本蔵久三	(昭和53～55年度)
調査担当者	主任文化財研究員	諏訪昭千代	
	文化財研究員	出口浩	
	主事	新東晃一	
	主事	立神次郎	
	主事	弥栄久志	
	主事	牛ノ浜修	
	主事	長野真一	
	文化財調査員	西田茂	
	文化財調査員	中島哲郎	
	文化財調査員	井ノ上秀文	
	文化財調査員	宮田栄二	
事務担当	係長	中条亨	(昭和53・54年度)
	主幹兼係長	川畑栄造	(昭和55・56年度)

事務担当主	事	伊地知 干 晴 (昭和53年度)
	主	査 安 藤 幸 次 (昭和55・56年度)
	主	事 天 辰 京 子 (昭和53～55年度)
	主	事 山 下 玲 子 (昭和56年度)

第3節 調査の経過

発掘調査は、昭和53年7月17日から昭和54年9月29日まで行ったが、経過は日誌抄により以下略述する。

調 査 の 経 過	
昭和53・7月	17日、山崎B遺跡発掘調査開始。遺跡全体に10Mグリッドを設定する。草刈り。 10×2mのテストトレンチを設け遺跡の範囲及び遺物包含層の把握に努め掘り下げ実施。 G・H区で南北に延びる堀状遺構を検出する。トレンチ調査の結果、土師器・須恵器・青磁・白磁・縄文式土器を出土し、Ⅱ層下位に土師器の包含層、Ⅳ層に縄文時代早・前期の包含層を確認する。
8月	範囲確認のためのトレンチ調査及び堀の検出作業。 G-5～10区、H-7・8区堀検出作業。埋土中に青磁・白磁・陶器片出土する。 H-10区で縄文時代前期土器（木屋原式）一括出土。
9月	範囲確認のためのトレンチ調査及び堀の検出作業。 G・H-8～10区堀検出作業。堀の内に古道あり確認を急ぐ。G-8区堀の埋土内に縄文時代早期土器（前平式）が出土する。縄文時代早期の包含層の可能性あり。 21日、河口貞徳先生・五味克夫先生に堀の検討及び指導を願う。
10月	範囲確認のためのトレンチ調査及び堀の検出作業。 E・F-8～11区のグリッド全面調査。Ⅲ層上面に中世時代のピット群検出。内黒土師器、土師器の出土。E-6・7区ピット群全面検出作業。古道4ヶ所検出。F-9区、溝状遺構検出。
11月	範囲確認のためのトレンチ調査及び一部グリッドの全面調査。E・F-8～12区ピット検出作業。F-4・5区堀遺構検出。F-8・9区古道確認遺構検出作業。F-8区Ⅱ層最下磨製石鏃、E-13区Ⅱ層最下「九」線核のある土師器出土。 14日、始良・伊佐地区文化財専門講座現地見学会。
12月	範囲確認のためのトレンチ調査及び一部グリッドの全面調査。 H-5～11区、淡紅色粘質ローム層～砂礫層掘り下げ。F-3区、G-12区堀検出。 E・F-12～15区中世遺構検出。古銭出土「洪武通宝」「至道元宝」「洪徳通宝」 H-1区、全面調査、4b層塞ノ神式土器出土。 14日、河口貞徳先生指導。

S 54 1 月	<p>8日作業開始。中世の遺構検出作業及び縄文時代の包含層及び遺構検出作業。 E・F-12~17区, 中世遺構検出。E・F-14・15区, 溝状遺構・古道検出。 H・I-1区, 塞ノ神式土器検出。礫群(集石)検出。 E・F-13・14区, 掘立柱建物跡確認。</p>
2 月	<p>中世の遺構検出作業及び縄文時代の包含層及び遺構検出作業。 I-1区, 塞ノ神式土器検出。E・F-18, 19区, 前平式土器検出。C-6~14区 中世遺構検出。 7日, 岡崎敬先生指導, 15日, 池水寛治先生指導。</p>
3 月	<p>中世の遺構検出作業及び縄文時代の包含層及び遺構検出作業。 C-5~13区, 中世遺構検出作業。C-9区溝状遺構検出。E・F-16・17区Ⅲ層 掘り下げ。H-O区V層下部より無文土器出土。C-13区3a層小型磨製石斧出土。 H~J-1区, 砂礫層掘り下げ。 19日, 石川秀雄先生, 地質指導。</p>
4 月	<p>中世の遺構検出作業及び縄文時代の包含層及び遺構検出作業。 H~J-0・1区, 砂礫層掘り下げ。C・D-10~13, F~H-2・3区中世遺構 検出作業。E・F-13・14区, 2間×3間掘立柱建物跡検出。堀の検出。中世遺構検 出終了。 28日, 航空写真撮影(ヘリコプター)</p>
5 月	<p>縄文時代の包含層及び遺構検出作業。 H・I-1区, 砂礫層確認調査。C~F-8~11区縄文包含層掘り下げ。C-3区 集石検出。G・H-4~7区, 砂礫層確認調査。 9日, 山口副知事, 道路建設課, 公団視察。</p>
6 月	<p>縄文時代の包含層及び遺構検出作業。 G・H-5~11区, トレンチ調査。中世遺構面地形測量図作成。 D・E-1~3区, 縄文時代前期の塞ノ神式土器。D~F-16・17区に縄文時代早 期の吉田式・前平式土器の分布がみられる。その他, 集石も数箇所確認。</p>
7 月	<p>縄文時代の包含層及び遺構検出作業。砂礫層掘り下げ。 G~I-2区, トレンチ砂礫層掘り下げ。 集石15基確認検出作業。遺跡全体にM層縄文時代前期の土器片分布する。縄文時 代地形測量図作成。 6日, 河口貞徳先生指導。9日, 河口貞徳, 三島格, 高宮広衛, 知念勇, 上村俊雄 先生見学。</p>
8 月	<p>縄文時代の包含層及び遺構検出作業。砂礫層確認掘り下げ。 20m間隔でトレンチにて砂礫層の層位確認。M層に塞ノ神式土器多くV層に前平式 土器が多く出土する。F-14区, V層埋土土壇検出。E-13区M層チャート製ナイ</p>

	フ形石器出土。
9 月	<p>縄文時代の包含層及び遺構検出作業。砂礫層確認掘り下げ。</p> <p>砂礫の層位確認のためのトレンチ調査。D・E・F-14・15区V層掘り下げ。上面より前平式土器出土。F-12区土壇検出。F-13区集石（Mb下）実測。縄文時代（V層上面）に於ける地形測量。砂礫層地層断面図作成。砂礫層中にローリングをうけた石器出土。</p>
10 月	<p>縄文時代の包含層及び遺構検出作業。砂礫層確認掘り下げ。</p> <p>砂礫の層位確認のためのトレンチ調査。全体のV層掘り下げ。土壇4・5・6検出写真撮影，実測終了する。遺物は，V層上面まで出土し，V層中，下面にはほとんど出土しない。但し，F-4区に無文土器がV層下面に検出する。12日，山崎B遺跡発掘調査終了する。</p>

第2章 遺跡の位置及び環境

山崎B遺跡は、鹿児島県始良郡栗野町木場牛瀬戸に所在し、鹿児島空港の北約16kmの地にあり、国鉄栗野駅の南西約750m、標高210mのシラス台地上にある。

遺跡の所在する栗野町は、鹿児島市街地より北東約44kmの鹿児島県の北部に位置する。東では、霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と境を接している。北は熊峯を隔てて吉松町、西は伊佐郡菱刈町、西南隅に国見岳がある。南は牧園・横川両町と境を接しているが、火山灰土で地形が複雑である。

熊本県白髪岳に源を発した川内川は、吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地をつくり、米作地帯を形成している。以前は、川内川の氾濫のたびに中央低地は泥海化するのが通例であったが、護岸工事の進歩によって近年ようやく被害を僅少に止めるようになった。

栗野岳の裾野は栗野町に広く広がって来ており、水の浸食がひどく地形は複雑であるが、一帯は火山灰土に覆われ、火山岩・火山灰・砂土が多くみられる。又、幸田・恒次・米永方面は、栗野と国見岳等の裾野で、小高原の形となっている。

遺跡のある牛瀬戸という地名の記録として、1704年、東大寺の再建の際、大佛殿の紅梁を2本、宮崎県白鳥山より奈良へ運搬したときのもので残っている。その一部を引用すると「式本之木山出し之道法白鳥山ヨリ栗ノ牛瀬戸迄道法九里申、三月十三日迄二出し牛瀬戸ヨリ船場濱ノ市迄七里此間二おとり越ト申難所有濱ノ市迄五月二式本共引付ケ申由前田利兵衛、加藤楯兵衛方迄以書付五月廿五日二申越付」と記載され¹⁾、又、郷土史には、炭疽病予防のため、市来どんの屋敷で牛の血を採っていた。このとき牛を引いて瀬戸を通っていたので牛瀬戸と呼ぶようになったという²⁾。このことより、この地は以前より街道筋にあったと思われる。

遺跡の周辺には、多くの遺跡が研究者等により確認されている。旧石器時代では、細石刃、細石刃核等が採集されている麦生田遺跡³⁾。縄文時代では、栗野工業高校建設に伴う花ノ木遺跡⁴⁾九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された木場遺跡⁵⁾がある。古墳時代では北方遺跡⁶⁾の地下式横穴が調査されている。歴史時代では、松尾城跡⁷⁾があり、本丸・二ノ丸跡が現存し、田尾原稲葉崎⁸⁾には県指定史跡の供養塔群がある。

(1) 『大佛殿再建記(天)』 1704

(2) 『栗野町郷土史』 栗野町

(3) 林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」 鹿児島考古8号 1973

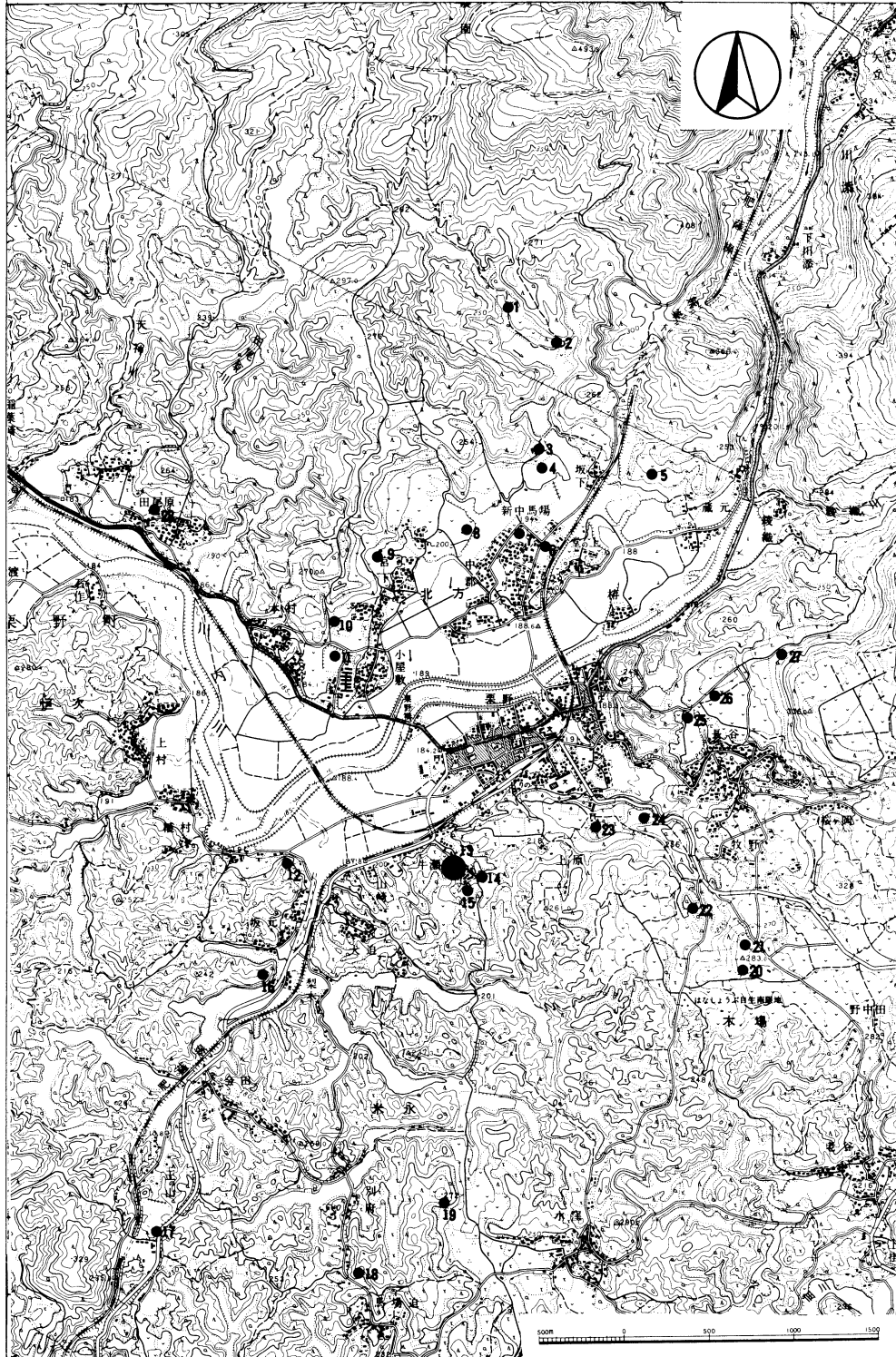
(4) 鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」 1975

(5) 鹿児島県教育委員会 現存報告書作成中

(6) 河川貞徳「北方地下式横穴」 鹿児島考古5号 1971

(7) (1)と同じ

(8) 五味克夫「栗野町稲葉崎・田尾原供養塔群」鹿児島県文化財調査報告書第13集

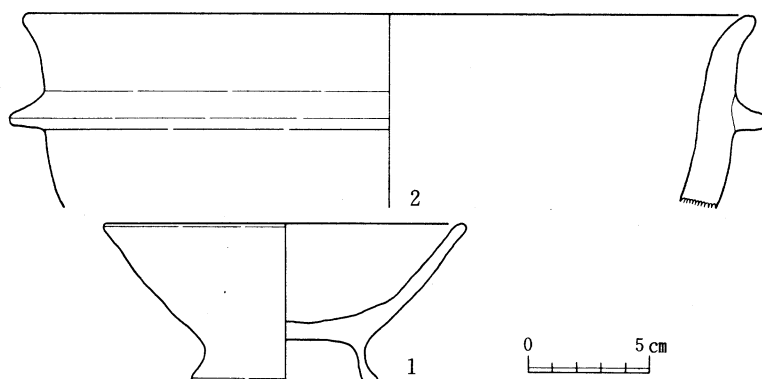


第1図 山崎B遺跡の位置及び周辺遺跡

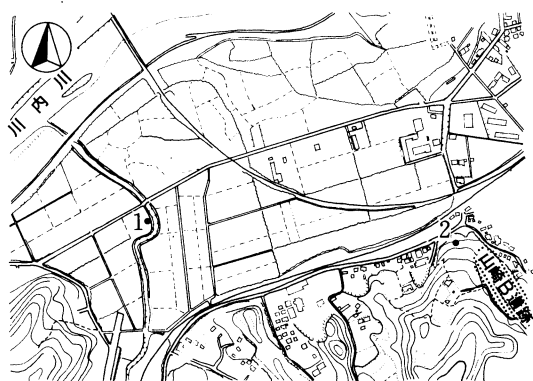
No.	遺跡名	所在地	備考	
1	山ノ口B	始良郡栗野町北方山ノ口	弥生式土器	
2	山ノ口A	〃 〃 〃	縄文・弥生式土器・土師器	
3	麦生田	〃 〃 麦生田	旧石器時代(細石刃・細石刃核)	(1)
4	九日田	〃 〃 九日田	縄文式土器(出水), 土師器	(2)
5	宇都	〃 〃 宇都	縄文式土器・土師器	
6	堂ノ上	〃 〃 堂ノ上	地下式横穴・地下式板石積石室	
7	新中馬場	〃 〃 新中馬場	積石塚・地下式横穴	
8	柿ノ木	〃 〃 中郡	縄文式土器・弥生式土器	
9	宮下	〃 〃 宮下	縄文式土器・弥生式土器	
10	池ノ川	〃 〃 池ノ川	地下式横穴	(3)
11	迫山	〃 米永迫山	弥生式土器	
12	下坂元	〃 〃 下坂元	弥生式土器	
13	山崎B	〃 木場牛瀬戸	縄文式土器(前平・塞ノ神)・建物跡・堀・土師器	本報告書
14	山崎A	〃 〃 〃	建物跡・古道・土師器	(4)
15	山崎C	〃 〃 〃	青磁・土師器	(4)
16	坂元城	〃 米永坂元	城跡	
17	王ノ山	〃 〃 王ノ山	弥生式土器	
18	石の本	〃 〃 石の本	縄文式土器	
19	後ヶ迫	〃 〃 水窪	弥生式土器	
20	西原	〃 木場西原	縄文式土器(押型文・曾畑・轟)	(1)
21	上佐牟田	〃 〃 上佐牟田	縄文式土器(押型文・曾畑・吉田)	(1)
22	花ノ木	〃 〃 花ノ木	縄文式土器(押型文・塞ノ神・深浦)・集石・土拵	(5)
23	諏訪岡	〃 〃 諏訪岡	縄文式土器(阿高・出水・市来)	(1)
24	木場C	〃 〃 〃	縄文式土器(岩崎)・土師器	(4)
25	木場B	〃 〃 内堀	土師器	(6)
26	木場A	〃 〃 外堀	旧石器時代(ナイフ形石器・剝片), 縄文式土器(前平・塞ノ神)	(6)
27	木場A-2	〃 〃 本城	旧石器時代(ナイフ形石器・細石刃核)	(6)
28	田尾原供養塔群	〃 田尾原鶴田山	供養板碑8基・五輪塔	(7)

表1 山崎B遺跡周辺の遺跡一覧表

- (1) 林昭男・米満重満 「栗野町の遺跡について」 鹿児島考古8号 1973
- (2) 鹿児島県教育委員会発掘 現在整理中
- (3) 河口貞徳「北方地下式横穴」 鹿児島考古5号 1971
- (4) 鹿児島県教育委員会 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ 1981
- (5) 鹿児島県教育委員会 「花ノ木遺跡」 1975
- (6) 鹿児島県教育委員会 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ 1982
- (7) 五味克夫「栗野町稲葉崎, 田尾原供養塔群 鹿児島県文化財調査報告書 第13集



第2図 周辺地域の出土遺物



第3図 出土地点

周辺地域の出土遺物

1は、山崎B遺跡隣接地の墓地移転の際出土したものである。

ほぼ完全な内黒土師器碗である。口縁部直径15.0cm、脚台端直径7.6 cm、高さ6.4 cm、脚台の高さ1.7 cmを測る。底部から口縁へは外へ開きながらまっすぐのび、端部は丸みをおびる。脚台は薄くつくられており、端部が外へふんばる。外側はていねいに横方向にナデられており内面はヘラでていねいに研磨され黒い光沢を呈している。

外側は淡茶褐色を呈しており、2ヶ所に黒斑がみられる。精製した微砂質の胎土を用いており、焼成は良好であるが、内面は剥脱が目立つ。9世紀頃のものと思われる。

2は、県道栗野・加治木線の綿打橋橋梁工事の際採集されたものである。

口縁部直径30.0cmを測るかめ形土器の口縁部である。口縁端付近でくの字状に強く外反し、その少し下に端部がいくらか下がる突帯が貼り付けられる。器厚は1.5cmと厚いが、端部は薄くなっている。外面・内面ともヘラによって横方向にナデられる。茶褐色を呈するが、外面にはススが付着している。黒雲母・石英・長石などの小礫を多量に含む砂質土で、焼成は普通であるが、内面は表面が部分的に剥脱している。

これは貼り付け突帯の形状・器面調整などから考えると弥生式土器のようでもあるが、口縁が強く外反するという特長・胎土などからは奈良時代以降の土師器のようでもある。同時に採集されたものには、いわゆる成川式土器のかめ形土器の頸部もある。

第3章 調査の概要

山崎B遺跡は、南北約270m、東西約80mの川内川南側の岸端部（川内川の氾濫による沖積台地）にあり川内川からの比高は約40mである。背後に小高い山をひかえ北方に平野を望む標高約210mの丘陵縁辺部に位置している。

当地は畑であったが、休耕していたため雑草が繁茂していた。そのためその伐採から始めた。調査実施にあたって、10m四方を単位に区画を設けることとし、縦貫道路のセンターライン、S T A と S T A 杭を結び横線を基準とした。この線と平行に10m間隔の横線を各方設け、南北に0～19、それと直角に10m間隔の縦線を設け、A-1、A-2……C-15と区を設定して区域名を表わすことにした。段取りとした10m毎の10×2mのトレンチ調査を実施し、遺跡の範囲や遺物包含層の把握に努めた。当初、分布調査に基づき縄文時代の遺跡としての調査のはこびとなったが、トレンチ調査の結果、E・F列に堀が検出され、中世の遺構の検出を考えるに至った。

中世の遺構として堀・古道・溝状遺構・掘立柱建物跡・柱穴・土壇の検出をみた。堀は、重複して3本検出され、両端部は調査対象区域外に延びており、把握できなかった。掘立柱建物跡は7棟検出された。また周辺には多くの柱穴が存在し、掘立柱建物跡がその他にも築かれたと思われる。遺物としては、土師器・須恵器・陶磁器・古銭・石製品・土製品の出土があった。

縄文時代の遺構として、Ⅳ・Ⅴ層上面に一か所に集石しているものや、散乱しているもの等形態はまちまちであるが集石が17ヶ所検出され、またⅣ層中にⅤ層が埋土されている土壇が6基検出された。土器は、早朝から晩期までみられ、吉田式・前平式・平椀式・塞ノ神式・政所式土器・押形文土器等が出土した。石器は、石鏃・石匙・石斧・スクレイパー・剥片石器・すり石等が出土している。

砂層の中より旧石器の遺物・細石刃・細石刃核・尖頭器等が出土し、砂礫層中に旧石器時代の遺構が検出できぬものかと調査を進めたが、砂礫層中の出土遺物はほとんどがローリング作用を受け原位置でなく川内川の氾濫によって他方より運びこまれたものと思われる。周辺には木場A遺跡・木場A-2遺跡、麦生田遺跡等の旧石器時代の遺跡がありそれ等の遺跡よりの移動が考えられる。

第4章 層 位

I層からIX層に分けられた。V～VIII層にかけて淡紅褐色や黄褐色の粘質土の入る地点が部分的に認められた。

I層 耕作土

II層 黒色軟質土

E・Fの1区からG-11区にかけて中世の堀が縦断しており、その堀から以東は削平がはげしくII～IV層上部まで消滅している。又、堀以西においても耕作によって攪乱されている状態が多い。須恵器、土師器、陶器片、青磁、白磁等が出土している。

I	III^a層 黄褐色，ボッコ層
II	堀以西は残存状態が良好であった。この層には縄文時代前期～晩期にわたる遺物を包含するが、本遺跡においては出土量は少ない。
III ^a	
III ^b	
III ^c	III^c層 黄褐色パミス層
IV ^a	無遺物層である。
IV ^b	IV^a層 青灰色層
V ^a	塞ノ神式や木屋原式土器を包含している。D-1～3区，D，E，F12～15区に出土がみられる。
V ^c	
V ^e	IV^b層 乳褐色土層 塞ノ神式・平椀式ほか厚手尖底土器，押型文，手向山式等を出土する。
V	V層 黒褐色硬質土層
VI	基本的にはa，b，c，d，eの五つの細分類ができた。b及びdはパミスがブロック状に入りこんでいることを示している。遺物はVa層に包含され吉田式，前平式をはじめ石鏃，剝片を多量に出土した。なお，部分的ではあるが，Ve層にも無文土器片が検出された。
VII	VI層 黄褐色層（パミス層） シラス質，無遺物層である。
VIII	VII層 火成砂層 1～2mにわたり，互層をなして堆積している。
IX	無遺物層である。 VIII層 砂礫層 西へうすく，東へ厚く堆積している。やはり1～3mの厚さにあり，様々な色調で互層をなしている。霧島山系より流入の輝石安山岩が主体を占める。

細石刃，細石刃核，石鏃その他剝片等出土している。ローリングされ磨滅したものも多い。

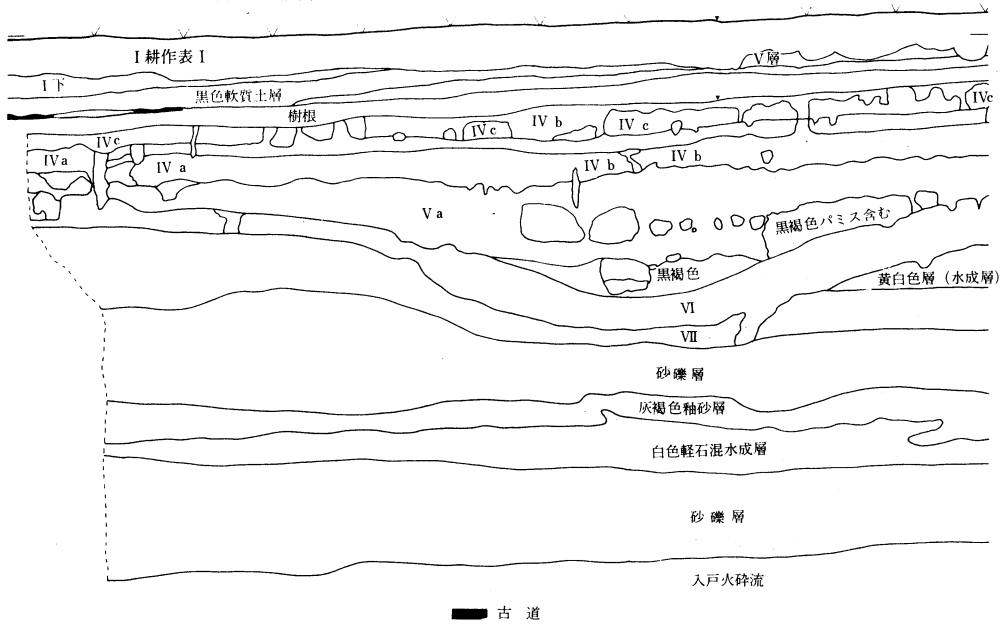
IX層 入戸シラス層

無遺物層である。

F-14区

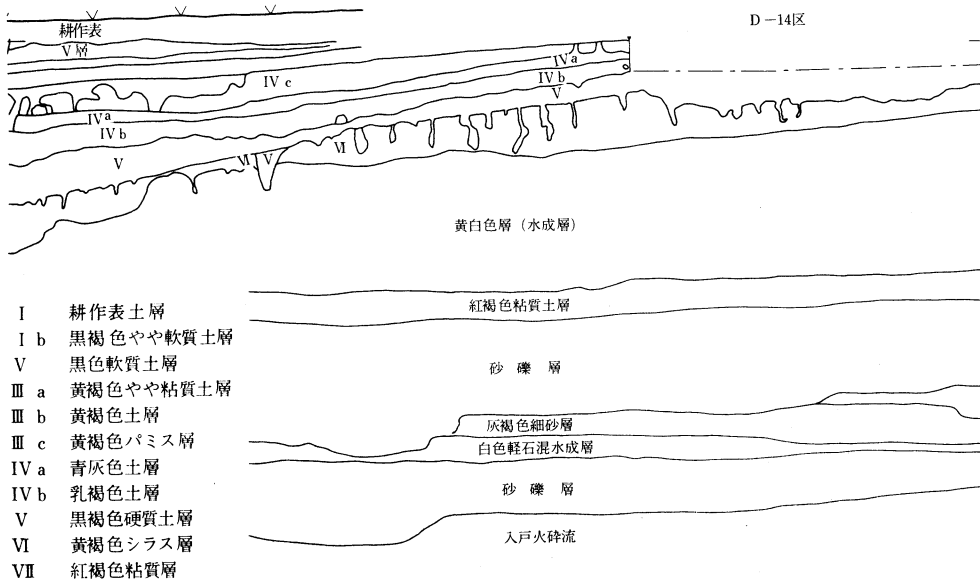
E-14区

耕作に伴う深掘りの痕跡である

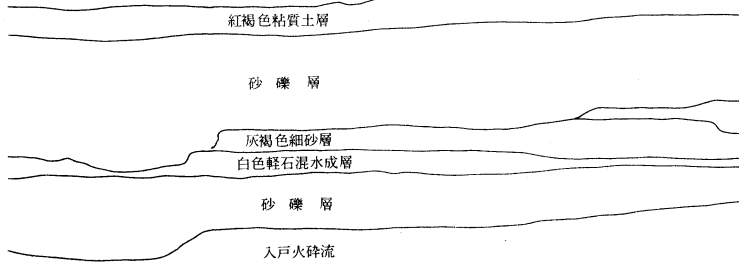


E-14区

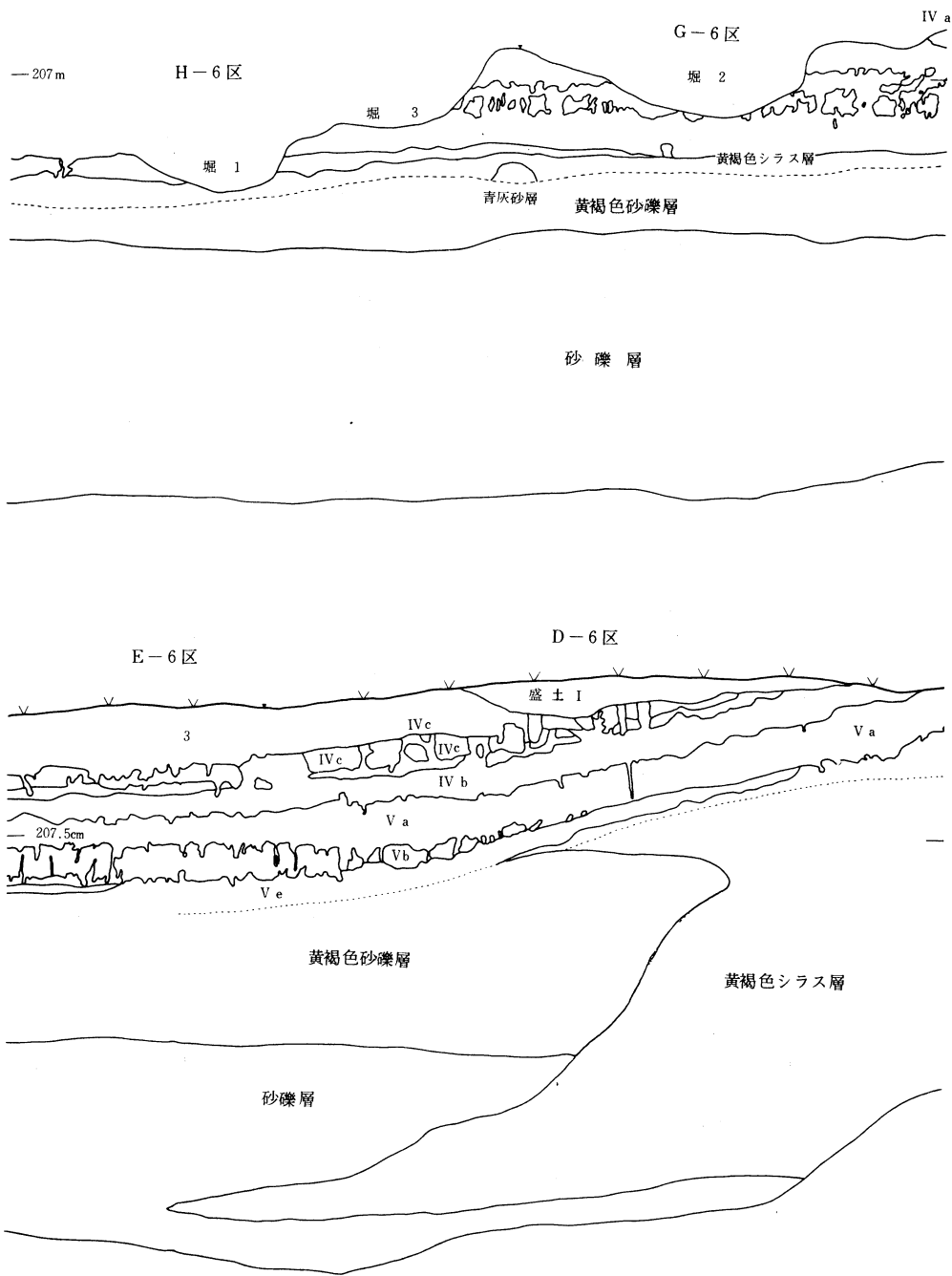
D-14区



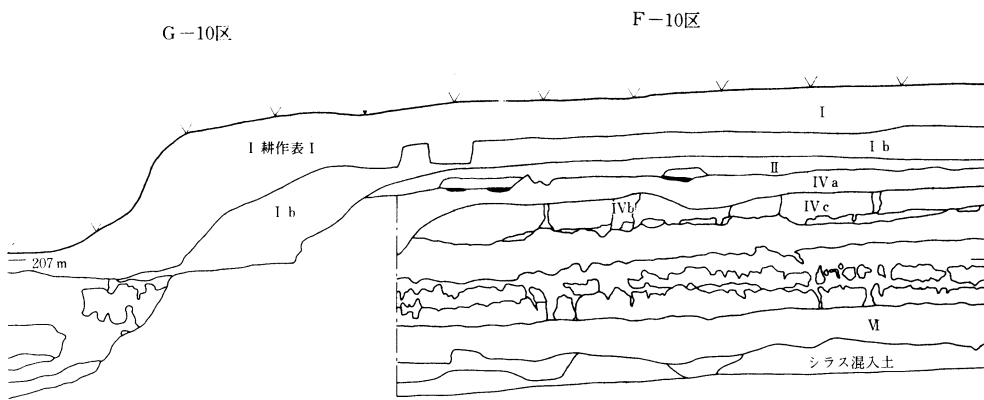
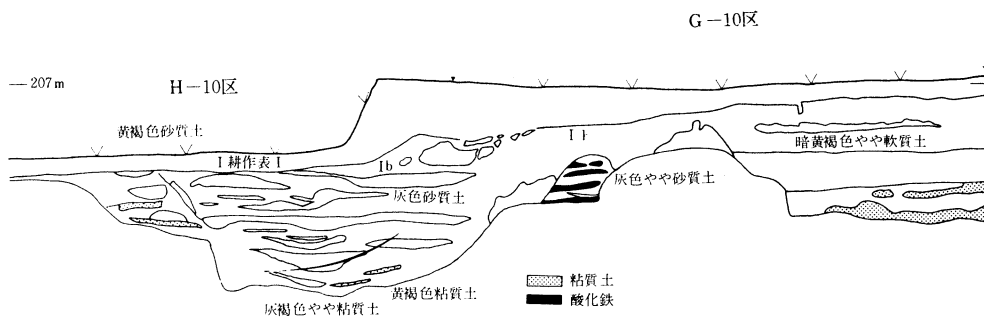
- I 耕作表土層
- I b 黒褐色やや軟質土層
- V 黒色軟質土層
- III a 黄褐色やや粘質土層
- III b 黄褐色土層
- III c 黄褐色パミス層
- IV a 青灰色土層
- IV b 乳褐色土層
- V 黒褐色硬質土層
- VI 黄褐色シラス層
- VII 紅褐色粘質層



第4図 地層断面図 (縮尺1/60)



第5図 地層断面図 (縮尺1/60)



黄白色層

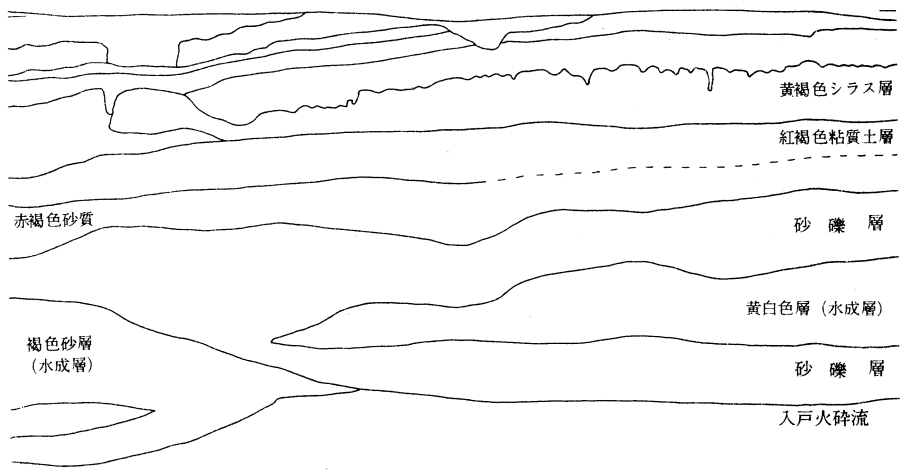
砂礫層

白危軽石混水成層

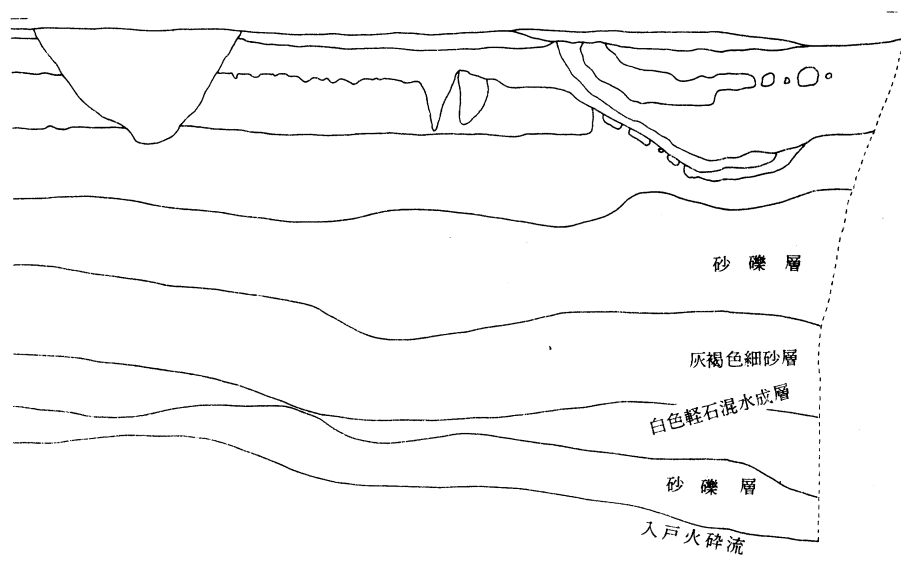
砂礫層

- I 耕作表土層
- I b 黒褐色やや軟質土層
- II 黒色軟質土層
- III a 黄褐色やや粘質土層
- III b 黄褐色土層
- III c 黄褐色パミス層
- IV a 青灰色土層
- IV b 乳褐色土層
- V 黒褐色硬質土層

第6図 地層断面図 (縮尺1/60)



F-14区



第7図 地層断面図 (縮尺1/60)

第5章 遺構と出土遺物

第1節 旧石器時代

当遺跡での旧石器時代の遺物は、遺跡内南側の一部に見られ、第Ⅷ層に出土している。この層は、遺跡の基盤をなすシラス層の上位に形成された小円礫と砂粒の堆積物層である。これらの砂礫層は霧島山系より運ばれてきた二次堆積物とされている。したがって、出土した石器類はその全てが原位置を保っているとは考えられず、砂礫層の形成時に流入したものと考えられている。また、石器の全てがローリング作用を受け、剥離面は全て磨耗している。したがって、出土した石器類は、採集物として取り扱っている。

7・8の細石刃核は、同一の形状を呈し小円礫を分割し各作業面を設定している。各作業面の作出の先後関係は明らかでない。打面調整は入念に行っている。当遺跡の細石刃剥離作業はよく行われており、器厚は薄くなり、打面は背面にかけて斜行したいわゆる「斜行打面」をその特徴としている。この種の細石刃核は、栗野町麦生田遺跡や溝辺町石峰遺跡でも知られている。16・17は片面加工尖頭器と思われ、17は頁岩を用い、縦剥ぎの厚い剥片の両側縁に、裏面からの整形剥離を行っている。14・15は、フレイク・コアで不定形な剥片を剥ぎ出している。

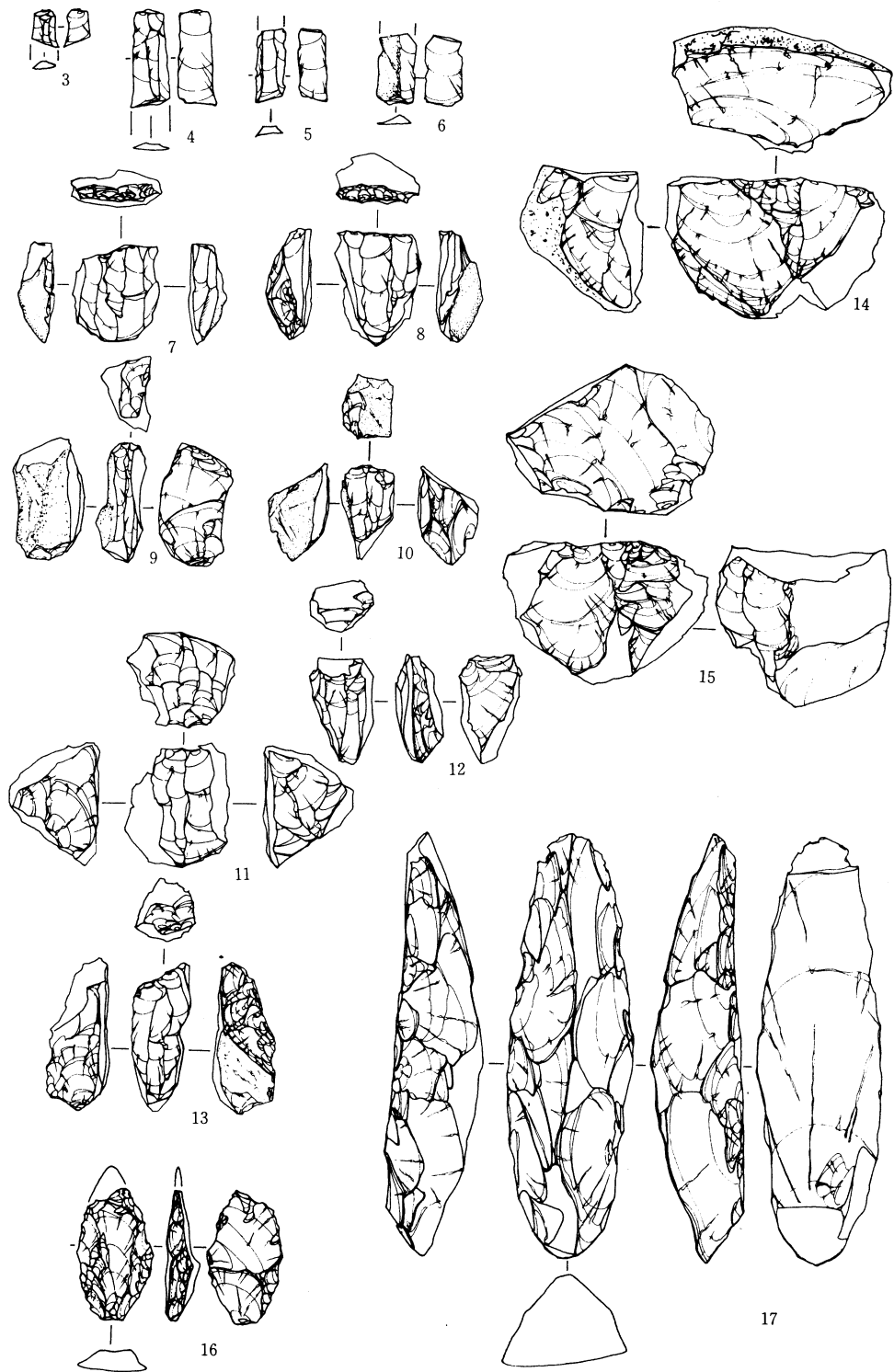
下表は、黒曜石の特徴より産地を推定したものである。

番号	名称	推定産地	石材の特徴等
3	細石刃	桑木津留	灰色で透明度は高く、光沢もある。良質な石材である。
4	細石刃	三船	灰色で透明度は高く、光沢もある。細い線（流理文）が多く見られ、気？も含まれる。細い線は一定方向に並んでいる。良質
5	細石刃	牟田	細い線が不規則に多量に含まれ、その結果黒灰色を呈し光沢もある。最も良質な石材である。気泡や裏母等の混入も見られない。
6	細石刃	桑木津留	透明で気泡（細く少量）がみられる。原石は小さな角礫状であったと思われ平坦面をなしている。灰色を呈し、良質な石材である。
7	細石刃核	不明	透明度は高く、ココロラ様の色を呈している。気泡も多く混入され、石英等の細い不純物が混じる。原石は小さな円礫ないしは
8	細石刃核	不明	角礫と思われる。5・6は同一の石材で、多くの遺跡での使用も知られている。（小牧3A、加治屋園、三代寺遺跡等）
9	細石刃核	桑木津留(?)	灰色を呈し、気泡が混じる。原石面は、ナイフで切ったような状態となり、平坦面をもっている。
10	細石刃核	桑木津留	全体としては灰ないしアメ色状を呈し、多くの気泡を含んでいる。石英粒も含まれる。原石面は7と同様である。良質な石材である。
11	細石刃核	上牛鼻	漆黒色で光を通さない。一見石炭のように見える。
12	細石刃核	牟田(?)	黒灰色で光沢がある。多くの線が混じる。やや大粒の石英粒が混じる。良質な石材である。
13	細石刃核	三船	黒灰色で光沢がある。多くの線が混じる。やや大粒の気泡のぬけたあとがある。原石面は泥が附着し、気泡もみられ裏母等は認められない。
14	石核	三船	黒色で光沢がある。多くの気泡のぬけた後がみられ、その結果、不規則な剥離面を呈している。原石面は泥が附着したようになりよごれている。
15	石核	三船	
16	尖頭器	三船	黒灰色で、13に近い表面観を呈している。気泡や気泡のぬけた後がある。流理文も見られる。
17	尖頭器		

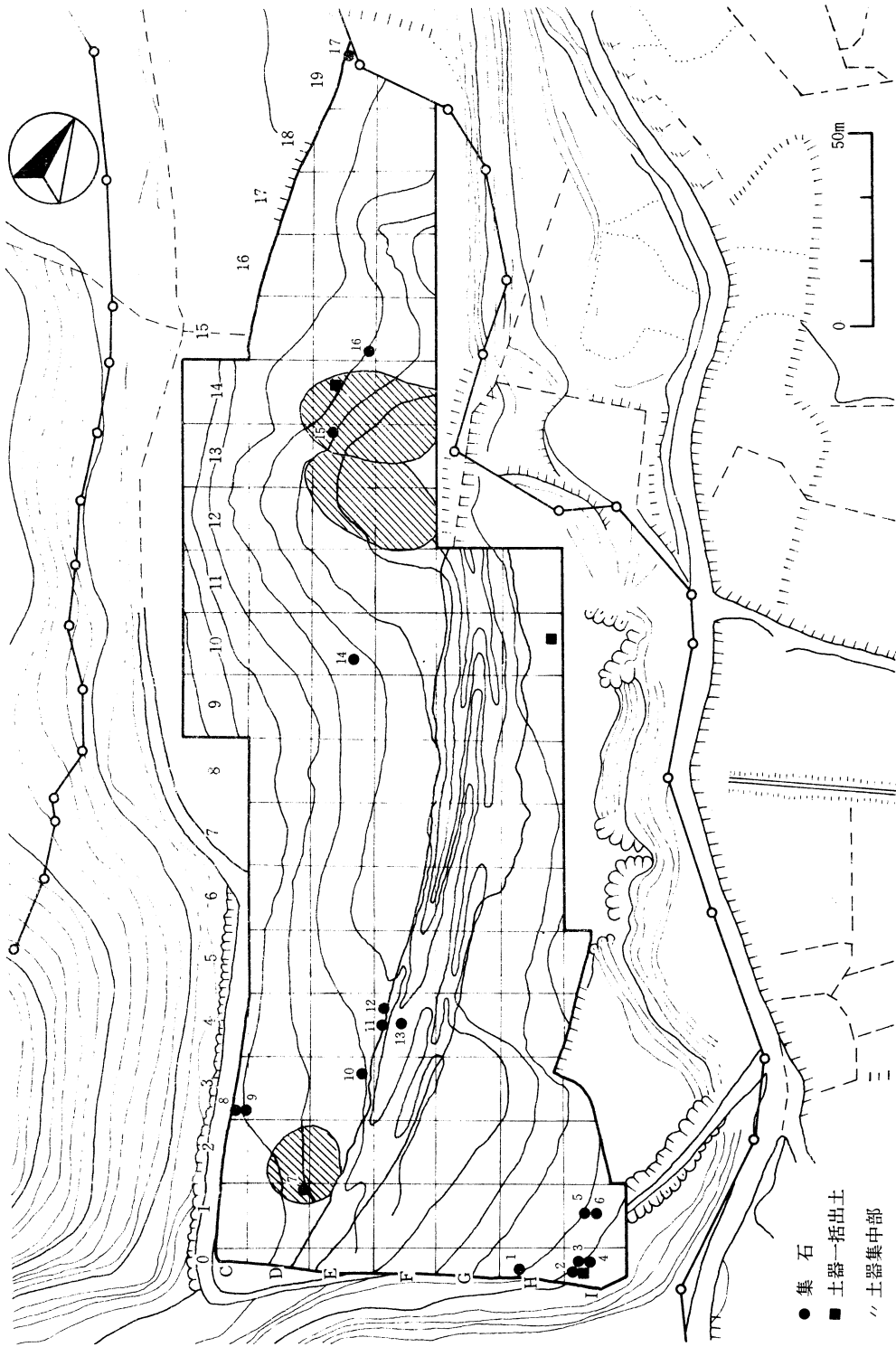
※注①三船（鹿児島市奄ヶ水三船）、桑木津留（熊本県人吉市大塚桑ノ木津留）、牟田（長崎県松浦市星鹿町牟田免）、上牛鼻（薩摩郡樋脇町市比野上牛鼻）

②この分類は別府大学助教授坂田邦洋氏の指導を受けたことより進めたものである。

第2表 旧石器時代遺物一覧表

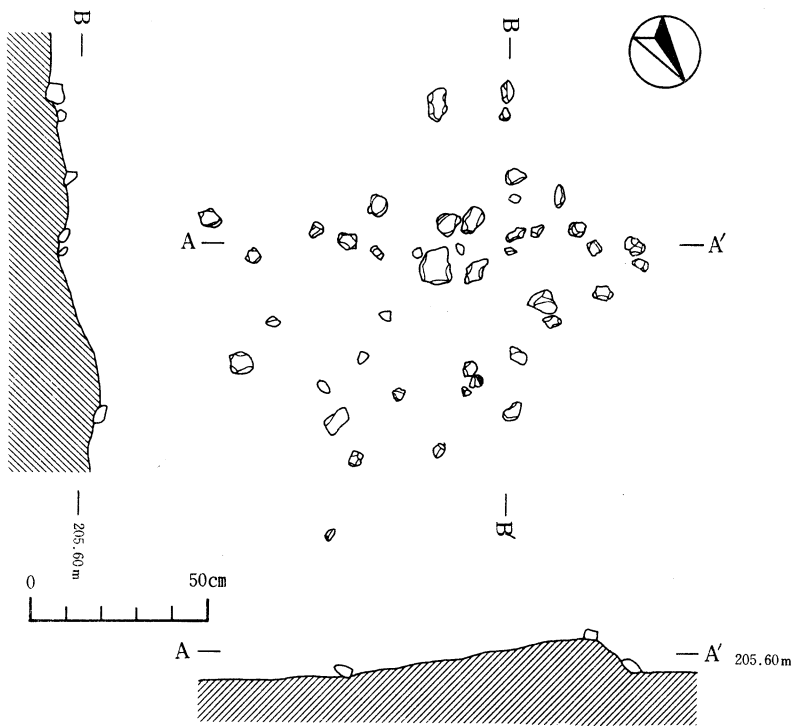
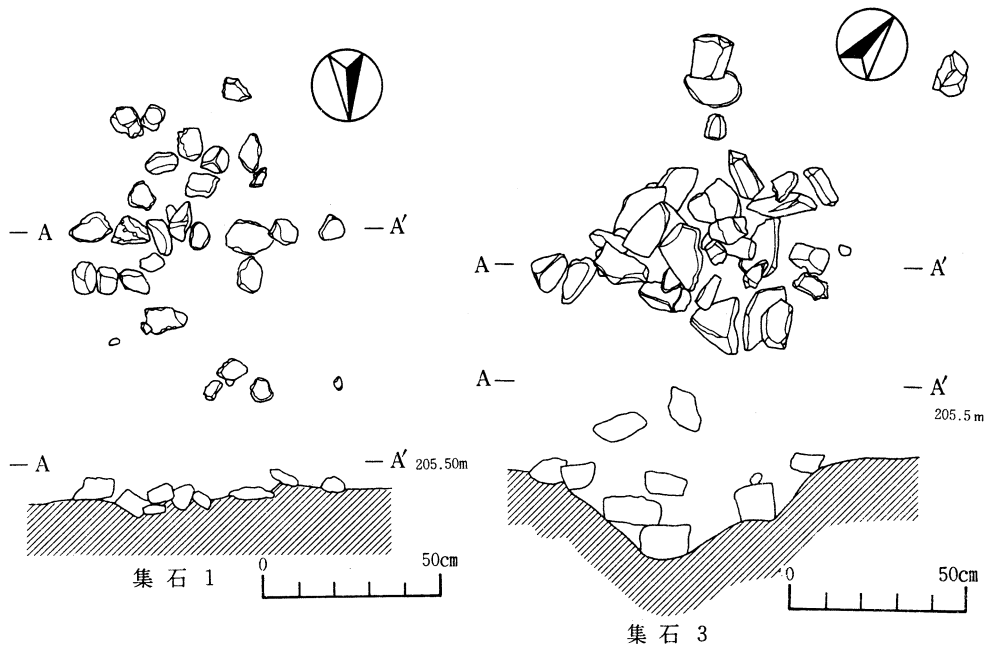


第8圖 旧石器時代石器実測圖

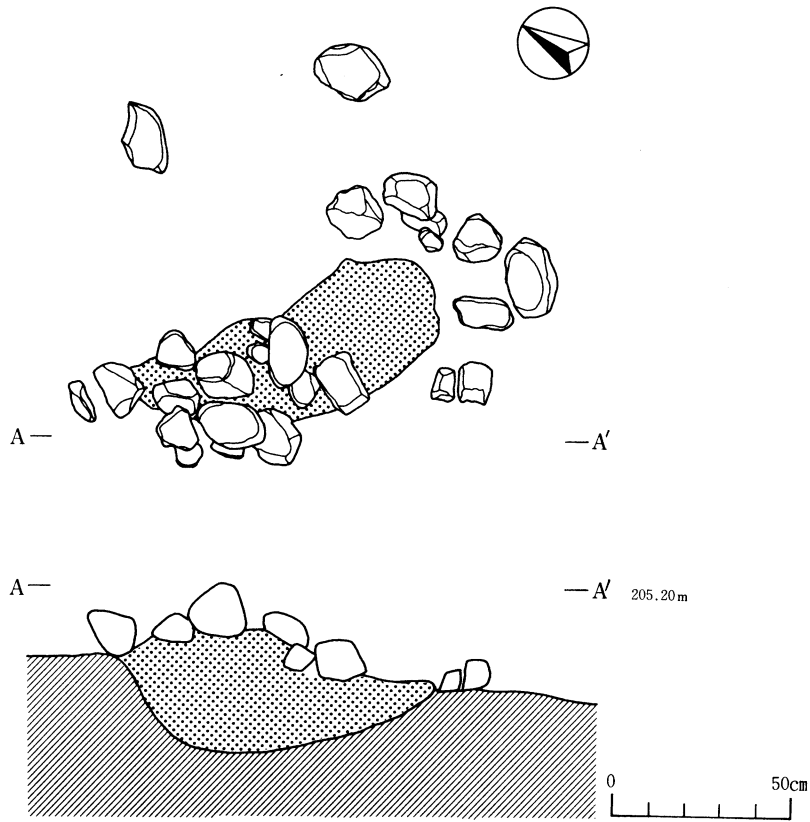
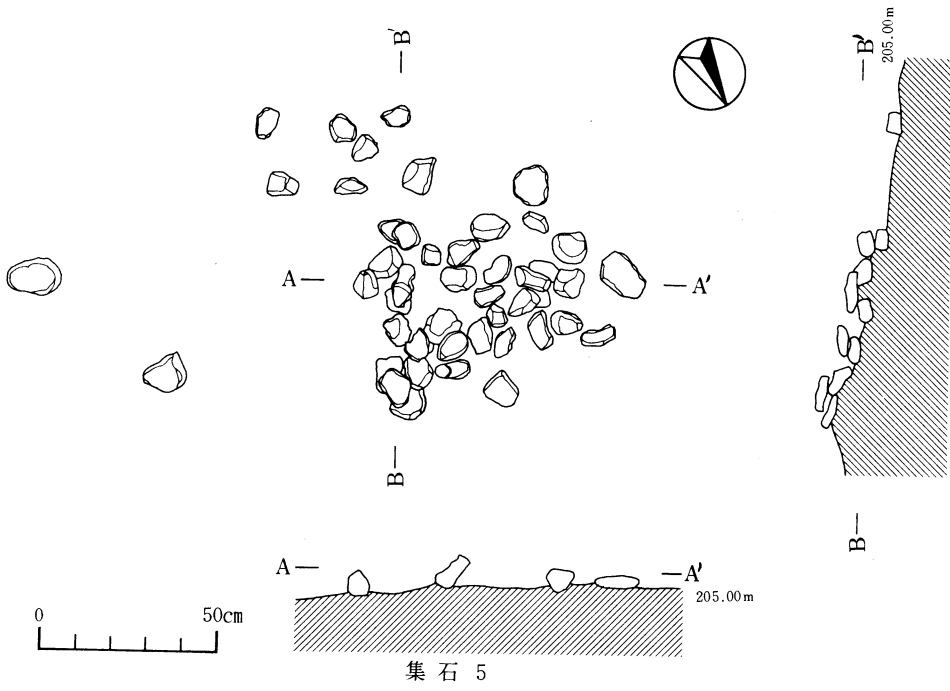


第 9 図 縄文時代地形図

- 集石
- 土器一括出土
- 〃 土器集中部

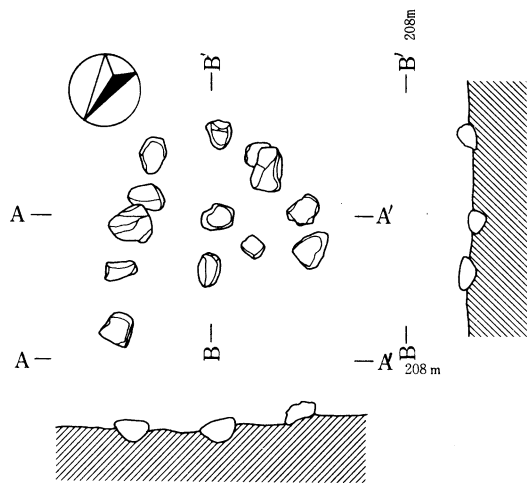


第10図 集石 1・2・3

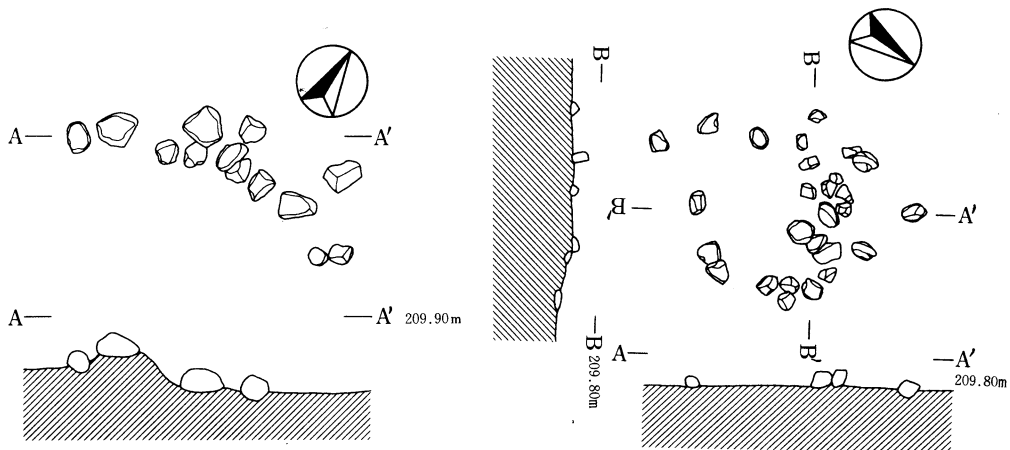
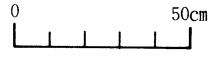


第11図 集石 5・6

集石 6

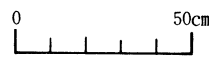
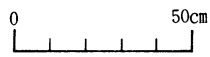


集石 7

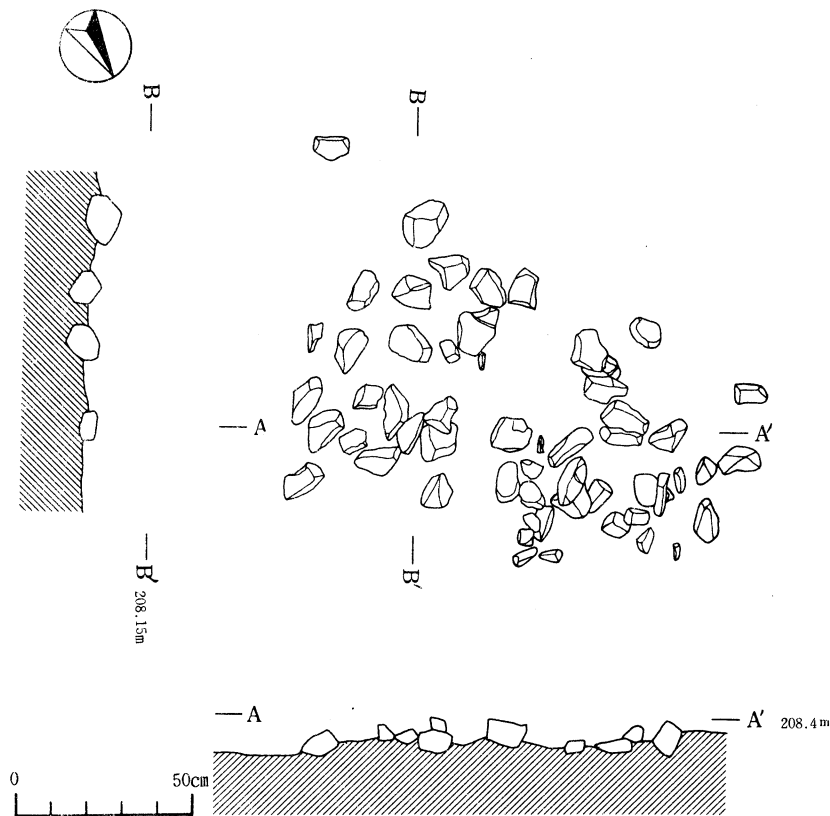


集石 8

集石 9



第12図 集石 7・8・9



第13図 集石10

第2節 縄文時代

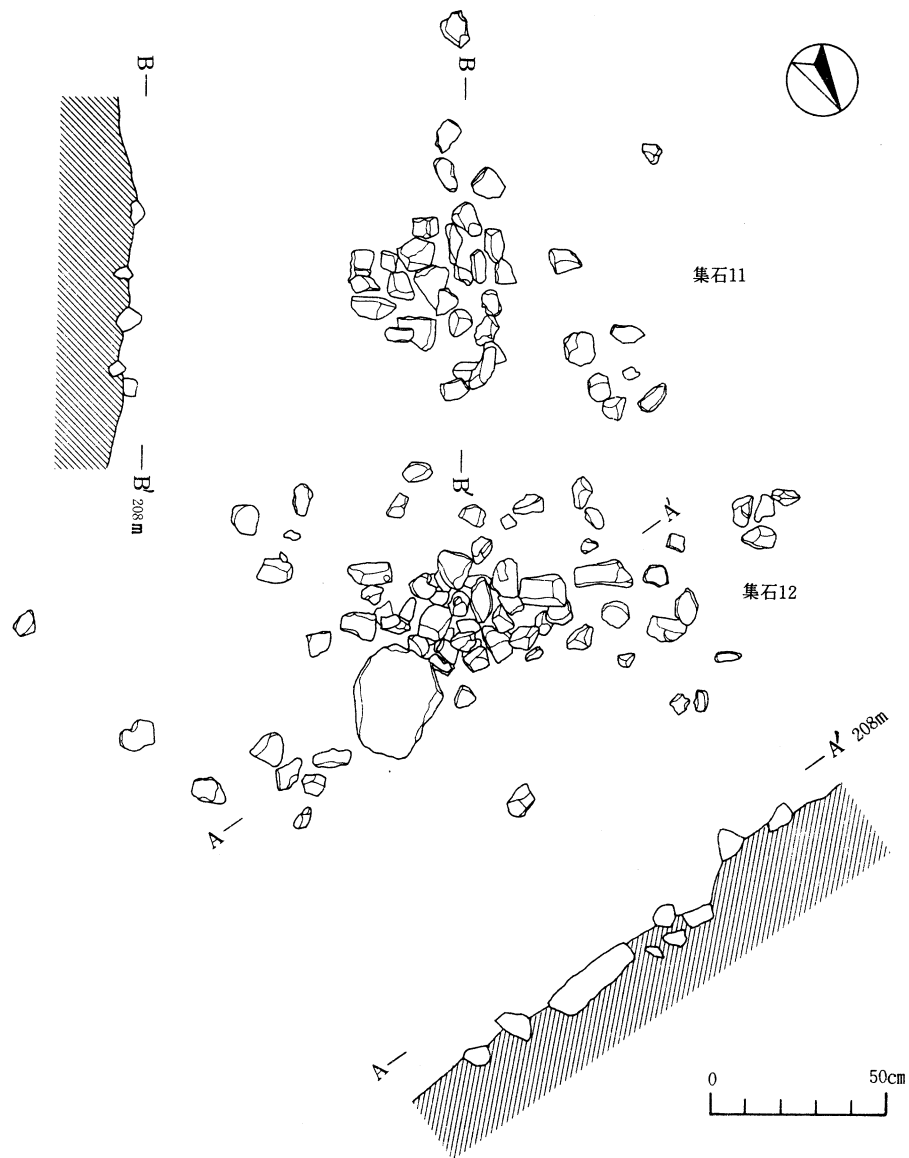
1. 遺構

今回の発掘調査の結果、台地全体に集石17基、D-13・14区を中心に土壇6基などの遺構がみられた。またC-13区には炭が集中してみられたが周辺に土器・礫等検出されず、炉などの確認はできなかった。

集石遺構

縄文時代早、前期の集石遺構は、土器分布の状況と同じように1～4区、12～15区に分布し17基を確認した。検出状況は、Ma層、Mb層、Va層にみられ、一か所に集中しているものから、散乱しているものと形態はまちまちであるが、集石として記録した。大半が拳大の安山岩の角礫や円礫の自然石からなる。集石の断面はほぼ一面となり、落ち込みなど土層の変化がみられないものが大半である。

集石には、その検出状況を大別すると、礫が1m四方に集中するものと10数個を小じんまりと集めたものや、配置にバラツキがありまとまりのないものに分けられる。



第14図 集石11・12

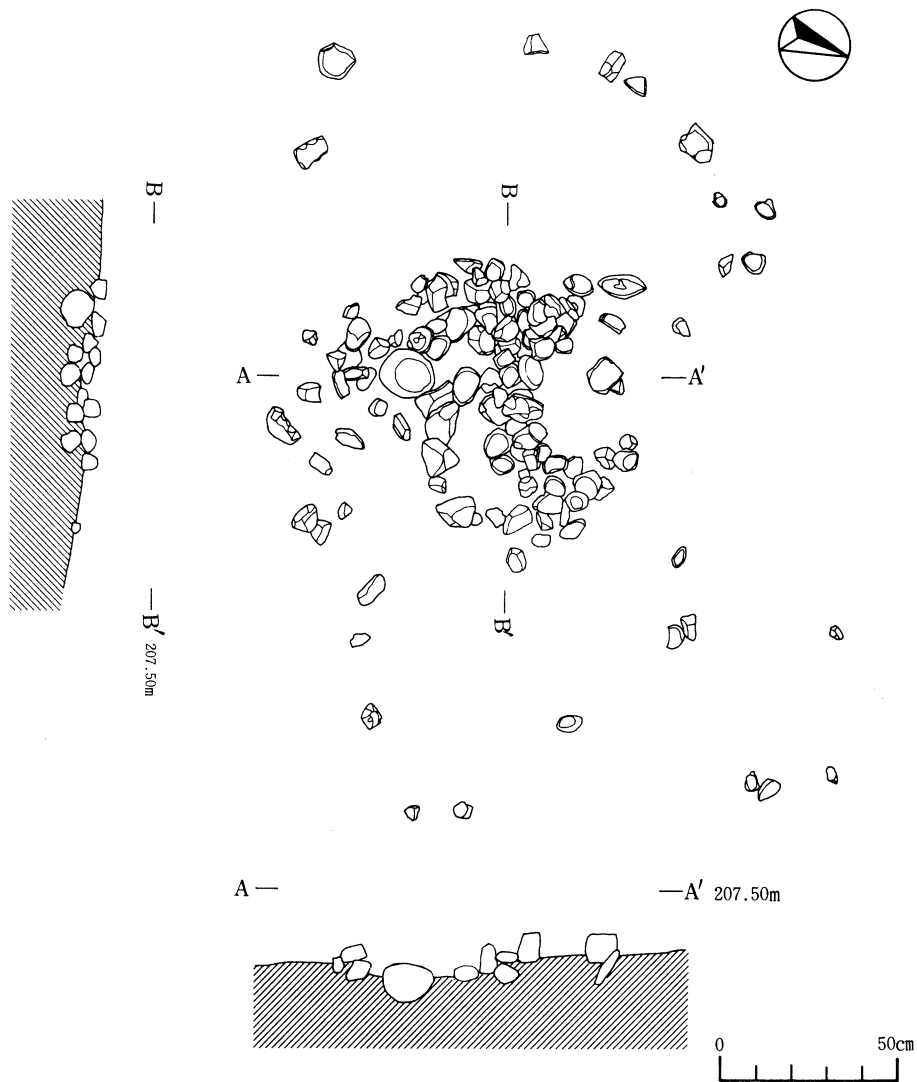
集石①は、H-O区 V層下部に検出され、径約1 mの円形状に拳大の円礫・角礫を集めている。両側の礫は少なくなっている。

集石②は、I-O区 Mb 上層に検出され、径約1.5mの範囲に44個の大小の円礫・角礫が散在している。

集石③は、I-O区 Mb 上層に検出され、径1 mの円形状に36個のわりに大きな角礫を集めたもので、掘り込みがみられ礫もかさなって検出された。



第15図 集石14

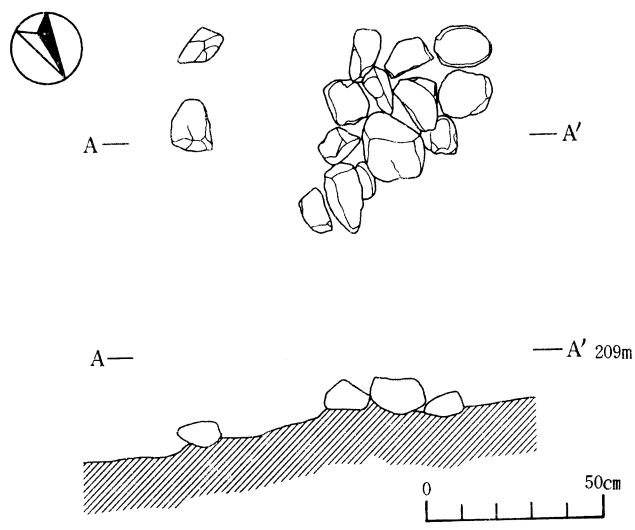


第16図 集石16

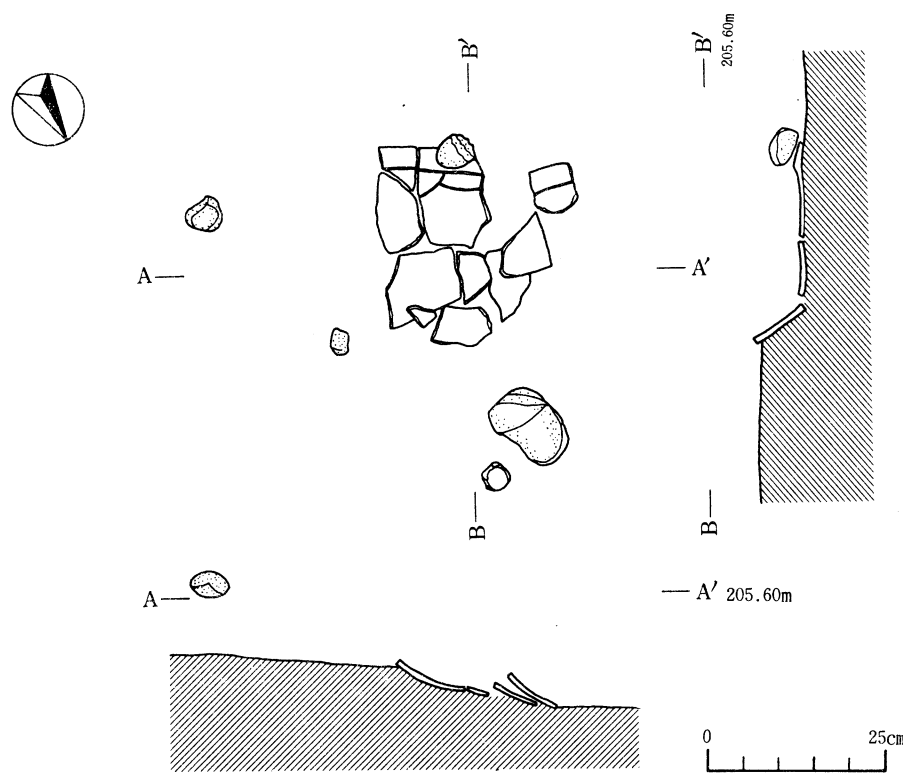
集石⑤は、I-1区 Nb 上層に検出され、径1 mの円形状の範囲に 46 個の拳大の角礫を集めたものである。掘り込み等は見られない。

集石⑥は、I-1区 Nb 層に検出され、中央部には木炭片の集中がみられ礫は木炭片がまばらであるがみられる。

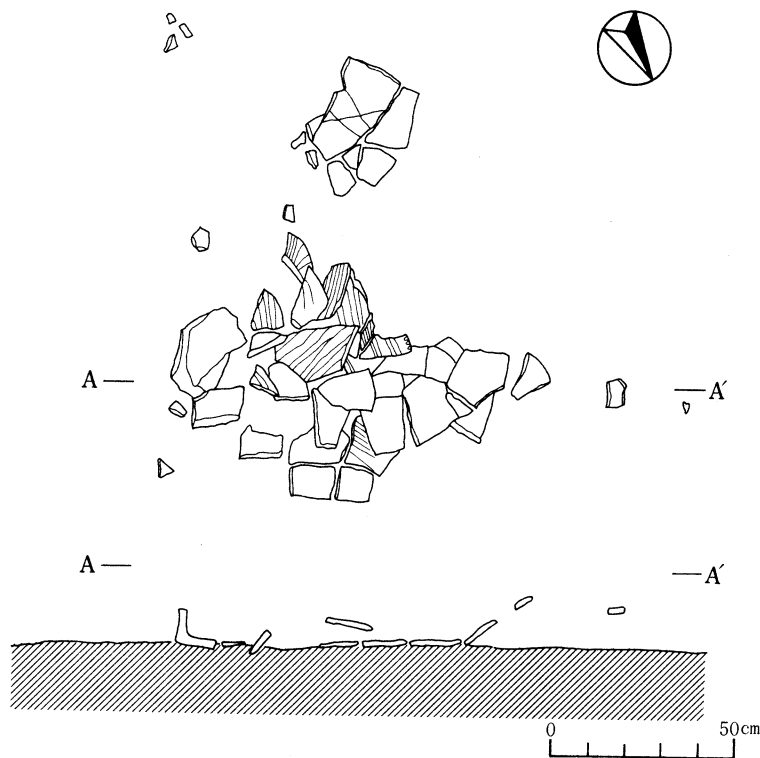
集石⑦は、D-1区 N層最下に検出され、径60cmの範囲に13個の拳大の円礫が集められている。南側に弧状を呈し、中央部はうすく、礫は火熱により赤くやけているもの、もろいものがみられる。内外に木炭片が散在している。



集石17



第17図 集石17・土器出土状況No.1



第18図 土器出土状況 No.2

集石⑧は、C-3区Va層上部に検出され、13個の拳大の角礫が1 mの列状に集まっている。

集石⑨は、C-3区Nb層上面に検出され、約60cmの円形状の範囲に27個のやや小さめの円礫を集め中心部の礫は少なくなっている。

集石⑩は、E-3区Mb層に検出され、約1.5m×約1mのだ円形状の範囲に58個のやや大きめの角礫が集められている。

集石⑪・⑫は、F-4区Na層に検出され、⑪は約50cmの範囲に37個の拳大の角礫が、⑫は、長径30cm×短径25cmの礫を中心に約90個の礫が集中して集められている。

集石⑭は、E-10区4層に検出され、約2mの範囲に46個の拳大の礫が点在している。

集石⑯は、E-15区5a層に検出され、約1mの範囲に147個の拳大から小児頭大のわりに大きな円礫までが集中している。掘り込み等はみられなかった。

集石⑰は、E-19区5a層上面に検出され、径50cmの範囲に13個のやや拳大より大きめの円礫が集められている。

土坑 (第19・20図)

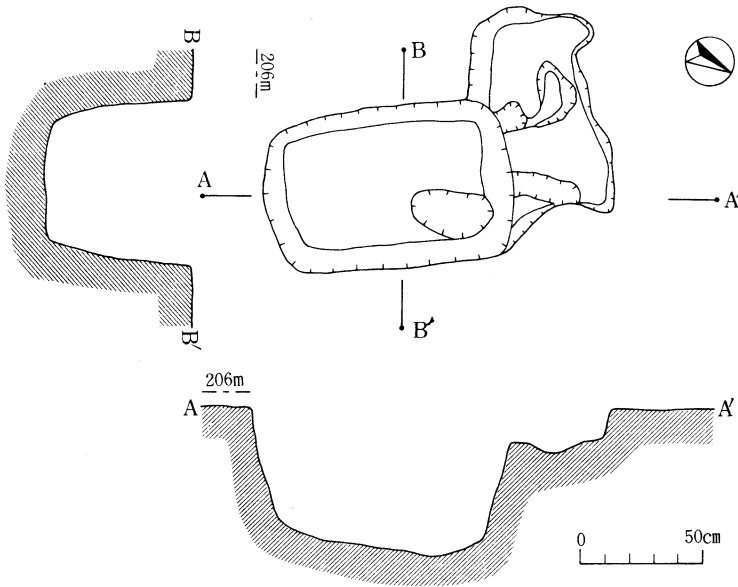
VI層 (黄褐色パミエス) にV層 (黒褐色土) が埋土されている土坑が6基検出された。埋土中には少量の黒曜石片と細片の吉田式土器片が検出された。

土坑1は、F-11区に検出され、長径100cm、短径70cm、深さ60cmであるが、V層の遺物散布は、V層上面であり、土坑の深さもまだ深いものと思われる。

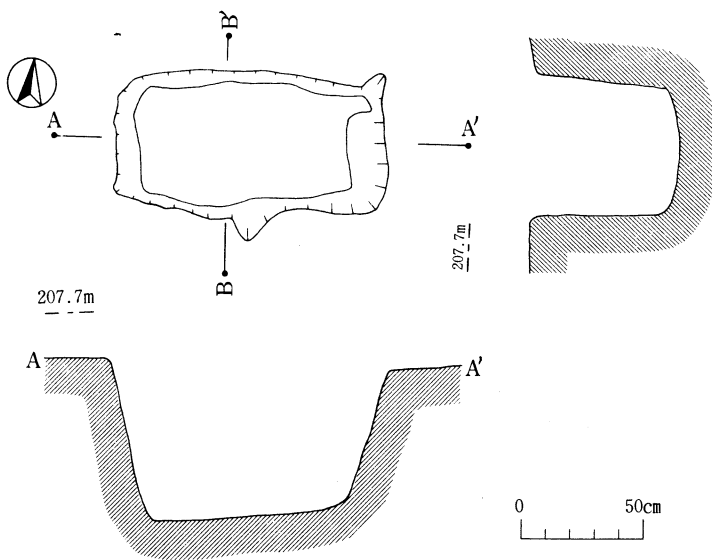
吉田式土器の細片が出土している。

土坑2は、E-15区に検出され、長径110cm、短径60cm、深さ60cmの、方形状を呈する土坑である。埋土中には、遺物はみられなかった。

他の土坑もほぼ同様のものであり性格などは、不明である。




第19図 F-11区 土坑1

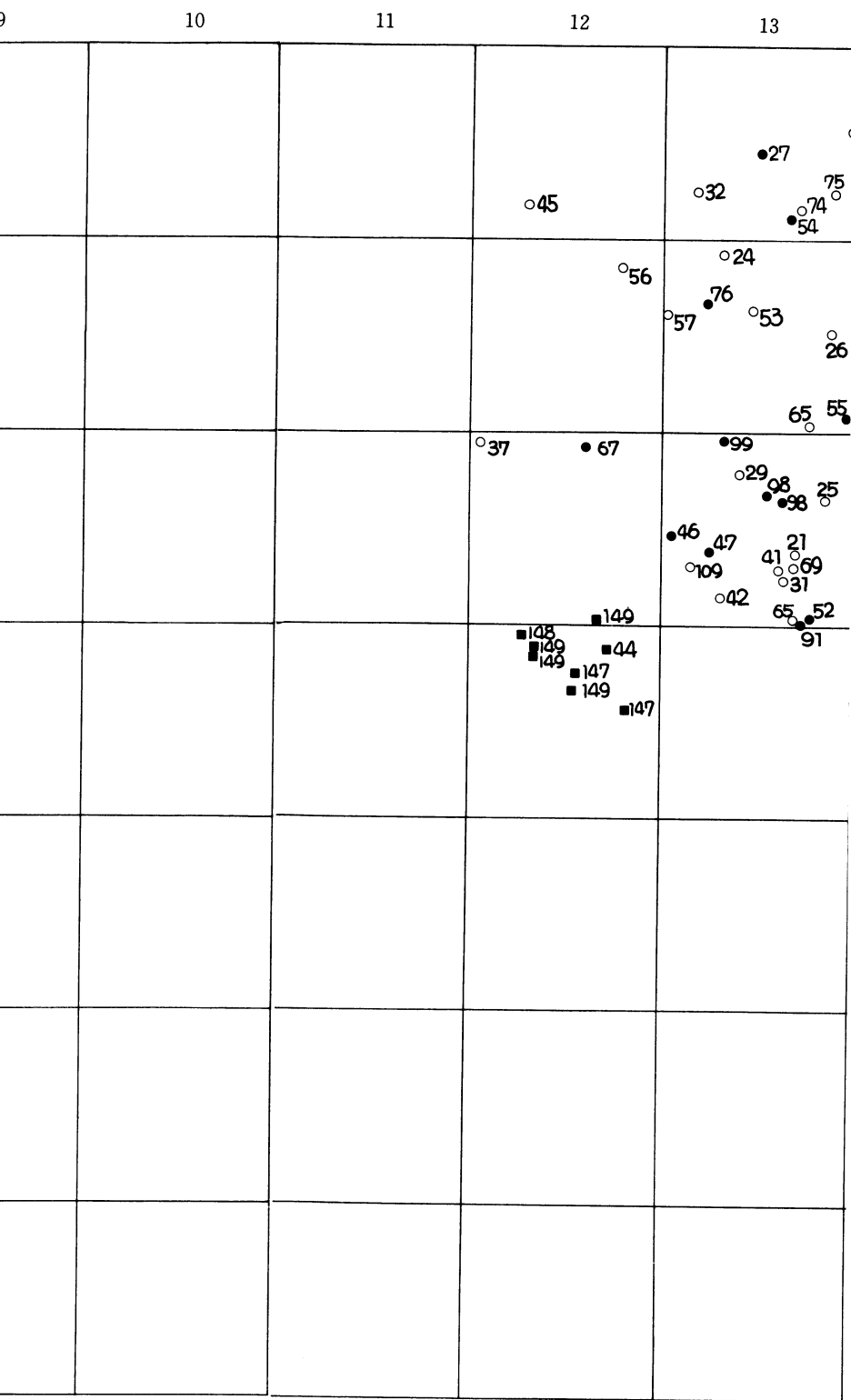


第20図 E-15区 土坑2

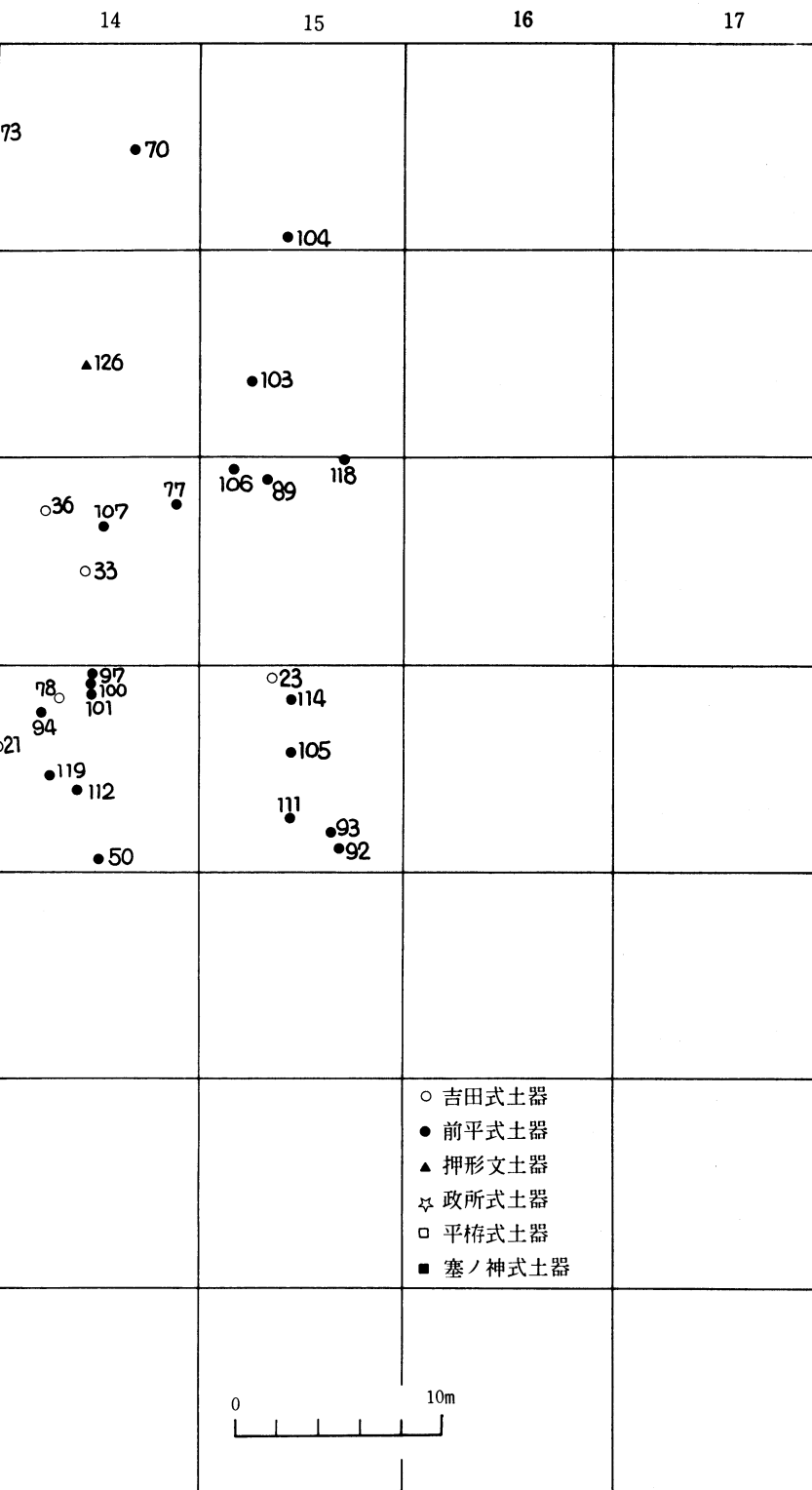
	1	2	3	4
C				
D				
E		■142	▲124	
F				
G				
H	●72			
I	▲125 ■145 □134 □136 ◊127	□137	■141	

5	6	7	8	
			○61	
		○62		
	☆131	☆130 ☆128	58 ☆129 ○59	
			○86	

第21図 縄文式



土器出土分布図



2 遺物 (土器) 第22～42図

縄文時代の遺物は早期から晩期まで各時期にわたり出土した。

吉田式土器は円筒形土器 (21～26・28～37・40～42・45・49・53・56～66・68・69・73～75・78・86) と角筒形土器 (91) 等が出土している。円筒形土器は口縁部が若干外反し、薄手で平底をなす。文様は口縁部に貝殻腹縁による刺突文・条痕・クサビ形粘土紐貼り付け文、があり胴部には貝殻腹縁による押圧文・押し引き文の連続を横位に施す。底部は刻目を有す。角筒土器 (9) はクサビ形粘土紐貼り付け文はない。また58・59・61・62は若干厚手の土器であり口縁部が外反し、文様構成も前述の吉田式土器との相違がみられる。

前平式土器は円筒形土器 (27・38・39・43・44・46～48・50～52・54・55・67・70～72・76・77) と角筒形土器 (87～108・110～114・118・119) 等が出土している。円筒形土器は吉田式土器と同形であるが、文様が貝殻腹縁による条痕、刺突文で構成されている。角筒土器は角部が小形状になり、底部は平底をなす。文様は貝殻腹縁による条痕と刺突・沈線の構成をなす。前平式土器も吉田式土器同様クサビ形粘土紐貼り付け文を有すものと無いものがある。

平椀式土器 (132～139)

口縁部が「く」字状に外反し、沈線と刻目突帯ならびに撚糸文の文様がみられる。

塞ノ神A式土器 (141～146)

口縁部が「く」字状に外反し、撚糸文と沈線文で文様を構成している。

塞ノ神B式土器 (147～149)

口縁部が「く」字状ならびに直向する土器で貝殻条痕と貝殻押圧文の文様の構成をもつ。

押型文土器・手向山式土器 (121～123)

微隆起突帯文と押型文も組み合わせである。口縁部は外反し頸部がしまり胴部は球状である。

政所式土器 (127～131)

厚手の土器である。口縁部は直向し底部は尖底である。文様は口縁部に貝殻腹縁による刺突を2段に施している。胴部から底部までの器面には文様はない。

その他の土器

150～152は口縁部と底部である。器の調整が粗雑で文様も口縁部に沈線を粗雑に施している。器形は円筒形とおもわれる。形式不明である。

153・154は条痕土器である。形式不明である。

155は沈線文土器である。形式不明である。

156・157は貼り付け突帯を数条付けたもので形式不明である。

158は条痕土器である。形式不明である。

159は5つの山形隆起をもち、ヘラで器面を調整しながら文様を構成している。この土器は始良郡溝辺町山神遺跡からも出土している。形式不明である。

160は条痕土器であるが貼り付け刻目突帯がみられる。この土器は始良郡溝辺町の木屋原遺跡でも出土している。形式不明である。

- 161・162は条痕に突帯がみられる。轟式土器類似と思われる。
- 163～166は阿高式土器類似の口縁部と思われる。
- 167は後期の土器と思われる。指宿式土器類似。
- 168は市来式土器類似と思われる。
- 169・170は条痕土器で形式不明である。
- 171～181は晩期の土器である。
- 171～175は浅鉢である。黒色研磨土器で晩期I 式に属し、精製土器である。
- 176～180は深鉢で晩期I 式に属し、粗製土器である。
- 181は晩期II 式と思われる。内側に調整痕がみられる。

第3表 縄文式土器一覧表

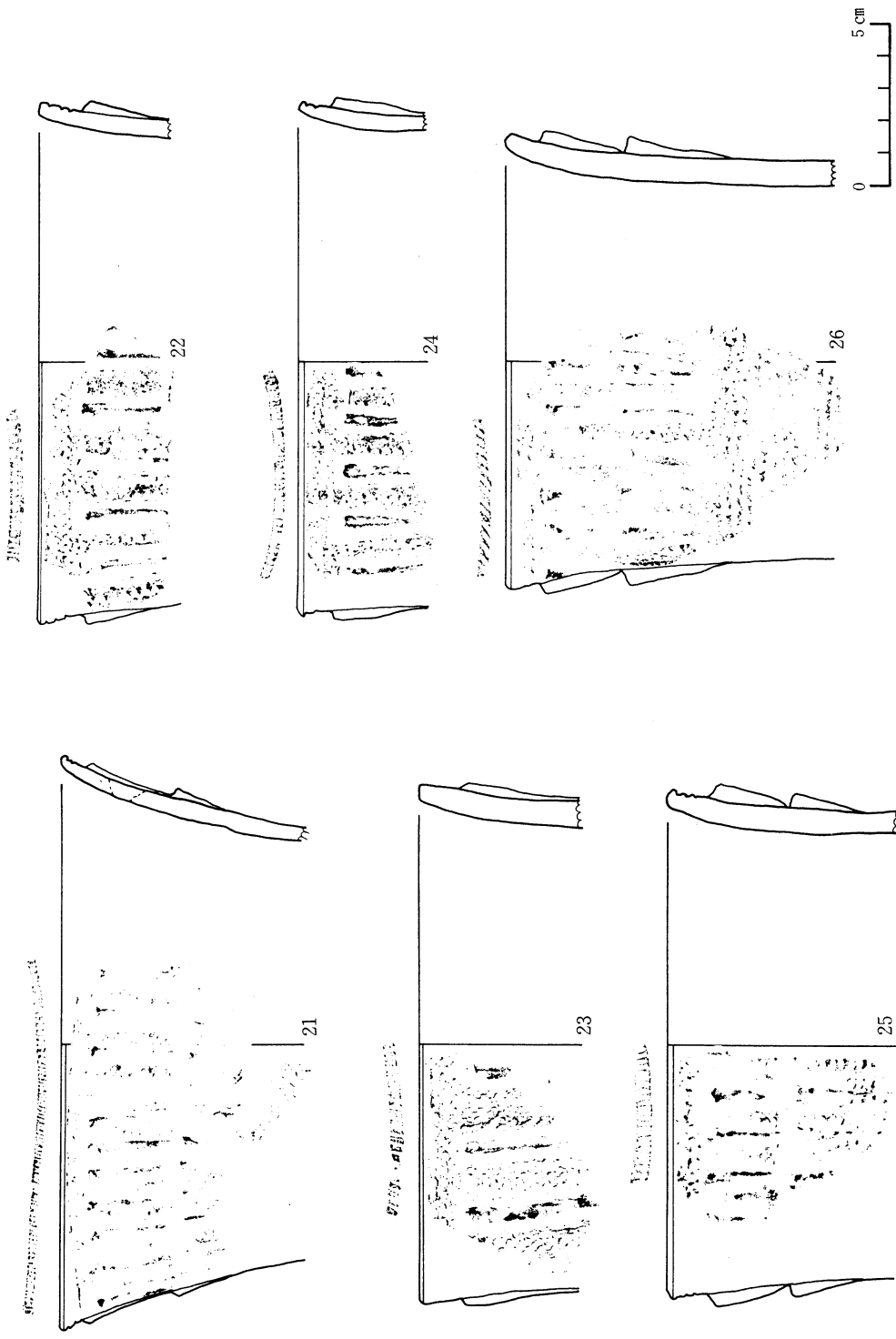
挿図 番号	出土番号	出土層	部位	特 徴	形式
21	14671 15054	E-13 5 a F-13 5 a 上	口縁	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁、横位に二段のクサビ状粘土貼り付け。胴部(押引文)縦長円穴有り。うすで。黒褐色。	吉田式
22	7306	D-13 5	〃	口唇部刻み目有り。口縁3条の貝殻縁刺突連続文を横位にクサビ形粘土ひもはりつけ有り。縦長円穴有り。うすで。黒褐色。	吉田式
23	8360	F-15 4 b 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突連続文を横位にクサビ形粘土ひもを貼り付け有り(へらで調整)黄茶褐色。うすで。	吉田式
24	6991	D-13 5	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突連続文を横位にクサビ形粘土ひも貼り付け有り。黒褐色。うすで。	吉田式
25	14114	E-13 5 a	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突連続文を横位にクサビ形粘土ひも有り。黒褐色。うすで。	吉田式
26	7560	D-13 4 b	〃	口唇部刻み有り。斜状2条の貝殻刺突文を横位に、胴部では貝殻縁で押圧連続文。黒褐色。うすで。	吉田式
27	6964	C-13 5	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。暗茶褐色。うすで。	前平式
28	15021	E-13 5 a 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁文、3段のクサビ形粘土ひも貼り付け有り。貝殻縁文。黒褐色。うすで。	吉田式
29	14120	E-13 5 a	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。貝殻縁文。黒褐色。うすで。	吉田式
30	14115	E-13 5 a 上	〃	口唇部刻み目有り。2条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。(へらで調整)黒褐色。うすで。	吉田式
31	14667	E-13 5 a	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突文、胴部は貝殻縁で押圧連続文。うすで。	吉田式
32	4255	C-13 3 a 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。上段はV状のクサビ形粘土貼り付けが見られる。茶褐色	吉田式
33	13299	E-14 5 a 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。上段はV状のクサビ形粘土貼り付けが見られる。暗茶褐色。	吉田式
34	13708	D-13 5 a 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。上段はV状のクサビ形粘土貼り付けが見られる。暗茶褐色。	吉田式
35	14104	E-13 5 a	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け有り。上段はV状のクサビ形粘土貼り付けが見られる。茶褐色。	吉田式
36	13196	E-14 4 b 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け。上段はV状のクサビ粘土貼り付け。縦長の孔有り。暗茶褐色。	吉田式
37	11738	E-12 5 a 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文。クサビ形粘土ひも貼り付け。上段はV状のクサビ形粘土貼り付けが見られる。茶褐色。	吉田式
38	5341	C-14 5 a	〃	クサビ形粘土貼り付け有り。貝殻文あり。	前平式
	12481	E-13 5 a 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条縁を横位に。クサビ形粘土貼り付け。貝殻縁刺突の上にクサビ形。	前平式
40	10962	E-13 4 b 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部貝殻縁押圧の連続2段のクサビ形粘土ひも貼り付けを有す。胴部押圧貝殻縁連続。茶褐色。うす手で内側はすこし調整。	吉田式
41	12383	E-13 5 a 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部貝殻縁押圧の連続。2段のクサビ形粘土ひも貼り付けを有す。胴部押圧貝殻縁の連続。暗茶褐色。うす手で内側は少し調整。	吉田式

挿図番号	出土番号	出土層	部位	特徴	形式
42	12512	E-13 Va 上	〃	円筒と角筒の口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻刺突で横位に角部は山形口縁を増す。3段のクサビ形粘土貼り付けを有し、へらで付着させている。胴部は貝殻縁押圧。茶褐色。うすす。	吉田式
43	11632	F-13 Mb 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻刺突文 地文を作る。その上にクサビ形粘土貼り付けを付着する。	前平式
44	10875	F-12 Mb	〃	口唇部刻み目有り、口縁部3条の貝殻刺突文を作る。その上にクサビ形粘土貼り付けがある。	前平式
45	8954	C-12 V	〃	口唇部刻み目有り。口縁3条の貝殻縁刺突文。	吉田式
46	11995	E-13 Va 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文を横位に。クサビ形粘土ひも貼り付け突帯有り。地文は貝殻条痕。茶褐色。	前平式
47	12457	E-13 Va 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文を横位に。クサビ形粘土ひも貼り付け突帯有り。地文は貝殻条痕。茶褐色。	前平式
48	11445	E-13 Mb 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文を横位に。クサビ形粘土ひも貼り付け突帯有り。地文は貝殻条痕。茶褐色。	前平式
49	14172	C-5 Va	口縁	口唇部刻み目有り。胴部貝殻縁押圧連続文を横位に。クサビ形粘土ひも貼り付け突帯有り。地文は貝殻条痕。茶褐色。	吉田式
50	13852	F-14 Mb 下	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突文を横位に。クサビ形粘土ひも貼り付け突帯有り。地文は貝殻条痕。茶褐色。	前平式
51	14106	E-13 Va	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2段の押圧貝殻又地文は貝殻条痕。クサビ形粘土ひも貼り付け突帯有り。暗茶褐色。うすす。	前平式
52	14687	E-13	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁による刺突文を横位に。クサビ形粘土貼り付けがある。茶褐色。	前平式
53	8042	D-13	〃	口唇部刻み目有り。口縁部2条の貝殻縁刺突文を横位に貝殻刺突文を斜に施こしている。	吉田式
54	6916	C-13	〃	茶褐色。貝殻縁押圧文。	前平式
55	7438	D-13 Mb	〃	口唇部刻み目有り。口縁部貝殻刺突連続文。茶褐色。	前平式
56	6084	D-12 Mb	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻腹縁で押圧の連続文を横位に。茶褐色。	吉田式
57	8732	D-13 Mb	〃	口唇部刻み目有り。口縁部4条の貝殻縁刺突文。器面は貝殻縁の押圧の連続文を横位に。茶褐色。	吉田式
58	8426	F-8 V	〃	口唇部刻み目有り。口縁部貝殻縁押圧の連続。胴部貝殻条痕。茶褐色。うすす。	吉田式
59	8419	F-8 M	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突。器面は貝殻腹縁の押圧連続。茶褐色。やや厚手。	吉田式
60	14118	E-13 Va	〃	口唇部刻み目有り。口縁部3条の貝殻縁刺突。器面は貝殻縁押圧連続文黒褐色。	吉田式
61	8224	D-8 V 上	〃	口唇部刻み目有り。口縁部半載竹管状の文様を2段に施している。胴部は押し引き文様に施している。やや厚手で黄褐色。	吉田式
62	2284	E-7 IIIa 上	〃	口唇部は刻み目を施して、口縁部は貝殻縁押圧に2条にし、その下に「く」字状の文様を施している。胴部の器面は貝殻条痕を横位に施している。やや厚手で灰褐色である。	吉田式
63	9215	D-15 V 上	胴部	クサビ形粘土紐貼り付け、貝殻縁押圧文。茶褐色。	吉田式
64	12502	E-13 Mb 下	〃	45との同一個体と考えられる。器面は、貝殻縁の押圧連続文。内面は篋調整が底部から上へかき上げられ口縁部近くは横の調整になっている。	吉田式
65	9384, 12431 11167	D-13 Mb 下 E-13 Mb 下	〃	貝殻縁の押圧連続文を器面全体に施している。黒褐色で薄手である。	吉田式
66	7421	E-8 M	〃	貝殻条痕と貝殻縁押圧との組合せ。やや厚手。	吉田式
67	11693	E-12 Mb	〃	貝殻腹縁の刺突連続文。底部に刻み目がある。	前平式
68	13615	D-14 Va	〃	貝殻腹縁の刺突連続文。茶褐色。やや厚手。	吉田式
69	14665	E-13 Va	〃	貝殻腹縁の刺突連続文。黒褐色。薄手。	吉田式
70	14386	C-14 Va	〃	貝殻腹縁の刺突連続文。茶褐色。薄手。	前平式
71	14096	E-13 Mb 下	〃	貝殻腹縁の刺突連続文。地文は貝殻条痕である。茶褐色。薄手。	前平式
72	3432	H-0 Va	〃	貝殻腹縁の刺突連続文。地文は貝殻条痕である。明茶褐色。やや厚手。	前平式
73	14173	C-13 Mb 下	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。暗茶褐色。薄手。	吉田式
74	6911	C-13 V	底部	貝殻腹縁による押圧連続文。底部には刻み目有す。茶褐色。薄手。	吉田式
75	8880	C-13 V	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。底部には刻み目有す。茶褐色。薄手。	吉田式
76	14056	D-13 Va	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。条痕と刺突の組合せ施文。長い刻み目有す。薄手。	前平式
77	9413	E-14 Mb	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。条痕と刺突の組合せ施文。長い刻み目有す。薄手。	前平式
78	11871	F-14 Va 上	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。長い刻み目を有す。	吉田式

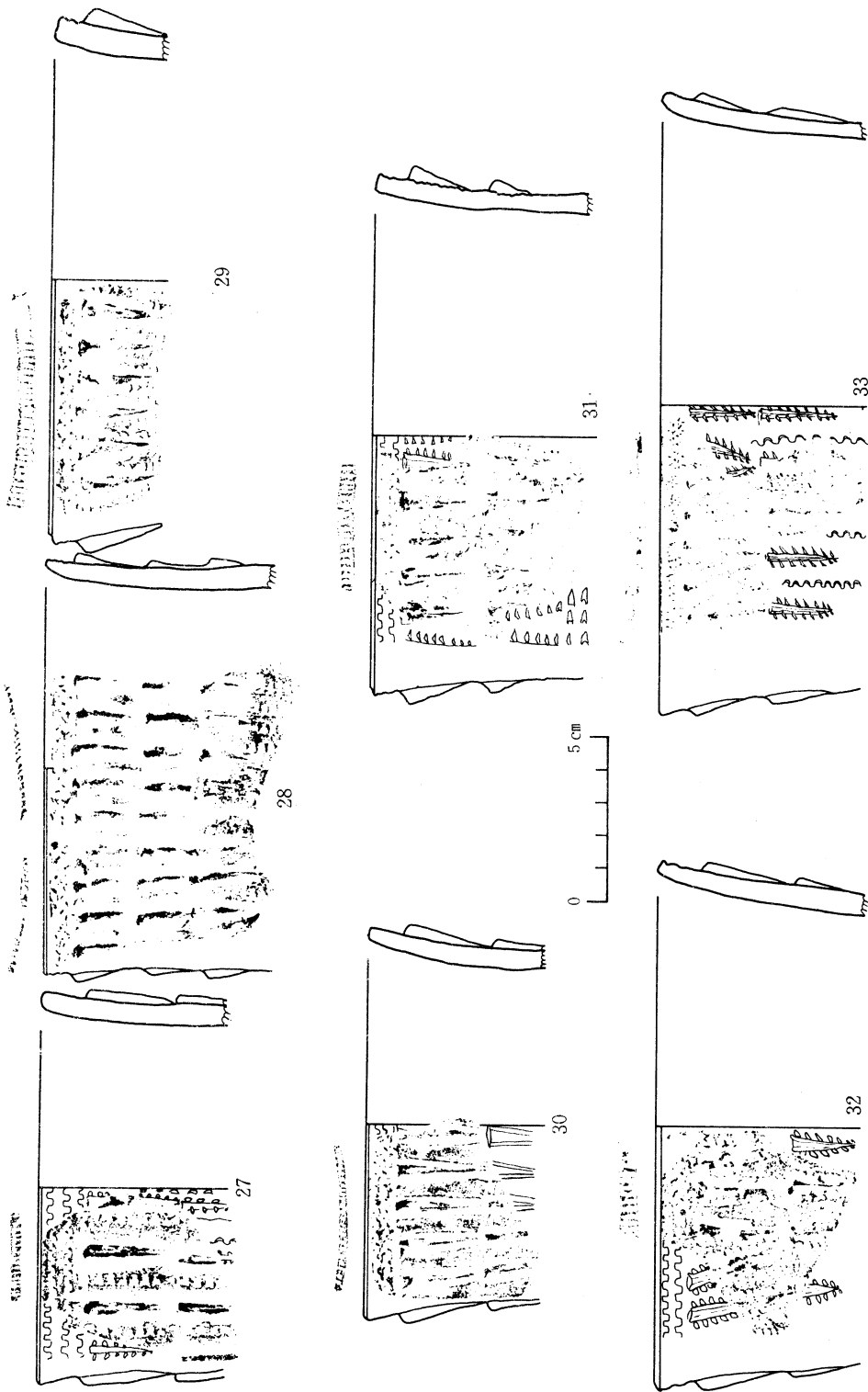
挿図番号	出土番号	出土層	部位	特 徴	形式
79	14226	F-13 Va 上	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。平底である。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
80	9887	F-11 Va 上	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。平底である。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
81	2711	I-1 Nb 中	〃	貝殻腹縁による押圧連続文。平底である。貝殻刺突文。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
82	14149	E-13 Va	〃	平底である。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
83	14096	E-13 Nb	〃	平底である。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
84	7982	D-13 Nb	〃	平底である。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
85	6230	D-14 Va	〃	平底である。茶褐色。へらで底面は研磨調整。	
86	8429	G-8 V	〃	横位の貝殻条痕で底部は刻み目有す。茶褐色。	吉田式
87			角筒口縁	口唇部刻み目有り。口縁部は3条の貝殻刺突連続文を有す。地文は貝殻腹縁斜条痕でその上に貝殻刺突文を施している。角部の口縁は山形口縁である。茶褐色。内側はへら削りである。	前平式
88	9420	E-14 Nb	角筒口縁	角部の口縁部である。口唇部には刻み目を有し口縁部には3条の貝殻腹縁による条痕と刺突が施文されている。山形口縁。茶褐色内側はへら削り。	前平式
89	13562	E-15 Va	〃	口唇部刻み目有す。口縁部は4条の貝殻腹縁刺突文がある。文様は貝殻腹縁による条痕の地文に刺突を組合せている。暗茶褐色。篋削りが内面にある。	前平式
90	14682	E-13 Va 上	〃	山形口縁で角部である。口唇部には刻み目を施して口縁部には3条の貝殻腹縁による刺突施文がある。貝殻条痕が地文で貝殻腹縁による刺突文が見られる。内面にも貝殻条痕がある。	前平式
91	11967	E-13 Va 上	〃	山形口縁の一部である。口唇部には刻み目が施され3条の貝殻腹縁刺突施文がある。器面の施文は貝殻条痕による条痕と刺突の組合せ。茶褐色	前平式
92	8523	F-15 Nb	角筒胴部	角部である。角部は刻み目がある。地文は貝殻条痕とその上に貝殻腹縁刺突文が施文されている。底部近くであるため厚い。茶褐色。	前平式
93	8520	F-15 Nb 下	〃	72と同一個体と思われる。内面はへらけずり調整である。	前平式
94	14338	F-14 Va	〃	貝殻腹縁による斜条痕の地文と菱形の刺突文を施こしている。底部近くのため厚手である。	前平式
95	9172	F-15 Nb 下	角筒底部	貝殻腹縁による斜条痕を地文に刺突を施文している。表が茶褐色で裏が黒褐色。	前平式
96	12338	F-15 Na	角筒口縁	貝殻腹縁による斜条痕を地文と刺突を施文している。山形口縁で角部にあたる。口縁部の文様は4条の連点文を施している。暗茶褐色。	前平式
97	13914	F-14 Va	〃	口唇部には刻み目を有し、口縁部は貝殻腹縁の刺突が3条みられる器面は貝殻条痕の地文に刺突が見られる。黒褐色。	前平式
98	14856 14531	E-13 Va E-12 Va	〃	口縁部は4条の連点文。外器面は貝殻腹縁による条痕と刺突文が施こされている。山形口縁で角部にあたる。茶褐色。	前平式
99	10927	E-13 Nb	〃	78と同一個体である。円形の孔がある。穿は外側よりつくられてる	前平式
100	14327	F-14 Va 上	角筒胴部	貝殻条痕の器面に刺突文を横位に施こしている。口縁部の77と同一個体であろう。暗茶褐色。	前平式
101	14327	F-14 Va 上	〃	79・80と同一個体。胴部下位の部分である。茶褐色。	前平式
102	13357	E-14 Va 上	角筒底部	79・80・81と同一個体。底部である。	前平式
103	12054	D-15 Va 上	角筒口縁	口縁部には3条貝殻腹縁刺突文を施こす。外器面に条痕と地文としてその上に貝殻腹縁(三列)による鋸歯状文を施こしている。暗茶褐色。	前平式
104	9199	C-15 V 上	口縁胴部	口縁部は3条の連点文を施こし胴部は貝殻条痕を鋸歯状の施文がみられる。角部にも貝殻腹縁による施文がみられる。外器面は黒褐色。内器面は茶褐色。内面はへらけずりで調整である。	前平式
105	12204	F-15 Nb 下	角筒胴部	84と同施文であるが、鋸歯状の施文が大きい。明茶褐色。	前平式
106	9214	E-15 V 上	〃	84・85と同施文である。角部で黒褐色。	前平式
107	13263	E-14 Nb 下	〃	84・85・86と同施文である。角部で明茶褐色。	前平式
108	9196	C-15 V 上	〃	84と同一個体である。	前平式
109	12452	E-13 Va 上	角筒口縁	口唇部には刻み目を有し口縁は3条の貝殻腹縁による刺突文がみられる。外器面は貝殻背面による押圧連続の施文である。薄手で明茶褐色。	吉田式
110	14528	E-12 Va	角筒胴部	文様は貝殻条痕の地文に貝殻腹縁による刺突連続文である。茶褐色内面はへらけずり。	前平式
111	8491	F-15 Nb 下	〃	91と同様であるが内面の調整はへらなで状である。	前平式
112	11282	F-14 Nb	角筒底部	刻み目のある底部であり、貝殻条痕と鋸歯状の施文がみられる。角部は鈍い。	前平式
113	13094	F-12 Va 上	〃	底部の刻み目は細くて長い。器面は貝殻条痕の地文に貝殻腹縁の刺突がみられる。茶褐色で調整がよく底面は研磨されている。角部は鈍い。	前平式
114	8370	F-15 V 上	〃		前平式
115	6987	D-13 V	〃	斜状の刻み目圧痕である。暗茶褐色。	
116	9574	F-14 III	〃	細い刻み目圧痕である。茶褐色。	

挿図 番号	出土番号	出土層	部位	特 徴	形式
117	10195	F-14 Mb	〃	刻目圧痕が施こされている。茶褐色。	
118	12807	D-15 Va	〃	貝殻腹縁による条痕が外器面に施こしている。底部の立ち上り部は 篋調整である。茶褐色。	前平式
119	10193	F-14 Mb	〃	貝殻腹縁による条痕が外器面に施こしている。底部の立ち上り部は 篋調整である。茶褐色。	前平式
120	14219	F-13 Va 上	〃	角部にクサビ形粘土貼り付け文がみられる。茶褐色。うすで。	
121	10333	E-13 Mb	口縁	外反する口縁部である。外器面は微隆起線文が施こされ、内器面は 山形押形文を施こしている。うす手である。	手向山系
122	3275	I-0 Mb 中	口縁	「く」の字に外反すると縁部である。内外面ともに山形押圧文を施文 している。明茶褐色。	押形文系
123		F-7 表下	頸部	102と同一個体と考えられる。頸部で微隆起線文が施こされている。	手向山系
124	6649	E-3 Mb 下	胴部	102と同一個体と考えられる。	押形文系
125	2882	I-0 Mb 中	〃	102, 104と同一個体と考えられる。頸部で外器面に押形文が施こされている。	押形文系
126	13490	D-14 Va	〃	口縁部は直行し、口縁部のみ貝殻腹縁による刺突が2段に施文されている。 厚手で暗茶褐色である。器面はナデ調整で良く仕上がっている。	押形文系
127	3134	I-0 Mb 中	口縁	口縁部は直行し、口縁部のみ貝殻腹縁による刺突が2段に施文されている 厚手で暗茶褐色である。器面はナデ調整で良く仕上がっている。	政所系
128	8156	F-7 V	〃	口縁部は直行し2段の貝殻腹縁による刺突連続文を施こしている。 器面の調整は良い。茶褐色。	政所系
129	8410	F-8 V	〃	口唇部は直行し2段の貝殻腹縁による刺突連続文を施こしている。 また口唇にも同施文がみられる。器面の調整は良い。厚手である。	政所系
130	8153	F-7 V	胴部	器面の調整が良い底部である。厚手の土器で外器面は茶褐色で内器 面は黒褐色である。	政所系
131	2319	F-6 II 下	底部	尖底部である。明茶褐色で外器面の調整はよい。厚手の土器である	政所系
132	3063	I-0 Mb 中	口縁	外反する口縁部である。微隆起線文連点と沈線文の組み合わせである。 微隆起線文には刻み目を有する。また口唇部にも刻み目がみら れる。明茶褐色で山形口縁と考えられる。	平椀系
133	2902	I-0 Mb 上	〃	「く」の字に外反する口縁部から頸部に至る部分である。刻み目のあ る微隆起線文と沈線の組み合わせ施文である。明茶褐色である。	平椀系
134	3300	I-0 Mb 下	胴部	「く」の字に外反する口縁部から頸部に至る部分である。刻み目のあ る微隆起線文が施こされている。	平椀系
135	3083	I-0 Mb 中	口縁	「く」の字に外反する口縁部で沈線と貝殻腹縁による押し引きとの組み 合わせである。蒲鉾型口縁である。胎土焼成は良い。茶褐色。	平椀系
136	3209	I-0 Mb 中	胴部	沈線と連点文の組み合わせである。厚手の土器である。	平椀系
137	2680	I-1 Mb 中	口縁	口唇部に刻み目がある。外反する口縁部であり沈線と微隆起刻み目 文の組み合わせである。	平椀系
138	3057	I-0 Mb 上	〃	蒲鉾型口縁である。口唇部は刻み目を施し口縁部は沈線で文様を施 している。茶褐色で焼成は良い。	平椀系
139	2902	I-0 Mb 上	胴部	燃糸文土器である。黒褐色である。焼成は良い。	平椀系
140	3041	I-0 Mb 上	〃	沈線と連点の組み合わせの施文を全面に施こしている。灰褐色で焼成は良い。	平椀系
141	2822	I-1 Va	口縁	「く」の字に外反する口縁部である。文様は口唇部に刻み目、口縁部に刻み目 の中に燃糸文を施こす。頸部にも刻み目がみられる。茶褐色。	壺/神A式
142	6653	E-2 Mb	胴部	燃糸文と沈線の組み合わせである。	壺/神A式
143	3075	I-0 Mb 上	〃	沈線の中に燃糸文を施文している。	壺/神A式
144	3077	I-0 Mb 中	〃	燃糸文の土器である。茶褐色。	壺/神A式
145	2883	I-0 Mb 上	〃	沈線の中に燃糸文を施こしている。	壺/神A式
146	3013	I-0 Mb 上	口縁 胴部	頸部は「く」の字に外反し、内側は稜がみられる。文様は口縁部に刺突連続文を 沈線でかこんだ燃糸文を施こす。胎土焼成良。茶褐色。	壺/神A式
147	1956・10854 9355	F-12 Mb. Nb F12 Mb	口縁~胴部	口縁部は「く」の字に外反し器面には貝殻腹縁による刻み目と条痕を施こす。	壺/神B式
148	8810	F-12 Mb	胴部	貝殻腹縁による押し引文と条痕を施文している。内側は若干研磨され ている。茶褐色。胎土焼成良。	壺/神B式
149	8812・9341 9317・9307	F-12 Mb. F-12 Mb F-12 Nb. F-12 Nb 上	〃	128と同一個体と考えられる。底部近くであるため貝殻腹縁による条 痕を横位に施文している。	壺/神B式
150	3446	I-0 Mb 下	口縁	口唇部は貝殻腹縁による刺突、外器面は貝殻条痕、内器面は篋調整 である。土器の整形が悪い。赤茶褐色。	
151	2806	I-1 Mb 中	〃	口唇部は貝殻腹縁による刺突、外器面は貝殻条痕。内器面は篋調整 である。土器の整形が悪い。赤茶褐色。	
152	2934	I-0 Mb 中	胴部	口唇部は貝殻腹縁による刺突、外器面は貝殻条痕、内器面は篋調整 である。土器の整形が悪い。赤茶褐色。	

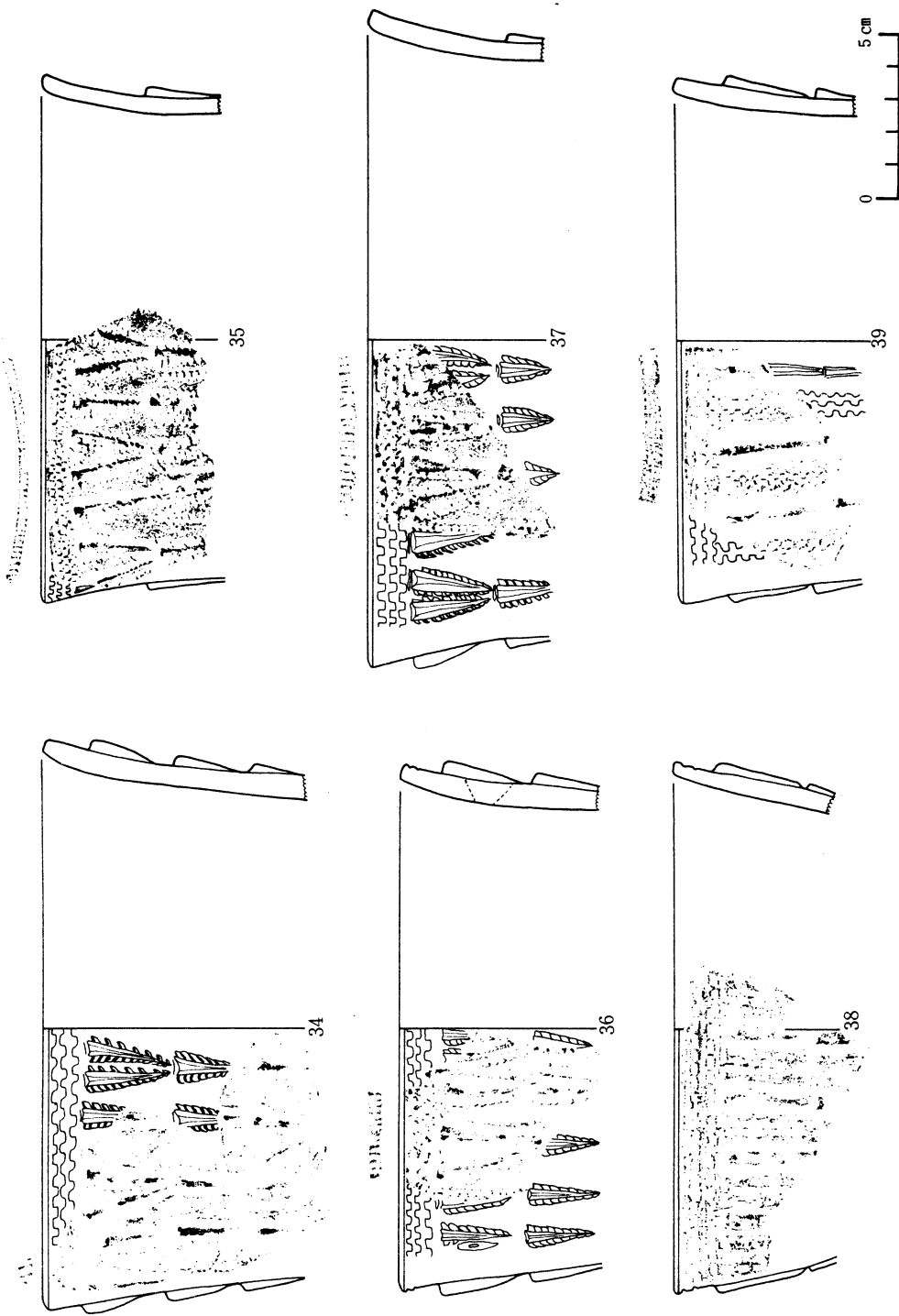
挿図 番号	出土番号	出土層	部位	特 徴	形式
153	6722	D-1 Ma	口縁	口唇部は貝殻腹縁による刺突で外器面の文様は貝殻条痕である。内器面は匏調整である。灰茶褐色。胎土焼成は良い。	
154	6723	D-2 Ma	〃	口唇部は貝殻腹縁による刺突で外器面の文様は貝殻条痕である。内器面は匏調整である。灰茶褐色。	
155	5930	D-2 M	口縁	篋状施文具で寄せ上げて隆起線文を施こしている土器である。内面は匏研磨である。暗茶褐色。焼成良。	
156	8122	E-5 M	胴部	直した口縁部で口唇部に貝殻腹縁の刺突連続文を施こす。外器面は貼り付けの隆起線文を廻らしている。内器面は貝殻条痕の調整がみられる。暗茶褐色。胎土焼成は良くない。	
157	7762・7763 7802 7778 8118	E-5 Ma E-5 Ma E-5 Na E-5 Na E-5 M	口縁	直した口縁部で口唇部に貝殻腹縁の刺突連続文を施こす。外器面は、貼り付けの隆起線文を廻らしている。内器面は貝殻条痕の調整がみられる。暗茶褐色。胎土焼成は良くない。	
158	2631	I-1 IIIb下	〃	口唇部に刻み目を施こす。外器面は匏で調整(文樣的に)。茶褐色。	
159			完形	5つの山形口縁をもち口唇部に刻み目をもつ匏で微隆起線をつくり上げる程度に施文している。上半部が横位に下半分が縦位に施こしている。暗赤褐色。	
160	100-101 120	H-9 M 上 H-10	胴部	口縁近くは隆起線文とヨレヨレの貝殻条痕がみられ、胴～底部は貝殻条痕とが横位にみられる。隆起線文には刻み目が施こされている全体として匏調整がみられる。口縁部はやや外反する。茶褐色。	
161	5704	E-2 IIIb上	口縁	やや外反した口縁部で隆起線文を施こしている。匏調整である。明茶褐色。	叢系類似
162	5702	E-2 IIIa		粘土紐を貼り付けた隆起線文土器である。黒褐色。	叢系類似
163	3952	C-10 IIIa上	口縁	大形沈線文の土器である。暗赤褐色。焼成良。	阿高系
164	4993	E-19 IIIa上	〃	刻目と沈線の施文である。明茶褐色で中期の土器統であろう。	阿高系
165	2118	F-13 II下	〃	刻目と沈線の施文である。明茶褐色で中期の土器統であろう。	阿高系
166	5648	E-4 IIIa	〃	細い沈線文の文様を施こす。口唇部は太い刻み目を施こし若干山形をなす。明茶褐色。	阿高系
167		E-18 表	〃	細い沈線の文様を施こす。頸部がしまり内面は若干緩力が出る。後期。	
168	9287	E-12 III	〃	三角断面の口縁部で連点がみられる。明茶褐色。後期。	
169			底部	貝殻条痕の調整がある。底部である。平底。明茶褐色。後期。	
170	6179	F-16 IIIb	〃	内面は貝殻条痕の調整がある。平底である。明茶褐色。後期。	
171		表下	口縁	黒色研磨土器である。浅鉢。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
172	5068	C-13 IIIa	〃	黒色研磨土器である。浅鉢。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
173	4750	C-13 IIIa上	〃	黒色研磨土器である。浅鉢。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
174	3704	C-13 II下	〃	黒色研磨土器である。浅鉢。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
175	2262	H-6 IIIa上	〃	黒色研磨土器である。浅鉢。口縁部は若干厚くなりその上に沈線文を施こす。晩期。	晩期I式
176		E-18 表	〃	粗製土器で深鉢である。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
177	3668	C-12 IIIa上	〃	粗製土器で深鉢である。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
178	9713	F-13 III	〃	粗製土器で深鉢である。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
179	9242	F-11 III上	底部	粗製土器で深鉢である。暗茶褐色。晩期。	晩期I式
180	9343	F-12 III	口縁	粗製土器で深鉢である。暗茶褐色。口縁部は沈線文を施こし「く」字形に頸部は曲り胴部は張り綾線がつく。晩期。	晩期I式
181	2836・2837 2838		〃	粗製土器である。鉢形土器。内面は若干研磨をみる。	晩期II式



第 22 図 縄文式土器 (1)



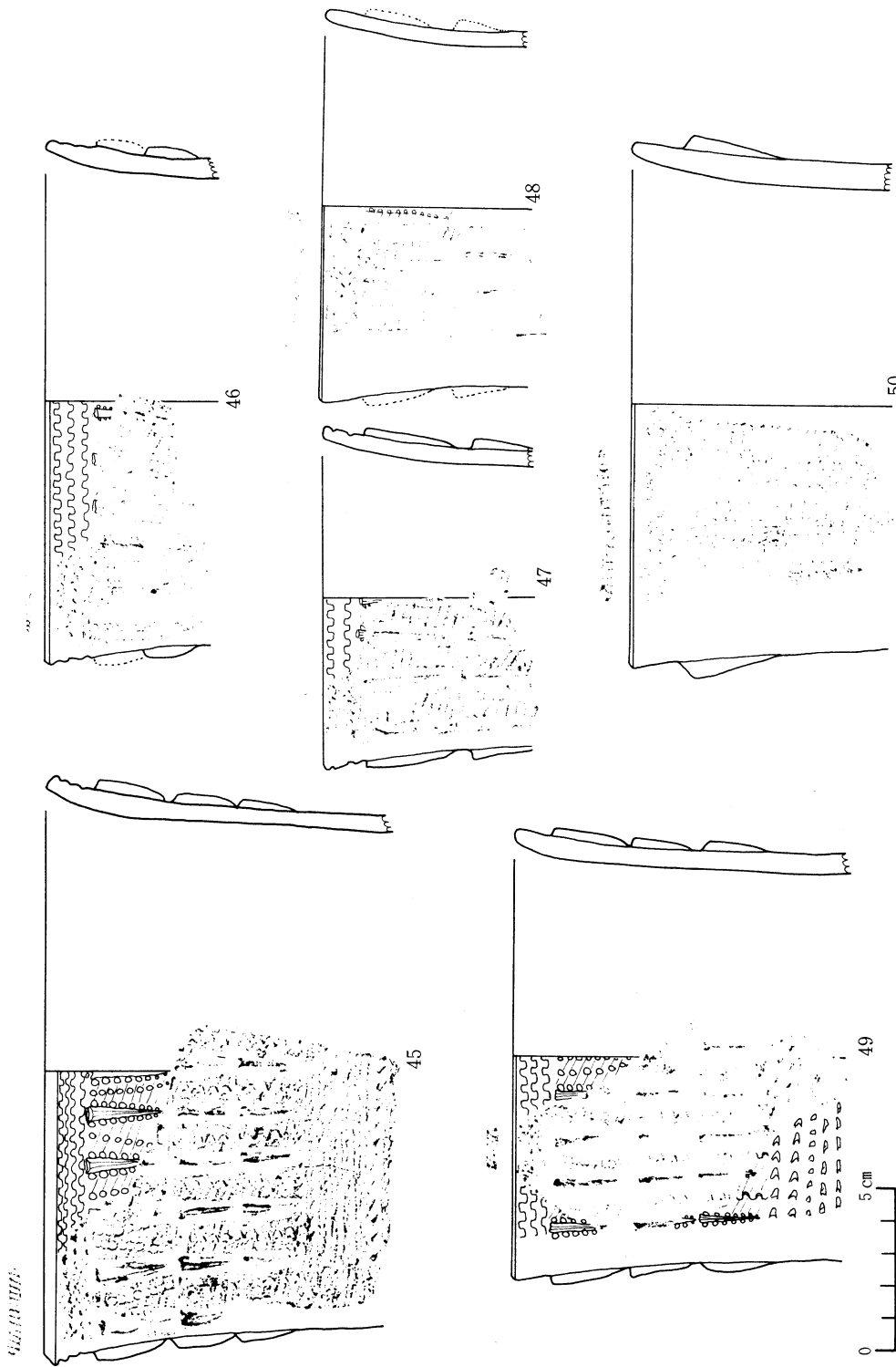
第 23 図 縄文式土器 (2)



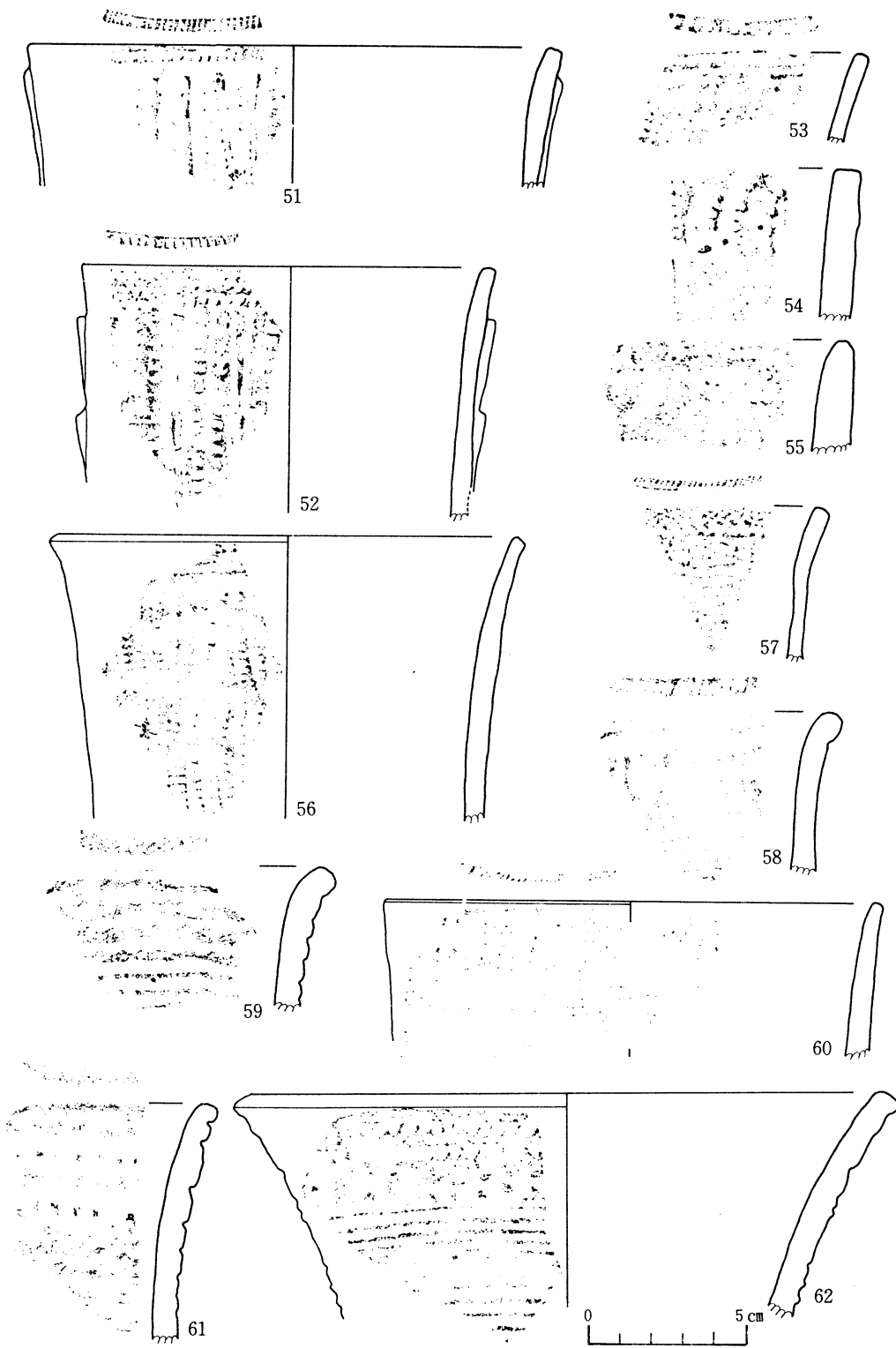
第 24 図 縄文式土器 (3)



第 25 図 縄文式土器 (4)



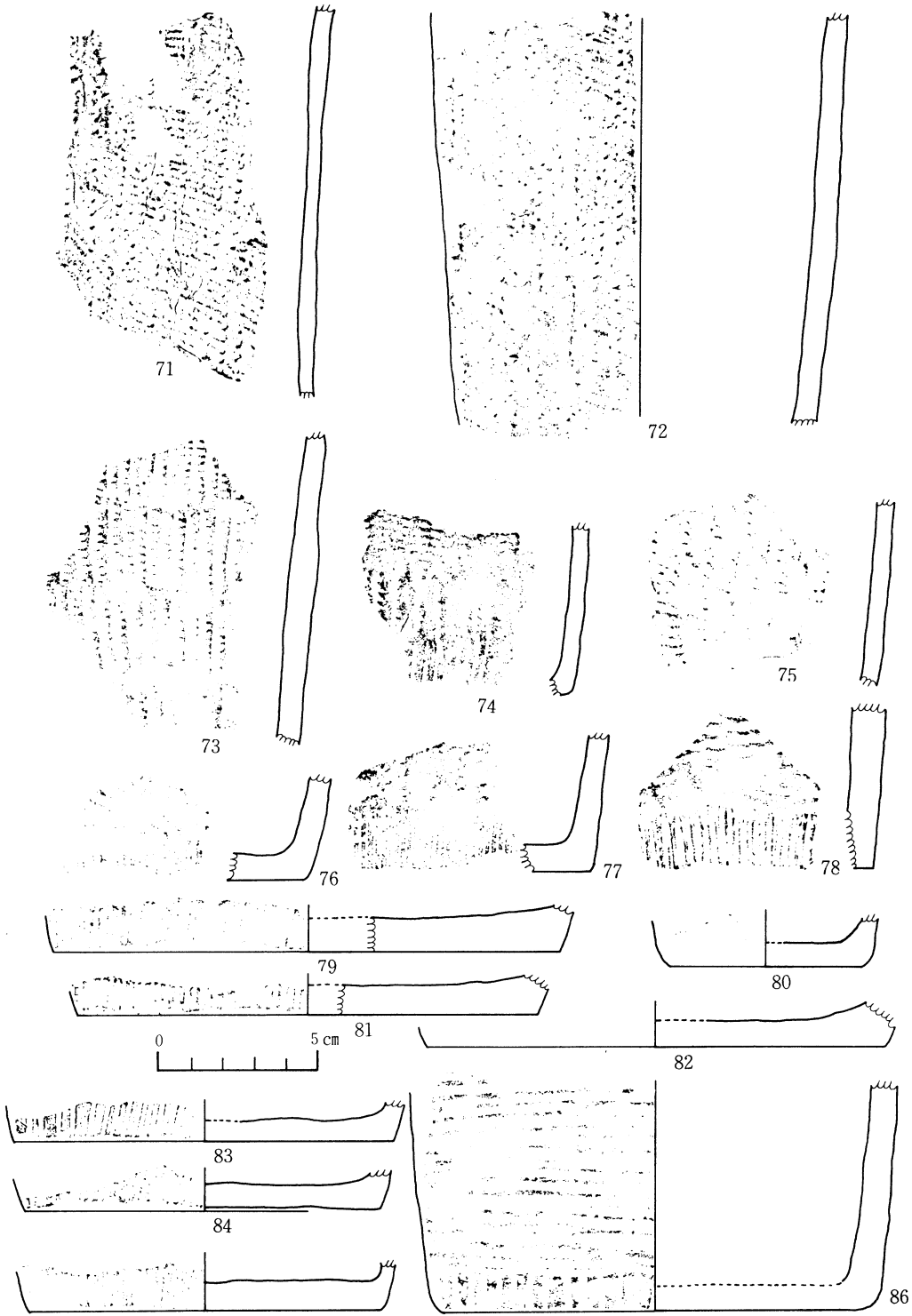
第 26 图 繩文式土器 (5)



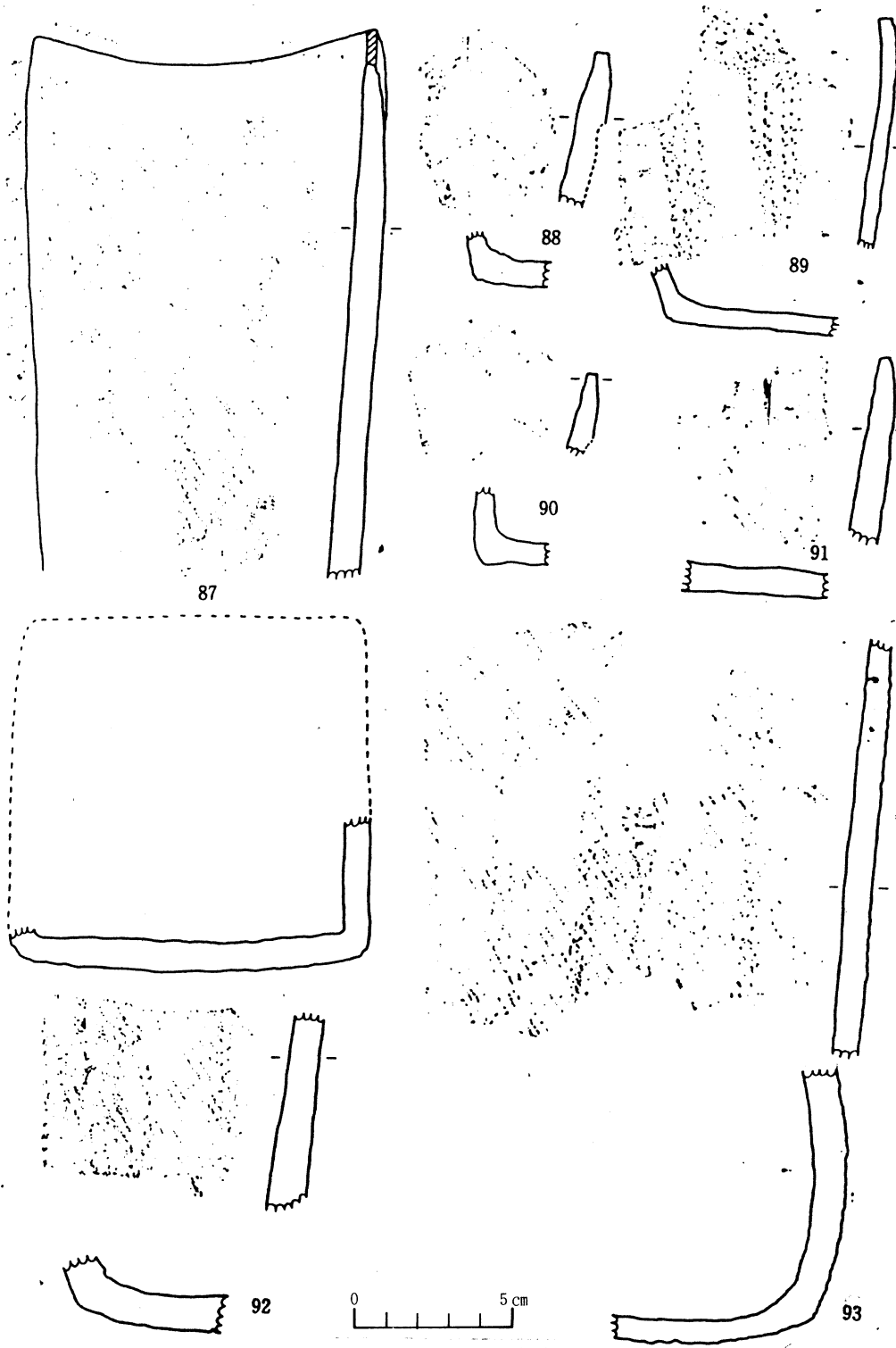
第27図 縄文式土器 (6)



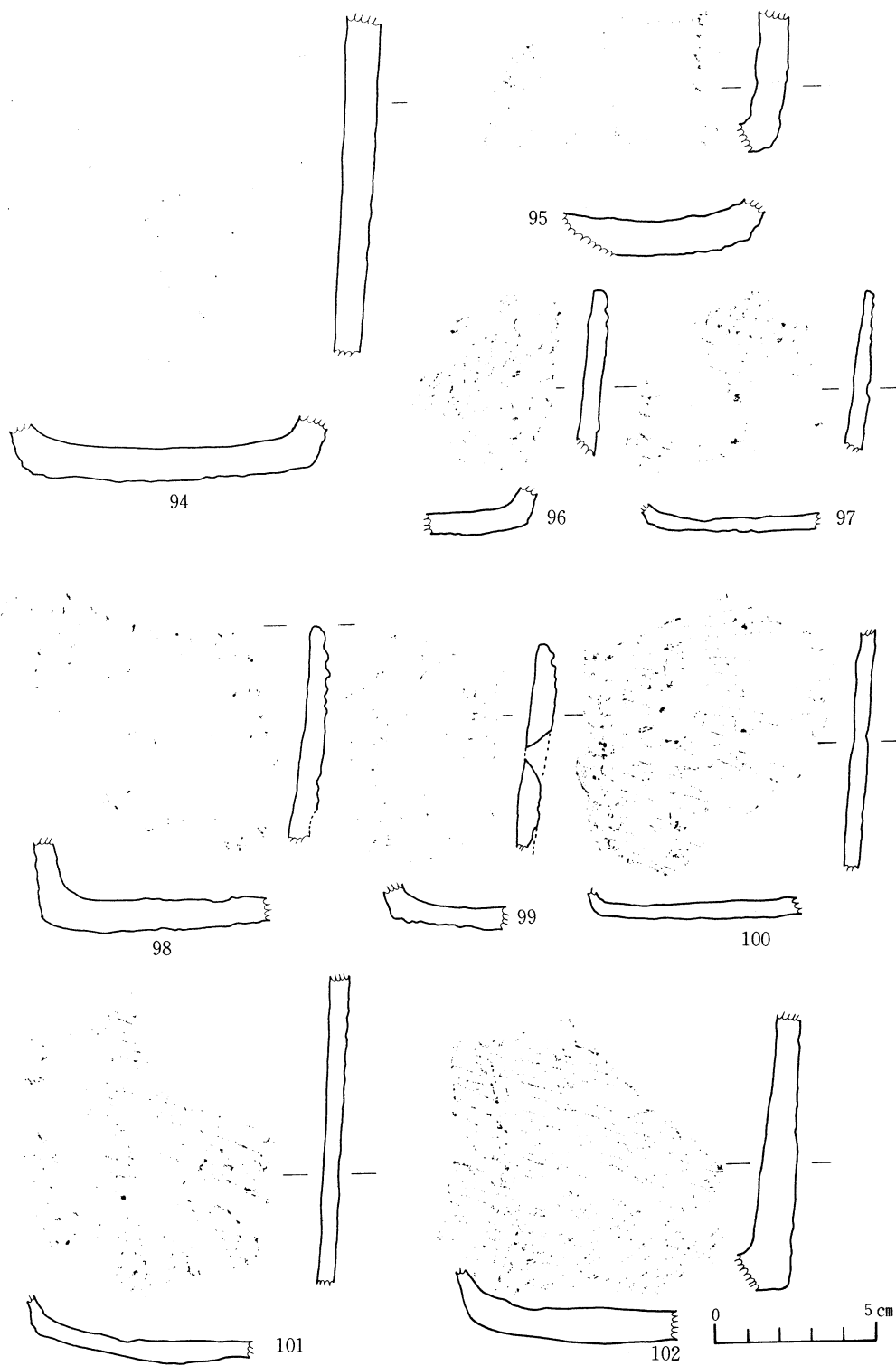
第28図 縄文式土器 (7)



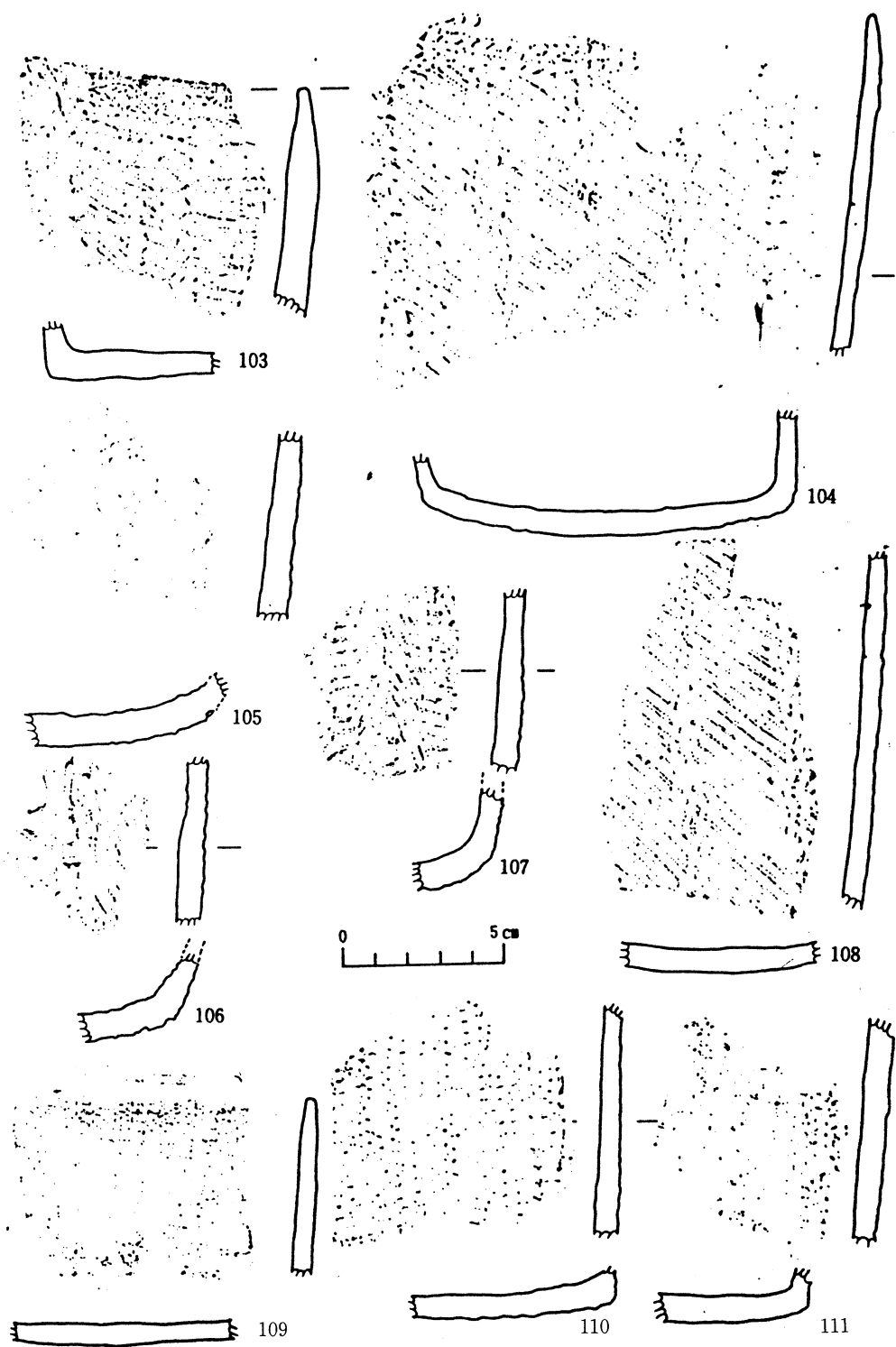
第29図 繩文式土器 (8)



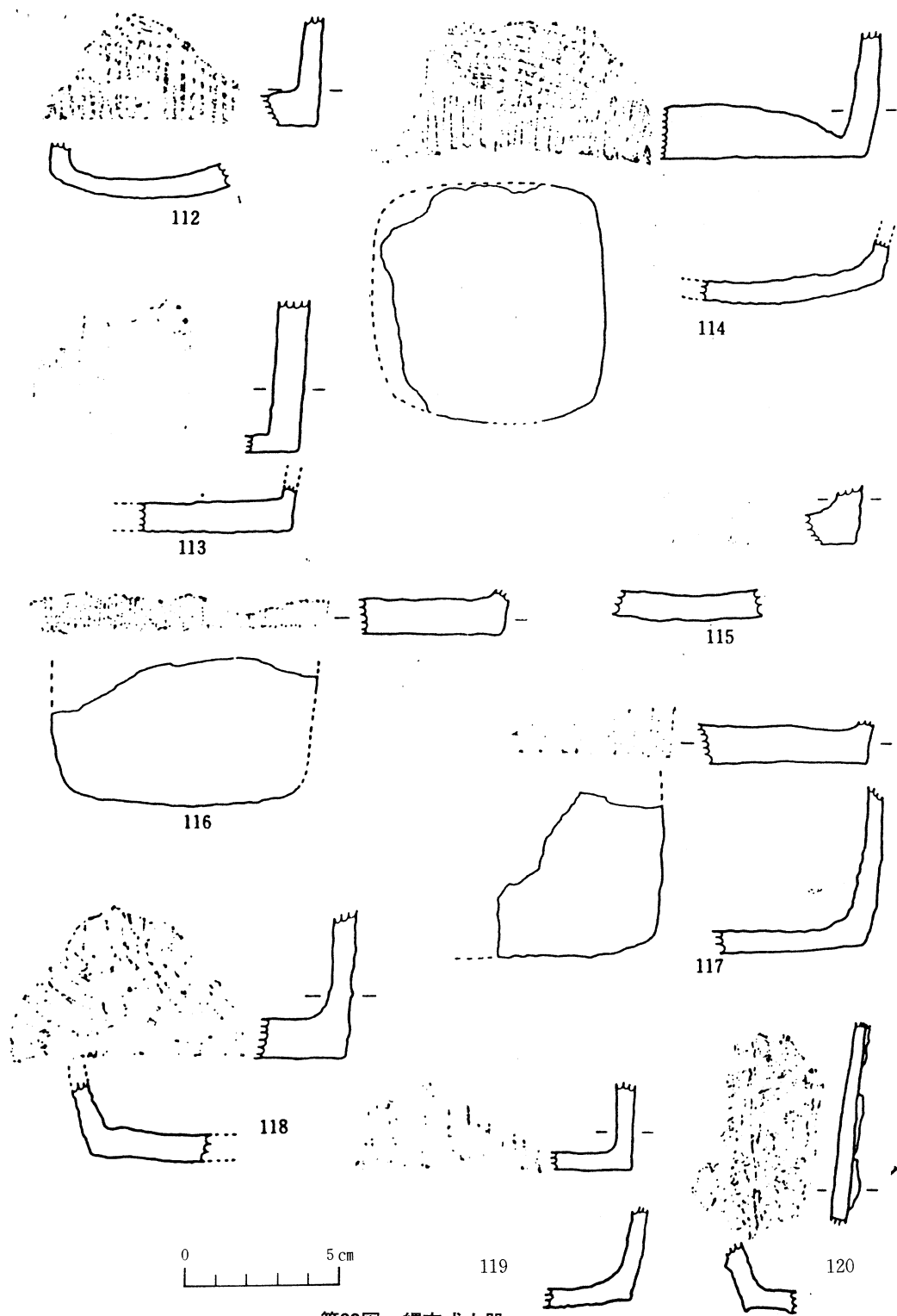
第30圖 繩文式土器 (9)



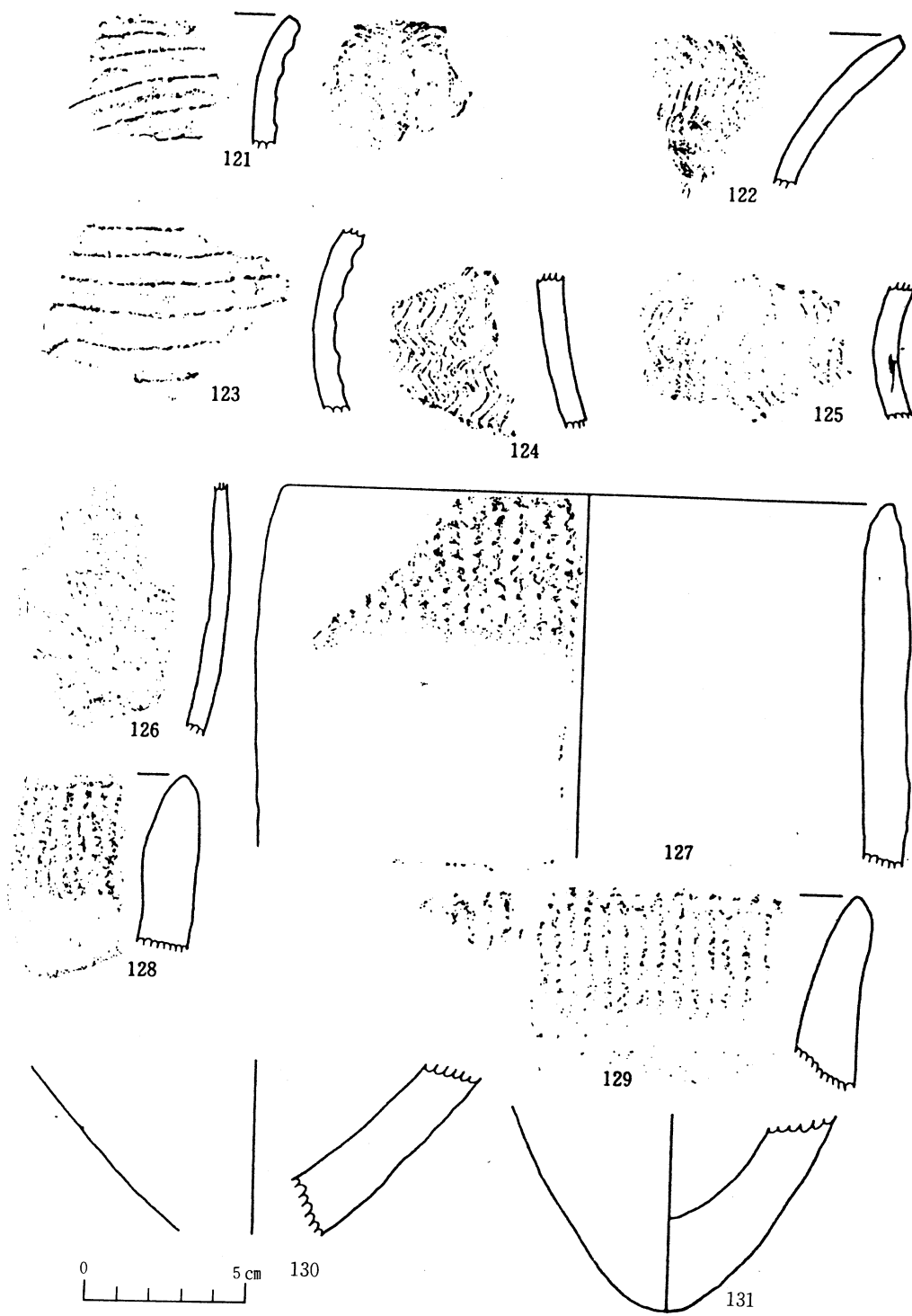
第31図 縄文式土器 (10)



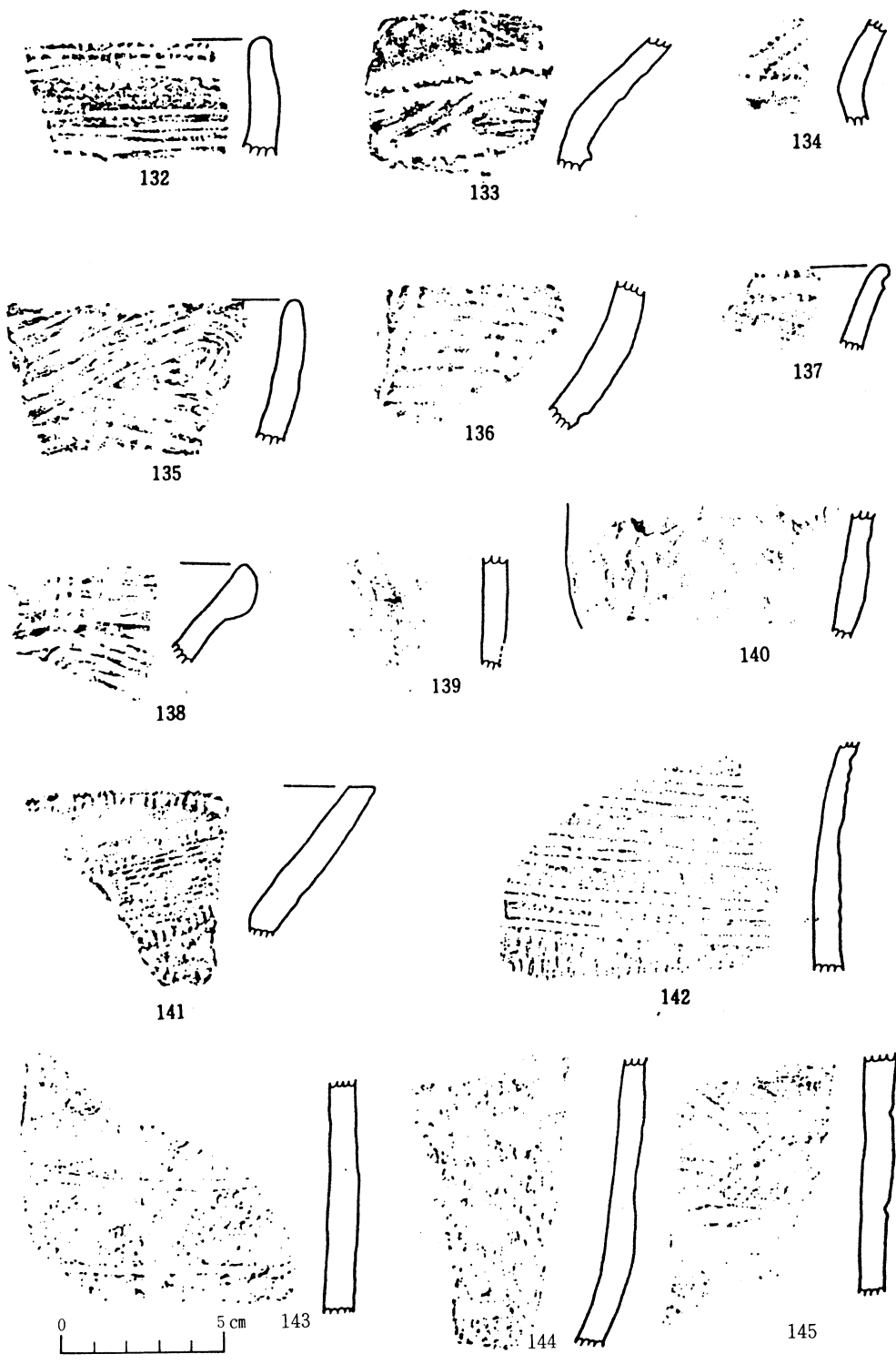
第32図 縄文式土器 (11)



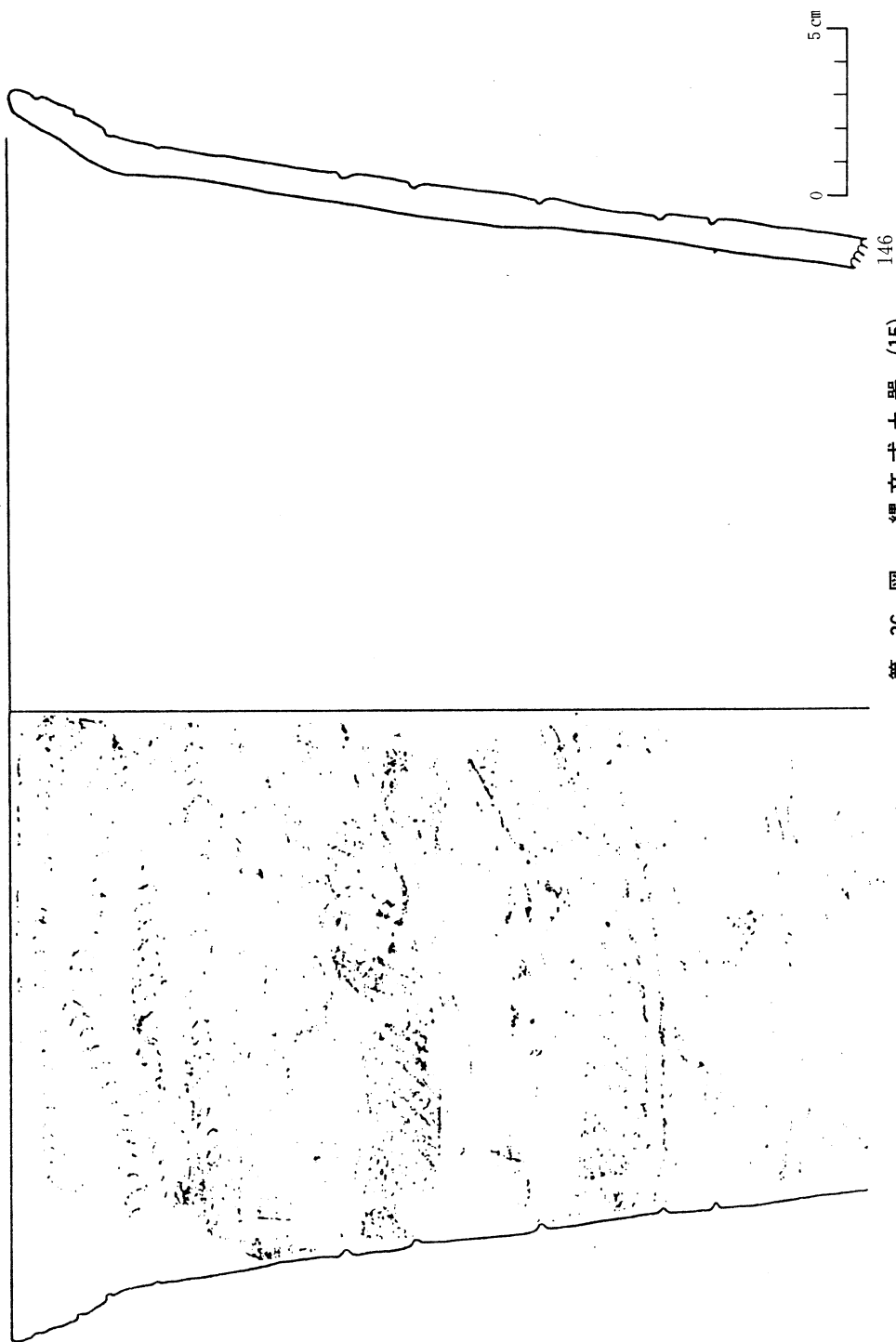
第33图 绳文式土器



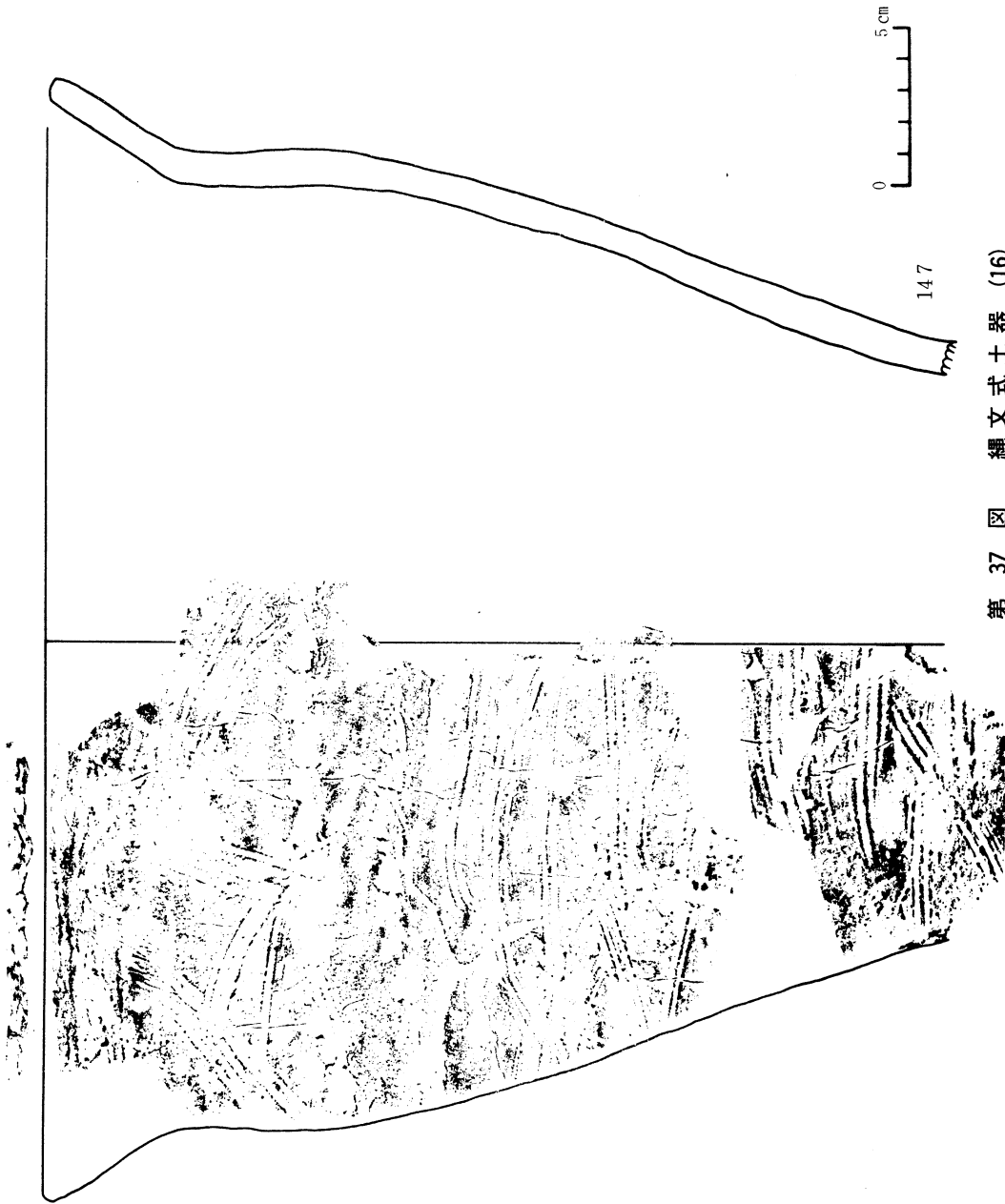
第34図 縄文式土器 (13)



第35図 縄文式土器 (14)



第 36 图 縄文式土器 (15)



第 37 図 縄文式土器 (16)



148



149



150



151

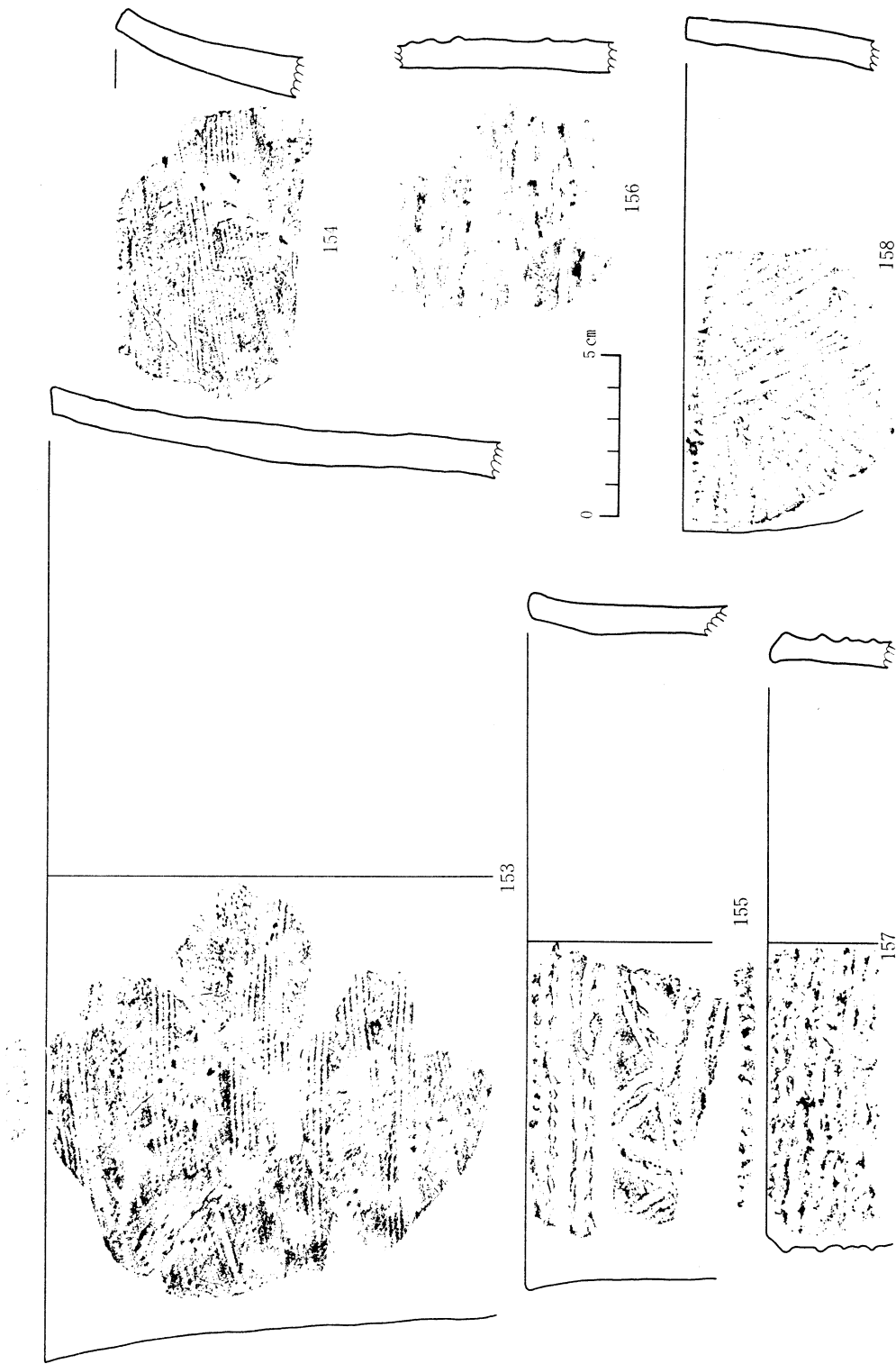


152

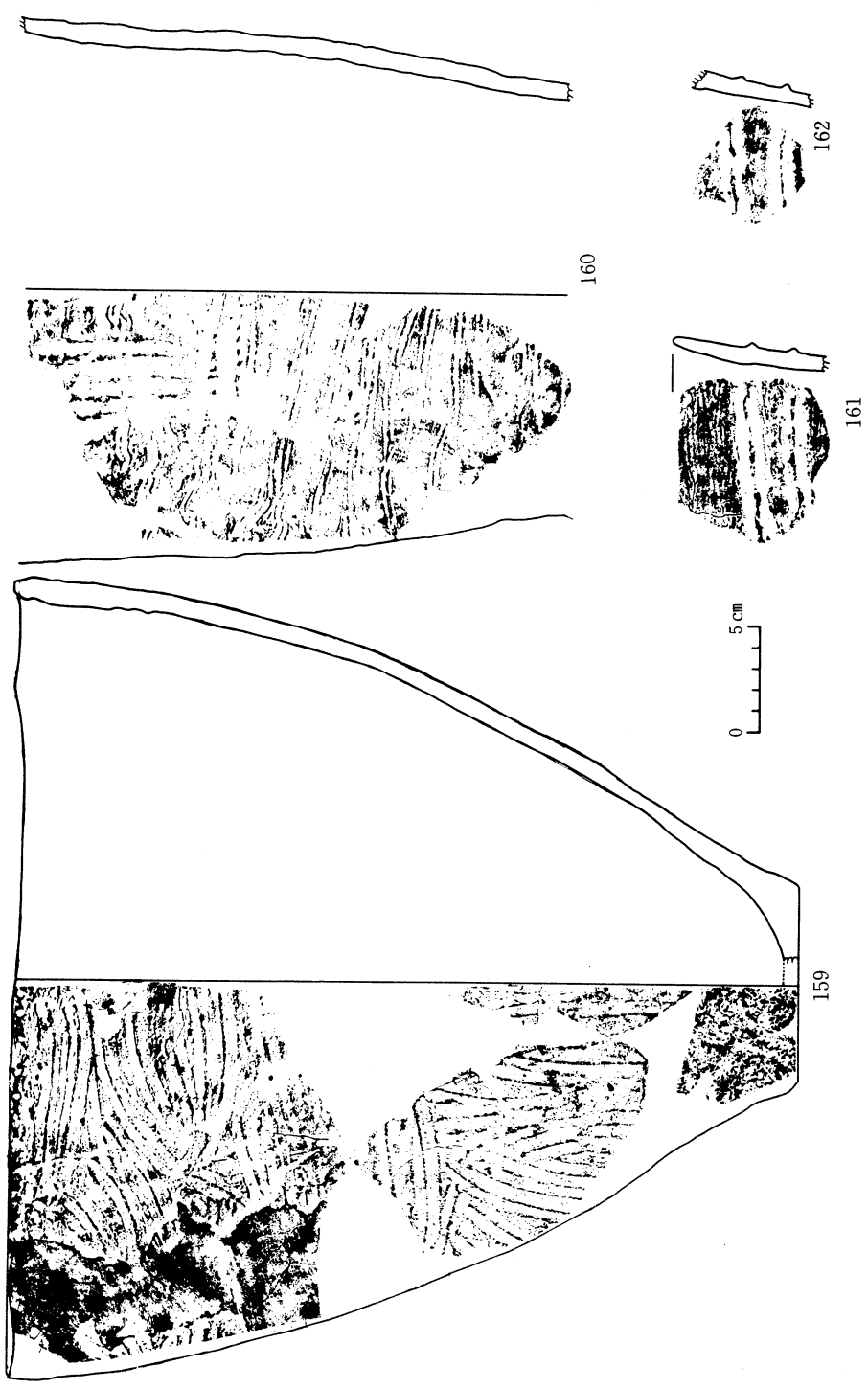


0 5 cm

第38図 縄文式土器 (17)



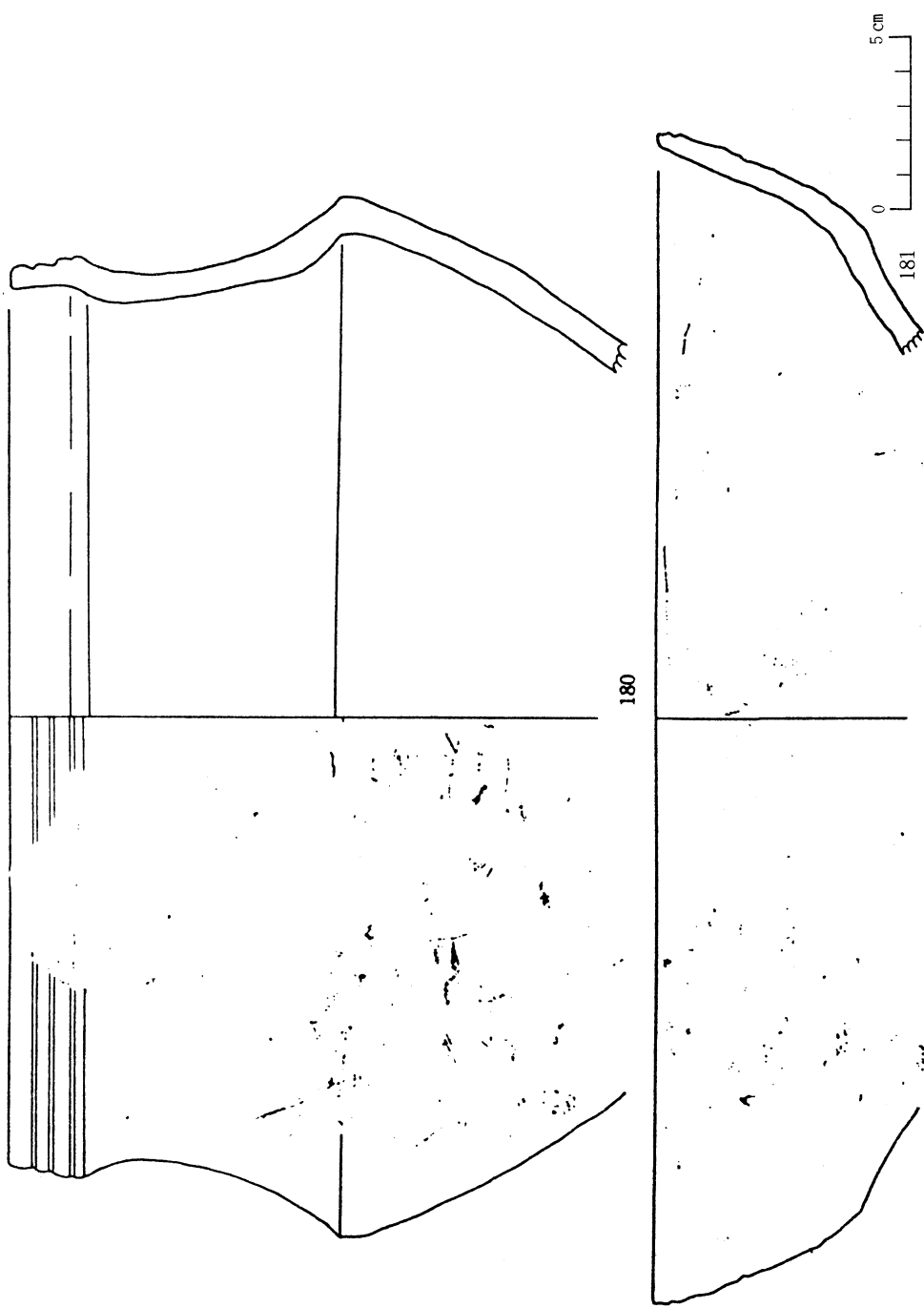
第 39 図 縄文式土器 (18)



第 40 図 縄文式土器 (19)



第41図 縄文式土器 (20)



第 42 图 縄文式土器 (21)

3 遺物 (石器)

本遺跡からは、総数 317点の石器が出土した。石器は、石鏃、石斧（磨製石斧、局部磨製石斧）、石匙、スクレイパー、剥片石器（使用痕のある剥片）、石核、剥片、すり石が出土している。これらの石器は各層ごとに分けて表わした。石鏃については第4表分類表に基づいて類別した。

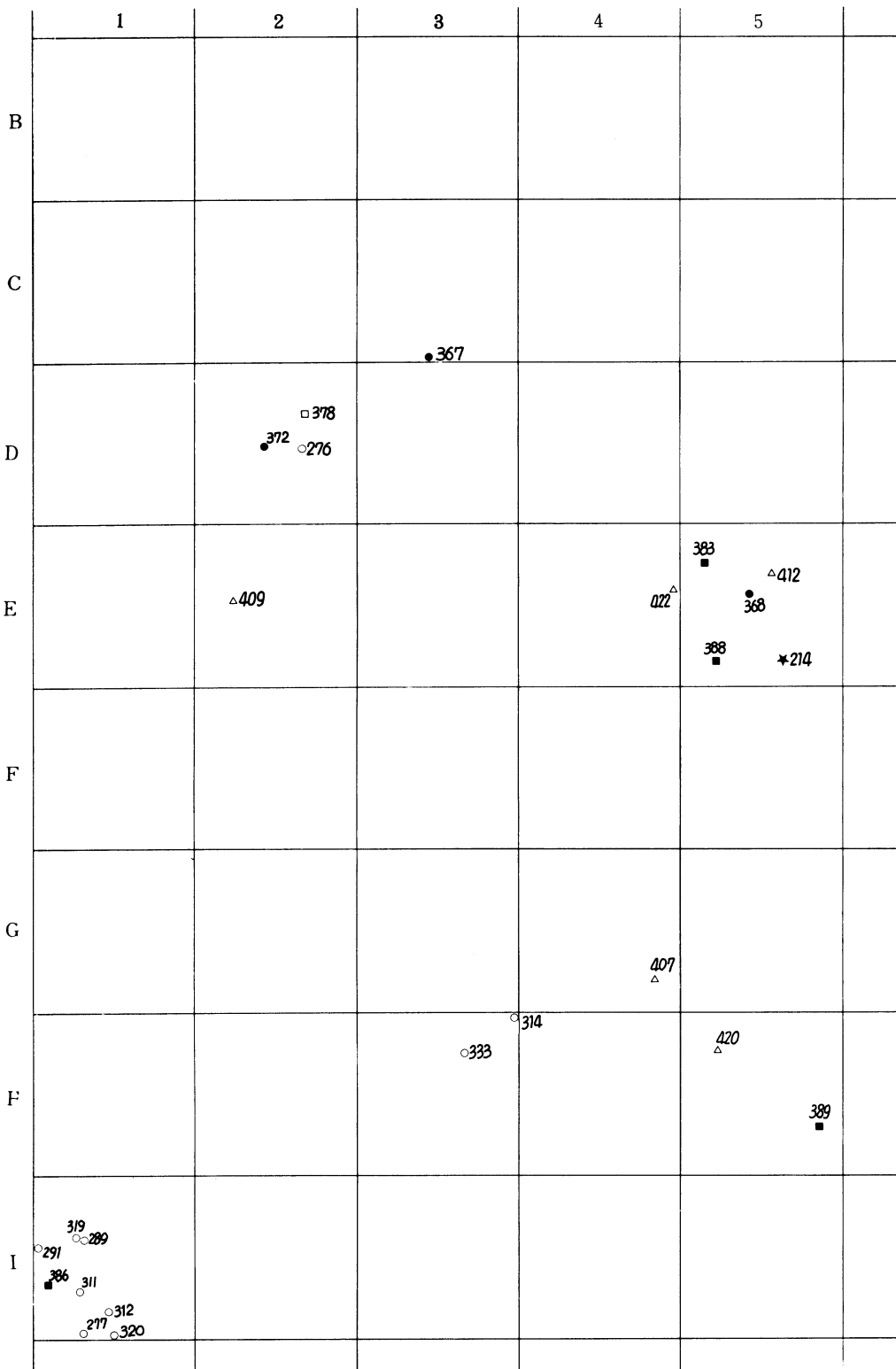
第4表 石鏃分類表

		基 部		側 辺		先 端			
凹	A	脚端が鋭く抉りが非常に深い。		A	鋸歯状を呈する。	A	鋭 い		
	B	脚場が鈍く抉りが非常に深い。							
	C	脚端が円く抉りが非常に深い。		B	側辺が内彎する。	B	ふ つ う		
	D	脚端が鋭く抉りが深い。							
	E	脚端が鈍く抉りが深い。		C	側辺がまっすぐで三角形を呈する。	C	鈍 い		
	F	脚端が円く抉りが深い。							
	基	G	脚場が鋭く抉りが浅い。		側辺外彎する(外曲する)	D	正三角形を呈する。	E	平 ら
		H	脚端が鈍く抉りが浅い。						
		I	脚場が円く抉りが浅い。						
		J	脚端が鈍く非常に抉りが浅い。						
		K	脚場が鋭く非常に抉りが浅い。						
		L	脚端が欠損で不明。						
平基									
凸基	ア	円 基		F	五角形を呈する。	F	先端部欠損で不明		
	イ	尖 基							

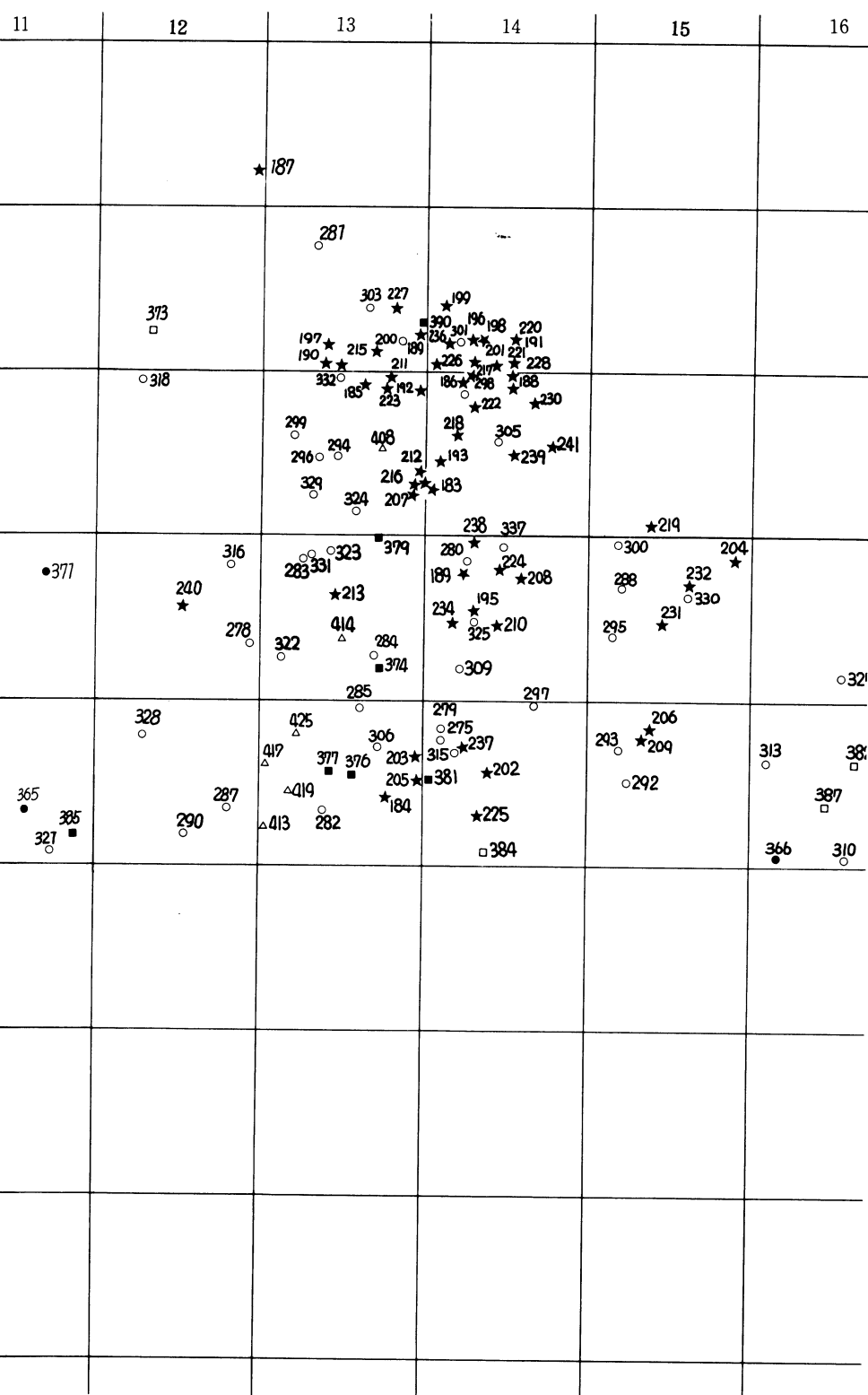
(1) V層出土の石器

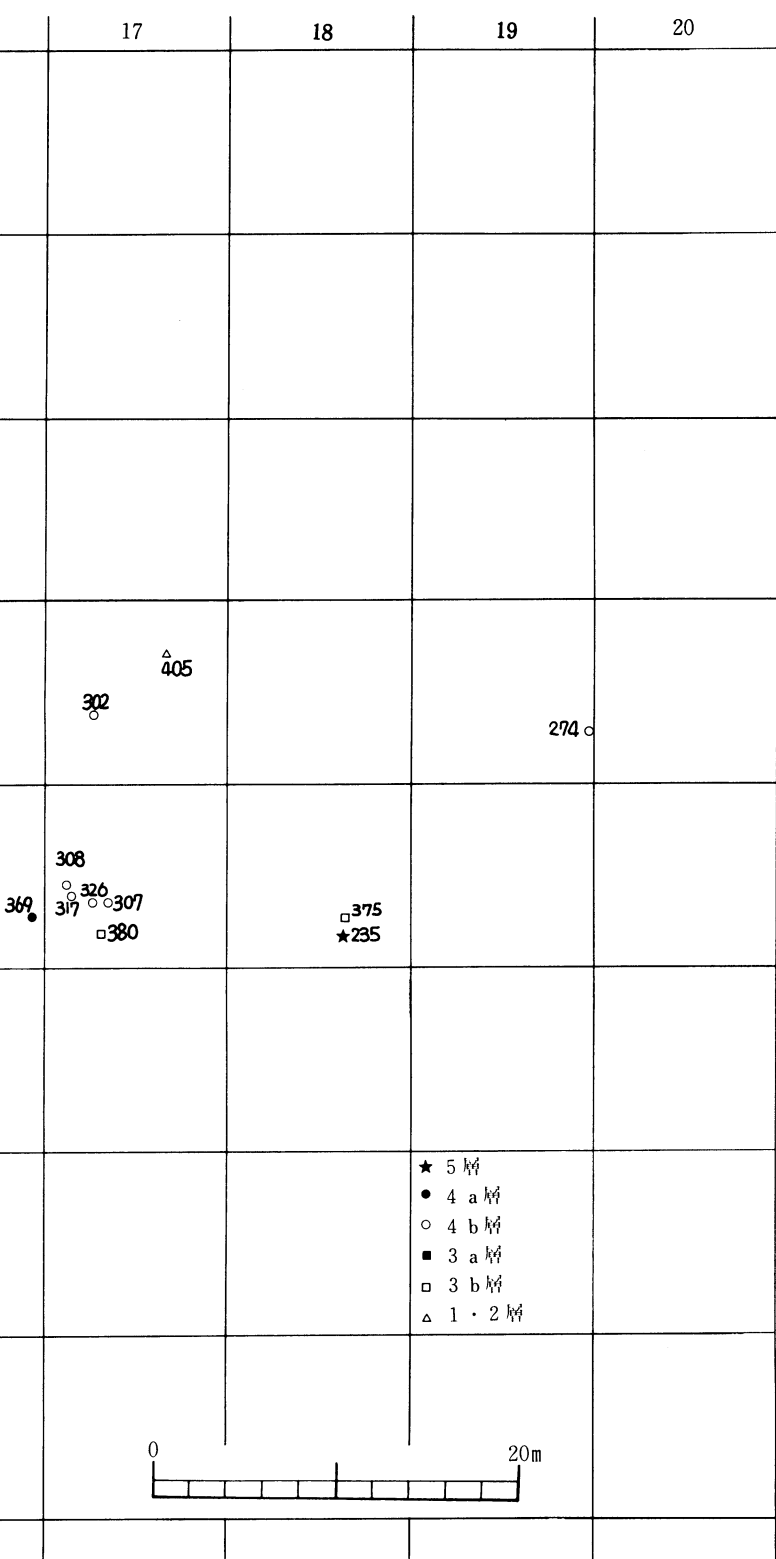
①石鏃 (第44・45図 182~231)

凹基式 (182~233) と平基式 (234~241) に大別できる。凹基式の中でも 186, 187, 189等のように脚端が鈍く抉りの浅い基部をもつものと 198, 199, 230のように脚端が鈍く非常に抉りが浅いものが大多数をしめる。中には、192のように脚端が鋭く抉りの深いものもある。側辺では、185~197のように側辺がまっすぐで三角形を呈するものと正三角形を呈する198~213のようなものもある。正三角形を呈するものは最大長が1.0cm~1.2cmで最大幅との関係から小形の石鏃である。中には、鋸歯状を呈する 182や側辺が内彎する183, 184のようなものもある。あるいは、側辺が外彎し最大幅が下端にあるもの214~227, 240, 241と下方に最大幅のあるもの228~233がある。先端部は、鋭いもの187, 200等や209, 215のように鋭さがあまりない普通



6	7	8	9	10	11
				△410	
					
	●370			423 ▲	
★229	★182	△424		411 △421	⋮
	404 △	△416			
△415		△406			
○288				233 ★	





の先端部をもつものが多い。

平基式では、側辺が鋸歯状を呈する234や側辺が内彎する235のようなものもある。また、正三角形を呈する237～239のようなものもある。先端部は欠損で不明のものが多いが、238や239は普通の先端部をなす。

②スクレイパー（第45図242～249）

242は、指頭形の剥片を用いて、両面より剥離されており、石材の関係からか荒い調整剥離である。243は、だ円形のもので片面に自然面を残す。刃部剥離調整は裏面より施されている。244は、不定形なぶ厚い剥片を用いて、一部自然面が見られる。刃部はていねいな押圧剥離調整である。245は、自然面を残しており、自然面側に刃部剥離調整が見られる。246は、縦長剥片を用いて刃部はていねいな剥離調整で、一部両面剥離が見られる。247は、綾の高い剥片で、打面調整の見られるものである。248は、綾の高い剥片で、表面より剥離調整が見られ、刃こぼれやフィッシャーの強い剥片である。

③剥片石器（使用痕のある剥片）（第46図254～269）

254は、縦長の剥片を用いて側縁はていねいな調整剥離である。255は、縦長剥片を用いて、両側縁に使用痕が観察できる。256は、打面調整の見られる剥片で、使用痕が下部縁に見られる。257は、打面調整が見られる縦長の剥片で、右側縁に使用痕が見え、フィッシャーが強く残る。258は、打面が見られ剥離面の側端が風化している。259は、打面が自然面の縦長の剥片で、両側縁に使用痕が見られる。260は、打面調整が見られる縦長の剥片で、刃こぼれが見られる。261は、不定形な剥片で、下部に使用痕が見られる。262は、打面調整をもつ剥片で、打面部は自然面を残す。263は、石材に砂岩質を利用したもので、下部に刃こぼれが見られる。264は、縦長剥片を利用し、両面より二次加工をおこなっている。265は、全側縁に刃こぼれの見られるもので、サツ痕も観察できる。266は、チャート質の石材を用いて、打面調整をもつ剥片である。267は、自然面を多く残す剥片で、打面調整をもつものである。268は、打面調整をもつ剥片で、刃部に刃こぼれが見られる。269は、一部に自然面を残し、側縁に刃こぼれが見られる。

④剥片（第45・46図250～253）

250～253は、黒曜石の剥片である。250は、自然面を残すもので、使用痕らしき部分も見られる。251は、自然面を一部に残す剥片。252は、縦長の剥片で、フィッシャーも見られる。253は、一部自然面を残し、横剥ぎの剥片である。

⑤石核・原石（第47図 270・271）

270は、亜円形の石核で、自然面を多く残し、石核調整を大まかにおこなっている。271は、大部分が自然面のだ円状の石核である。剥離状況から見て加工途中の原石ではないかと思える。

⑥すり石（第47図 272・273）

272は、亜円礫を用いており、片面が磨られており表面全体は風化している。273は、だ円形の礫を用いて、両面とも磨かれており、片側が一部欠落している。

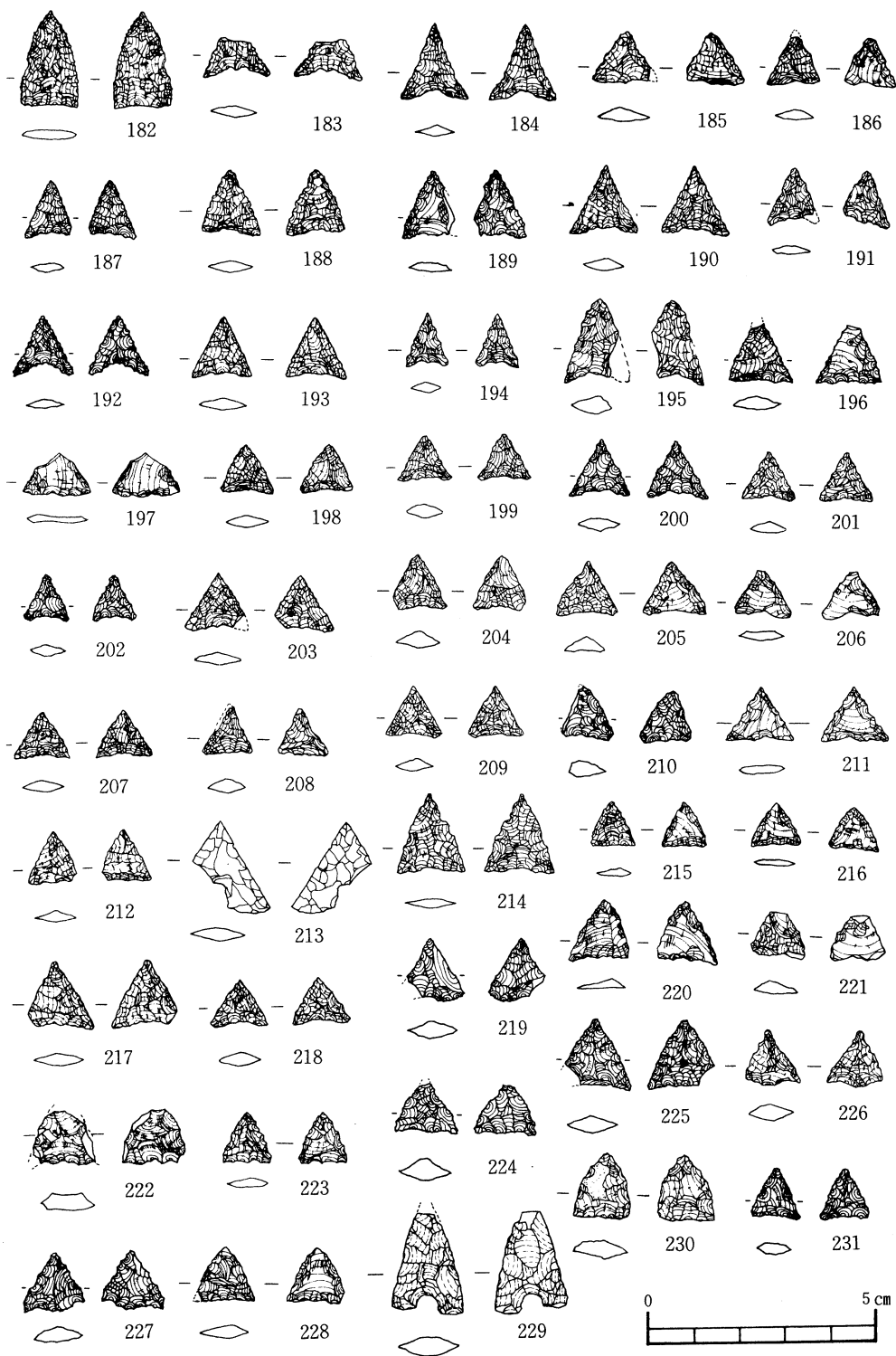
第5表 V 層出土の石鏃一覧表

番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
182	F-7	V b	凹基式	J	A	B	2.15	1.3	0.2	0.62	黒曜石	側部欠	
183	D-14	V a 下	〃	G	B	F	0.9	1.5	0.25	0.225	黒曜石	側部より先欠	
184	F-13	V a 上	〃	E	B	B	1.7	1.5	0.3	0.31	黒曜石		
185	D-13	V f	〃	I	C	B	1.15	1.25	0.3	0.3	黒曜石	片脚欠	
186	D-14	V	〃	H	C	F	1.1	1.1	0.25	0.2	黒曜石	先端部片脚欠	
187	B-12	V a	〃	H	C	A	1.3	1.0	0.2	0.16	黒曜石	片脚欠	
188	D-14	V	〃	H	C	B	1.4	1.3	0.25	0.35	黒曜石	〃	
189	C-13	V	〃	H	C	B	1.45	1.2	0.2	0.29	黒曜石	〃	
190	〃	〃	〃	G	C	A	1.5	1.5	0.25	0.35	黒曜石	〃	
191	D-14	V f	〃	G	C	A	1.25	1.0	0.2	0.2	黒曜石	両脚先端部欠	
192	D-13	V	〃	D	C	A	1.3	1.3	0.2	0.16	黒曜石		
193	D-14	V a	〃	H	C	B	1.35	1.35	0.25	0.3	黒曜石		
194	D-13	〃	〃	H	C	A	1.2	0.95	0.25	0.175	黒曜石	片脚欠	
195	E-14	V a 下	〃	F	C	C	1.8	1.0	0.4	0.57	黒曜石	片脚欠	
196	C-14	V	〃	H	C	F	1.3	1.4	0.3	0.375	黒曜石	先端部欠	
197	C-14	V a	〃	J	C	F	1.0	1.5	0.15	0.2	黒曜石	片脚欠	
198	C-14	V 下	〃	J	D	C	1.0	1.1	0.25	0.21	黒曜石	〃	
199	C-14	V a	〃	J	D	B	1.0	1.2	0.3	0.21	黒曜石		
200	C-13	V	〃	G	D	A	1.25	1.3	0.3	0.25	黒曜石		
201	D-14	V 下	〃	K	D	A	1.0	1.2	0.25	0.21	黒曜石		
202	F-14	V a	〃	H	D	C	1.0	1.0	0.25	0.175	黒曜石	先端部片脚欠	
203	F-13	〃	〃	H	D	B	1.25	1.2	0.25	0.31	黒曜石	片脚欠	
204	E-15	V 下	〃	H	D	F	1.2	1.15	0.35	0.35	黒曜石	片脚欠	
205	F-13	V a	〃	H	D	B	1.2	1.35	0.3	0.28	黒曜石	先端部片脚欠	
206	F-15	V 上	〃	H	D	F	1.05	1.25	0.2	0.225	黒曜石		
207	D-13	V 下	〃	G	D	C	1.0	1.2	0.25	0.225	黒曜石		
208	E-14	〃	〃	J	D	A	1.05	1.1	0.3	0.22	黒曜石	先端部脚部欠	
209	F-15	V a	〃	J	D	B	1.1	1.2	0.3	0.3	黒曜石	片脚欠	
210	E-14	V a 上	〃	J	D	C	1.2	1.1	0.35	0.375	黒曜石	先端部欠	
211	D-13	V	〃	J	D	B	1.2	1.45	0.15	0.18	黒曜石	片脚欠	
212	D-13	V a 下	〃	J	D	B	1.15	1.0	0.25	0.245	黒曜石	片脚欠	
213	E-13	V a	〃	I	D	A	2.0	1.2	0.25	0.58	玄 武	片脚欠	
214	F-5	V	〃	K	E(?)	A	1.7	1.5	0.2	0.39	黒曜石		
215	C-13	V 下	〃	J	E(?)	B	0.95	0.95	0.15	0.125	黒曜石	片脚欠	

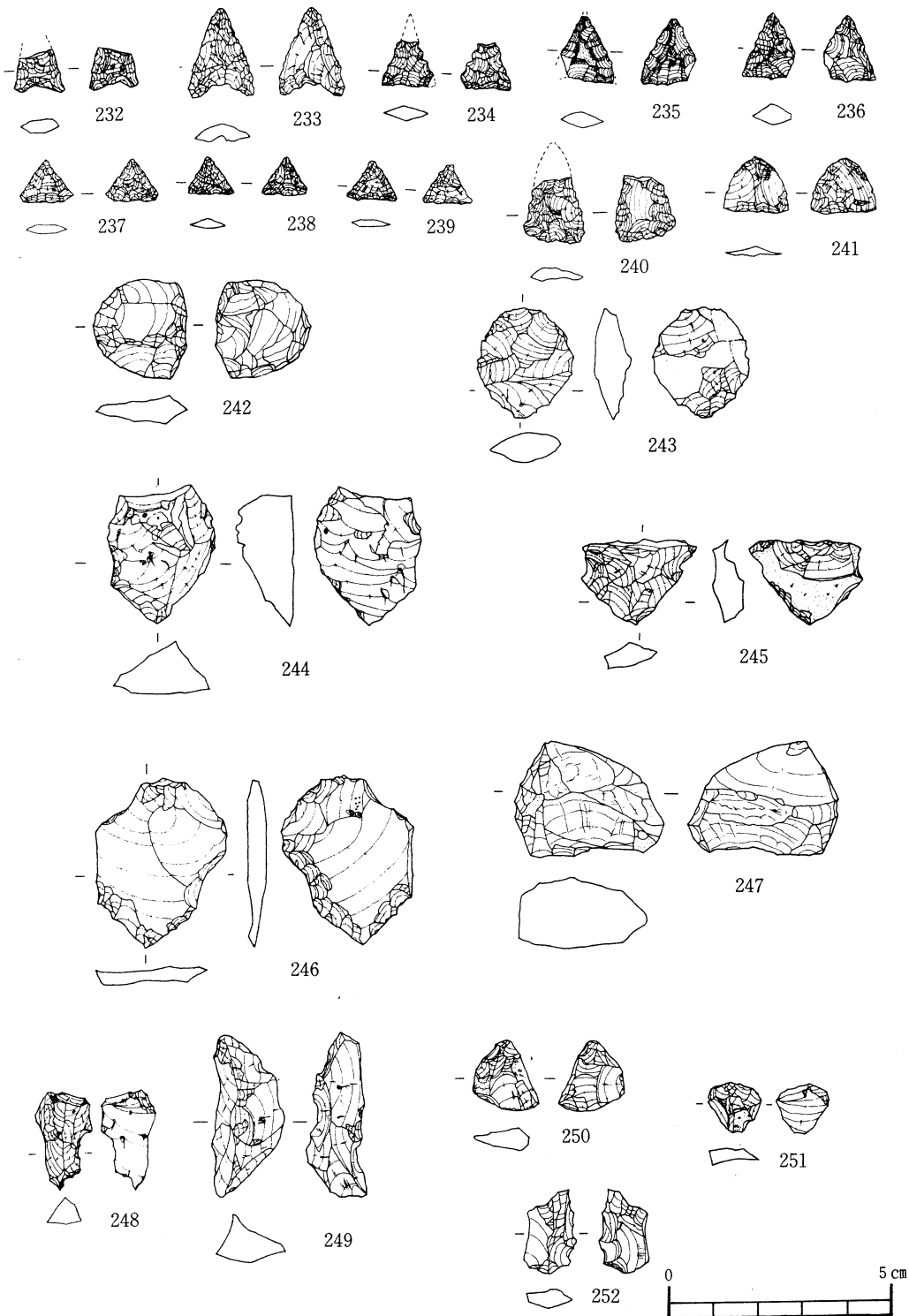
番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
216	D-13	V a 下	凹基式	J	E(?)	C	0.95	1.1	0.1	0.125	黒曜石	片脚欠	
217	D-14	〃	〃	H	E(?)	C	1.5	1.35	0.3	0.45	黒曜石	片脚欠	
218	D-14	V a 上	〃	H	E(?)	B	1.0	1.2	0.3	0.24	黒曜石	片脚欠	
219	D-15	〃	〃	H	E(?)	C	1.4	1.1	0.4	0.39	黒曜石	先端部片脚欠	
220	C-14	〃	〃	J	E(?)	C	1.35	1.3	0.2	0.22	黒曜石	片脚欠	
221	C-14	〃	〃	J	E(?)	F	1.0	1.2	0.3	0.31	黒曜石	先端部片脚欠	
222	D-14	V	〃	J	E(?)	F	1.2	1.4	0.4	0.675	黒曜石	片脚先欠	
223	D-13	〃	〃	J	E(?)	C	1.1	1.05	0.2	0.19	黒曜石	片脚欠	
224	E-14	V a 上	〃	J	E(?)	F	1.2	1.3	0.45	0.45	黒曜石	先端部欠	
225	F-14	V a 下	〃	H	E(?)	B	1.8	1.2	0.2	0.34	チャート	片脚欠	
226	D-14	V 下	〃	L	E(?)	B	1.3	1.2	0.35	0.35	黒曜石	片脚先欠	
227	C-13	V	〃	L	E(?)	A	1.3	1.35	0.35	0.38	黒曜石	先端部欠	
228	D-14	V 下	〃	K	E(?)	C	1.2	1.2	0.3	0.325	黒曜石	片脚欠	
229	F-6	V	〃	F	E(?)	F	2.2	1.6	0.45	0.32	チャート	先端部両脚欠	
230	D-14	V a 下	〃	J	E(?)	C	1.4	1.2	0.4	0.675	黒曜石		
231	E-15	V a	〃	H	E(?)	B	1.1	1.05	0.3	0.24	黒曜石	先端部	
232	E-15	〃	〃	H	E(?)	F	1.0	1.1	0.3	0.31	黒曜石	胴部より欠	
233	H-10	VI	〃	E	E(?)	B	2.0	1.5	0.35	0.825	石 英		
234	E-14	V a 下	平基式		A	F	1.0	1.1	0.35	0.33	黒曜石	先端部片脚欠	
235	F-18	V	〃		B	F	1.5	1.05	0.3	0.5	黒曜石	両脚先端部欠	
236	C-14	V a	〃		C	F	1.5	1.05	0.45	0.54	黒曜石	先端部	
237	F-14	〃	〃		D	C	0.95	1.2	0.2	0.21	黒曜石	両脚部	
238	E-14	V 上	〃		D	B	0.85	1.0	0.2	0.14	黒曜石	先端部片脚欠	
239	D-14	〃	〃		D	B	0.9	1.1	0.15	0.13	黒曜石	先端部両脚欠	
240	E-12	V a	〃		E(?)	F	1.5	1.35	0.3	0.85	黒曜石	先端部	
241	D-14	〃	〃		E(?)	G	1.3	1.45	0.25	0.4	黒曜石		

第6表 V 層出土の石器一覧表

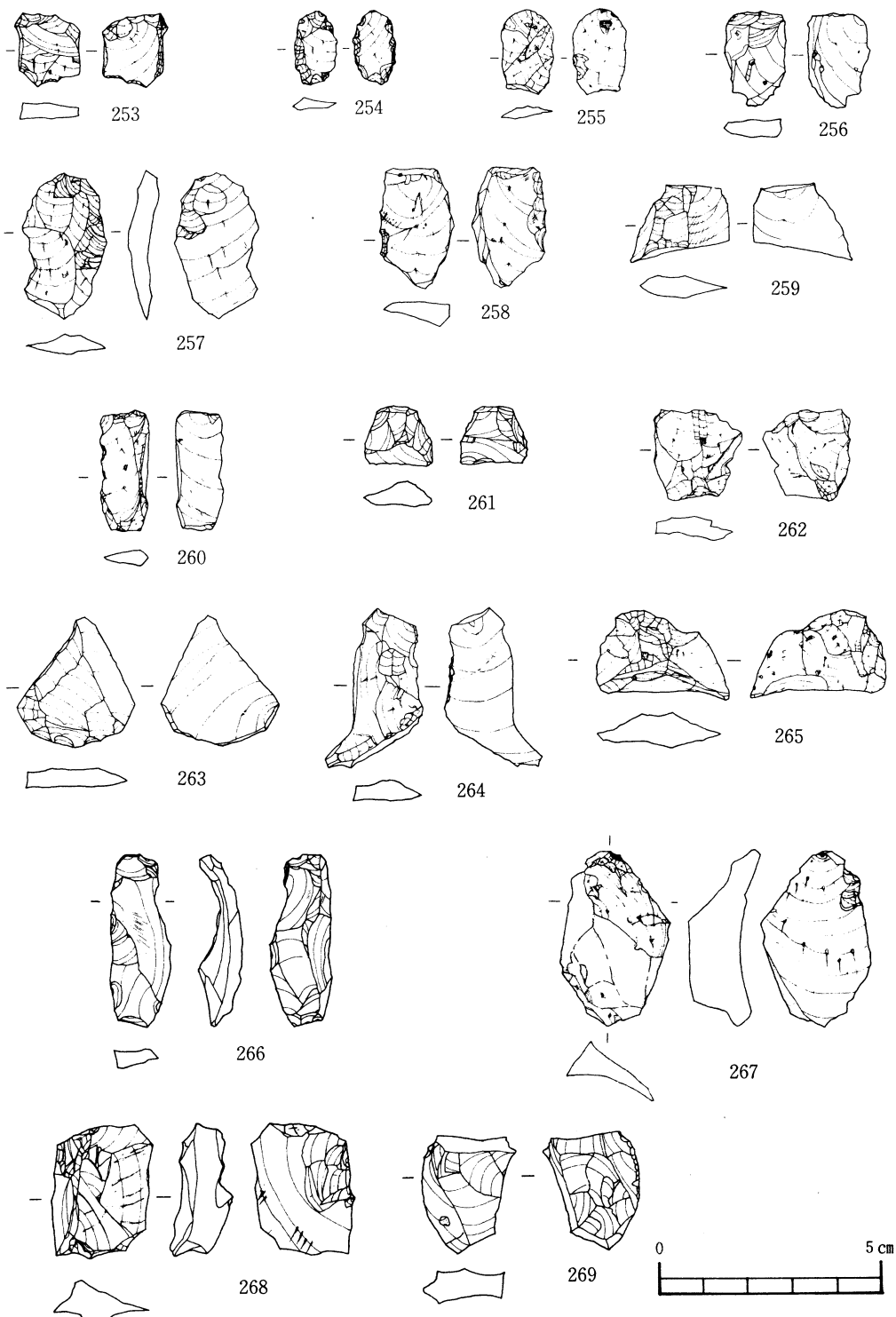
番号	区	層	形式	重さ (g)	石材	備 考	番号	区	層	形式	重さ (g)	石材	備 考
242	F-15	V a 上	スクレイパー	3.18	黒曜石		248	D-14	V a 下	スクレイパー	1.625	黒曜石	
243	D-13	V a 下	〃	3.72	黒曜石		249	F-14	V a 上	〃	4.96	黒曜石	
244	D-14	V a 下	〃	9.17	黒曜石		250	F-15	V a	剥 片	1.025	黒曜石	
245	D-14	V a 下	〃	2.63	黒曜石		251	E-14	V a	〃	0.46	黒曜石	
246	F-12	V a 下	〃	5.69	チャート		252	C-13	V a	〃	0.89	黒曜石	
247	I-0	V	〃	12.54	チャート		253	D-13	V a	〃	1.13	黒曜石	



第44図 V層出土の石器(1) 石鏃

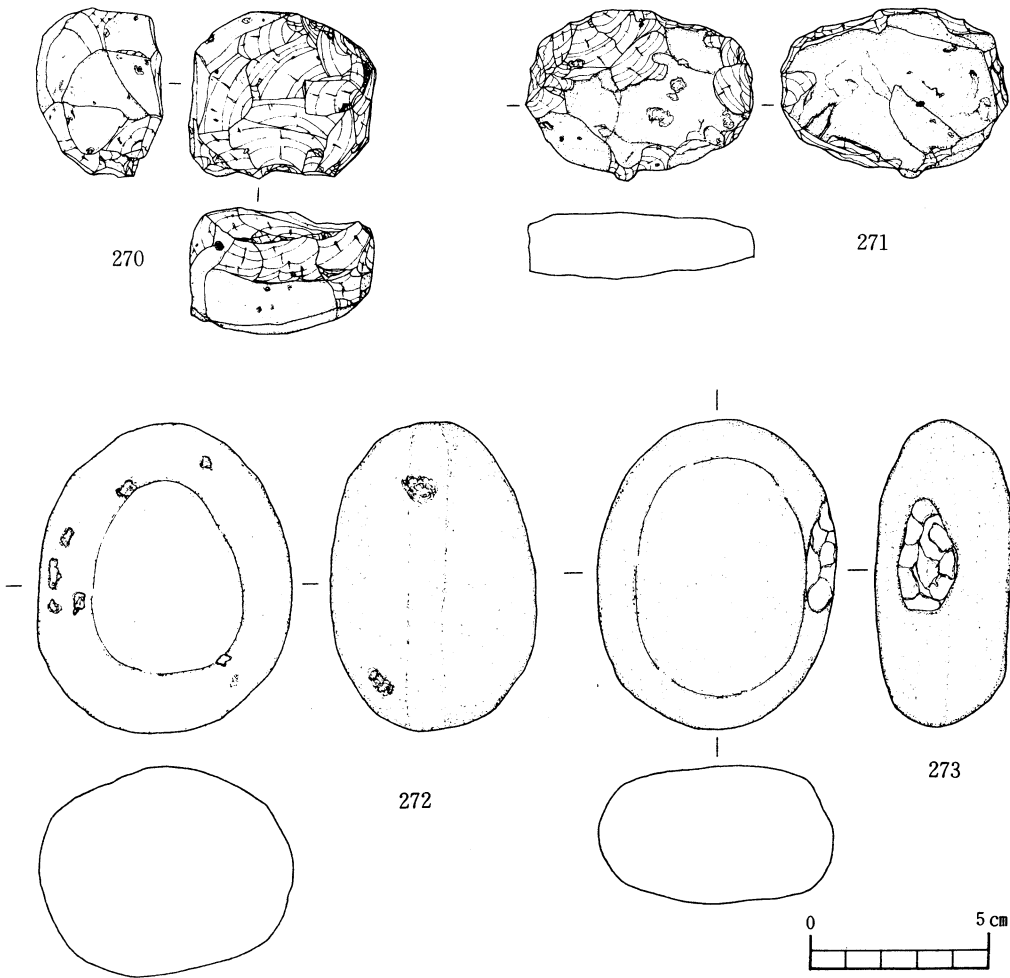


第45図 V層出土の石器(2) 石鏃・スクレイパー・剥片



第46図 V層出土の石器(3) 剥片・剥片石器

番号	区	層	形式	重さ (g)	石材	備考	番号	区	層	形式	重さ (g)	石材	備考
254	D-13	V a 土坑	剥片石器 (使用痕のある鋸)	0.48	黒曜石		264	E-15	V a	剥片石器 (使用痕のある鋸)	4.49	チャート	
255	E-14	V a 下	〃	0.575	黒曜石		265	F-13	V a 上	〃	3.325	黒曜石	
256	F-14	V a	〃	1.6	黒曜石		266	D-13	V 上	〃	3.525	チャート	
257	D-14	V a	〃	2.3	黒曜石		267	F-14	V a 下	〃	10.8	黒曜石	
258	D-18	V	〃	2.78	黒曜石		268	D-14	V a	〃	6.93	頁岩	
259	F-14	V	〃	1.575	黒曜石		269	F-15	V a 上	〃	4.8	チャート	
260	C-15	V a	〃	1.26	黒曜石		270	F-8	V	石核	117.05	黒曜石	
261	E-14	V a 上	〃	1.14	黒曜石		271	F-14	V a	原石	67.3	黒曜石	加工途中
262	E-13	V a	〃	2.12	黒曜石		272	E-15	V a	スリ石	542.2	砂岩	
263	D-13	V a	〃	3.34	砂岩		273	C-14	V a 上	〃	380.4	砂岩	



第47図 V層出土の石器(4) 原石・石核・スリ石

(2) Mb層出土の石器

①石鏃 (第48・49図 274～334)

凹基式と(274～322)と平基式(323～332)及び、円基式(333・334)とに大別できる。凹基式の中でも、基部の脚端が鈍く抉りが浅いもの282・285・292等と脚端が鈍く非常に抉りが浅いもの304～307等が多数をしめる。中には脚端が鈍く抉りが非常に深い276・277などもある。側辺で見れば、小形の正三角形を呈する292～302や側辺がまっすぐで三角形を呈する280～289があり、また、側辺が外彎して最大幅が下端にあるもの280～289などが多数をしめ、なかには、鋸歯状を呈する274・275や側辺が内彎する276～279が若干見られる。先端は、鋭いもの280・285・301等があり、ほとんどが普通の先端部をなす。

平基式は、側辺部が外彎し最大幅が下端にあるもの326～332が多く、正三角形を呈する324・325や側辺がまっすぐで三角形を呈する323などもある。先端は普通のものや鈍いものが多い。

円基式は、側辺部が内彎するものだけで、先端部は欠損のため不明である。

②石匙 (第49図 335)

335は、横形の石匙で片面に自然面を残す、つまみ上部が欠損しており、つまみのつくりはていねいである。刃部調整は内面よりおこなわれているが荒い調整剥離である。

③スクレイパー (第49・50図 336～344)

336は、横長剥片を利用し、右側縁に剥離調整が見られる。337は、コア状のもので、上部に自然面を残し、刃部は、下方より剥離されている。338は、長方形を呈し、剥離調整が裏面に見られる。339は、一部自然面を残し、先端部を裏面より調整剥離をおこなっている。340は、フレーク状であり、両面より調整剥離が見られる。341は、一部自然面を残し、平坦打面をもつ。342は、上部に打面をもち、一部自然面を残す。343は小形の円盤状の石器で、二次調整が見られる。344は、大形の円盤状石器で、上部を残しほぼ全体に調整剥離が見られる。

④剥片石器 (使用痕のある剥片) (第50・51図 345～361)

345は、縦長剥片を利用し、打面調整が見られる。346は、縦長剥片を用い右側縁に使用痕を観察できる。347は、一部自然面を残し、縦長の剥片を用いている。348は、打面調整が見られる縦長剥片を利用し、両側縁に使用痕が見られる。349は、打面の見られる縦長剥片。350は、一部自然面が見え、縦長剥片を利用。351は、右側縁に使用痕が観察できる。352は、打面調整のある縦長剥片で、一部自然面を残す。353は、両側縁に使用痕が見られる。354は、打面調整のある剥片である。355は、一部自然面が見られ、打面調整を残す剥片。356は、打面が見られ、右側縁に刃こぼれが見られる。357は、バルブスカーの顕著な縦長剥片。358は、下方に使用痕が見られる。359は、自然面を残す縦長剥片で、両側縁に刃こぼれが見られる。360・361は、自然面を多く残し、両側縁に使用痕が見られる。

⑤剥片 (第51図 362～364)

362は、一部自然面を残し、表面に剥離が見られる。363は、右側に自然面を残す、縦長の剥片。365は、綾の高い剥片で、打面が見られる。

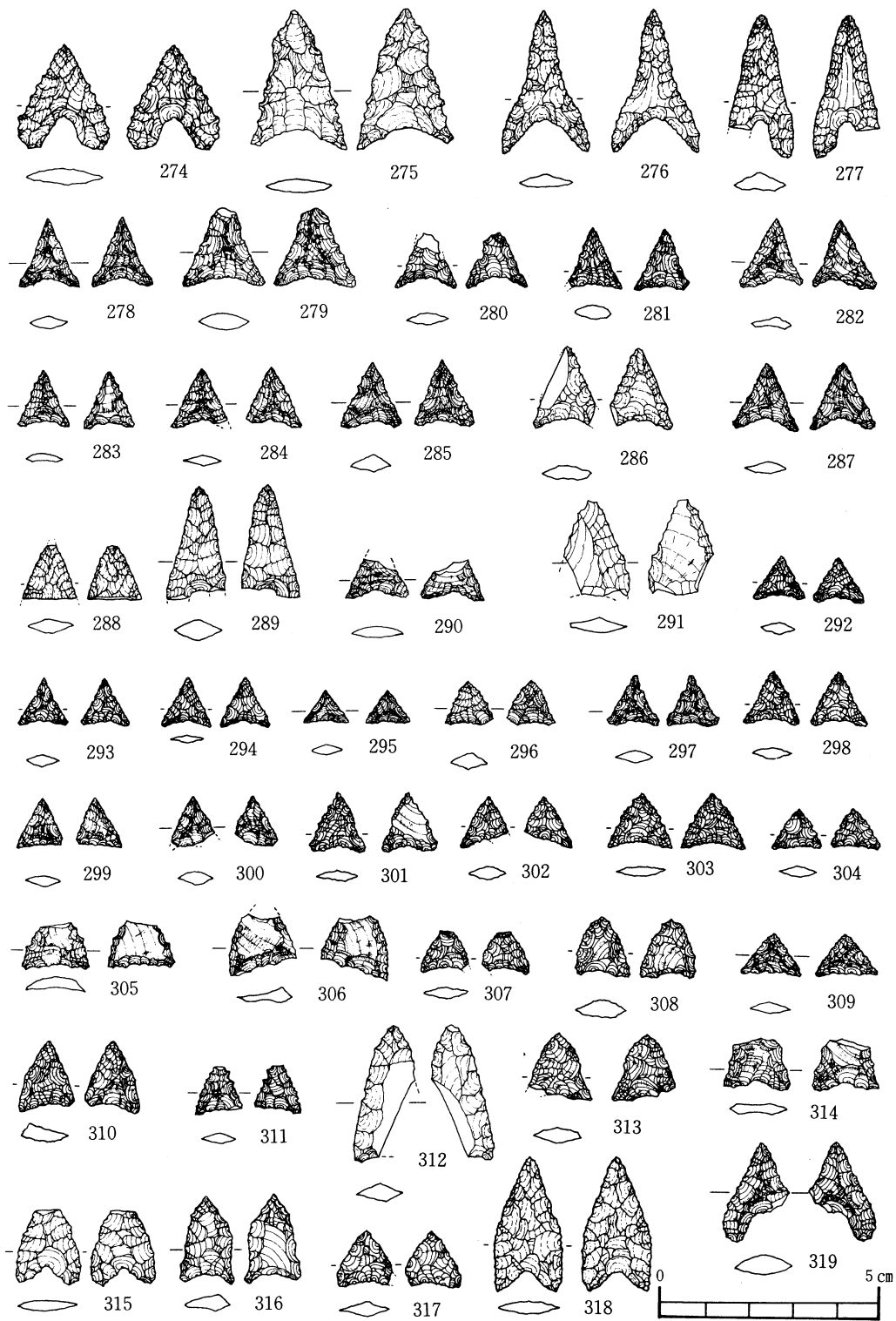
第7表 Nb層出土の石鏃 第7表 Nb層出土の石鏃

番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
274	E-19	II b	凹基式	C	A	B	2.35	2.1	0.4	1.46	チャート		
275	F-14	II b下	〃	D	A	B	3.2	2.1	0.3	1.8	頁 岩	片脚欠	
276	D-2	II b	〃	B	B	B	3.25	1.7	0.3	0.79	黒曜石		
277	I-1	II b	〃	B	B	B	3.25	1.5	0.4	1.41	チャート	片脚欠	
278	E-12	II b	〃	H	B	A	1.6	1.35	0.3	0.3	黒曜石		
279	F-14	〃下	〃	H	B	F	1.8	1.9	0.35	0.84	黒曜石	先端部欠	
280	E-14	II b	〃	D	C	A	1.2	1.4	0.25	0.25	黒曜石	先端部欠	
281	D-13	II b	〃	G	C	B	1.4	1.2	0.3	0.325	黒曜石	片脚欠	
282	F-13	II b	〃	H	C	B	1.6	1.4	0.2	0.325	黒曜石		
283	E-13	〃	〃	H	C	B	1.3	1.2	0.2	0.19	黒曜石		
284	E-13	〃	〃	K	C	B	1.35	1.2	0.2	0.21	黒曜石	片脚欠	
285	F-13	〃	〃	H	C	A	1.5	1.35	0.4	0.48	黒曜石	片脚欠	
286	H-6	〃	〃	H	C	B	1.85	1.3	0.3	0.74	安山岩	片脚欠	
287	F-12	II b下	〃	E	C	F	1.5	1.5	0.25	0.32	黒曜石		
288	E-15	〃	〃		C	F	1.2	1.25	0.3	0.44	チャート	先端部欠	
289	I-0	II b上	〃	L	C	C	2.6	1.4	0.5	1.39	チャート	両脚欠	
290	F-12	II b下	〃	K	C	F	0.9	1.4	0.2	0.225	黒曜石	先端部欠	
291	I-0	II b上	〃		C	F	2.2	1.4	0.35	1.02	石 英	両脚先端部欠	
292	F-15	II b	〃	H	D	B	1.0	1.1	0.3	0.17	黒曜石		
293	F-15	II b	〃	G	D	B	1.05	1.1	0.3	0.175	黒曜石	片脚欠	
294	D-13	II b	〃	G	D	B	1.1	1.1	0.15	0.125	黒曜石	片脚欠	
295	E-15	II b下	〃	J	D	A	0.8	1.0	0.25	0.11	黒曜石		
296	D-13	〃	〃	J	D	C	0.95	1.0	0.4	0.275	黒曜石	片脚欠	
297	E-14	II b下	〃	H	D	B	1.25	1.15	0.25	0.22	黒曜石		
298	D-14	II b	〃	H	D	B	1.2	1.3	0.25	0.25	黒曜石		
299	D-13	II b下	〃	J	D	B	1.1	1.0	0.3	0.21	黒曜石	片脚欠	
300	E-15	II b下	〃	K	D	F	1.25	0.8	0.3	0.2	黒曜石	先端部片脚欠	
301	C-14	II b	〃	H	D	A	1.35	1.25	0.2	0.26	黒曜石		
302	E-17	〃	〃	E	D	B	1.2	0.9	0.3	0.225	黒曜石	片脚欠	
303	C-13	〃	〃	G	E(?)	C	1.25	1.5	0.2	0.33	黒曜石		
304	D-13	〃	〃	J	E(?)	B	0.9	1.1	0.2	0.17	黒曜石		
305	D-14	〃	〃	J	E(?)	F	1.1	1.5	0.2	0.375	黒曜石	先端部欠	
306	F-13	〃	〃	J	E(?)	F	1.5	1.5	0.35	0.675	黒曜石	先端部基部欠	
307	F-17	〃	〃	J	E(?)	F	0.9	1.05	0.25	0.24	黒曜石	先端部片脚欠	

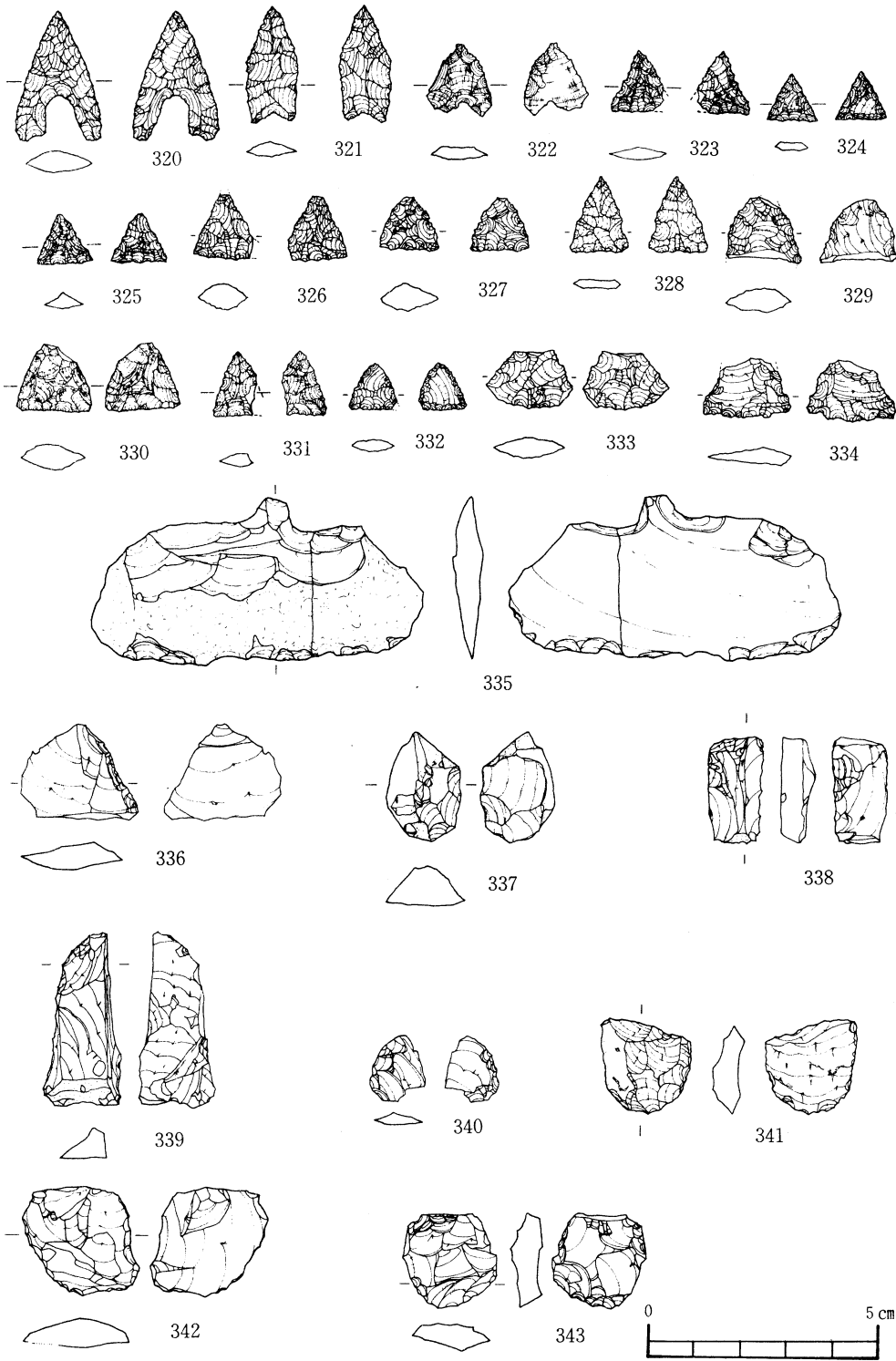
番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
308	F-17	IV b	凹基式	H	E(7)	C	1.35	1.3	0.4	0.675	黒曜石	先端部欠	
309	E-14	〃	〃	K	E(7)	C	0.9	1.4	0.2	0.19	黒曜石		
310	F-16	〃	〃	H	E(7)	C	1.6	1.2	0.35	0.62	黒曜石	片脚欠	
311	I-0	IV b中	〃	J	E(7)	F	1.1	1.1	0.3	0.25	黒曜石	先端部片脚欠	
312	I-0	IV b上	〃	L	E(7)	C	3.1	1.15	0.45	1.325	安山岩	片脚欠	
313	F-16	IV b	〃	H	E(7)	C	1.5	1.3	0.35	0.525	黒曜石	片脚欠	
314	H-3	IV b下	〃	I	E(7)	F	1.2	1.5	0.2	0.375	黒曜石	先端部欠	
315	F-14	IV b	〃	E	E(4)	F	1.8	1.4	0.2	0.59	チャート	先端部片脚欠	
316	E-12	IV b	〃	H	E(4)	C	2.0	1.1	0.35	0.68	チャート		
317	F-17	IV b	〃	I	E(4)	C	1.3	1.25	0.3	0.45	黒曜石	片脚欠	
318	D-12	IV b	〃	F	E(4)	B	3.1	1.6	0.3	1.325	玉 髓		
319	I-0	IV b下	〃	F	E(4)	B	2.25	1.2	0.5	0.875	黒曜石	片脚欠	
320	I-0	IV b中	〃	C	E(4)	B	2.8	1.8	0.5	1.69	黒曜石		
321	F-11	IV b	〃	I	E(7)	C	2.5	1.1	0.35	0.84	チャート		
322	E-13	IV b下	〃	I	E(±)	F	1.6	1.4	0.25	0.575	黒曜石	先端部欠	
323	E-13	IV b	平基式		C	F	1.0	1.4	0.35	0.35	黒曜石	先端部欠	
324	D-13	IV b下	〃		D	B	1.0	1.1	0.15	0.15	黒曜石		
325	E-14	IV b	〃		D	B	1.1	1.2	0.35	0.28	黒曜石	片脚部	
326	F-17	IV b	〃		E(7)	F	1.4	1.3	0.55	0.77	黒曜石	片脚先端部欠	
327	E-16	IV b	〃		E(7)	F	1.2	1.25	0.6	0.69	チャート	先端部	
328	F-12	IV b	〃		E(7)	B	1.65	1.25	0.2	0.35	チャート	片脚部	
329	D-13	IV b	〃		E(7)	D	1.4	1.65	0.5	1.03	黒曜石	先端部欠	
330	E-15	IV b下	〃		E(7)	F	1.5	1.6	0.55	1.2	黒曜石	先端部	
331	F-13	IV b下	〃		E(7)	C	1.4	1.9	0.3	0.325	黒曜石	片脚部	
332	D-13	IV b	円基式		E(7)	C	1.0	1.0	0.2	0.22	黒曜石	片脚部	
333	H-3	IV b	円基式		B	F	1.2	1.85	0.5	1.04	黒曜石	先端部片脚欠	
334	E-14	IV b	〃		B	F	1.3	1.9	0.35	0.925	黒曜石	先端部	

第8表 Mb層出土の石器一覧表

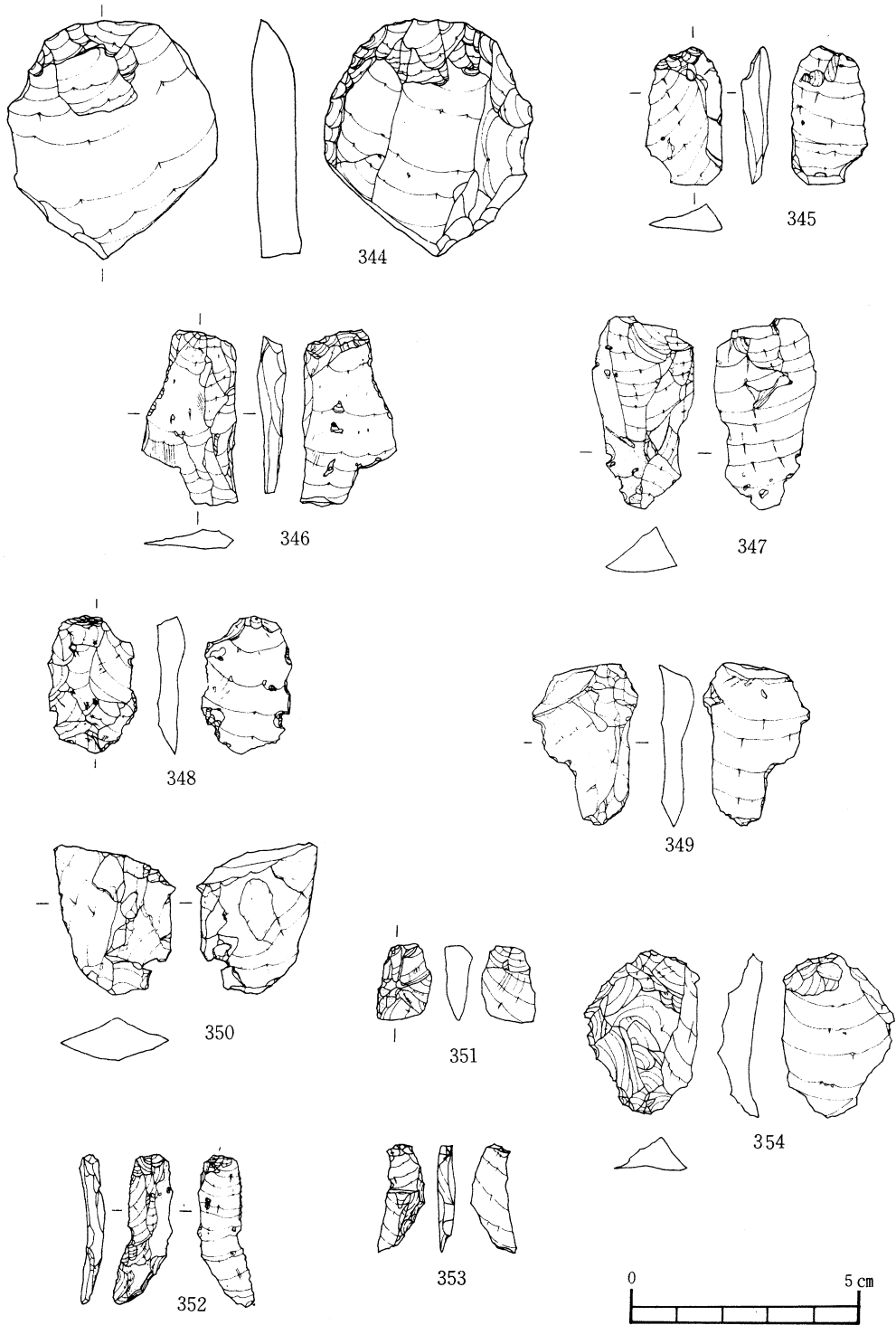
番号	区	層	形 式	重さ (g)	石 材	備 考	番号	区	層	形 式	重さ (g)	石 材	備 考
335	F-12	IV b	石 匙	4.26	玄武岩		340	E-14	IV b下	スクレイパー	0.38	石 英	
336	D-13	IV b下	スクレイパー	2.55	粗質 黒曜石		341	E-13	IV b	〃	2.12	黒曜石	
337	D-13	IV b	〃	3.4	黒曜石		342	E-14	IV b	〃	10.125	黒曜石	
338	E-19	IV b	〃	2.12	黒曜石		343	E-13	IV b下	〃	3.075	黒曜石	
339	I-1	IV b中	〃	8.7	黒曜石		344	C-13	IV b	〃	31.7	チャート	



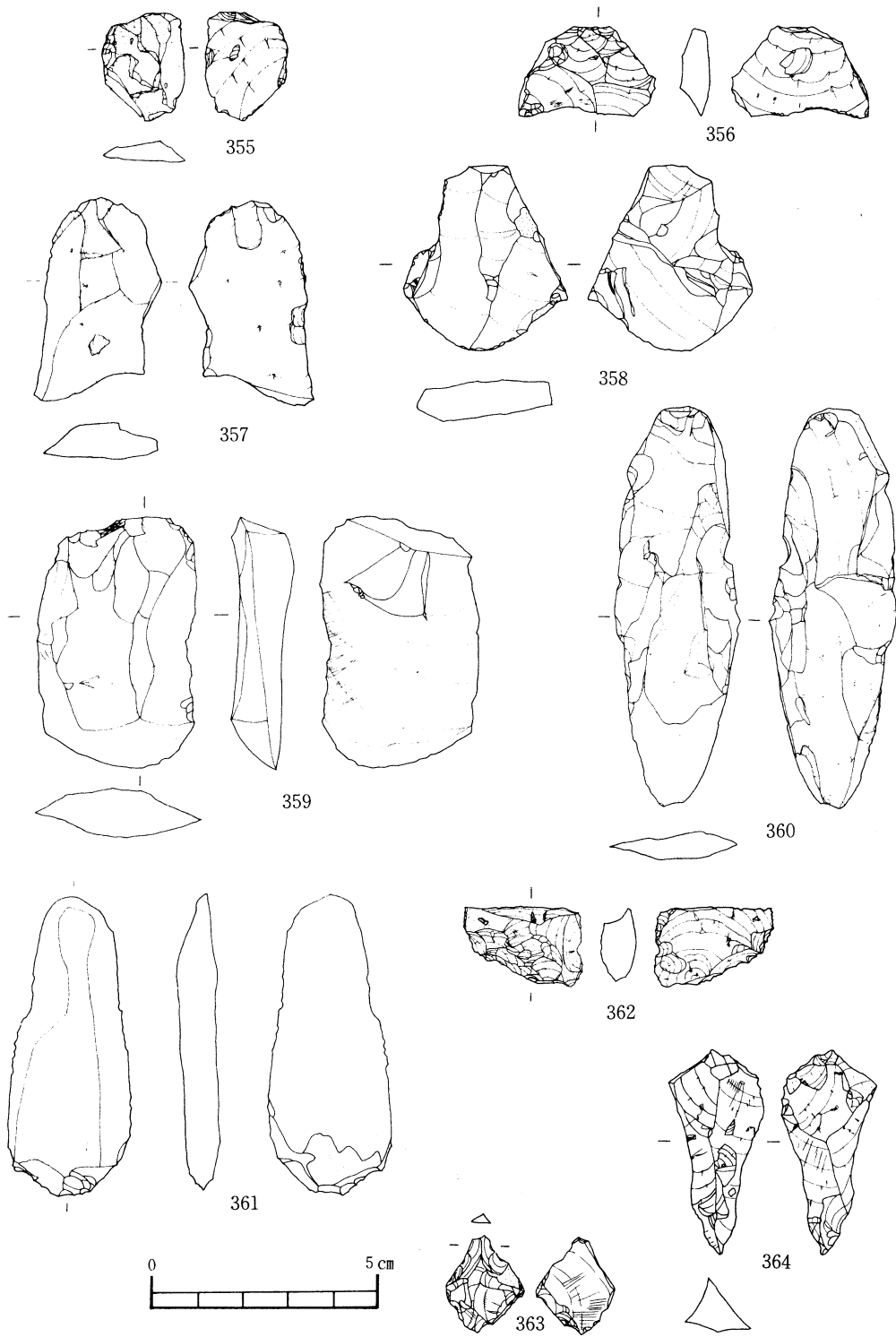
第48図 Nb層出土の石器(1) 石鏃



第49図 4 b層出土の石器 (2) 石鏃・石匙・スクレイパー



第50図 Mb層出土の石器(3) スクレイパー・剥片石器



第51図 IVb層出土の石器(4) 剥片石器・剥片

番号	区	層	形式	重さ(g)	石材	備考	番号	区	層	形式	重さ(g)	石材	備考
345	D-13	IV b	剥片石器 (使用痕のある剥片)	2.875	黒曜石		355	D-13	IV b	〃	1.975	黒曜石	
346	I-1	IV b上	〃	3.825	黒曜石		356	D-12	IV b	〃	3.19	黒曜石	
347	F-13	IV b	〃	4.91	黒曜石		357	E-14	IV b	〃	10.125	黒曜石	
348	D-2	IV b	〃	2.675	黒曜石		358	F-11	IV b上	〃	11.3	玉石イ質	
349	F-10	IV b	〃	18.6	石英		359	I-0	IV b中	〃	26.79	頁岩	
350	D-12	IV b	〃	6.89	石英		360	D-13	IV b	〃	19.95	玄武岩	
351	D-13	IV b	〃	1.0	黒曜石		361	F-14	IV b下	〃	19.7	砂岩	
352	E-13	IV b	〃	1.27	黒曜石		362	E-13	IV b	剥片	3.61	黒曜石	
353	I-1	IV b中	〃	0.63	チャート		363	H-0	IV b上	〃	1.225	黒曜石	
354	C-14	IV b	〃	7.125	チャート		364	I-11	IV b上	〃	5.85	黒曜石	

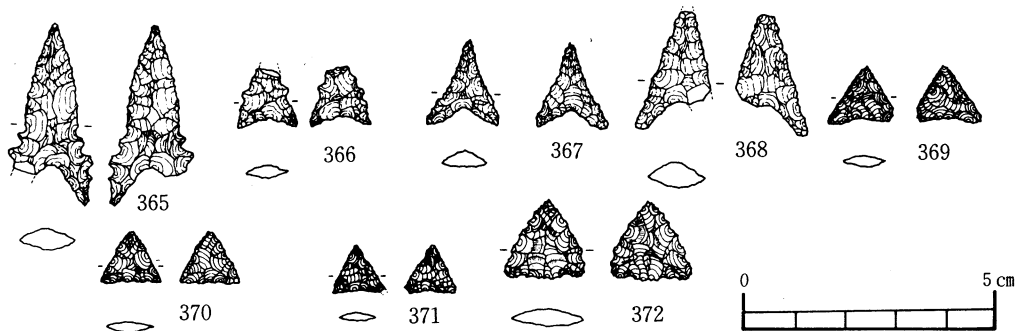
(3) IV a層出土の石器

①石鏃 (第52図 365～372)

IV a層の石器の出土は石鏃のみである。凹基式(365～371)と平基式372である。脚端が鈍く抉りが非常に深いものと浅いものがあり、側辺は、鋸歯状を呈する365・366と正三角形を呈するものにて代表される。平基式の372は、側辺が外彎し最大幅が下端のものである。

第9表 4 a層出土の石鏃一覧表

番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	石材	欠損部	備考
365	F-11	IV a上	凹基式	E	A	B	3.6	1.6	0.4	1.4	安山岩	片脚欠	
366	F-16	IV 下	〃	L	A	F	1.2	1.2	0.3	0.25	チャート	先端部欠	
367	C-13	IV a	〃	E	B	A	1.7	1.5	0.35	0.4	チャート		
368	F-5	IV	〃	E	C	F	2.35	1.2	0.5	0.82	石英	片脚欠 先端部欠	
369	F-16	IV 下	〃	J	D	B	1.15	1.3	0.2	0.25	黒曜石	片脚欠	
370	E-7	IV	〃	J	D	B	1.0	1.2	0.2	0.2	黒曜石		
371	E-11	IV a	〃	J	D	B	0.9	1.0	0.2	0.13	黒曜石	片脚欠	
372	D-2	IV	平基式		E	C	1.5	1.6	0.35	0.59	黒曜石		



第52図 IV a層出土の石器・石鏃

(4) Ⅲ層出土の石器

①石鏃 (第53図 373～390)

凹基式 (373～389) と平基式 390 とに大別できる。凹基式の中でも、基部の脚端が鈍く挟りが深い 283・288 と脚端が鈍くて挟りが浅いもの 379・380 等がある。また、脚端がまるく挟りが浅いもの 384・389 はどもある。基部においては全体的に挟りが浅いものが多い。側辺では、側辺が外彎し最大幅が下端にあるもの 382～386 が多い。378～384 は正三角形を呈するもので最大長 1.0cm～1.2cm の小形の石鏃もある。先端は普通のものが多く鋭利なものはない。

平基式は、側辺が五角形を呈する 390 がある。先端は欠損で不明である。

②石匙 (第53図 391～392)

391 は、縦長の剥片を利用して、一部自然面を調整面に残している。つまみ、刃部ともていねいな剥離である。392 は、横長の剥片を利用して、刃部の剥離はていねいである。刃部が三角形をなす石匙である。両面とも使用痕が見られる。

③スクレイパー (第53・54図・393～395)

393 は、横長の剥片を利用し、打面調整痕の残るもので押圧剥離による刃部調整である。394 は、打面調整が見られる剥片で、刃部の調整は荒い。395 は、断面三角形の縦長の剥片で、スッ痕が観察できる。

④剥片石器 (使用痕のある剥片) (第54図 396～401)

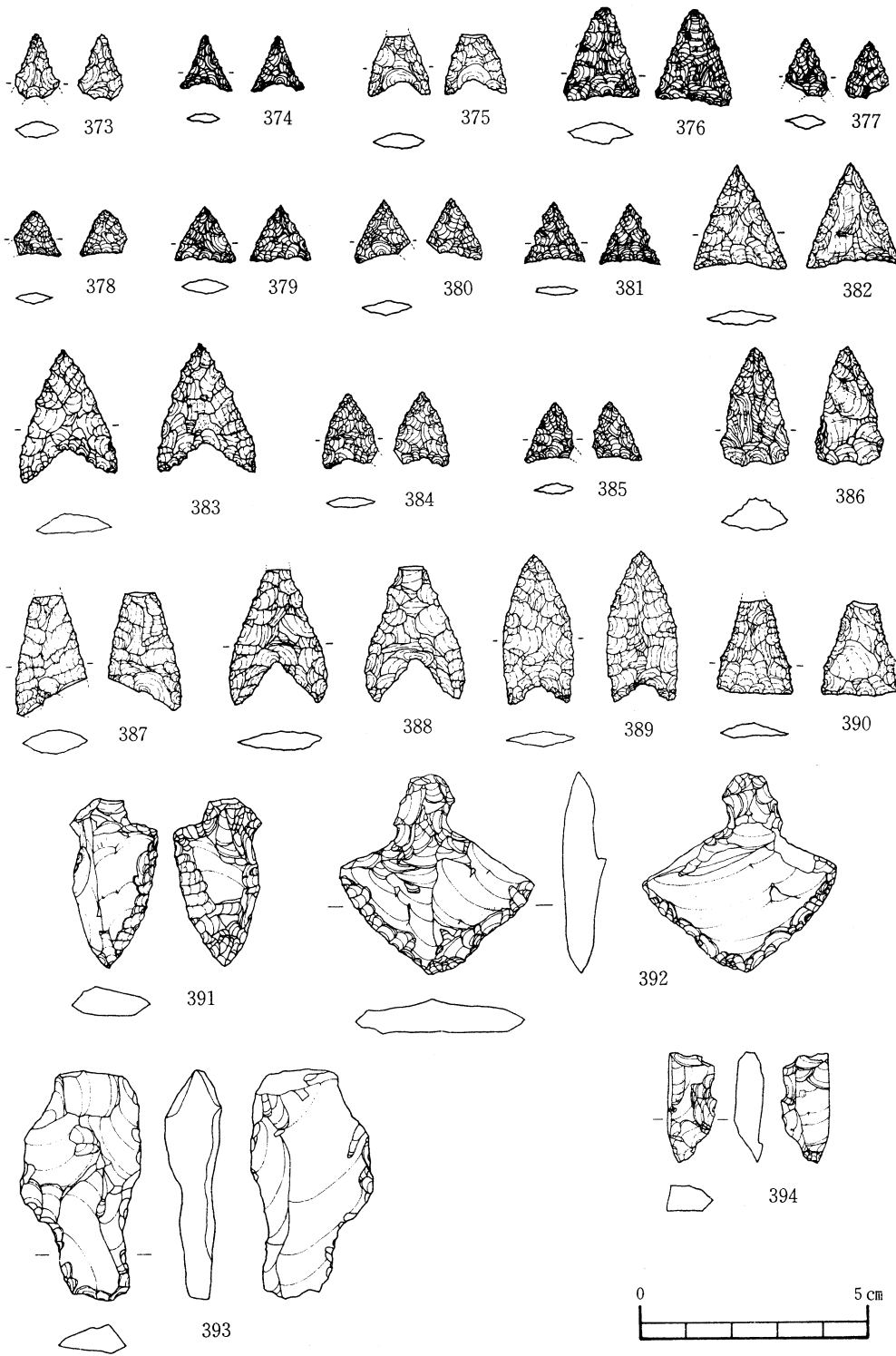
396～401 は使用痕のある剥片である。396 は、自然面を残す剥片で刃部に刃こぼれが見える。397 は、亜円礫を割った剥片で自然面を残す。398 は、打面調整が見られ、フィッシャーも顕著である。399 は、一部自然面を残し、打面調整をおこなっている。側縁部に使用痕が見られる。400 は、打面調整が見られ一部に自然面を残す。側縁部に使用痕が見られる剥片である。401 は、円形状の剥片で、片面に自然面を残す。打面調整も見られ、刃部に刃こぼれが観察できる。

⑤石斧 (第55図 402・403)

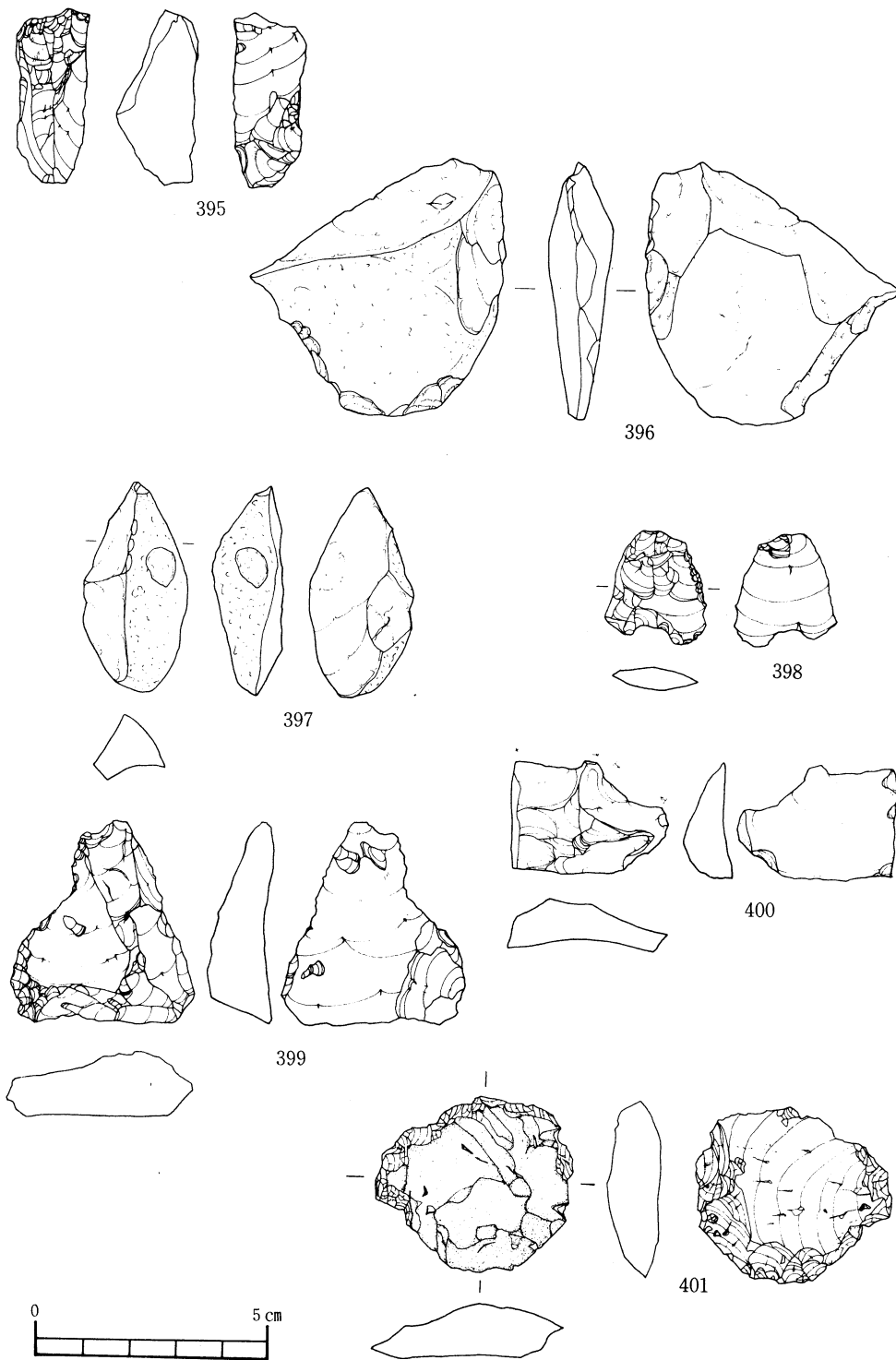
402 は、小形の磨製石斧である。刃部は両刃で、ていねいに磨かれている。柄部に欠損が見られるが、その部分も磨いた痕がある。403 は、磨製石斧の破片で、全体的に風化している。

第10表 Ⅲ層出土の石鏃一覧表

番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石材	欠損部	備考
373	C-12	Ⅲ c	凹基式	L	A	F	1.4	1.0	0.4	0.39	安山岩	両脚欠	
374	E-13	Ⅲ	〃	H	B	F	1.2	1.15	0.2	0.15	黒曜石		
375	F-18	Ⅲ b	〃	F	C	F	1.3	1.3	0.35	0.55	チャート	先端部欠	
376	F-13	Ⅲ	〃	J	C	F	2.1	1.65	0.45	1.24	黒曜石	片脚欠	
377	F-13	〃	〃	L	C	B	1.25	0.9	0.3	0.26	黒曜石	脚部より欠	
378	D-2	Ⅲ c 上	〃	J	D	B	1.0	0.9	0.25	1.03	黒曜石	片脚欠	
379	E-13	Ⅲ	〃	H	D	C	1.2	1.35	0.3	0.34	黒曜石		
380	F-17	Ⅲ b	〃	A	D	B	1.35	1.15	0.3	0.31	黒曜石	片脚欠	



第53図 Ⅲ層出土の石器（1）石鏃・石匙・スクレイパー

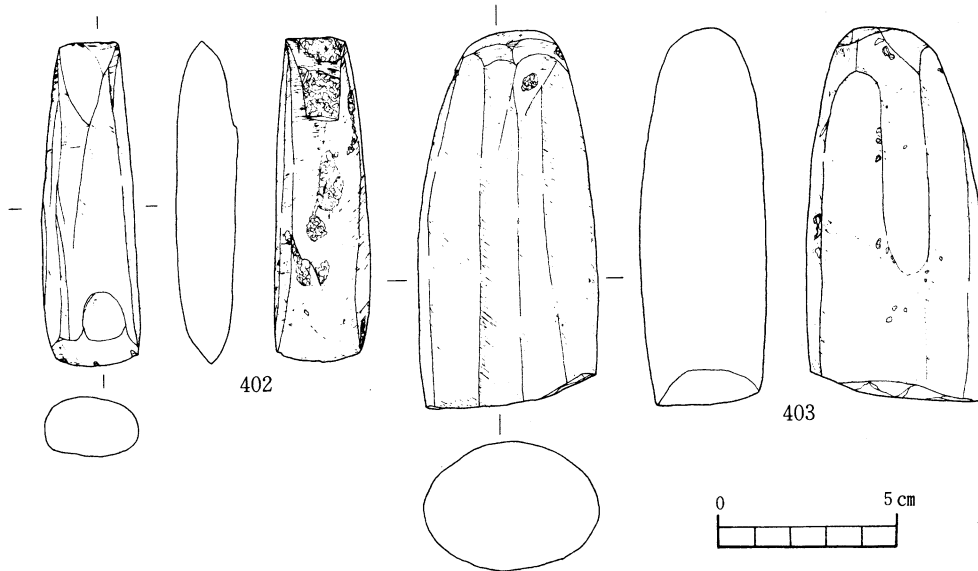


第54図 III層出土の石器(2) スクレイパー・剥片石器

番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石 材	欠損部	備 考
381	F-14	Ⅲ	凹基式	K	D	B	1.3	1.3	0.2	0.205	黒曜石		
382	F-16	Ⅲc	〃	J	E	B	2.3	2.0	0.3	0.19	チャート		
383	E-5	Ⅲa上	〃	E	E	B	2.85	2.1	0.4	1.57	チャート		
384	F-14	Ⅲb	〃	I	E	B	1.65	1.2	0.2	0.425	黒曜石	片脚欠	
385	F-11	Ⅲa	〃	H	E	C	1.3	1.95	0.2	0.28	黒曜石	片脚欠	
386	I-1	Ⅲa	〃	L	E	C	2.6	2.5	0.7	2.54	チャート		
387	F-16	Ⅲc	〃	L	E(イ)	F	2.55	2.6	0.5	2.2	チャート	片脚先欠	
388	E-5	Ⅲa上	〃	E	〃(イ)	F	2.9	2.2	0.4	1.91	安山岩	先端部欠	
389	H-5	Ⅲa下	〃	I	〃(ウ)	C	3.2	3.5	0.35	1.725	チャート		
390	C-13	Ⅲa上	平基式		F	F	2.0	2.65	0.3	1.16	チャート	先端部欠	

第11表 Ⅲ層出土の石器一覧表

番号	区	層	形式	重さ (g)	石 材	備 考	番号	区	層	形式	重さ (g)	石 材	備 考
391	D-3	Ⅲb	石 匙	4.34	チャート		398	D-13	Ⅲ b	剥片石器 (使用痕のある鋸片)	1.98	黒曜石	
392	D-3	Ⅲc上	〃	9.6	黒曜石		399	F-13	Ⅲ c下	〃	15.41	黒曜石	
393	F-10	Ⅲa	スクレイパー	12.39	チャート		400	F-14	Ⅲ c下	〃	8.15	チャート	
394	F-14	Ⅲc	〃	1.7	黒曜石		401	F-15	Ⅳ a	〃	14.475	黒曜石	
395	E-13	Ⅲc下	〃	7.96	黒曜石		402	C-13	Ⅲ a上	石 斧	66	砂 岩	
396	F-13	Ⅲa下	剥片石器 (使用痕のある鋸片)	333.05	玄武岩		403	E-4	Ⅲ a上	〃	66	砂 岩	
397	C-12	Ⅲa上	〃	10.66	凝灰岩								



第55図 Ⅲ層出土の石器③) 石斧

(5) 1・2層出土の石器

1層および2層より石鏃・石匙・スクレイパー・すり石・石斧(磨製石斧・局部磨製石斧)が出土している。また、中世期の遺構内でも石鏃・石匙・すり石が出土している。これらは、縄文時代の遺物であり、中世および近世の造成や耕作によって下部より浮きあがったものと思われる。

①石鏃(第56図 404～425)

凹基式(404～423)と平基式(424～425)が出土している。凹基式の中でも405・409・419等は基部の脚端が鈍く非常に抉りが浅い。404・413・417・421は脚端が鈍く抉りが深い。422は、脚端が円く抉りが非常に深いものも見られる。また、脚端が鋭く抉りが深い412のようなものもある。側辺で見れば、404などは鋸歯状を呈し、405～499は、側辺が内彎する。側辺が外彎するもので、最大幅が下端に類するものは415～418で、最大幅が下方に類するものは420～422である。423は、五角形を呈する。側辺がまっすぐで三角形を呈するものは、410～413である。414は正三角形を呈し、最大長0.75cm、最大幅0.8cmの小形の石鏃である。

平基式は、側辺がまっすぐで三角形を呈する424と側辺が外彎し、最大幅が下端になる425の2点出土している。424は、頁岩質の磨製石鏃で、先端部は鋭さのない普通の先端をなし、425は、先端部欠損で不明である。

②石匙(第56・57図 426～429)

426は、両面に一部自然面を残す横形の石匙である。つまみの部がやや雑な作りで、刃部は、弧状を呈する。一見剥片的な要素も見られる。427は、大形の縦形の石匙で、刃部が欠損している。つまみの剥離はていねいである。428は、刃部調整の荒い石匙で横長の剥片を利用している。石器中央部で欠損している。429は、チャート質の石匙で、縦長の剥片を利用している。つまみも両面剥離し、ていねいである。刃部は片面より剥離されている。刃部に刃こぼれが見られる。

③スクレイパー(第57図 430)

430は、石英質の石材を用いた打面調整をもつ剥片である。三角形の側辺部に調整剥離が見られ、特に側辺右側は、調整剥離がていねいに行われ刃部を作り出している。調整剥離は表面だけ行っている。使用痕も観察できる。

④すり石(第57図 431・432)

431・432とも全面が風化している。431は、中央部にヒビが入っており熱が加わった可能性もある。432は、両面ともていねいにすられた円形のすり石である。風化しており鮮明ではないが、側面も一部磨かれている。側面部に一部欠損が見られる。

④石斧(第57図 433・434)

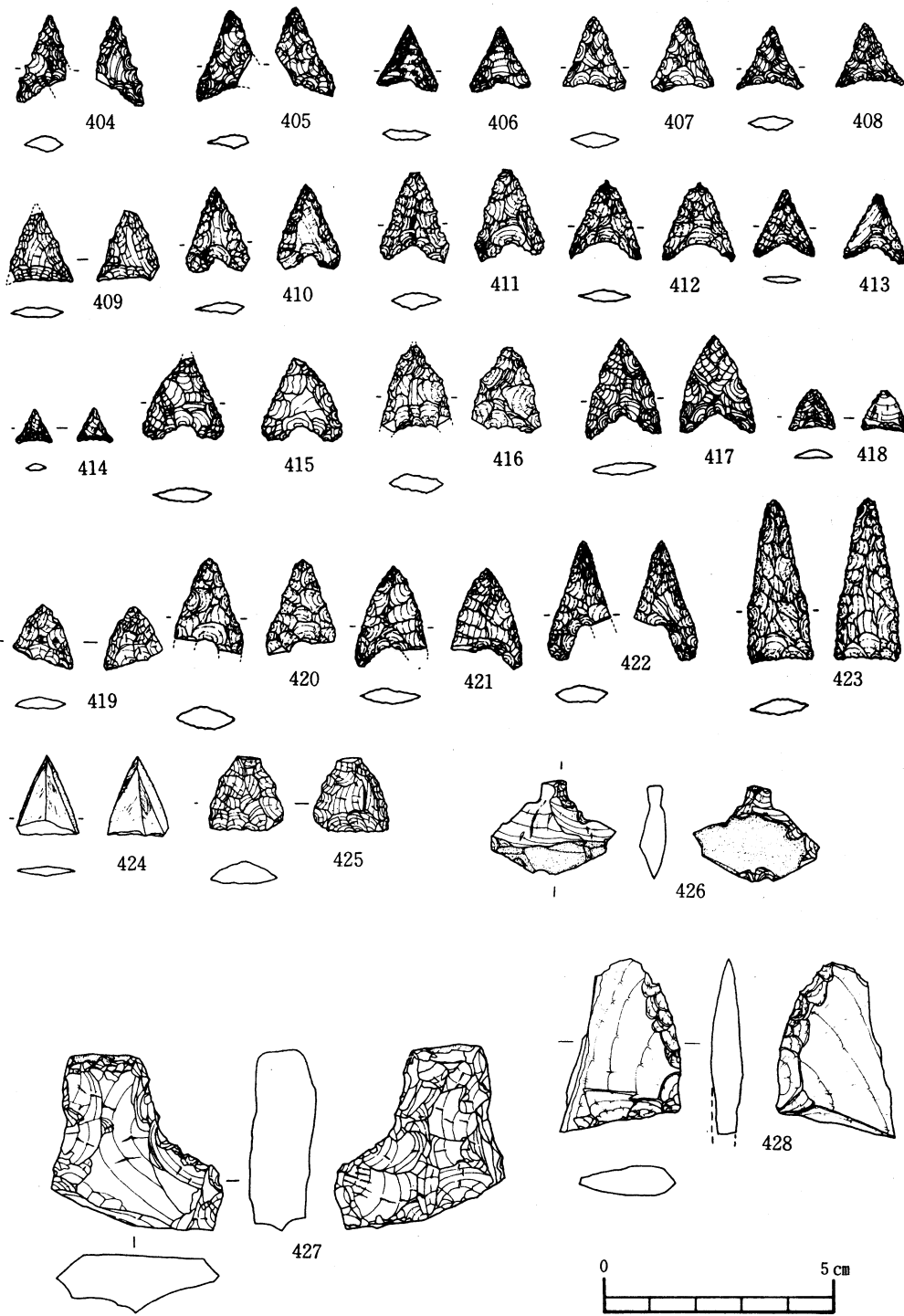
433は、花崗斑岩の石材を用いており、一部自然面を残している磨製石斧の破片である。434は、安山岩製の局部磨製石斧である。短冊形の石斧で、片刃の刃部をもつもので、刃部片面を磨いている。上部は欠損している。

第12表 I・II層出土の石鏃一覧表

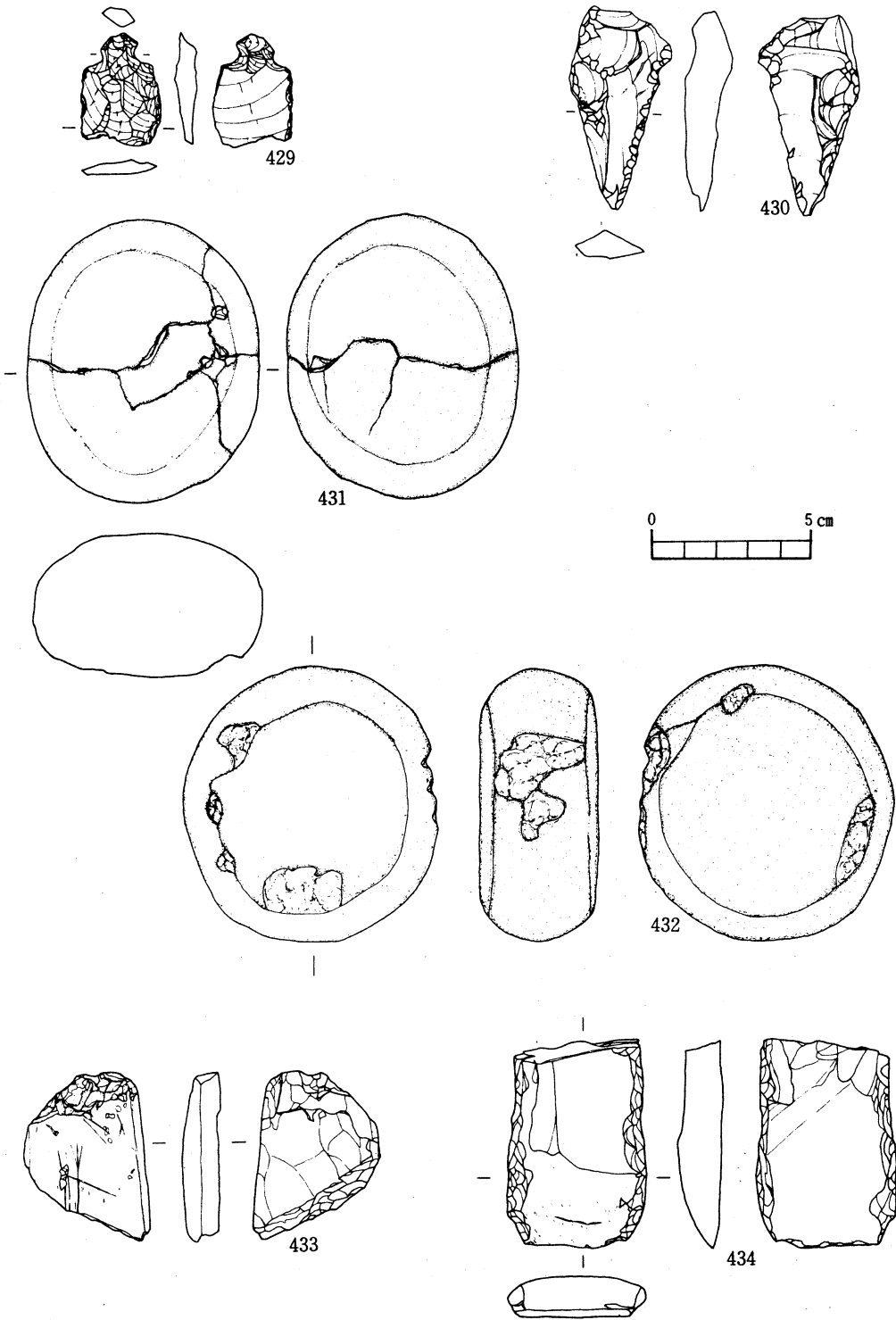
番号	区	層	形式	基部	側辺	先端	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石材	欠損部	備考
404	F-7	表	凹基式	E	A	A	1.9	1.0	0.35	0.56	黒曜石	片脚部	
405	E-19	表	〃	J	B	F	1.9	0.9	0.3	0.44	黒曜石	脚部より欠	
406	H-8	〃	〃	H	B	A	1.4	1.4	0.2	0.22	黒曜石		
407	G-4	〃	〃	H	B	C	1.6	1.4	0.35	0.5	玉髓		
408	D-13	II 下	〃	G	B	A	1.45	1.45	0.3	0.325	黒曜石	片脚部	
409	E-12	盛土	〃	J	B	F	1.5	1.2	0.25	0.45	チャート	片脚部 先端部	
410	C-10	表	〃	F	C	A	1.8	1.4	0.25	0.6		先端部	
411	F-10	II	〃	F	C	F	2.0	1.5	0.35	0.7	チャート (珪岩)	〃	
412	E-5	II 下	〃	D	C	D	1.7	1.5	0.2	0.375	安山岩	片脚部	
413	F-13		〃	E	C	F	1.5	1.3	0.15	0.24	黒曜石	先端部	
414	E-13	土垣1	〃	J	D	A	0.75	0.8	0.15	0.3	黒曜石		
415	H-6	表	〃	F	E(7)	F	1.8	1.8	0.3	0.9	チャート	先端部	
416	G-8	〃	〃	L	E(7)	C	1.85	1.5	0.35	0.92	安山岩	先端部 片脚部	
417	F-13	II 下	〃	E	E(7)	A	2.1	1.6	0.25	0.675	黒曜石		
418	—		〃	J	E(7)	C	0.9	1.0	0.2	0.125	黒曜石	先端部	
419	F-13		〃	J	E(7)	C	1.4	1.2	0.25	0.33	黒曜石	両脚部	
420	H-5	表	〃	L	E(4)	C	2.1	1.5	0.5	0.96	安山岩	〃	
421	E-10	II 下	〃	E	E(4)	C	2.2	1.5	0.3	0.86	チャート	片脚部	
422	E-4	II	〃	C	E(4)	A	2.6	1.25	0.3	0.76	チャート	〃	
423	E-10	I	〃	J	F	C	3.55	1.45	0.4	1.68	安山岩		
424	F-8	II 最下	平基式		C	B	1.7	1.4	0.2	0.43	頁岩	基部	
425	F-13		〃		D	F	1.6	1.7	0.5	1.25	黒曜石	先端部 片脚部	

第13表 I・II層出土の石器一覧表

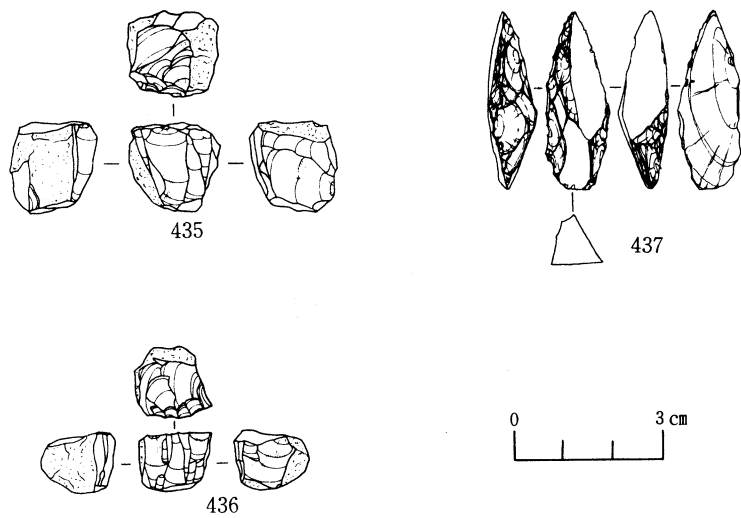
番号	区	層	形式	重さ (g)	石材	備考	番号	区	層	形式	重さ (g)	石材	備考
426	F-7	表 下	剝片	1.325	黒曜石		431	E-2	表	すり石	420	輝石 安山岩	
427	E-12	II	石匙	17.26	玄武岩		432	F-5	堀の内	すり石	447.3	輝石 安山岩	
428	G- ¹¹ / ₁₂	表	〃	7.0	玄武岩		433	F-11		石斧	30.475	花斑 崗岩	
429	G-3	堀の内	〃	5.71	チャート		434	F-12		石斧	61.2	安山岩	
430	C-13	II 中	スクレイパー	16.92	石英質 (珪岩)								



第56図 I・II層出土の石器(1) 石鏃・剝片・石匙



第57図 I・II層出土の石器(2) 石匙・スクレイパー・すり石・石斧



第58図 縄文時代層位より出土の旧石器時代遺物

435は、黒曜石製の細石刃核である。原石は、桑ノ木津留のアメ色をした気泡の少い小礫である。剥出面とプラットホームの角度はほぼ垂直であり、436もほぼ同様である。

437は、玄武岩製の尖頭器である。いずれもM b～V層に出土し、ローリング作用を受けていて、下位の層位の遺物とも思われる。

第3節 弥生時代

弥生時代の遺物は土器が3点のみで、遺構等は検出されていない。

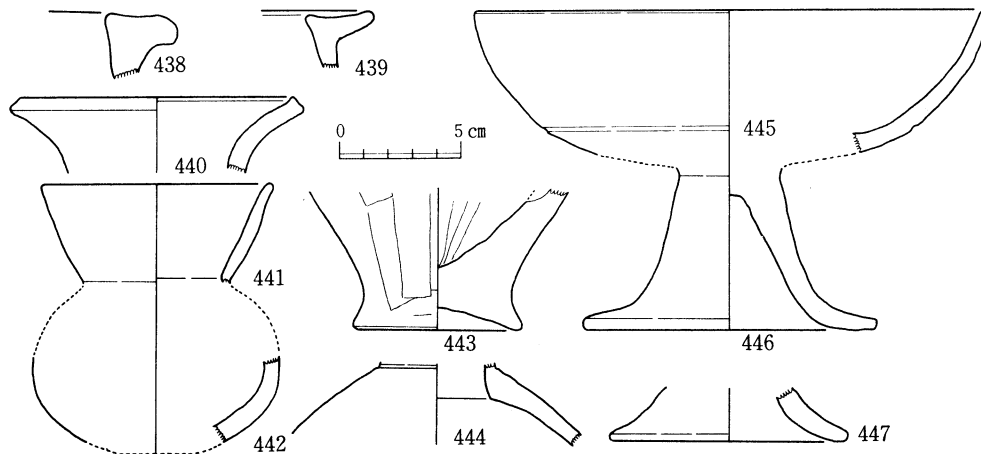
438はE-3区の2層で出土したかめ形土器である。逆L字形をした口縁部で、端部は丸みをもっている。表面はよくナデている。439はG-8区の堀状遺構から出土したかめ形土器である。内側にやや肥厚して、上端部がくぼんだ鋤先状の口縁部で、内側がやや下がっている。表面がやや剥脱しているが、内外ともナデ整形である。440はE-6区の2層で出土した壺形土器で、口縁直径11.2cmを測り、上に肥厚する口縁部をもつ。表面の磨滅が激しい。これらは淡茶褐色あるいは茶褐色を呈し、黒雲母・石英等の砂粒を多く含む砂質土を用いており、焼成は普通である。これらの土器は中期後半のもので、440は東九州系の土器と思われる。

第4節 古墳時代

古墳時代に属する遺物も少なく、遺構等は検出されていない。

441・442・444は埴形土器である。441は口縁直径9.5cmを測る口縁部で、頸部から口縁部へ向かって広がっている。442は胴部下半で、441と同一個体かと思われる。444は頸部で、内面には強く屈曲する部分がある。これらは化粧土が塗布されており、茶褐色を呈している。外面はヘラでていねいに横方向にナデられており、内面もなで整形である。石英・長石・黒雲母等を多く含んだ砂質土を用い、焼成は良好である。443はかめ形土器の脚台で、浅い。外面・内面ともヘラによるたてナデで仕上げる。茶褐色を呈し、焼成度は良い。石英の多い砂質土を用いる。445～447は丹塗りの高坏形土器である。445は口縁直径21cm、推定高6cmを測る坏部で、底部近くに1本の浅い凹線がある。446は高い脚部で、裾部が広がる。447も脚部であるが、これは短かい。これらは淡茶褐色を呈し、黒雲母・石英・長石などを多く含んだ砂質土を用いる。焼成度は良い。内面・外面ともヘラによるナデ仕上げである。

これらの土器は後期の笹貫式土器である。443が堀2（F-6区）で出土した他は、すべてI-1区・I-2区・J-1区周辺で出土している。



第59図 弥生時代・古墳時代の遺物

第5節 古代～中世

1. 遺構

概要で述べたように多くの遺構が検出された。これらの遺構を記述順に整理すると次のようになる。

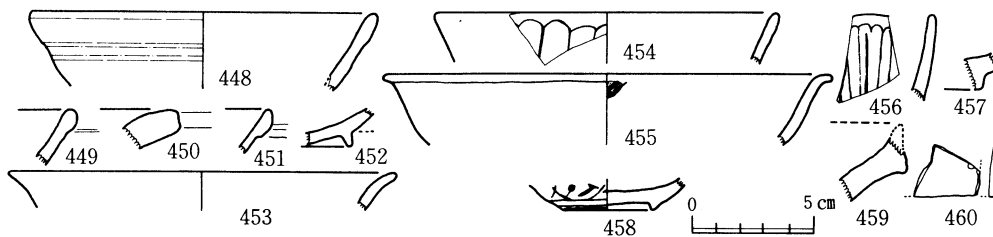
①堀 ②古道 ③溝 ④掘立柱建物 ⑤柱穴 ⑥土壇

①堀 (第61図)

堀は、重複して三本検出された。両端部は調査対象区域外に延びており、把握できなかった。堀1、2、3は南北に並行して築かれたものである。掘りこみの関係より検出順に1、2、3と名称した。

堀1

堀1は、約3mの深さを持ち、埋土は粘質土と砂層の交互したものであり、何回にもわたる流水作用がみられたことがあげられる。



第62図 堀1の出土遺物

堀1の出土遺物

堀1の出土遺物は少なく、土師器・磁器・陶器・石製品がある。

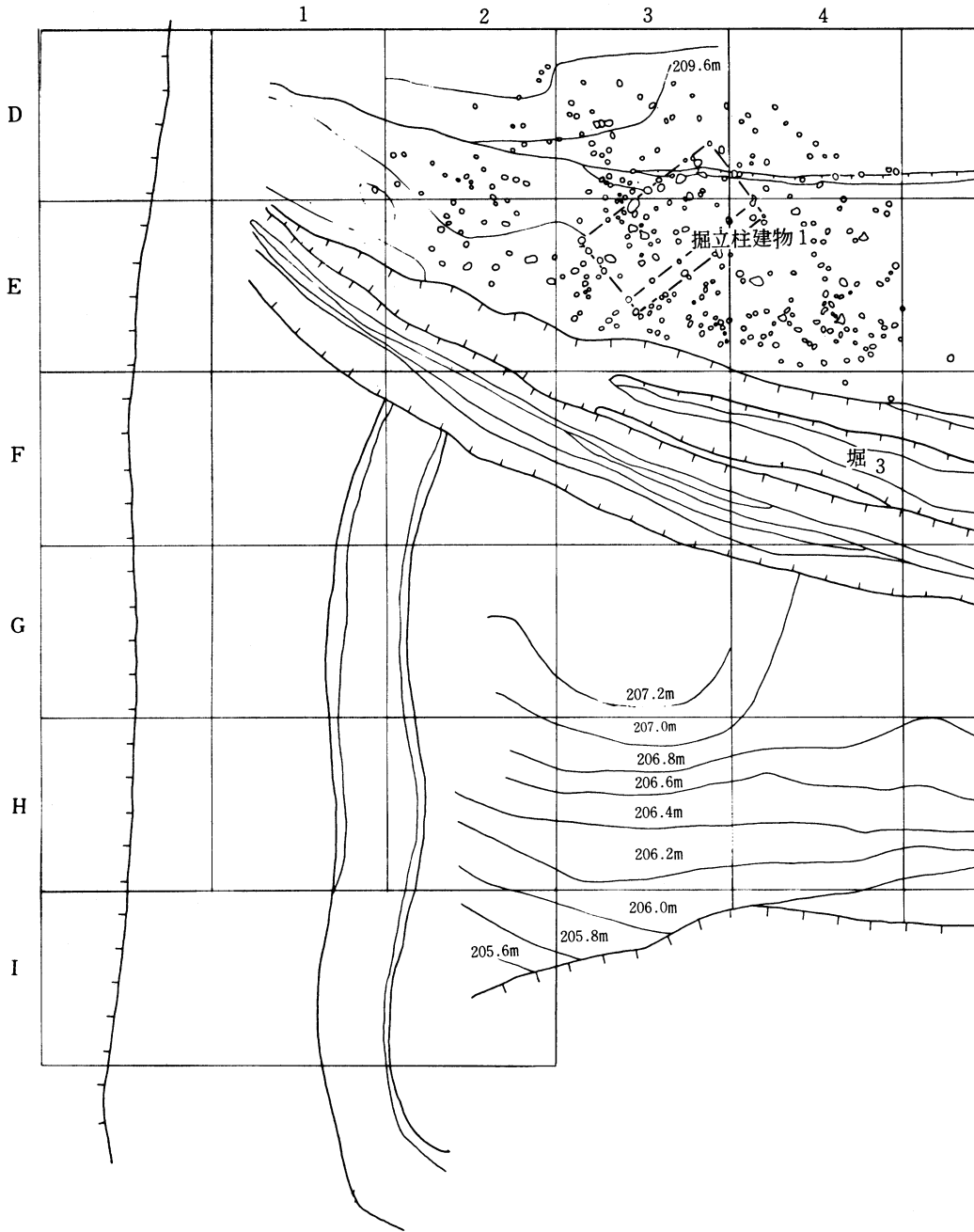
土師器 環とかめがある。環(448.449)は口縁へ広がりながらまっすぐのび、端部は玉縁状を呈する。かめ(450)はくの字状にまがるもので、端部は太い。

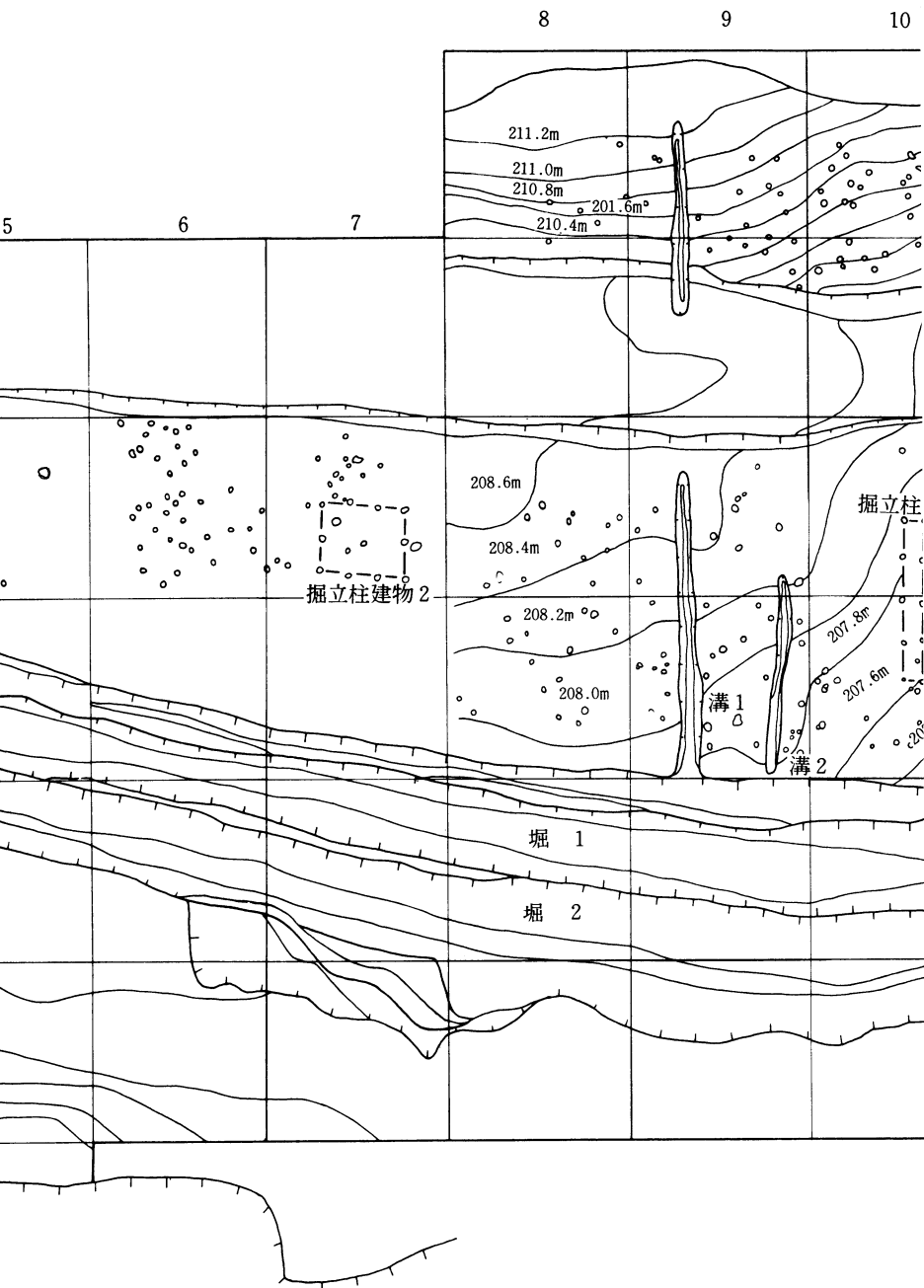
磁器 白磁・青磁・染付がある。白磁は碗と環があり、碗は玉縁状を呈する口縁部をもつ。環は口縁部がゆるやかに外反し、低い高台が付く。高台の接着部は内外ともに釉切れがみられ、畳付部分には釉がかからない。青磁は碗で、外面に縦線と波状文で描かれた蓮花文がみられる。染付には碗と皿があり、碗の口縁部は端反りし、外面に1条、内面に2条の横線がある。皿の底部は箕筒底で、畳付部より内側には釉がかからない。内底にも横線と花文が描かれる。

陶器(459) 口縁部が上下に拡張する備前焼の摺鉢である。

石製品(460) 剝脱しているが、縁辺部と面をみがいた扁平な石板である。粘板岩製である。

C





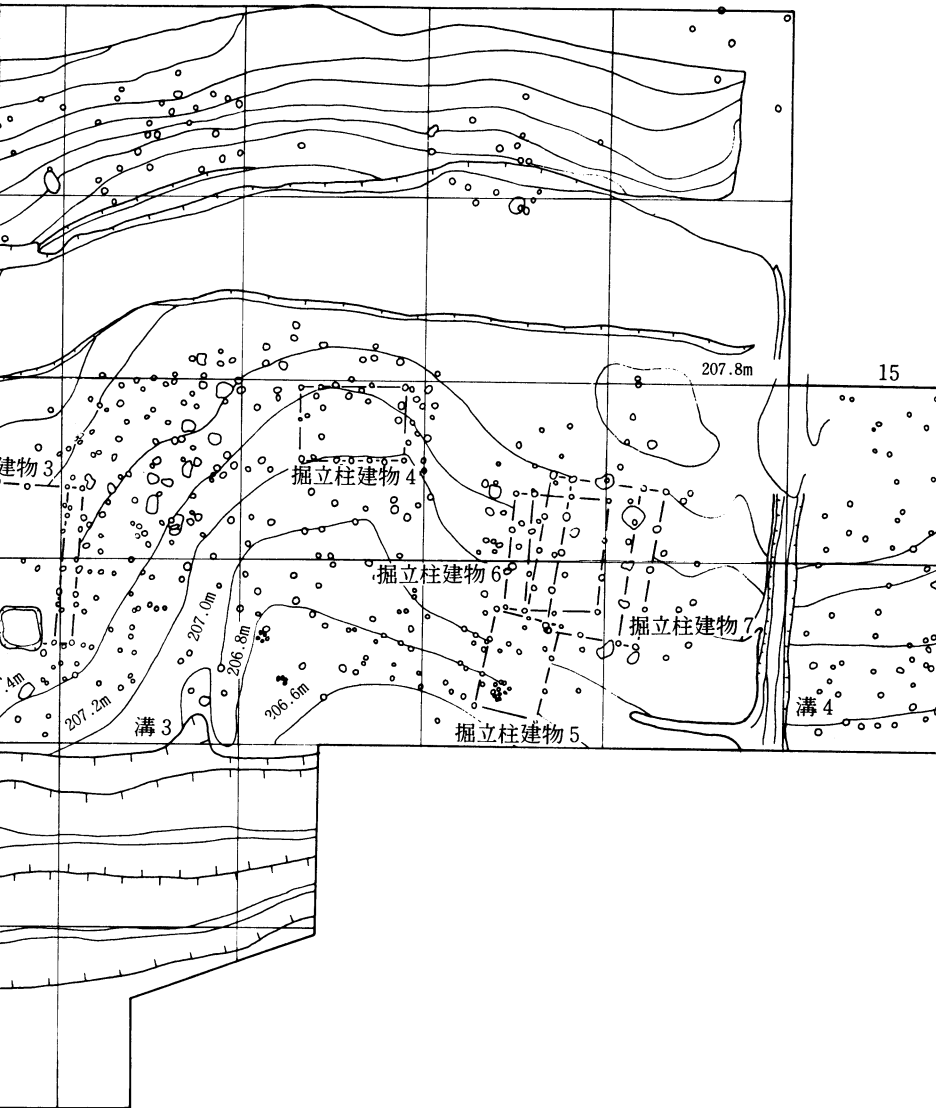
第 60 図 中世遺構 I

11

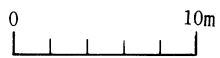
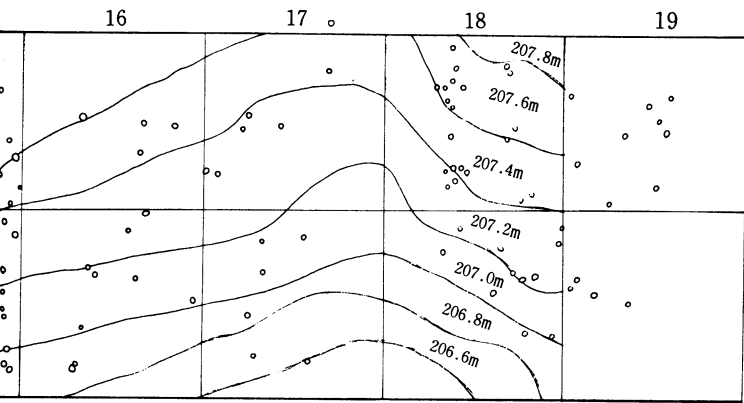
12

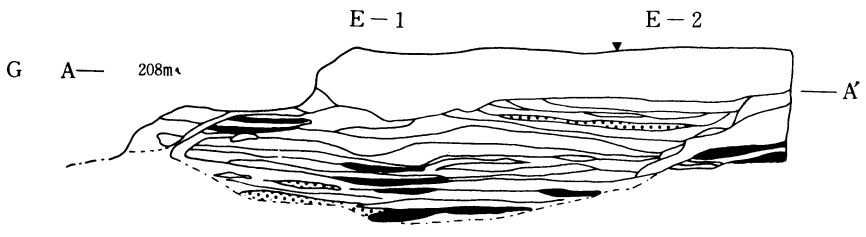
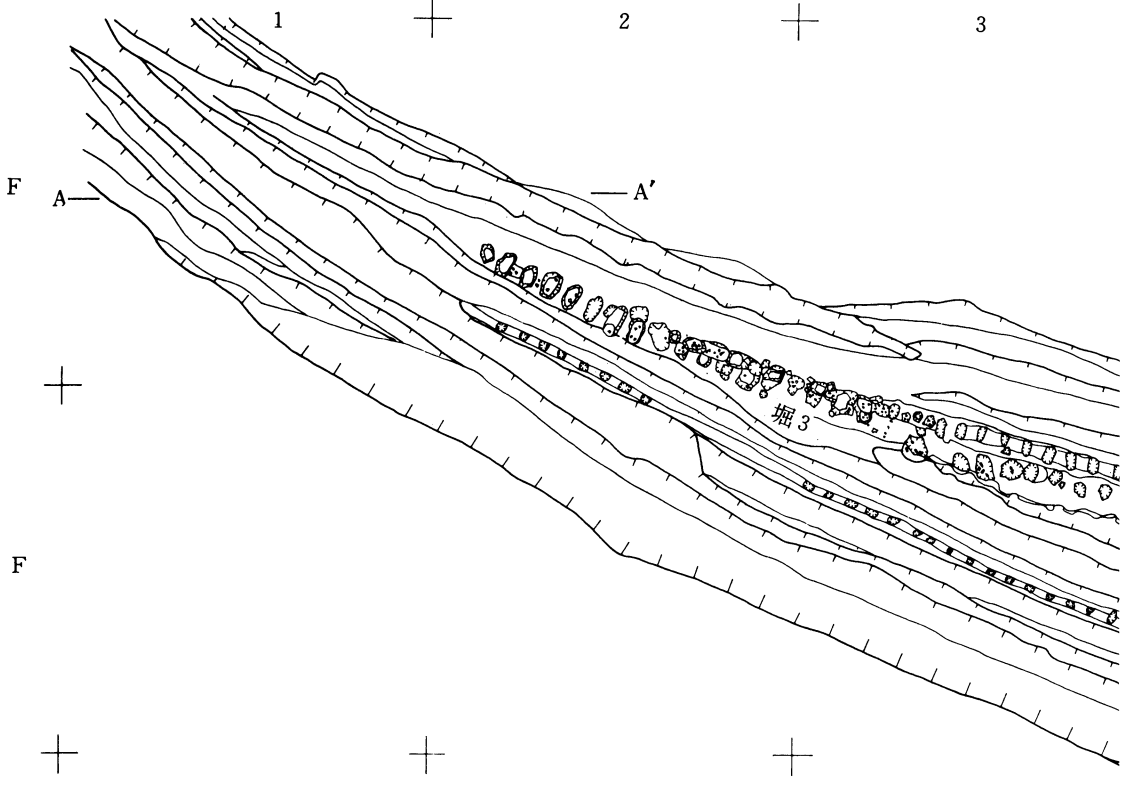
13



14



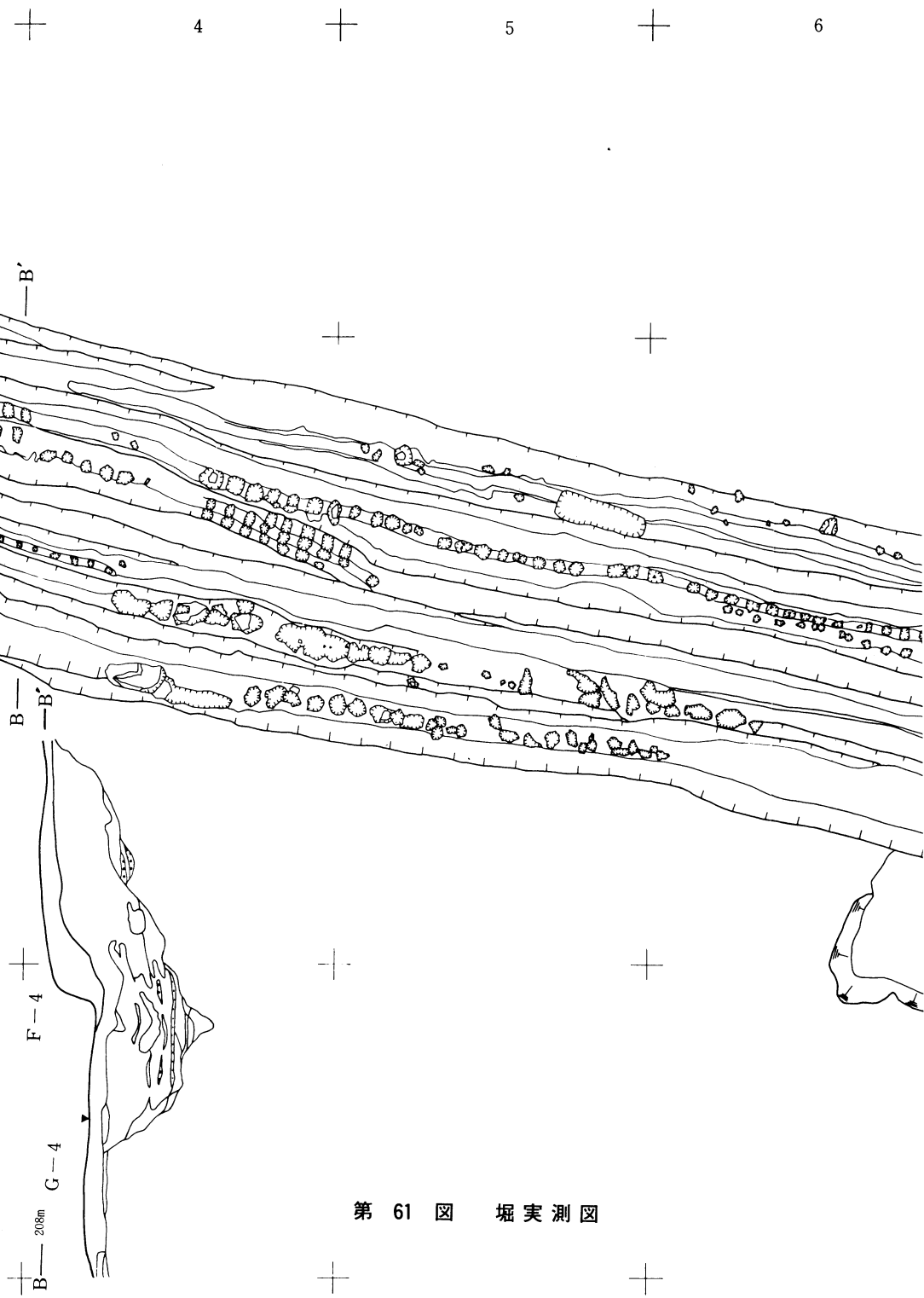
配置図





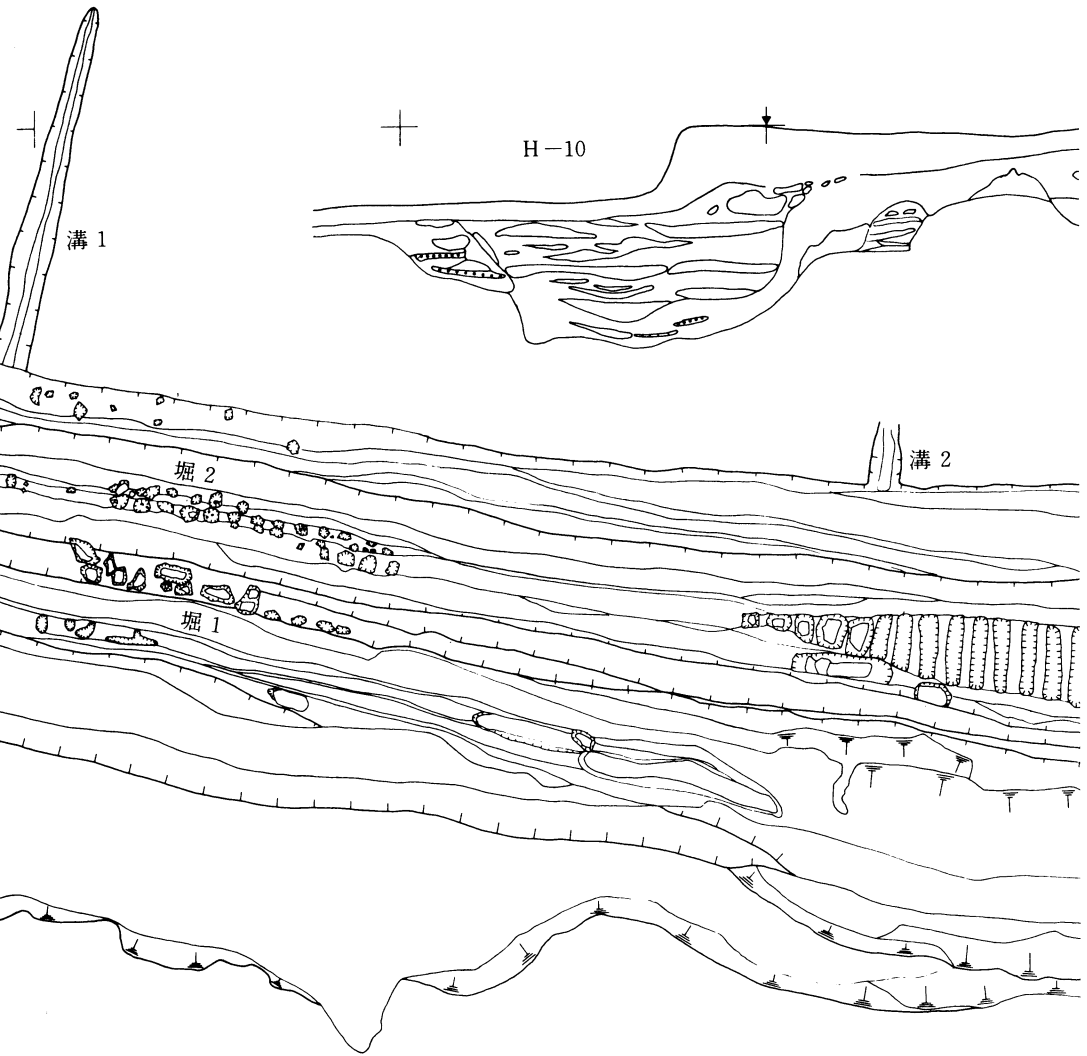
 粘質土
 酸化鉄

H



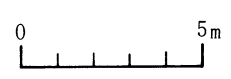
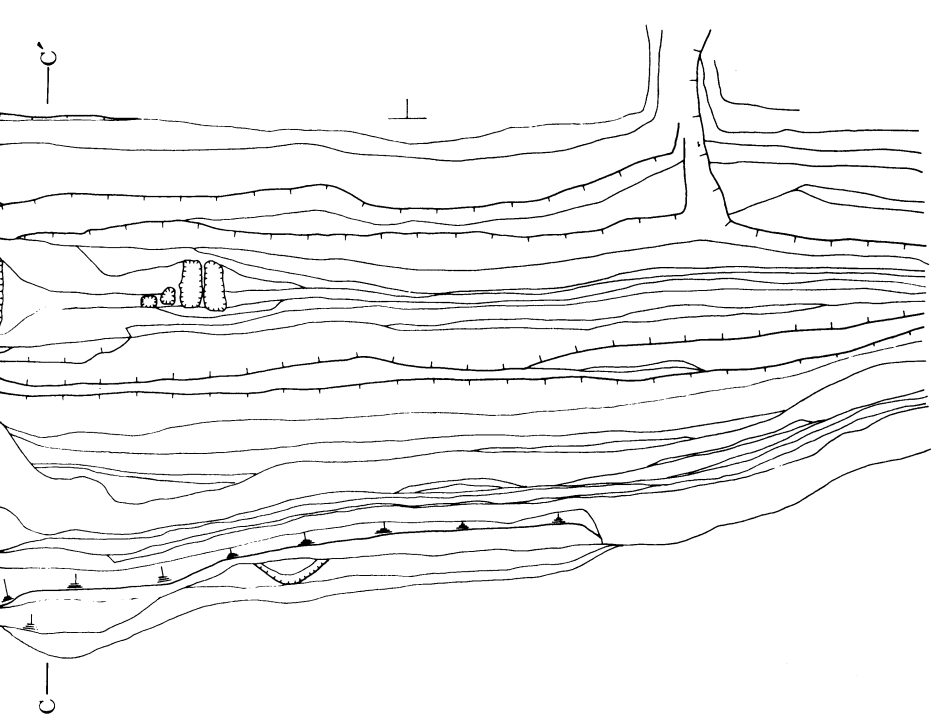
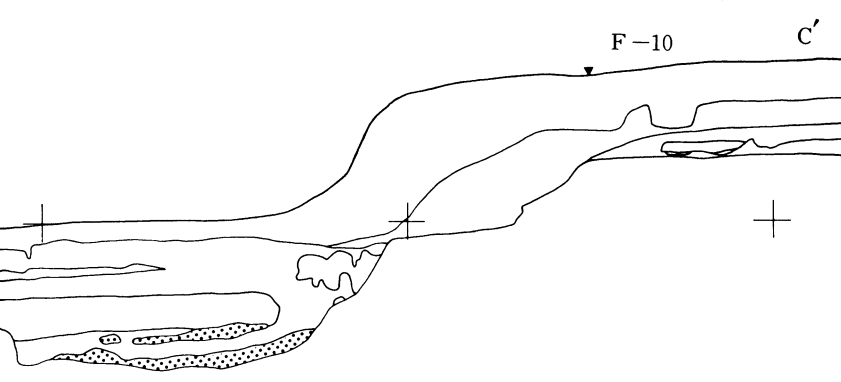
第 61 图 堀実測図

+ 7 + 8 + 9



+ + +

+ 10 + 11 +

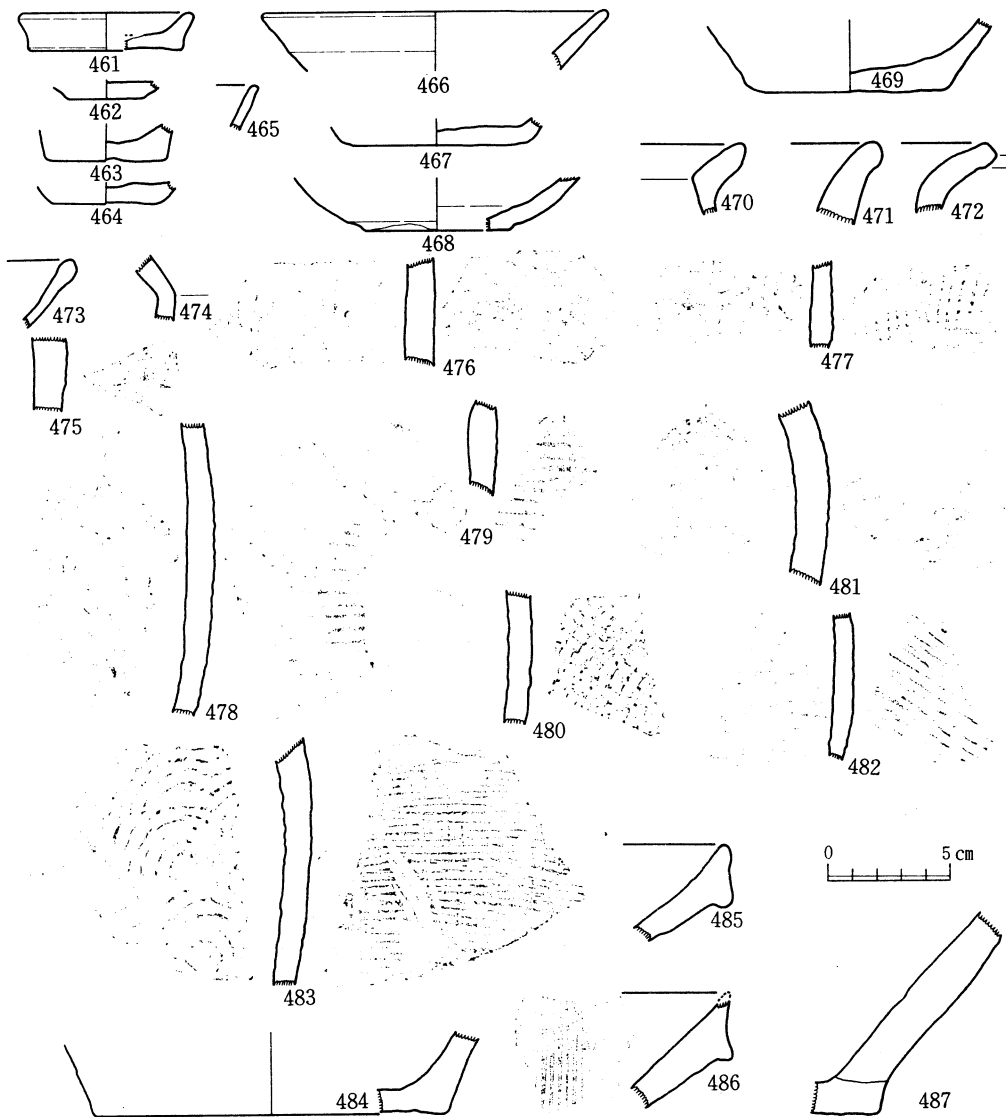


+ + +

堀 2

堀 2 は、巾約 4.5m 深さ 3m であり堀 1 と平行してみられる。下部には、ポットホールがみられ、流水作用があったことがわかる。

また、粘質土、砂層土、酸化鉄の層位が交互にみられ、長時間にわたって使用されたものであろう。



第63図 堀 2 の出土遺物 (1)

堀2の出土遺物（461～526）

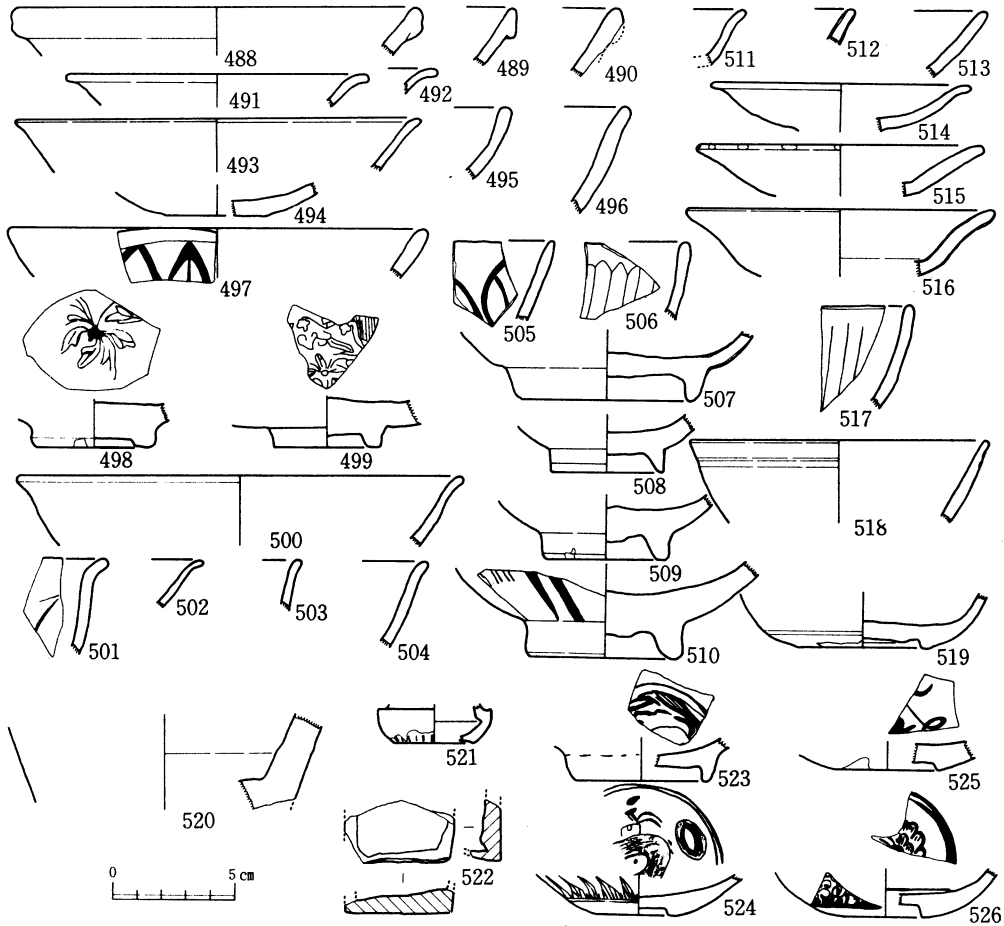
堀2からは多量の遺物が出土しており、ここに図化した他にも上半部から出土した多量の近代陶器や釘などの鉄製品等がある。土器には土師器・須恵器・陶器・磁器があり、他に滑石製石鍋片がある。

土師器（461～472）

皿・坏・かめの3器種がある。461は口縁直径6.8cm、高さ1.5cmのほぼ完形の皿である。皿・坏は精製の微砂質の土を用いており、底の切り離しはへら切りである。かめは口縁部がくの字状に強く屈曲し、外面、内面は横方向のへらなで、内面の頸部以下は横方向のへら削りで仕上げる。石英・黒雲母などを多く含む砂質土を用いている。

須恵器（473～483）

坏・壺・かめの3器種がある。坏は端部が玉縁状を呈する。壺は胴部のみで、474は屈曲部分で、外面は横方向のくし目で仕上げる。かめも胴部のみで、外面の叩きは、正格子目文が多く、横長格子目文・平行線文が各1点ある。内面の叩きは平行線文・同心円文が多いが、格子



第64図 堀2の出土遺物（2）

目文もある。

陶器 (484～487)

484～487は備前焼の甕とすり鉢である。甕は底部直径14.4cmを測り、内面は繊維状のハケなどで仕上げる。すり鉢の口縁部は上下に拡張するもので、内面に6条のかき目がみられる。これらは砂礫を多く含む胎土で、赤味をおびた紫灰色を呈す。487は茶褐色を呈すかめの底部で、内面には緑色の釉がかかっている。砂質の胎土である。

磁器 (488～526)

白磁・青磁・青白磁・染付がある。白磁は玉縁状の口縁部をもつ碗と、端部が外反する坏、端部へまっすぐのびる碗がある。青磁には、碗・坏・皿・合子がある、皿は口縁部がやや外反し、高台のつくもので515は稜花皿である。内底部分には釉がなく、重ね焼きの可能性もある。坏も口縁部が外反するものである。碗には口縁部がまっすぐ伸びるものと、端反りするものがある。外面は無文のもの、蓮弁を描いたもの、縦線のみのものであり、505は内面に劃花文がみられる。底は低い高台のあるもの、高い高台のあるもの、箕筒底のものがある。498と499は内底に草花文があり、499の線は細い。釉は高台から内側全体に釉のかからないもの、畳付部分のみにかからないものがある。521は合子の身で、外面の受部・底部以外には灰色がかつた青緑色釉がかかっている。底部はしぼっている。522は青白磁の水滴で、長いほうの一边は4.4cmを測る。染付は4点とも皿で、高い高台をもつものと箕筒底のものがある。

②古道

古道と思われるものが、E-5区からF-11区にかけてみられ、ほぼ堀と平行にみられる。溝状遺構であるが、床面に酸化鉄がみられカチンカチンに固められている。

③溝状遺構

溝状遺構は計3本検出された。全て西から東へ傾斜をとり、堀2に流れこむ様である。性格としては、溝間にピット群が形成されていることなどより、溝としての流水作用以外に区割り(何らかの区域設定)としてのみかたもかんがえられる。

④掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、7棟検出された。堀より東に築かれ、溝1と溝3の間に無数の柱穴が集中し、5棟が確認され、またその南の方にも2棟検出された。E-2～4区、E・F-10～15区には無数の柱穴が存在し、掘立柱建物跡がその他にも築かれたと想定されるが確認されたものは7棟であった。

掘立柱建物跡1 (第14表・第65図)

建物跡1は、D・E-3・4区に検出された。梁間2間(4.28m)×桁行5間(9.28m)を測り、北側桁行に梁間1.13mの庇が付いているものである。建物の桁行は、N-67°-W方向で

第14表 掘立柱建物跡／計測表

2間×5間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方	
P 1～2	216	436	P 1～4	170	902	1	52	38	36	円	
2～3	220		4～6	188		2	62	34	32	円	
4～5	204	424	6～8	998		3	30	32	28	円	
6～7		422	8～10	192		4	50	32	30	円	
8～9		430	10～12	154		5	40	34	24	円	
10～11		428	2	2～13		950	6	36	38	32	円
12～13		224		3～5	188		7	52	74	52	だ円形
13～14				5～7	170		8	42	32	30	円
		7～9		204	9		48	26	22	円	
			9～11	194	10	42	44	36	だ円形		
			11～14	176	11	48	28	22	円		
					12	28	32	28	円		
					13	24	32	28	円		
					14	22	26	22	円		
平均	216	428	平均	183.4	928	平均	41.1	35.8	30.1		

建物跡1の底(1)

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1～15	120		P 15～16	158	900	15	20	38	32	円
4～16	122		16～17	200		16	70	28	24	円
6～17	106		17～18	222		17	30	28	22	円
8～18	114		18～19	178		18	40	40	38	円
10～19	94		19～20	142		19	50	28	24	円
12～20	120					20	30	44	30	だ円形
平均	112.6		平均	180		17.5	40	34.3	28.3	

第15表 掘立柱建物跡3 計測表

2間×4間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1～2		324	P 1～3	202	844	1	10	20	16	円
3～4		346	3～5	192		2	36	56	28	だ円形
5～6		376	5～7	222		3	22	26	24	円
			7～9	228		4	44	28	24	円
						5	54	32	24	円

P 7 ~ 8	218 } 172 }	390	P 2 ~ 4	220	878	6	52	30	28	円
9 ~ 10			4 ~ 6	212		7	48	38	30	円
10 ~ 11			6 ~ 8	232		8	54	26	24	円
			8 ~ 11	214		9	52	40	34	円
				10		34	30	26	円	
11	68	26	24	円						
平均	195	366.4	平均	215.2	861	平均	43	32	25.6	

建物跡 3 の 底 (1)

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 12	86		P 12 ~ 14	214	840	12	20	24	22	円
3 ~ 14	94		14 ~ 16	188		14	34	22	22	円
5 ~ 16	76		16 ~ 18	214		16	26	46	24	だ円形
7 ~ 18	84		18 ~ 20	224		18	38	28	24	円
9 ~ 20	80		20	30		16	14	円		
平均	84	平均	210	平均	29.6	27.2	21.2			

建物跡 3 の 底 (2)

	梁間柱間	梁間間		梁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 2 ~ 13	104		P 13 ~ 15	216	884	13	38	30	18	だ円形
4 ~ 15	114		15 ~ 17	222		15	44	30	20	だ円形
6 ~ 17	120		17 ~ 19	232		17	52	32	28	円
8 ~ 19	100		19 ~ 21	214		19	56	28	26	円
11 ~ 21	112		21	66		30	24	円		
平均	110	平均	221	平均	51.2	30	23.2			

第16表 掘立柱建物跡 4 計測表

2間×3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 2	216	392	P 1 ~ 4	186	552	1	32	26	22	円
2 ~ 3	176		2	184		2	30	22	20	円
4 ~ 5	200		402	4 ~ 6		184	3	32	28	26
6 ~ 7		404	6 ~ 8	184	4	34	30	22	円	
8 ~ 9	210	410	2 ~ 9		594	5	38	32	22	円
9 ~ 10						6	48	26	22	円
						7		38	20	だ円形

			P 3 ~ 5	192	} 566	8	46	28	22	円
			5 ~ 7	198		9	18	22	20	円
			7 ~ 10	176		10	54	36	30	円
平 均	200.5	402	平 均	186.3	570.6	平均	30	28.8	22.6	

第17表 掘立柱建物跡5 計測表

2間×3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 2	180	} 364	P 1 ~ 4	172	} 538	1	44	28	24	円
2 ~ 3	184		4 ~ 6	190		2	42	28	24	円
4 ~ 5			6 ~ 8	176		3	62	32	30	円
6 ~ 7		364				4	32	28	24	円
8 ~ 9		352	3 ~ 5	178	} 532	5	36	22	18	円
			5 ~ 7	192		6	50	26	20	円
			7 ~ 9	162		7	46	32	26	円
						8	30	28	24	円
						9	32	28	22	円
平 均	182	359	平 均	178.3	535	平均	41.5	28	23.5	

第18表 掘立柱建物跡6 計測表

2間×2間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 2	204	} 434	P 1 ~ 4	208	} 432	1	46	34	26	だ円形
2 ~ 3	230		4 ~ 6	224		2	40	26	24	円
4 ~ 5		406	2 ~ 7		430	3	62	26	22	円
6 ~ 7	194	} 404	3 ~ 5	244	} 458	4	52	32	30	円
7 ~ 8	210		5 ~ 8	214		5	72	30	24	円
						6	46	46	34	円
						7	32	34	30	円
						8	66	30	24	円
平 均	209.5	414.6	平 均	222.5	440	平均	52	32.2	26.7	

建物跡6の底(1)

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 9	102		P 9 ~ 10	200	} 430	9	60	26	20	円
4 ~ 10	110		10 ~ 11	230		10	50	26	22	円
6 ~ 11	118					11	22	24	22	円

平均	110		平均	215		平均	44	25.3	21.3	
----	-----	--	----	-----	--	----	----	------	------	--

第19表 掘立柱建物跡7 計測表

2間×4間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1~2	202	382	P1~4	204	814	1	60	64	32	だ円形
2~3	180		4~5	228		2	126	108	64	だ円形
5~6		386	5~7	168		3	56	50	44	だ円形
7~8		412	7~9	214		4	88	82	42	だ円形
9~10	196	396	2~10			5	46	76	44	だ円形
10~11	200		3~6	420	6	76	32	28	円	
			6~8	222	7	84	102	44	だ円形	
			8~11	214	8	62	32	28	円	
					9	42	32	30	円	
					10	22	98	92	円	
					11	32	40	30	円	
平均	194.5	394	平均	208.7	848.6	平均	63	65	43.4	

建物建物跡7の底(1)

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P1~12	106		P12~14	234	868	12	32	52	32	だ円形
4~14	114		14~15	188		14	64	32	30	円
5~15	130		15~17	226		15	54	44	32	だ円形
7~17	94		17~19	220		17	32	32	20	だ円形
9~19	124					19	22	24	22	円
平均	113.6		平均	217		平均	40.8	36.8	27.2	

建物跡7の底(2)

	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P3~13	130		P13~16	434	860	13	18	34	28	円
6~16	112		16~18	210		16	34	34	30	円
8~18	118		18~20	216		18	26	30	26	円
11~20	98					20	30	36	20	だ円形
平均	114.5		平均	215		平均	27	33.5	26	

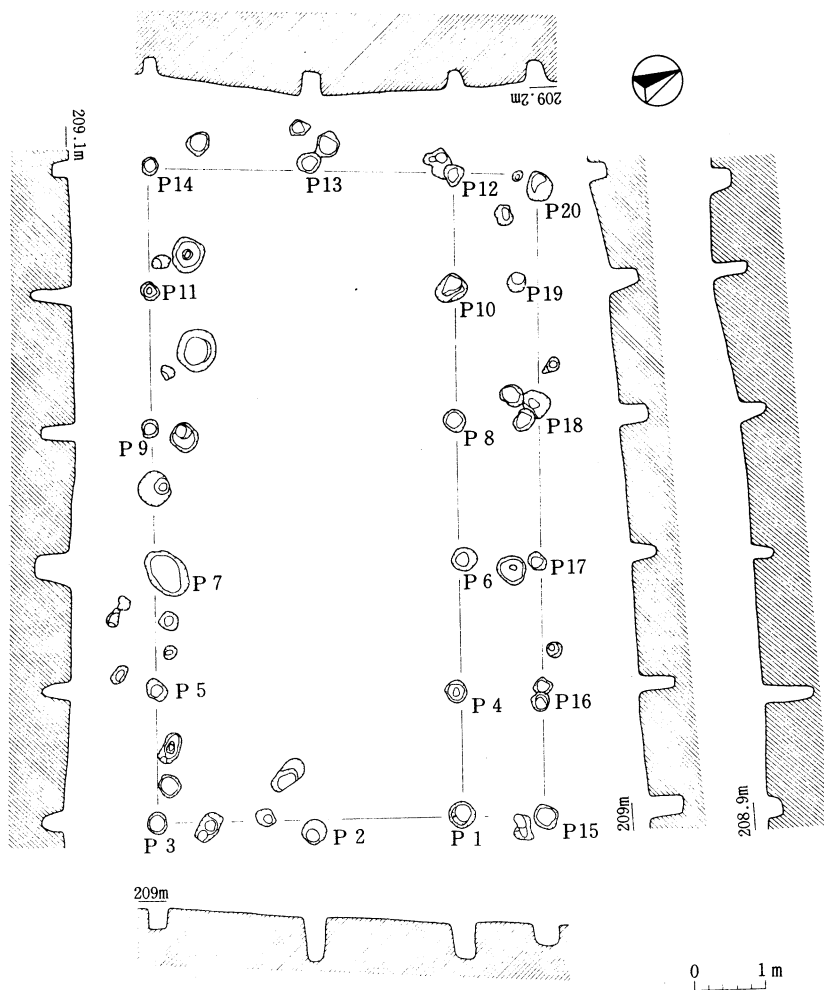
ある。梁間の1間が平均2.16m、桁行間が1.83mとなる。柱穴の掘り方は円形ないしだ円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は35.8cmを測る。深さの平均は検出面より41cmである。

掘立柱建物跡 2

建物跡 2は、E-7区に検出された。建物跡 1と建物跡 3のほぼ中間にあり、梁間2間×桁行5間を測り、建物の桁行は、N-23°-W方向である。建物柱穴の掘り方は、北西隅の柱穴は、だ円形であるが、他は全て円形である。

掘立柱建物跡 3 (第15表・第66図)

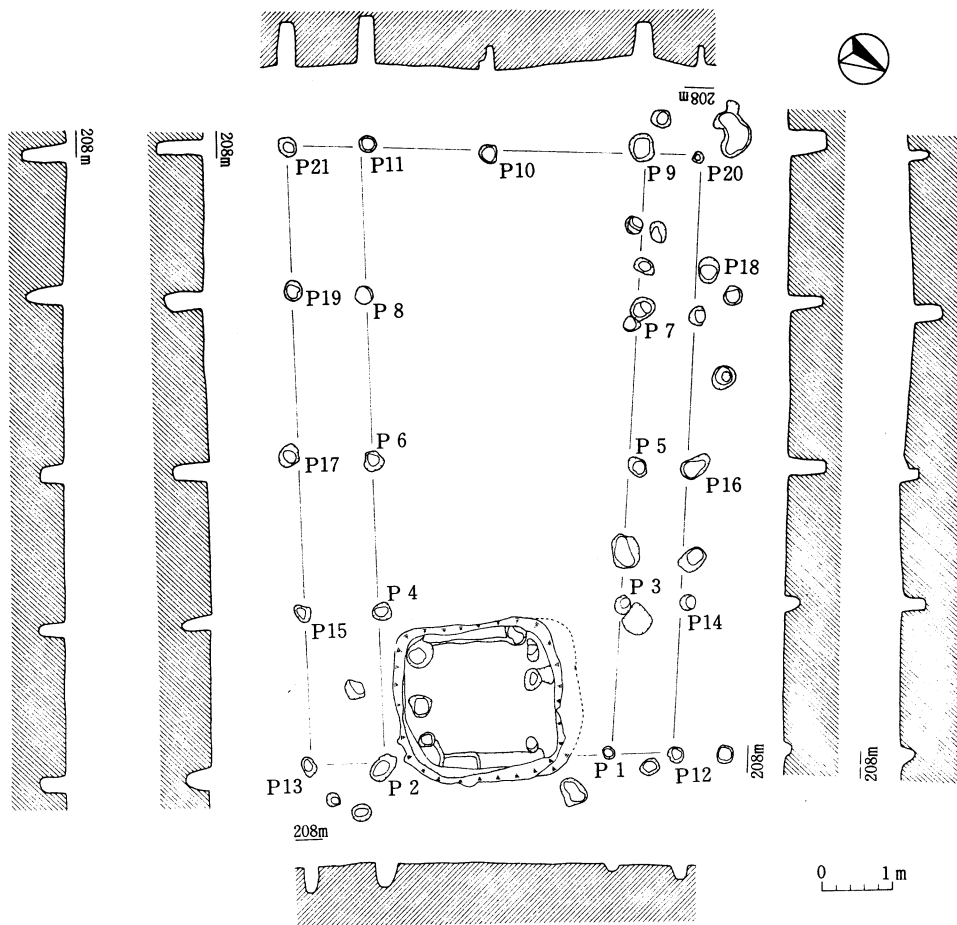
建物跡 3は、E・F-10・11区に検出された。溝状遺構 2と溝状遺構 3の間にあり、梁間2



第65図 掘立柱建物跡 1

間 (3.66m) × 桁行 4 間 (8.61m) を測り、両側桁行に梁間0.84mと1.1 mの庇が付いているものである。建物の桁行は、N-68°-E方向である。また、東側梁間には長径2.6m × 短径2.2mの隅丸方形の竪穴遺構を検出した。IV層上位まで掘り込み床面とする。深さ約60cm、面積は約4㎡。側壁は、わずかに傾斜を呈する。柱穴は総数7個を検出する。遺構内の東側と両側に長さ1.5m、幅20cm、深さ8cmと長さ1.2m、幅20cm、深さ6cmの壁帯溝がみられる。竪穴遺構は建物跡3と共伴関係は不明である。

梁間の1間が平均で1.95m、桁行間が2.15mとなる。柱穴の掘り込みはP2がだ円形で他は全て円形プランを呈する。建物柱穴の平均径は43cmを測り、深さの平均は検出面より26cmである。東側庇の柱穴の掘り込みは、P16がだ円形で他は円形であり、柱穴の平均径は27cmで、深さは30cmを測る。西側庇の柱穴の掘り込みは、P13、P15がだ円形で他は円形である。柱穴の平均径は30cmで、深さは平均51cmを測る。

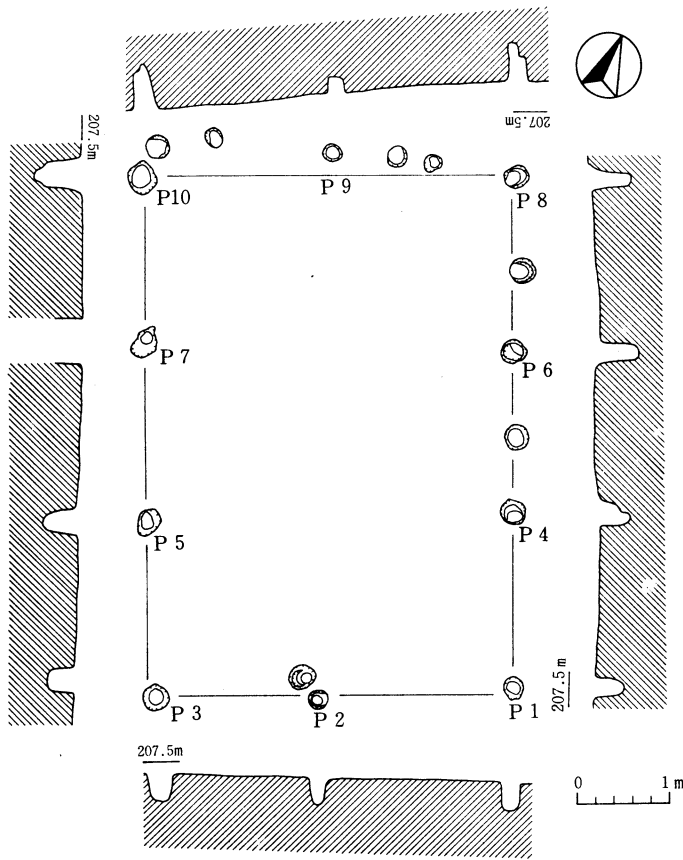


第66図 掘立柱建物跡 3

掘立柱建物跡 4 (第16表・第67図)

建物跡 4 は、E-12区に検出された。溝状遺構 2 と溝状遺構 3 のほぼ中間にあり、7 軒の建物跡では一番西側にある。

梁間 2 間 (4.02m) × 桁行 3 間 (5.70m) を測り、建物の桁行は、N-30°-W 方向である。梁間の 1 間が平均で 2.0m、桁行間が 1.86m となる。柱穴の掘り方は、P 7 がだ円形であり、他は全て円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は 28cm を測る。深さの平均は検出面より 30cm である。



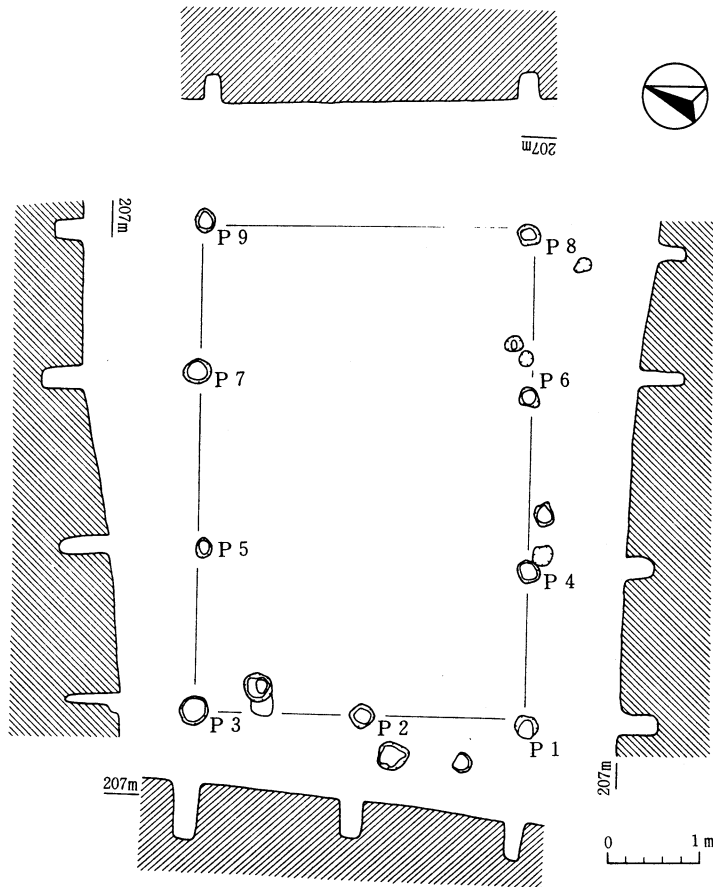
第67図 掘立柱建物跡 4

掘立柱建物跡 5 (第17表・第68図)

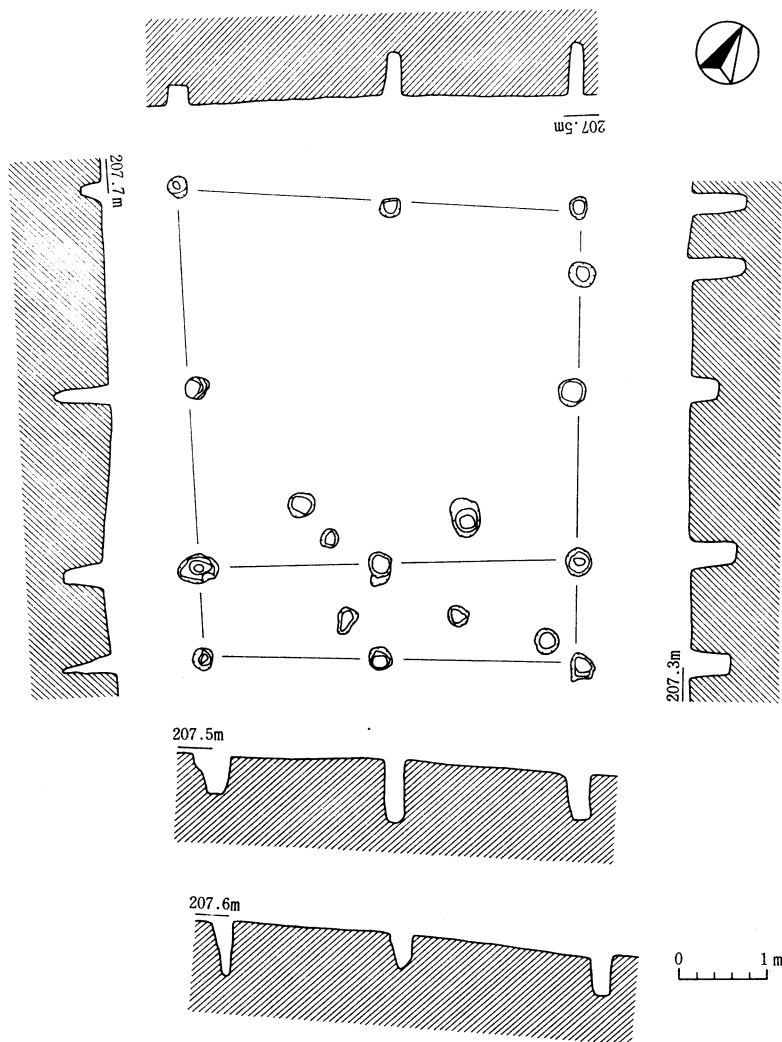
建物跡 5 は、F-13区に検出された。梁間 2 間 (3.59m) × 桁行 3 間 (5.35m) を測り、建物の桁行は、N-73°-E 方向である。梁間の 1 間が平均で 1.82m、桁行間が 1.78m となる。柱穴の掘り方は全て円形のプランを呈し、建物柱穴の平均径は 28cm を測る。深さの平均は検出面より約 41cm である。

掘立柱建物跡 6 (第18表・第69図)

建物跡 6 は、E・F13区に検出された。梁間 2 間 (4.15m) × 桁行 2 間 (4.4m) を測り、建物の桁行は、N-63°-E 方向である。南側桁行に梁間 1.1m の庇が付いているものである。梁間の 1 間が平均で 209.5cm、桁行間が 222.5cm となる。柱穴の掘り込みは P 1 がだ円形で他は全て円形プランを呈し、庇は全て円形プランを呈する。建物柱穴の平均径は 32cm を測り、深さの



第68図 掘立柱建物跡 5

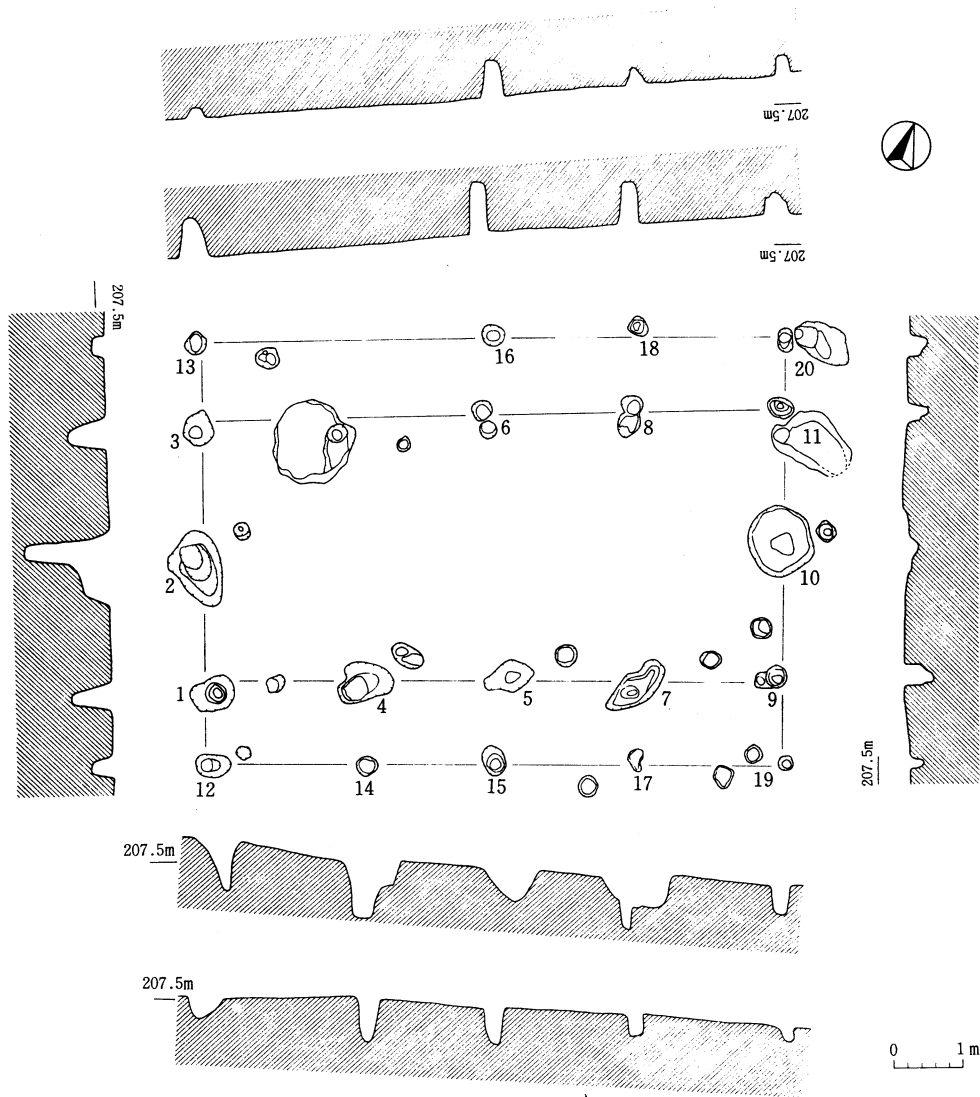


第69図 掘立柱建物跡 6

平均は検出面より約52cmである。

掘立柱建物跡 7 (第19表・第70図)

建物跡7は、E・F-13・14区に検出され、建物跡6と複合している。梁間2間(3.94m)×桁行4間(8.49m)を測り、両側桁行に梁間1.14mと1.15mの庇が付いているものである。建物の桁行は、N-69-E方向である。梁間の1間が平均で1.95m、桁行間が2.09mとなる。柱穴の掘り方は、だ円形と円形プランが半々を呈し、庇もだ円形・円形プランを呈する。建物柱穴の平均径は、65cmを測る。深さの平均は検出面より約63cmである。



第70図 掘立柱建物跡 7

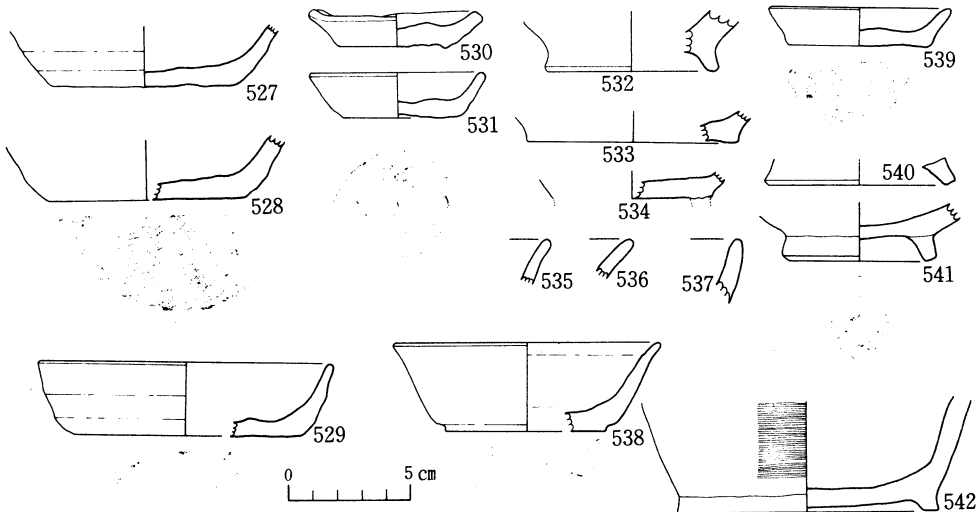
遺構内出土の遺物

①土師器 (第71図・527～541)

527～536・538～539はピット内出土である。527は坏の底部で底部径8cmを測る。へら切り底である。528・529は同一ピット内出土の坏で528は底部径8cmを測る。内面は凹凸がはげしい。器面は内外面共に横方向のなで整形で、糸切り底である。529は口縁径12cm・底部径9cm・器高3cmを測る。内面に黒色のすすが付着する。糸切り底である。530・531は同一ピット内出土の皿である。530は口縁径7.1cm, 底部径4.3cm, 器高1.8cmを測る。器壁の凹凸がはげしく、静止糸切り底である。531は口縁径7.2cm, 底部径4.7cm, 器高1.8cmを測る。器面は内外面共に、横なで調整を施す。回転糸切り底である。532・533は同一ピット内出土, 532は底部径7cmを測る内黒土師器の碗である。533は底部径8.6cmを測る坏で、底部はへら切りである。534は高台付の碗と思われるが、高台は貼り付け部分の所で剥離している。535・536は坏の口縁である。538は口縁径11cm, 底部径6.6cm, 器高3.6cmを測る坏である。内面には指による調整痕が残り、すすも付着する。糸切り底である。537は掘立柱建物跡6内の竪穴遺構より出土した坏の口縁, 540はC-11区土坑内出土, 底部径7.8cmを測る碗の高台部分, 高台の取り付け部分が剥離している。541はC-13区落ち込みの焼土部分より出土, 底部径6.2cmの内黒土師器で貼り付け高台付きの碗である。底部に「X」字状の線刻を施す。

②須恵器 (第71図・542)

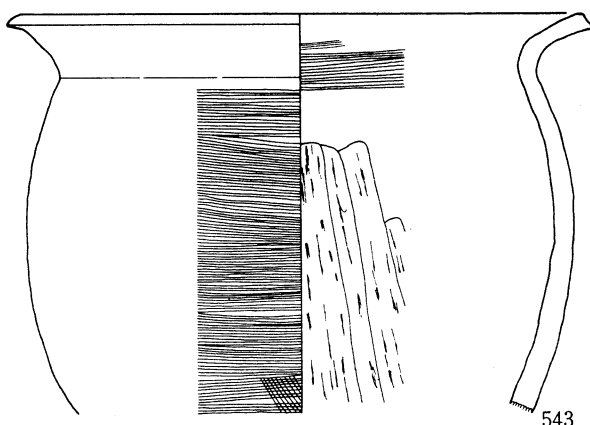
C-11区の土坑内出土で、底部径10.6cmの壺の底部である。外面の整形ははけによる横方向のなで、色調は青灰色、外面には黄白色のボロがかかり、底はやや赤味がかっている。



第71図 遺構内出土遺物 (土師器・須恵器)

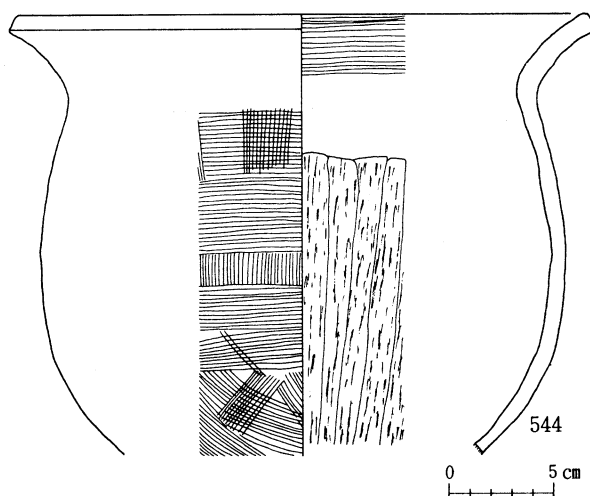
土壇出土の土師器かめ (第72図)

F-13区に重なって出土したもので544の上に543があった。両者ともほぼ同じような形態をしており、胴部の張りが少なく、やや長胴形である。外面の整形はこまかいハケなどで、内面の整形は頸部より上がハケの横なで、下がたて方向のへら削りである。黄色っぽい淡茶褐色を呈し、胎土は砂粒の多い砂質で、外表面に砂粒が露出している。焼成はふつうである。



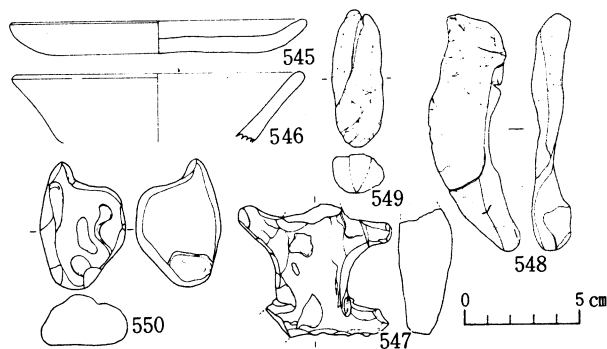
土壇出土の遺物 (第73図)

G-13区の浅い落ち込みから多くの焼土等と共に、土師器の皿・坏・土製の人形・棒状品が出土している。皿は口縁直径13cm、高さ1.4cmを測る。底部から口縁へ開きながら、まっすぐのび、底部切り離しはへら切りである。坏も口縁部へ向かって開きながら、まっすぐのびるもので、口縁直径12.8cmを測る。ともに精製土を用い、淡茶褐色を呈す。焼成は普通である。



土製人形は茶褐色を呈したもので、頭部と足を1本欠いている。両手・両足とも大きく開いており、指の表現はない。棒状土製品は3種に分かれ、548は長さ10.3cmを測るもので、3つの粘土塊をこねて扁平な棒状に仕上げている。549も3つの粘土塊をこねて棒状に仕上げたもので、長さ6cmを測る。550はパン状を呈する。いずれも精製土を用い、乳茶褐色を呈す。焼成度は普通で、軟質に焼けている。

第72図 土壇出土の土師器かめ



第73図 土壇出土の遺物

2. 遺物

①土師器 (第74図～第79図)

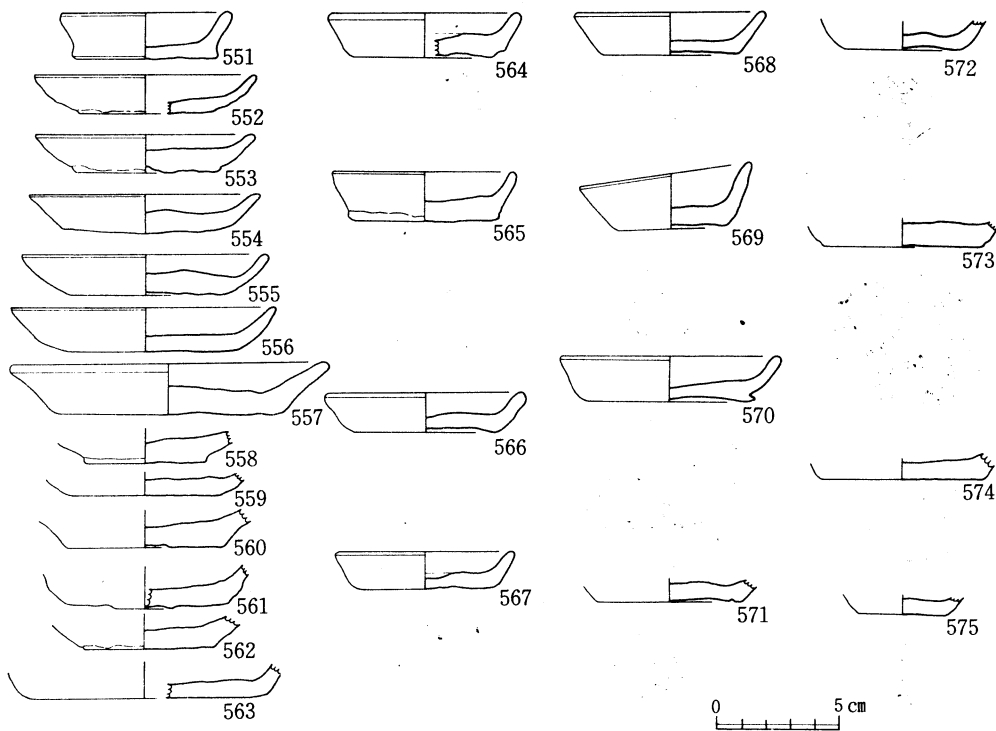
土師器は第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ a層上部・及び遺構内より出土しており、皿、坏、碗、こしき、かめ、浅鉢、すり鉢等の器種があり、墨書土器、刻書土器、黒色土器等も見られる。

皿 (第74図・図版38)

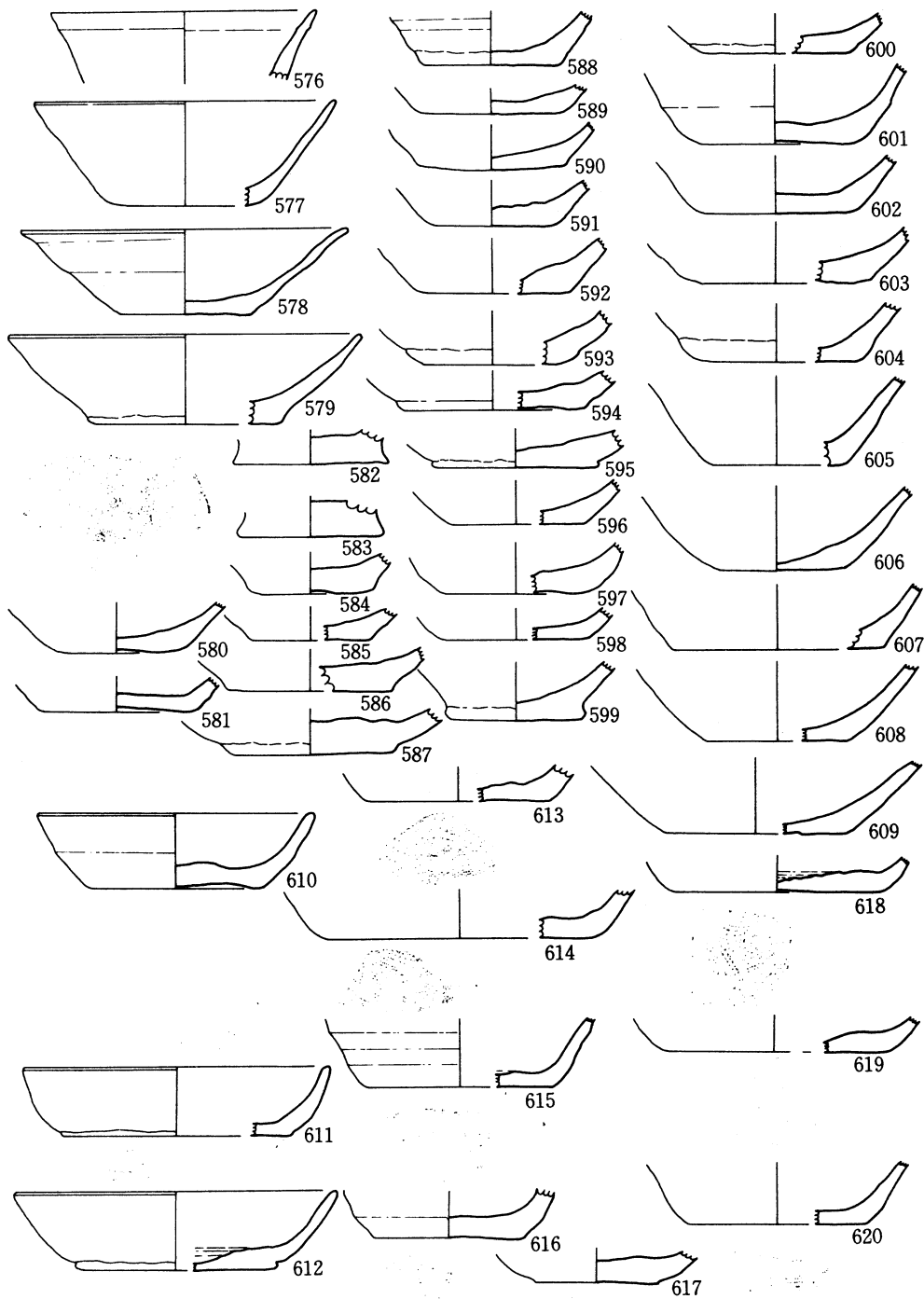
皿は口縁径が7cm～13cmで、器高が2cm前後のものが主である。551～563はへら切り底、564～575は糸切り底である。又、554・569は堀の中より出土したものである。

坏 (第75図・図版39)

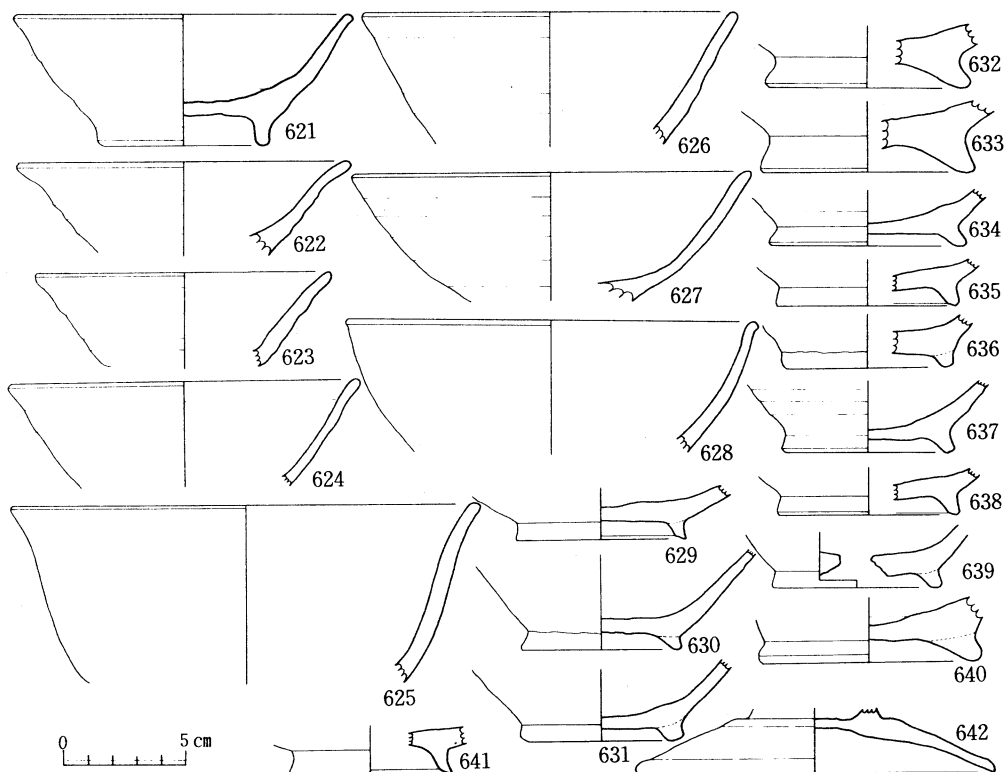
坏の破片は多く出土したが、完形になるものは少なかった。576～609はへら切り底である。576は口縁径11.7cmを測り、口縁下に稜状の段を有する。577は口縁径13.2cm、器高4.5cmを測る。578は口縁径14.4cm、器高3.7cmを測り、底部から大きく外反するものである。579は口縁径15.5cm、器高4.9cmを測る。580は底部の内・外面にへらによる「+」字の線刻が認められる。しかし、外面は土器の磨耗が著しく拓影は取れない。610～612は糸切り底で器高の低いものである。610は口縁径12.2cm、器高3.3cmを測る。611は口縁径13.4cm、器高3cmを測る。612は口縁径14.2cm、器高3.5cmを測る。



第74図 土師器(1) 皿



第75図 土師器(2) 坏



第76図 土師器 (3) 埴・蓋

埴 (第76図・621 ~641 図版)

埴は底部から直線的に外反するもの (621 ~ 624 ・ 626) と、やや丸味を帯びたもの (625 ・ 627 ・ 628) とが見られる。621は口縁径13.8cm, 器高5.3 cmを測り, 高台を有する。622は口縁径13.6cmを測る。623は口縁径12.1cm, 624は口縁径14.4cmを測る。625は口縁径19.2cmを測るものでやや大型である。626は口縁径15.4cm, 627は口縁径16.3cm, 628は口縁径16.9cmを測る。629 ~ 641は高台を有する底部及び底部付近である。629 ~ 631・636・639・640には高台部の貼り付けが観察される。又, 639については底部中央部に約0.6cmの焼成後の窄孔が見られる。

蓋 (第76図・図版 40)

蓋は1点だけ出土した。642である。つまみの部分が欠損しているが, 高台状のつまみと思われる。つまみの部分から外方へ大きく広がり 口縁径14.6cmを測るものである。又、口縁端部は下方へ鋭くおさめる。

こしき (643) 口縁直径52cmを測る大型のもので、断面形が円形をした把手が2個ついている。口縁端は断面形が矩形を呈し、外面が横方向はけなで、内面が横方向へらなで仕上げ。淡茶褐色を呈し、焼成度は良い。小砂を含む砂質土を用い、表面にも砂粒が露呈している。C13区Ⅲa層出土。

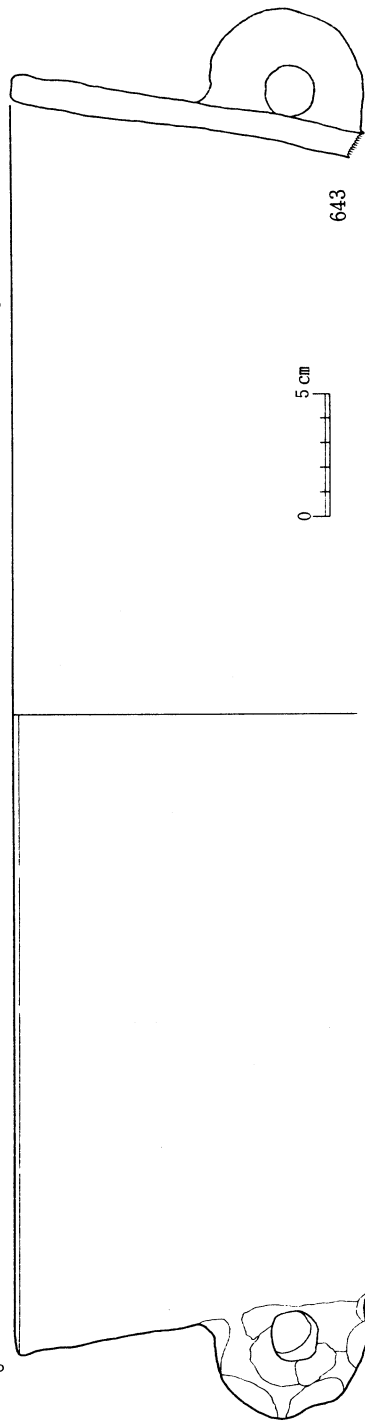
かめ (644～647, 649～665) 644～646は薄手のつくりをしており、同一個体である。口縁部を欠くが、頸部でくびれ、胴部は丸みをもってふくらみ、安定した平底である。表面が相当に剝脱しているが、外面が縦方向のはけなで、内面が縦方向のへらなで仕上げ。外面に黒斑がある。その他のかめは、内面の頸部以下を縦あるいは斜方向のへら削りで仕上げるもので、口縁部は強く外反し、底部は丸い。口縁直径が25cm以上を測るもの(647・649)と、21cm以下のもの(650・651)とがある。659は口縁直径14cmしかない小がめで、口縁内面に屈曲部をもつ。口縁部断面は丸みをもつものが多いが、矩形のものもあり、647は段をもつ。663は口縁付近に凹凸が目立つ。胴部の張りは少ない。底部は平底様の丸底で、664の底部内面は繊維状はけなで仕上げ。頸部以下の内面を除き、へらあるいははけなで仕上げである。色は茶褐色あるいは淡茶褐色を呈し、胎土は石英などの小石を多く含む砂質土である。焼成度はふつうであるが、良好なものも多い。

番	区	層	650	C11	2下	656	不	明	662	C13	3a上
644	F17	3a上	651	F13	2	657	E3	2下	663	E3	〃
645	〃	〃	652	E3	2下	658	C13	2中	664	F11	2下
646	〃	〃	653	C13	3a上	659	F11	3a	665	F9	2
647	C13	〃	654	〃	〃	660	F13	2下			
649	C12	2下	655	不	明	661	G3	3a上			

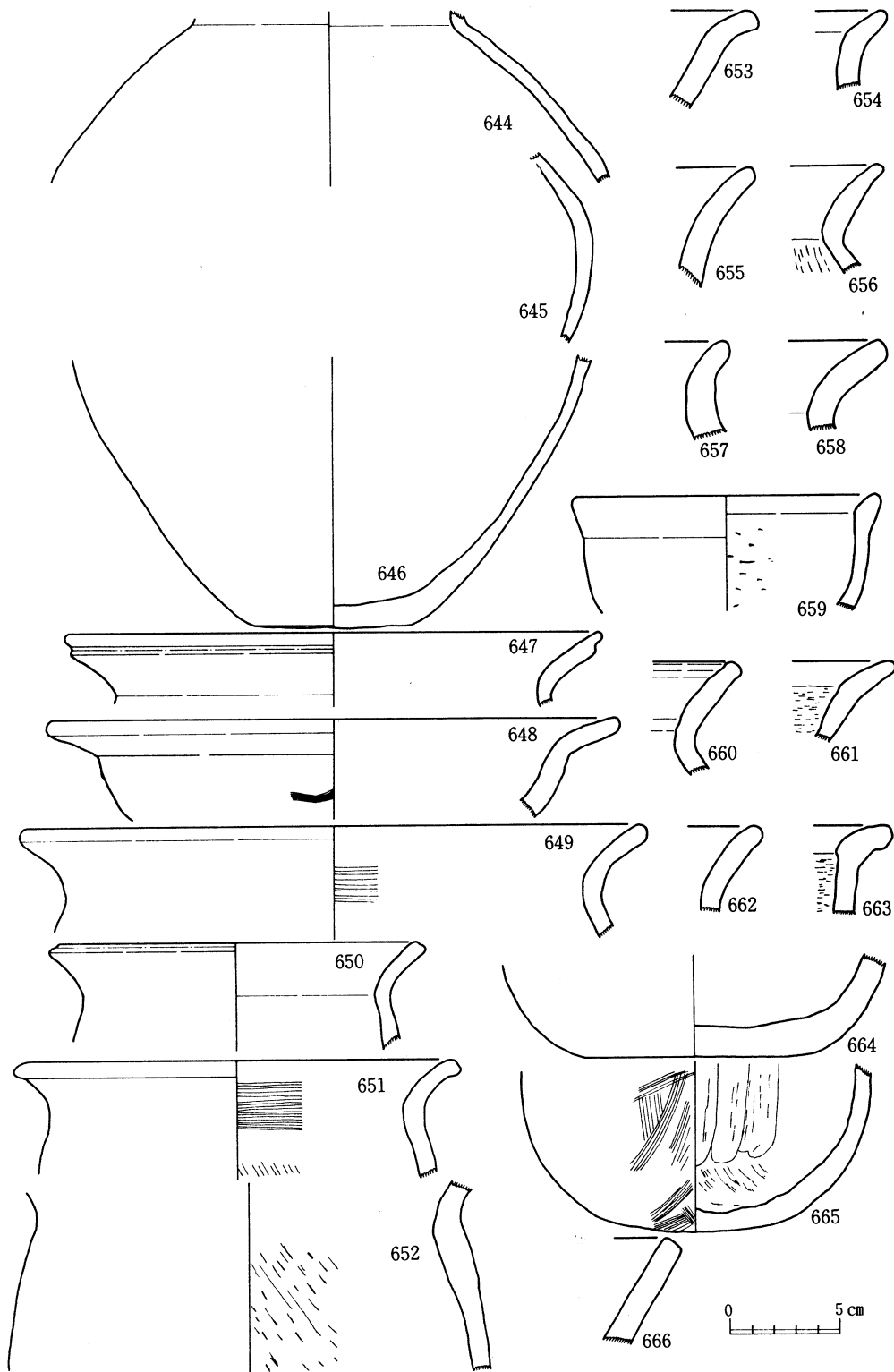
第20表 かめ出土地区一覧表

浅鉢 (648) 口縁部が強く外反し、頸部は段をもってくびれる。内面・外面とも繊維状はけなで仕上げ、焼成度は良い。細かい砂質土を用い、茶褐色を呈す。F11区Ⅱ層出土。

すり鉢 (666) 焼成度が良く、硬質に焼けている。内面がはけなで、外面がへらなで仕上げ、内面にかき目がひかれる。淡茶褐色を呈し、細かい土を用いる。F13区Ⅱ層出土。



第77図 土師器(4)なべ



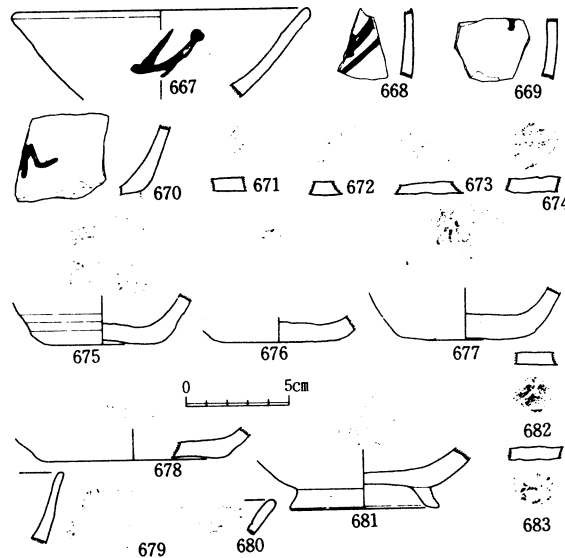
第78図 土師器(5) かめ・すり鉢

墨書土器 (667～670) 4点出土している。667は口縁直径14.4cmを測る内黒土師器の坏で、外面に字がかかっている。668は内黒土師器の碗で、外面に字がかかっている。669は土師器の坏で、外面に字がかすかに残っている。以上3点がかかっている字を解読できない。670は土師器の碗の底部で、外面に『九』らしき字がかかっている。これらはいずれも微砂質土あるいは精製土を使用している。

線刻土器 (671～683) 13点出土している。671～678・681はいずれも坏あるいは碗の内底部に『九』という字がかかっている。するどいへら様のものでかかれ、よく似た字体である。679は外面に斜線がかかっているが、全体形が不明である。680は坏の内面、口縁近くに横線がみられる。682は坏の底部に十字状の線刻がある。683は坏の底部に『×』印がある。坏の口縁部は端部が丸みをもっており、まっすぐのびている。底部は丸みをもって体部からうつっており、675は体部に凹凸がみられる。底部切り離しはへら切りであり、675は回転へら切り、677は静止へら切りである。碗は外へふんばる高台がついており、直径7.2cmを測る。外面はへらみがき、内面はていねいなへらなで仕上げられる。これらは微砂質のこまかい土を使用している。

図番	区	層	色	焼成度	672	F10	2	淡茶褐	ふつう	678	C12	2下	淡茶褐	良
667	F13	2下	淡茶褐	良	673	F14	3	茶褐	良	679	F13	〃	〃	ふつう
668	C12	1	〃	〃	674	E15	1	〃	〃	680	C13	〃	〃	〃
669	〃	3a上	〃	ふつう	675	E13	2	淡茶褐	〃	681	E16	〃	〃	良
670	F13	2	〃	〃	676	F13	〃	茶褐	〃	682	F9	〃	〃	ふつう
671	E7	3a上	茶褐	良	677	〃	2下	淡茶褐	〃	683	〃	〃	〃	〃

第21表 墨書土器・線刻土器一覧表



第79図 土師器(6) 墨書土器・線刻土器

②黒色土器 (第80・81図 図版 41)

A類 内外面黒色土器 (684～687)

6片の出土が確認され内2片は細片のため図化できなかった。684～686の口縁部は、立ち上がる体部が口唇部で丸くおさめられ、684の口縁部だけがわずかに外反する。687は底径6.4cmを測る。内面に縦位のへらみがきを施し調整している。胎土に石英・長石等の砂礫を含み、焼成は比較的良好。

B類 内面黒色土器 (688～710, 707～739)

a. 坏 (688～695)

688は口縁径11.1cmを測る。口縁部は体部が直線的に立ち上がり口縁部を丸くおさめ、口縁部外面下位に凹線を有する。689から692は底部である。689の底部は静止によるへら切りで、690～692は回転によるへら切りである。689・690は体部の立ち上がりがゆるやかで底部と体部の境は明瞭な稜をなす。691・692は底部から直線的に体部が立ち上がり底部の器厚が厚い。胎土は砂質を含み焼成は不良である。

b. 埴 (693～710, 712～739)

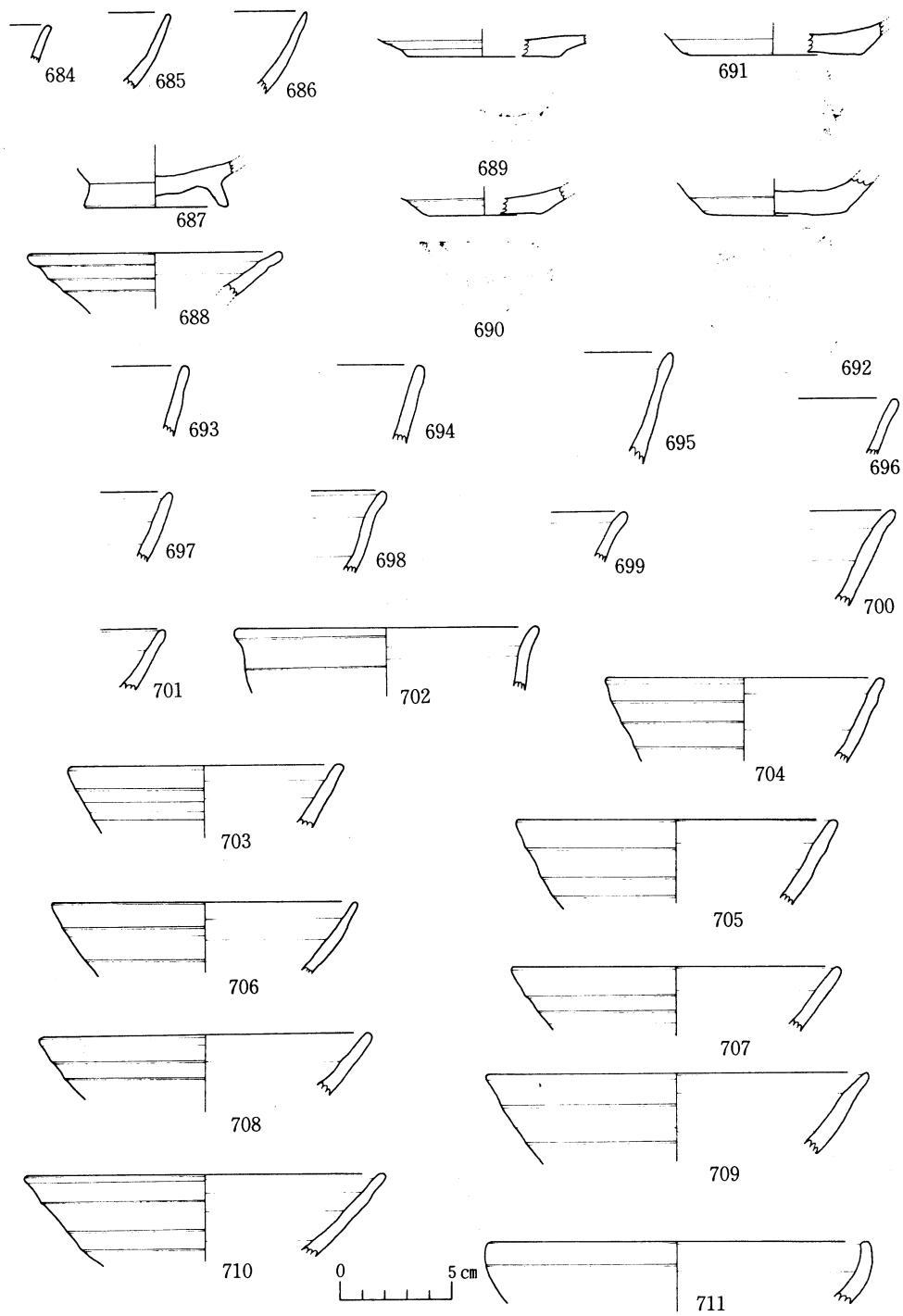
693から710は口縁部である。口縁部は体部が直線的に立ち上がり口唇部を丸くおさめる。695・699・700・702の口縁部はわずかに外反する。内面の調整は丁寧なへら磨きである。698～701の内面は他のものに比べて灰黒色を有する。胎土は良好で焼成は少し軟らかい。703～705の口縁径は12.3cmから14.4cmを測り、内面に横方向のへら磨きを施している。706～710の口縁径は13.6cm～17.1cmを測る。体部は直線的に大きく外傾するものが多く、内面にへらなどで調整が施してある。胎土に石英・長石等の砂礫を含み焼成は比較的良好である。

712～739は底部である。712から730の底径は7cmから9cmを測る。体部はゆるやかに内湾し、体部の立ち上がり角30度から70度の類で中でも725・726が大きい。内面に横位のへら磨きが認められる。底部の器厚は全体的に薄い、727だけが比較的に厚い。高台は外開きのもので貼り付け角70度から80度である。胎土に石英・長石を含み焼成は比較的良好である。

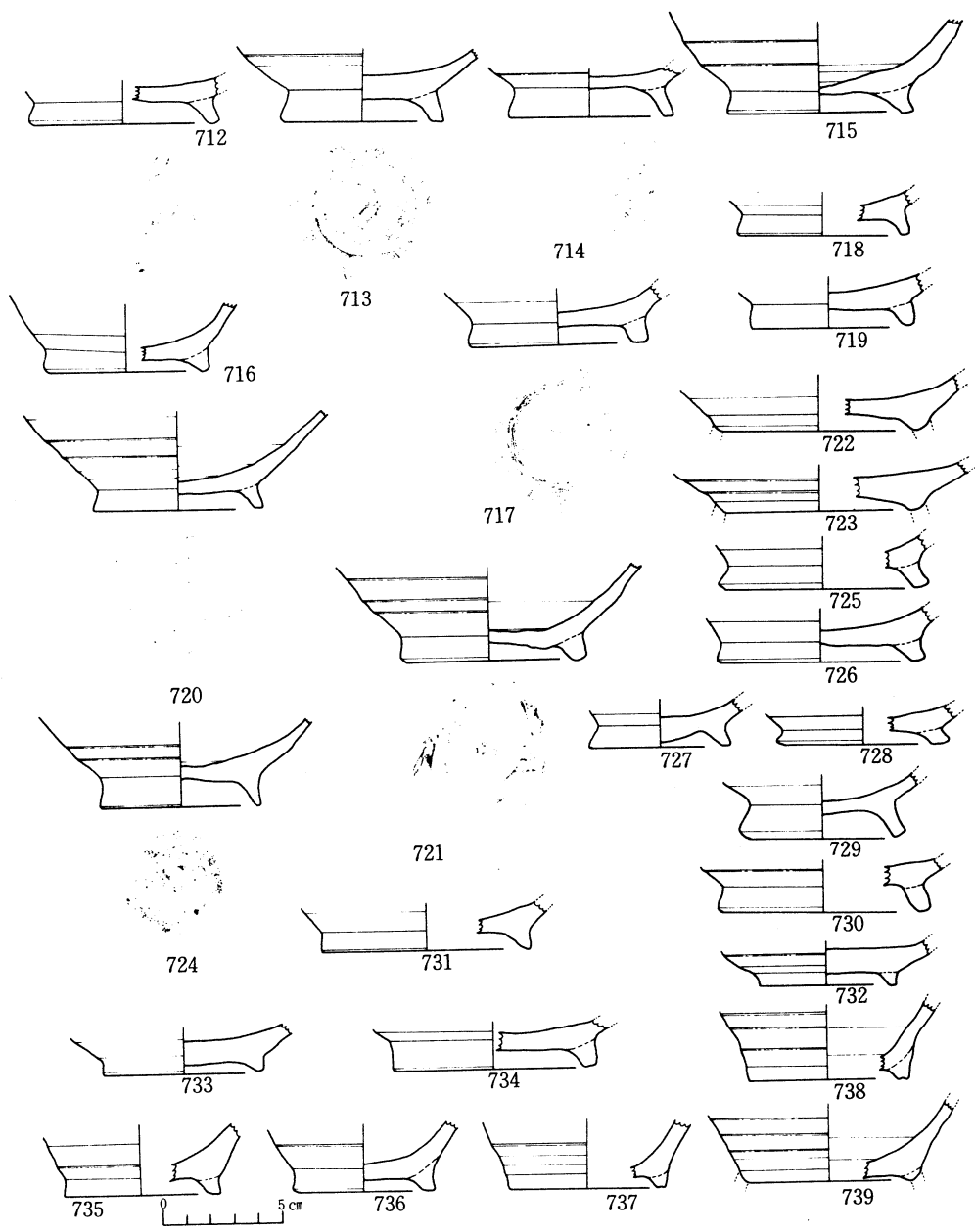
730～734の底径5.7cmから8.5cmを測り、体部の立ち上がりが30度から60度とゆるやかなもので、高台は低く直角に貼り付けしている。胎土・焼成伴に良い。735から739は底径6cmから6.5cmを測り、体部は直線的に60度から70度の角度で立ち上がる。内面は横方向にへら磨きで調整され、高台は735・736を除いて純角(110度)に貼り付けられている。又、737・738は高台の端部に凹線を有している。胎土に砂礫を含み、焼成は比較的良好。

C埴 (711)

711の口縁径17cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部付近で強くくびれる。口縁部の内外面を横方向にへら磨き調整し、口唇部の内外面に明瞭な稜を成す。内面黒色土器で分類したが、口縁部のくびれる付近まで漆黒色を呈する。胎土に石英・長石等の砂礫を含み焼成は良好である。



第80图 黑色土器 (1)



第81图 黑色土器 (2)

③須恵器 (第82図・第83図)

須恵器には坏蓋・坏身・琿・壺・こね鉢・提瓶・かめといった器種がある。

坏蓋 (740) つまみの形態と口縁端部は不明であるが、高さは1cm前後と扁平である。端部付近がやや下がっている。灰色を呈し、軟質に焼けている。F14区表層出土。

坏身 (741) 口縁直径13.2cm、高さ4cm、底径6.2cmを測る口縁端が丸く収まる坏身である。軟質に焼けており、灰色を呈するが、口縁付近は黒褐色を呈する。F12区・F13区のⅡ下層出土。

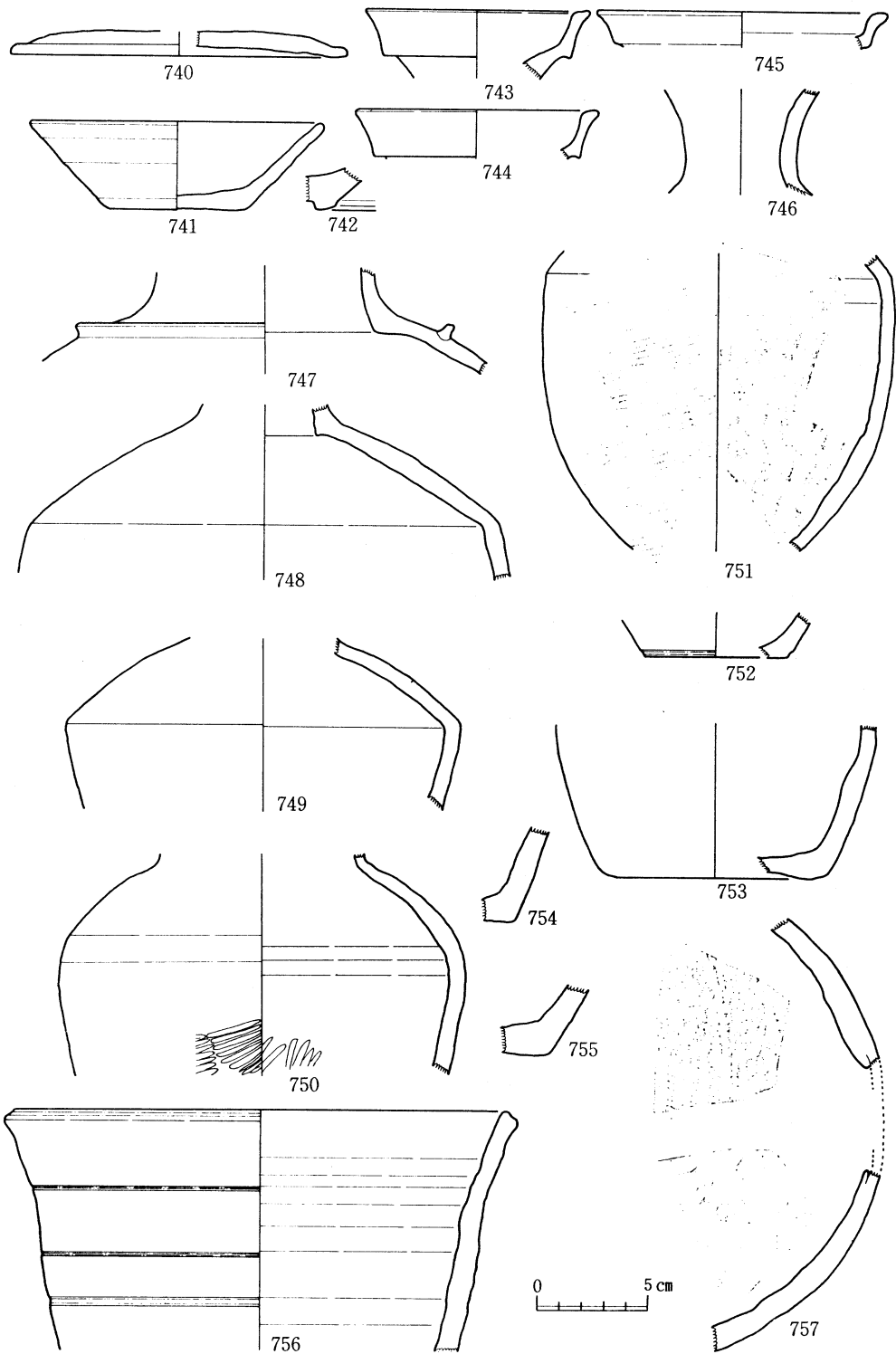
坏 (742) 高台部分で、高台端は外がややあがった断面矩形を呈している。良質土を使い外表面は青みがあった灰色を呈している。焼成は良い。G12区の表層出土。

壺 (743～755) 口縁部は直径が10.2cm～13.1cmを測り、端部付近で直に近く立ち上がる。端部は肥厚するが、丸く収まるものと、やや尖がるものがある。頸部は直径5～6cmほどにくびれる。肩部に最大径があり、ここに稜線が出るものと、丸く収まるものがある。747は広い範囲から出土したものを接合した個体で、肩部に断面台形の貼り付け突帯が付く。頸部内面には稜線が付く。底部はやや細くなるが、安定した平底である。外面調整はへら横なで、櫛状はけなであるいは、条痕たたきであり、内面は横方向へらなで、あるいは同心円文たたきで仕上げる。747の外面は正格子目のたたきを施したあと、へらで横方向になで消す。胎土は砂質の土を用いている。751は外面に緑がかかった釉が付着している。また、747～749の外面、751の内面にはぼろが付着している。747は赤みがかかった茶褐色を呈しているが、他は灰色あるいは白灰色を呈している。743、746・749・754はC13区のⅢa上層あるいは表層から、744はE4区表層から、745はE13区表層から、747はE6・E9・E11・F5・G1・G6区から、748はE6・E15区Ⅱ下層から、750・751はC14区Ⅱ下層から、752はG6区表層から、753はC12区Ⅲa上層から、755はB2区表層から出土している。

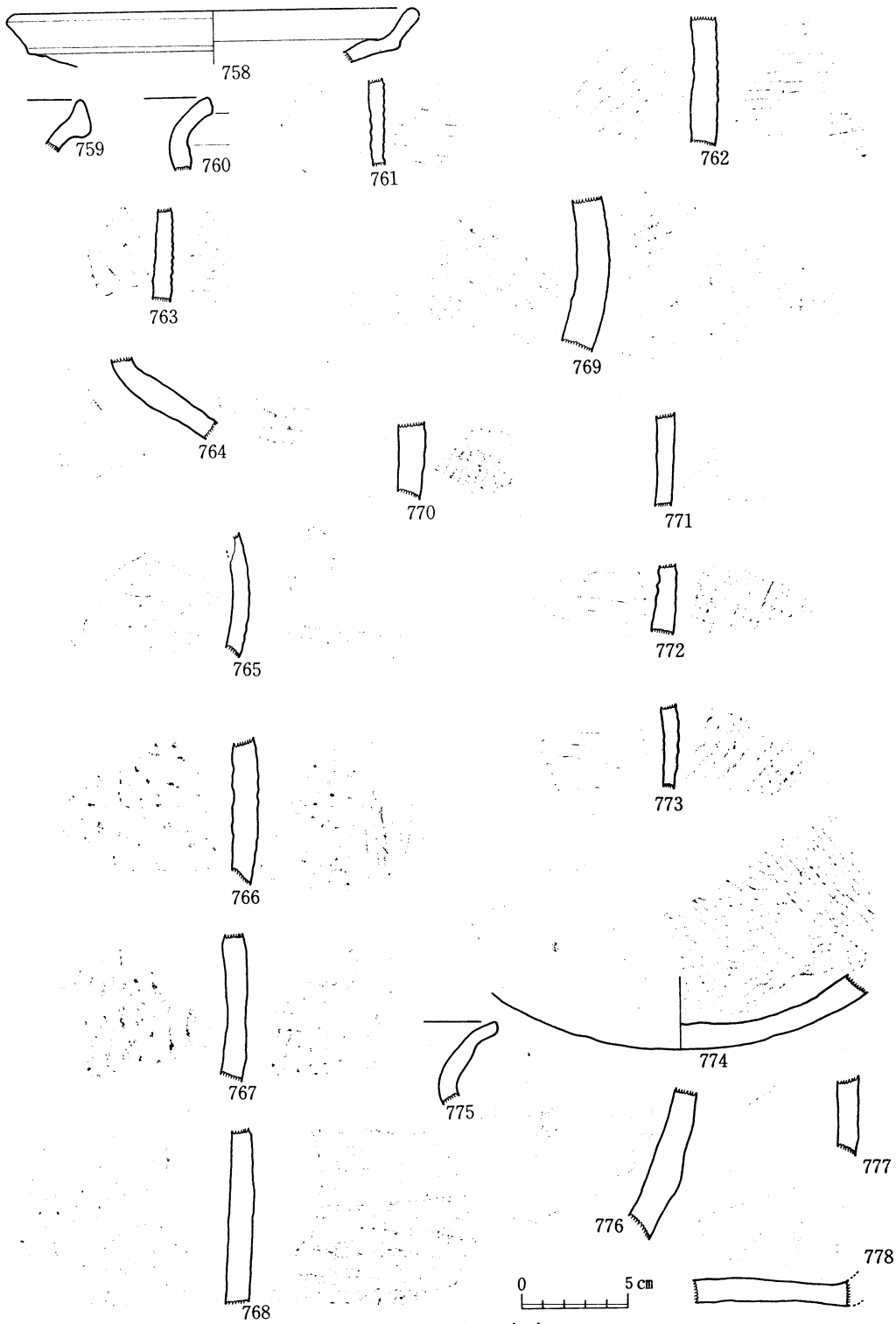
こね鉢 (756) 軟質に焼けているもので、口縁端はややくぼんでいる。底に向かってやや細くなっており、外面・内面ともに凹凸が多くみられる。口縁直径22.3cm。F12区で出土。

提瓶 (757) 調整は外面が長方形の格子文たたき、内面が部分的に同心円文状のたたきを残すが、ほとんどは横方向になでている。鉄分を多く含む胎土を使用しており、外にはぼろが付着している。E4区表層出土。

甕 (758～774) 口縁部は、頸部が細くくびれて端部が外へ開き丸く収めるものと、端部がややふくらむもの、端部が外反して断面が矩形を呈するものがある。胴部のたたきは外面が平行線のもの・正格子のもの・長方形格子のものがある。内面は平行線たたき、同心円文たたき、正格子目たたき、なでがある。底は丸みをおびており、外面が格子たたきのあとへらなで、内面が平行線文たたきで仕上げる。759・767は瓦質に近く、軟質に焼けている。758の内面・外面には自然灰釉が付着し、766は生焼けの状態である。色は黒灰色・灰色・灰褐色を呈すが、774は茶褐色を呈している。C11・C12・C13・D2・D9・E1・E4・E6・E15・F5・F7・F13・F14・H5・G7区の表層あるいはⅡ下層で出土している。



第82図 須恵器 (1)



第83図 須惠器 (2)

④瓦質土器 (第83図)

775 は 甕 の口縁部である。外へ強く反っており、薄いつくりである。内外ともはけの横などで仕上げる。黒灰色を呈し、焼成は良く須恵質を呈す。G 5 区の表層出土。776～778は焼成が良く須恵質に焼けているすり鉢である。胴部には凹凸がみられ、内面に6～7条のかき目がみられるが、使用により相当磨滅している。砂質土を用いて、灰褐色を呈している。いずれも表層からの出土で、776がF 7区、777がE10区、778がE 1区から出土している。

⑤磁器 (第84図～第88図)

白磁・青磁・染付(青花)・青白磁がある。

白磁 (779～838) 形態等から10種類に分けた。器種には碗・皿・獣脚・合子蓋がある。

I 類 (779～792) 玉縁状の口縁で、高台に釉のかからない碗である。口縁は玉縁部分がやや不明瞭なもの(779～781)、玉縁部分が大きくて明瞭なもの(782～787)がある。口縁直径は13.8cm～15.9cmと大型である。内面の底部付近には1条の凹線が巡っているが、788はすれ違った凹線になっている。高台は浅いもの(788・790)と高いもの(789)がある。高台端の断面形は矩形である。791は口縁直径9.7cm、高さ2.7cm、高台直径4.8cmを測る浅い碗で、口縁端は丸く収まる。高台端は内面・外面ともに段をもち、外面の胴部より下には釉がかからない。内面には鉄分が付着している。792はごく浅い高台をもっており、深い形態の碗である。底部から高台へ移る所に段をもち、高台内面に釉はかからない。これらの白磁には黄みをおびた灰白色の釉がかかっており、781・786・789・792には貫入が、782・783・787には気包がある。

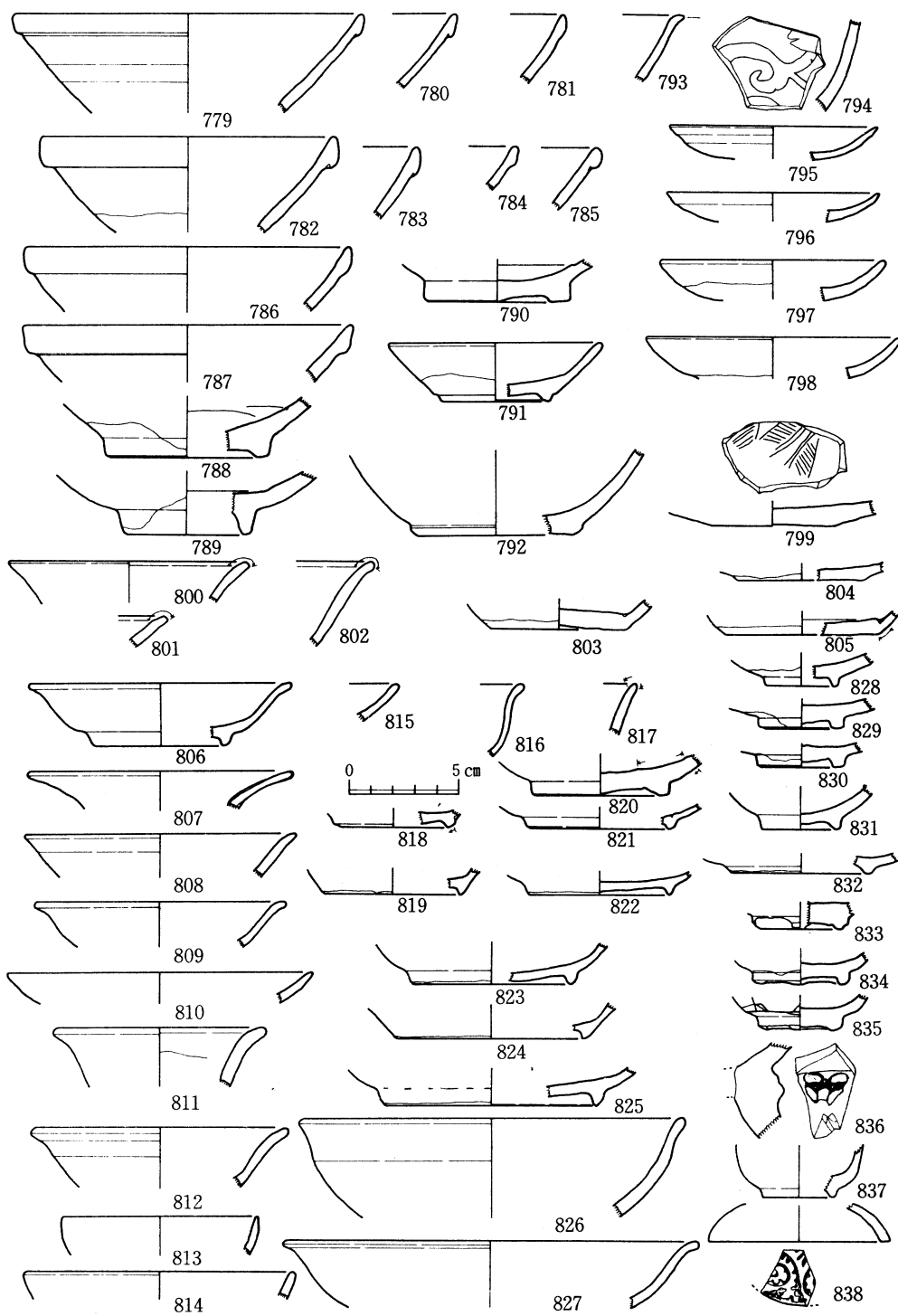
II 類 (793) 口縁部が強く外反し、端部が平らになる碗で、端部がやや黄みをおびている。

III 類 (794) 内面に端部が丸みをもつ竜らしきものの型押がみられる碗で、青みがかった釉がかかっている。枢府窯タイプである。

IV 類 (795～799) 端部が丸みをもっておわる皿で、口縁直径9.4cm～11.5cm、深さ0.8cm～1.4cmを測る。外面の底部には釉がかからない。799の内底にはするどい刃物でかかれた直線文様がかかっている。

V 類 (800～805・812・817) 口縁端部の断面形が矩形を呈し、安定した底部をもつ皿で、俗に口はげ皿と呼ばれる。内面の底部と体部の境に凹線がみられる。青っぽい緑色を呈す釉がかかっているが、口縁端と胴部下半にはかからず、底面は茶がかった黄褐色を呈す。

VI 類 (806～832) 口縁部がくの字状に外反する皿(806～810・815・818～825・828～830・832)と碗(811・813・814・816・826・827・831)である。皿には浅い高台が付くが、床付部分のみに釉がかからないもの(819・821～825・831)と、高台内面にも釉のかからないもの(818・820・828～830・832)とがある。坏部と高台部分の境に釉切れのみられるものが多い。820は重ね焼きの痕跡を残している。碗には811・813・831のような口縁直径10cm以下の小碗と、826・827のように口縁直径17以上の大碗がある。813は端部が細くなっておわる。811は釉が厚く、内面の体部下半には釉がかからない。



第84图 白 磁

Ⅶ類（833～835） 高台にえぐりのある腕である。835は体部を残している個体であるが、体部が8稜、高台部分が4稜となる。834・835は体部下半以下に釉がかからないが、833は床付部分のみに釉がかからない。黄みをおびた白色土に白色釉がかかっているが、833・834は貫入が多くみられる。

Ⅷ類（836） 獣脚である。貫入の多い緑がかった釉がかかる。

Ⅸ類（837） 高台の付く茶碗状の小腕である。黄っぽい白色土に白色釉がかかっているが、床付部にはかからない。内側にベンガラあるいは朱が付着している。

X類（838） 口縁直径8cmの合子蓋で、端部は断面形が矩形を呈す。上面には波状の文様がみられる。

青磁（839～906） 釉の色・器形あるいは産地等から14種類に分けた。

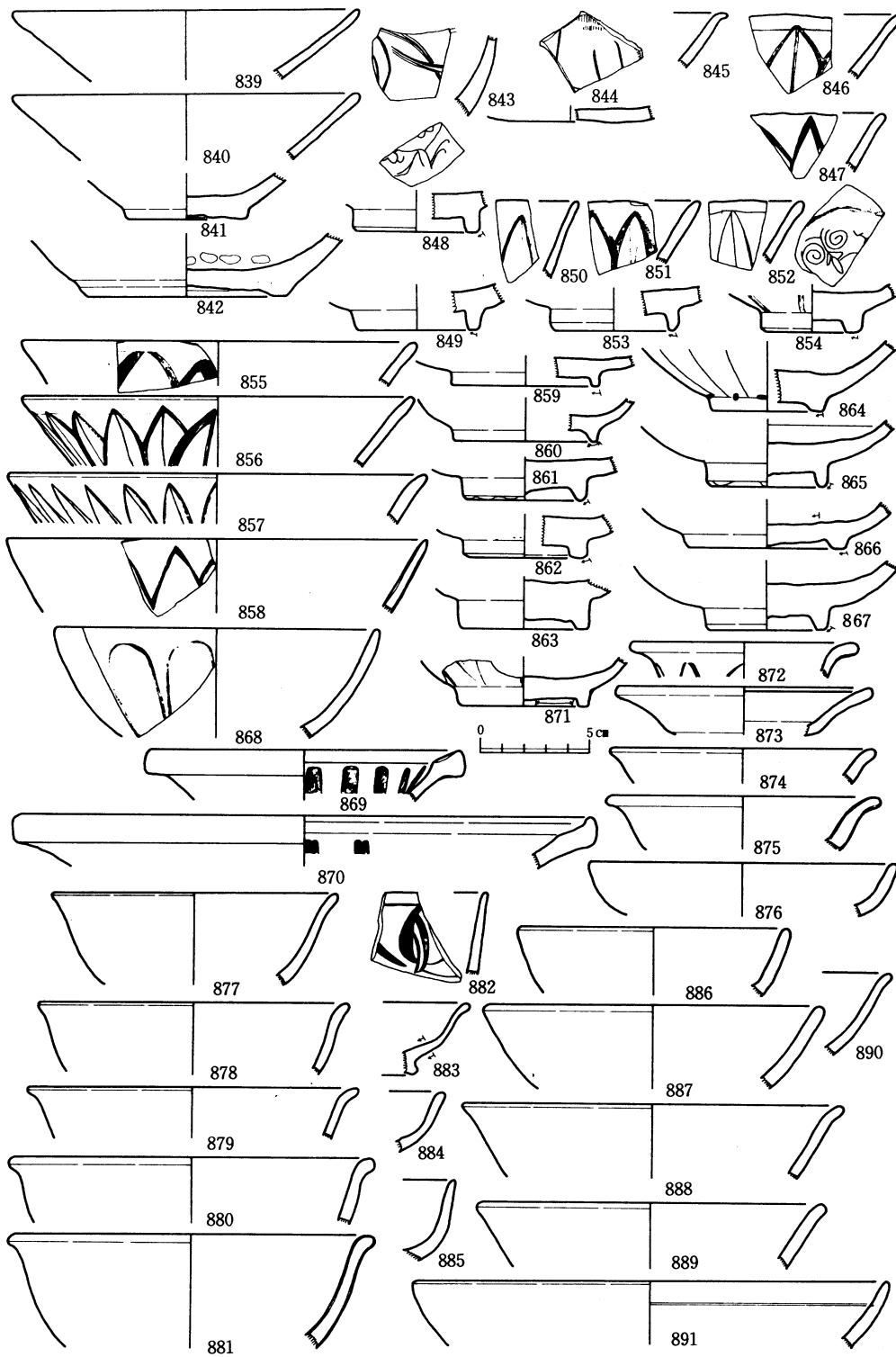
I類（839～842） 灰色の砂質土に緑黄色の釉が器面全体にかかった碗で、越州窯系の青磁である。口縁直径15.8cmと大型で、端部は丸みをもっておわる。高台は蛇の目高台のものと低い輪状高台のものがある。輪状高台のものも中央部は蛇の目状を呈する。841は高台の端に、842は高台と内底に斑点状の目痕がみられる。

II類（843・844） 内面に劃花文あるいは櫛描き文のあるもので、同安窯系の青磁である。843は灰褐色土に貫入の多い淡緑色の釉がかかった碗である。844は灰色土に貫入の多い淡緑色の釉がかかった皿で、底部には釉がかからない。内底にはヘラによる片彫りと、櫛による放射状文がみられる。

III類（845） 口縁部が外反し、端部が平らになる坏で、灰白色土に緑黄色の釉がかかる。

IV類（846～867） 低い高台が付き、外面体部に蓮弁の文様を有するものである。蓮弁文様はヘラで片彫りにかけられ、先端は鋭いが、鎊のあるもの（846・850～852・856・857）とないもの（847・855・858）とがある。口縁端はほとんどがまっすぐのびるが、やや外反するものもあり、端部は丸みをもっておわる。866は内面の体部下半に1本の横線がある。高台は断面台形を呈し、多くは部厚いが、やや細いものもある。高台外面に屈曲をもつもの（848・853・861・862・865・867）や、高台内面をヘラで切るもの（863・865）もある。内底見込みに花文様をスタンプしたもの（848・854・865）があり、848・854は繊細な絵である。高台の床付および内面には釉がかからないが、860は床付き部分のみに釉がかからない。また866は内底部の釉をかきとり、底部の厚さを体部と同じように整えている。概して、底部の厚さは厚い。灰色あるいは灰白色・白灰色の土に、灰緑色・淡緑色・青緑色・緑黄色の釉がかかる。848・859・863・866の釉には貫入がみられ、867の釉には気包がみられる。また864の外面体部と底部の境には釉切れがみられる。

V類（868・871） 無鎊蓮花文腕である。蓮花文の先端は丸みをもっている。高台内部の一部を除いて厚い釉がかかっている。内底には花文様のスタンプが押される。灰色の土に淡い緑色釉あるいは暗い緑色釉がかかる。



第85图 青磁(1)

VI 類 (869・870) 口縁端が部厚くなっておわる盤である。869は口縁直径14cmと小型で、端部付近で強く外に屈曲する。内面に蓮弁様文がみられる。白灰色の土に緑色釉がかかる。870は口縁直径26cmと大型で、口縁端は、断面矩形であるが、内部は2ヶ所で屈曲する。内面には2個1組の蓮弁様文がみられる。白灰色の土に青緑色の釉がかかる。

VII 類(872～875・883・884) 口縁部がくの字状に外反する皿で、872は外面に蓮花文が、873は内面の口縁近くに2条の凹線がみられる。灰白色の土に貫入のある緑色釉がかかる。

VIII 類(876・882・885～887・891) 口縁部がまっすぐのび、端部が丸く収まる皿・碗である。882は内面に劃花文がある。891は口縁直径21.7cmと大型で、内面に横線がある。灰色土・白灰色土・灰白色土に灰緑色・緑黄色の釉がかかっている。

IX 類(877～881・888～890) 端反り碗である。灰色土に青緑色・緑黄色・灰緑色・暗緑色の釉がかかっているが、多くに貫入・気包がみられる。

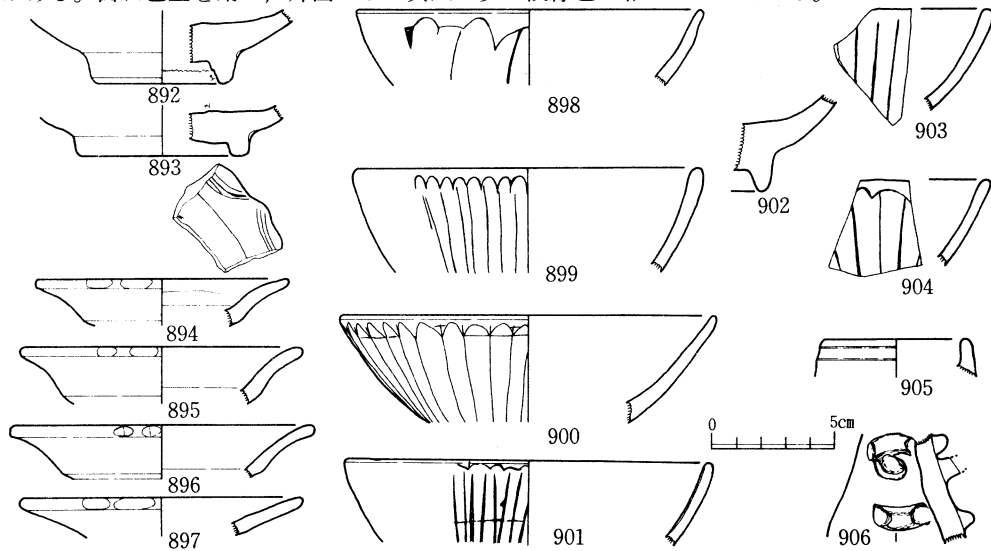
X 類(892・893) 底の厚い底部である。892は高台内面に、893は内底部に釉がかからない。灰白色土に貫入の多い暗緑色・青緑色釉がかかっている。

XI 類(894～897) 口縁部がくの字状に外反する稜花皿で、894は内面に櫛描き文がある。灰色土に貫入の多い青緑色釉がかかる。897は内外にボロが付着し、釉切れもみられる。

XII 類(898～904) 細蓮弁文碗である。波状文と縦線で蓮花文を表現するが、900は波状文と縦線が正確にされているのに対し、899は少しずれており、898・901・904は相当ずれている。903は波状文がない。902は内面にも線描き文がある。灰白色土・灰色土に緑色・灰緑色・青緑色の釉がかかるが、高台内面には釉がかからない。貫入のあるものもある。

XIII 類(905) 口縁がまっすぐのび、端部が丸く収まる壺で、口縁に浅い凹線がみられる。

XIV 類(906) 狭くなって、まっすぐ口縁部へむかう不遊環瓶の頸部で、耳の剥脱した痕がある。白灰色土を用い、外面のみに貫入の多い淡緑色の釉がかかっている。



第86図 青磁(2)

797	E 9	2 下	816	6	1	835	F12	1	853	不明	872	E 1	1	891	F13	2				
779	F 9 他	2	798	C10	2 上	817	G 6	〃	836	G 6	〃	854	G 7	1	873	F11	〃	892	F11	3 a
780	F 8	1	799	F10	1	818	F 8	〃	837	不明	855	F12	2 下	874	E12	2 下	893	G11	1	
781	H 5	〃	800	H 5	〃	819	F12	〃	838	F18	1	856	〃	2	875	F17	1	894	E16	〃
782	B 2	〃	801	F19	〃	820	〃	〃	839	不明	857	F13	1	876	F13	〃	895	E13	〃	
783	E 4	〃	802	F12	2	821	F13	〃	840	〃	858	E 6	〃	877	〃	〃	896	D11	2 下	
784	F16	〃	803	C14	1 F	822	F15	〃	841	E 6	1	859	F 3	〃	878	F12	〃	897	F13	1
785	H 5	〃	804	F 7	1	823	E19	〃	842	C18	〃	860	C 8	〃	879	E10	〃	898	〃	2 下
786	古道	〃	805	G 6	〃	824	E 5	〃	843	E12	2	861	F15	〃	880	E 8	〃	899	E17	1
787	C11	1	806	E 1	〃	825	F12	〃	844	F 5	1	862	C12	〃	881	E12	2	900	F12	〃
788	不明	〃	807	F12	2	826	F13他	2	欠	欠	863	B 2	〃	882	堀	1	901	E13	〃	
789	〃	〃	808	E	1	827	E14	1	845	E 9	1	864	〃	〃	883	E 7	1	902	堀	1
790	〃	〃	809	E 6	〃	828	古道	〃	846	F16	3 a	865	C 6	2 下	884	E 3	〃	903	G 9	1
791	F13	1	810	〃	〃	829	G 9	1	847	E12	1	866	E12	〃	885	C10	〃	904	F12	2
792	G 5	〃	811	G11+12	〃	830	C11	〃	848	E13	2	867	H 8	1	886	F11	〃	905	F17	1
793	F15	〃	812	E12	2	831	E14+15	〃	849	E17	1	868	G 7	〃	887	G12	〃	906	F12	2 下
794	F10	〃	813	C12	〃	832	F 9	〃	850	F12	2	869	E19	〃	888	E13	2			
795	E12	2	814	E10	〃	833	F17	〃	851	G 9	1	870	不明	〃	889	B 6	1			
796	F11	1	815	F 9	1	834	〃	〃	852	F 5	〃	871	E 1	1	890	E10	〃			

第22表 白磁・青磁出土地一覧表

染付（907～925） 中世から現代にかけての染付が多量に出土しているが、ここでは中世のもののみを扱う。これらは俗に嘉靖様式と呼ばれる大陸産染付で、器形には皿と碗がある。

皿（907～914）は、口縁直径が9.6cm～11.5cmで、深さが2.2cm位ある。口縁端はやや内反して丸く収まるものと、端部が強く外反するものがある。底部は低い高台をもつものもあるが、碁筈底のものが多い。高台のつくものは、床付き部分のみに釉がかからない。碁筈底のものは床付き部分のみにかからないもの（909）と床付き部分より内側には全くかからないものがあり、908の底にはわら等の敷物痕跡がみられる。907は外面に上から横線・三角文・鋸歯文・横線・芭蕉文が、内面に花文と2本の横線が描かれる。908の内面は圏線に囲まれた花文がある。909は外面に芭蕉文と2本の横線が、内面に3本の圏線に囲まれた花文がある。910は外面に横帯と不明文、内面に2本の圏線と草花文がある。911は外面に唐草文が、912は内面に圏線に囲まれた不明文がある。913・914は外面に横線、内面に1条の圏線に囲まれた不明文様がある。

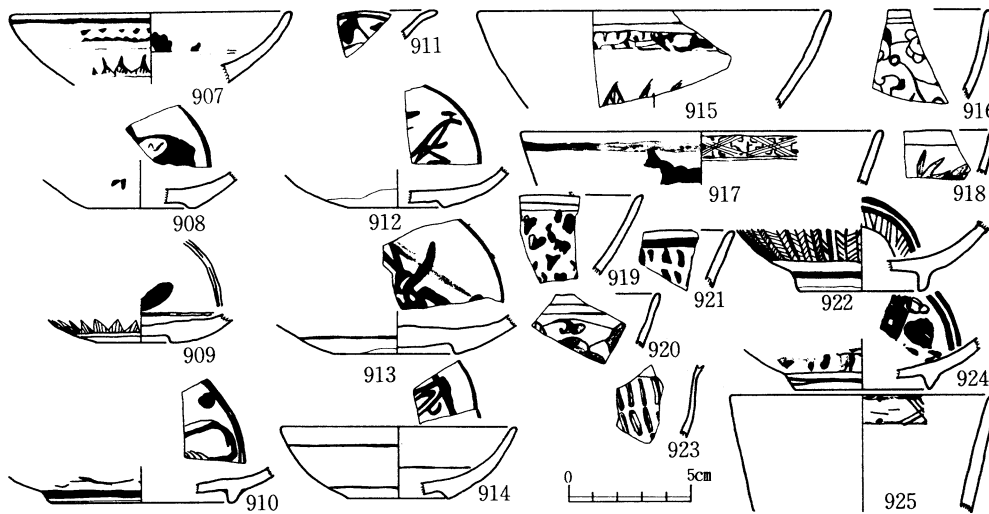
碗（915～925）は口縁直径が15cm近くある。925は口縁直径10.8cmと小さく、底部から口縁へ向かってまっすぐ立ち上がる。多くは外へ開きながらまっすぐのびるが、923は口縁付近でくの字状に外反する。高台は床付き部分のみに釉がかからない。915は外面に上から横線・

雲文・唐草文・芭蕉文がかかれ、内面は無文である。916・920は外面に横線と唐草文、内面に横線が、917は外面に横帯と不明文様、内面の口縁付近に横線に挟まれた斐垣文がある。918は外面に横線と楓文、内面に横線がある。919・921は外面に2本の横線と三角形の連続文、内面に横線がある。922は外面に綾杉文と横帯、内面に3本の圈線に囲まれた縦線がある。923は外面に方形の連続文がある。924は外面に不明文様と3本の横線、内面に2本の圈線に囲まれた花文がある。925は外面が無文で、内面の口縁近くに横線に囲まれた斐垣文がある。

これらは灰白色あるいは白色の土を用いているが、907は淡茶褐色の土を用いている。

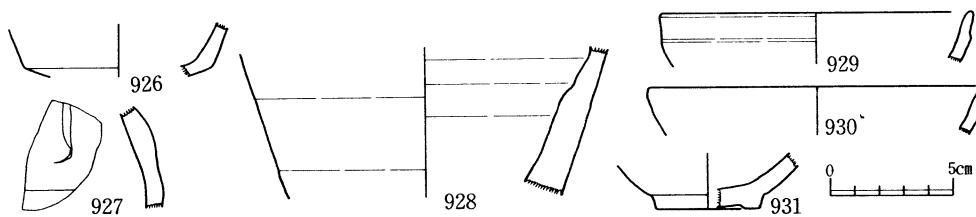
図番	区	層	909	F 7	1	912	G11-12	1	915	E18	1	918	G 6	1	921	F13	1	924	G 7	1
907	E11-12	1	910	G 8	〃	913	F17	〃	916	G 7	〃	919	G 7	〃	922	E14	〃	925	古道	
908	C 11	2 F	911	E 5	〃	914	G11	〃	917	E 3	〃	920	E 2	〃	923	E 5	〃			

第23表 染付の出土地一覧表



第87図 染付

青白磁（926～928） 926は碗の体部で、底部との境に段をもつ。貫入がある。H 7区出土。927・928は四耳壺で、927が肩部、928が底部近くの破片である。肩部近くには把手の痕跡があり、底部近くは部厚い。927がF10区、928がG12区のいずれも表層から出土。



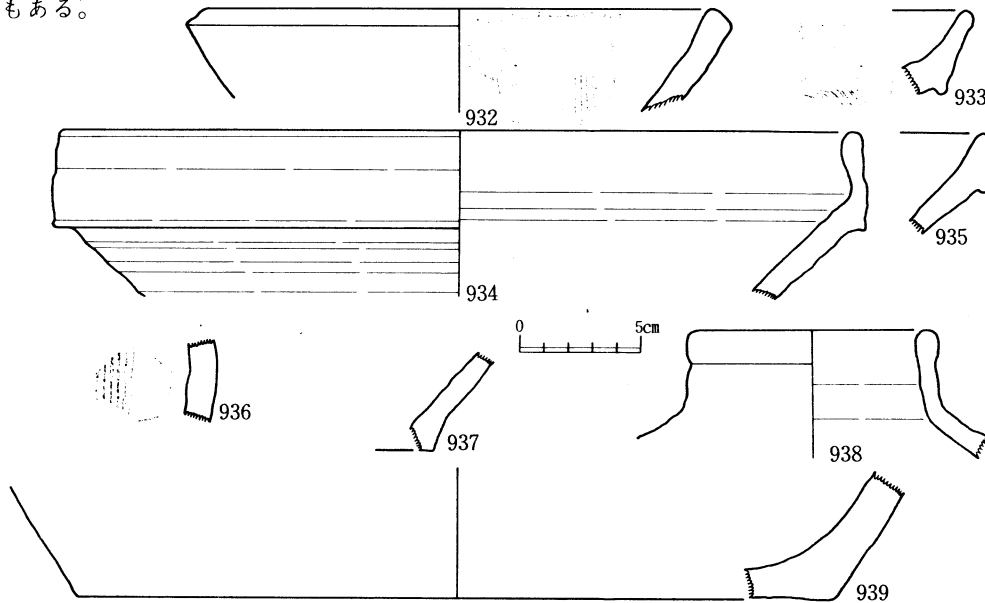
第88図 青白磁・天目

⑤陶器 (第89図)

陶器には天目茶碗と備前焼とがある。

天目 (929～931) 碗の口縁部が2点、底部が1点出土している。929は口縁直径12.6cmを測り、端部付近でやや薄くしている。端部は丸い。E-14区の表層出土。930は口縁直径13.6cmを測り、口縁へ向かって開きながら、まっすぐのびており、端部は丸く収まる。F7区の表層出土。929・930とも体部は光沢のある黒色を呈しているが、口縁部付近はやや黄みをおびた茶色の釉がかかっている。931は低い台形状の高台を有し、外面の体部と高台部分との境には段を有する。外面は露胎で、内面のみに光沢のある茶色っぽい黒色釉がかかっている。F-17区の表層出土。これらの胎土は、いずれも細砂質のものを用い、灰白色を呈する。

備前焼 (932～939) すり鉢・壺・かめの器種がある。932は口縁端部の断面が矩形を呈するすり鉢で、幅の広いかき目が下から上へ施される。これのみ色調が違っており、灰褐色を呈しているが、外面はやや紫がかかった茶褐色を呈する。F-17区表層出土。933～935は、口縁端が上下に拡張するすり鉢であるが、その幅は933が2.4cmと狭く、934は4.0cmと広い。6条ほどのかき目が施されている。934は他の備前焼と胎土が違っており、致密なものを使っている。933がE-12区の2層、934がE-7区の表層、935がB2区の表層出土。936はすり鉢の体部、937は安定したすり鉢の底部である。936が掘2、937がG-9区の表層出土。938は肩部から口縁へ向かってゆるやかに内反し、口縁部が玉縁状を呈する壺で、内面・外面とも凹凸が目立つ。E-7区の2層出土。939はかめの底で、直径31cmと大きい平底である。外面は短かくはけなで、内面はへらなでである。E-1区の表層出土。これらは小礫の多い砂質土を用い、焼成度は良好である。色調は赤みをおびた茶褐色を呈し、外面にごまのかかったものもある。



第89図 陶器

⑦ 土製品 (第90図)

土玉 (940) 直径約2cmの球形をしたもので、表面は凹凸が目立つ。石英の多い微砂質の土を用い、軟質に焼けている。灰黒色を呈する。G6区1層出土。

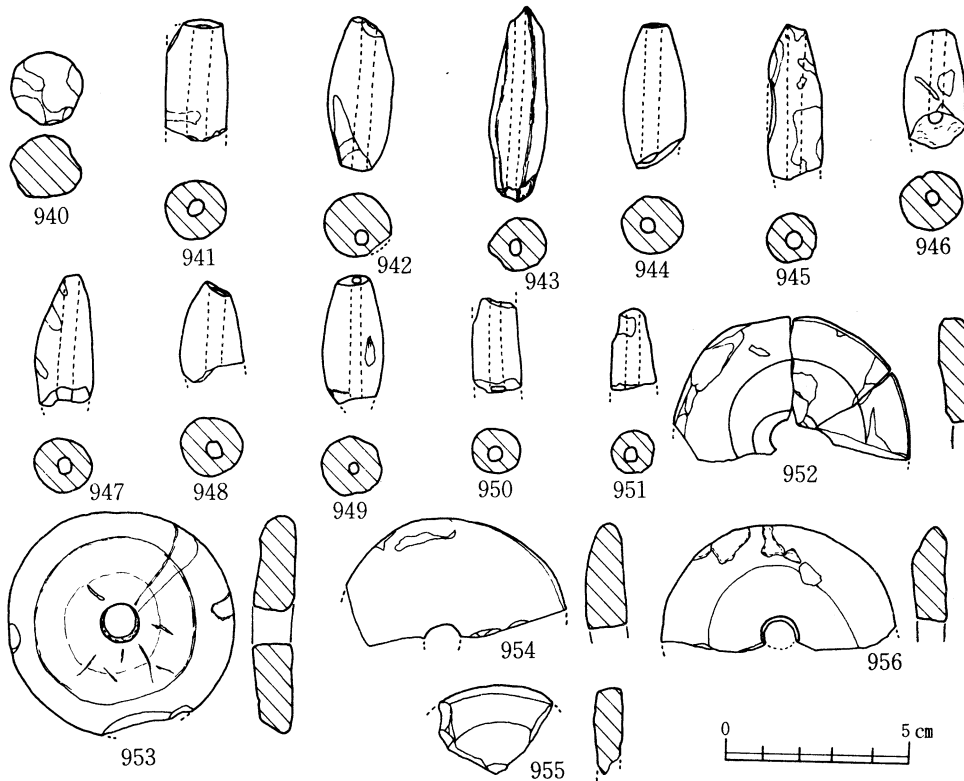
土錘 (941～951) 土師質に焼けた土錘で、951は軟質であるが、他は焼成度良好である。紡錘形をしており、端部を直に切ったもの(941)もある。完形品は942・943のみである。

図番	区	層	色	長さ	直径	重さ	944	F11	2	淡茶褐	3.9	1.7	10.25	948	C12	3a上	淡茶褐	2.7	1.7	5.30
941	E4	1	淡茶褐	3.3	1.7	8.95	945	F12	〃	〃	4.3	1.4	8.20	949	F8	2下	〃	3.5	〃	8.95
942	堀	〃	〃	4.2	1.8	10.85	946	E7	〃	茶褐	3.2	1.7	7.85	950	F13	2	〃	2.6	1.6	3.70
943	C14	3a	乳灰	5.3	1.6	8.80	947	C14	3a	淡茶褐	3.6	1.6	6.55	951	〃	2下	茶灰	2.2	1.2	1.90

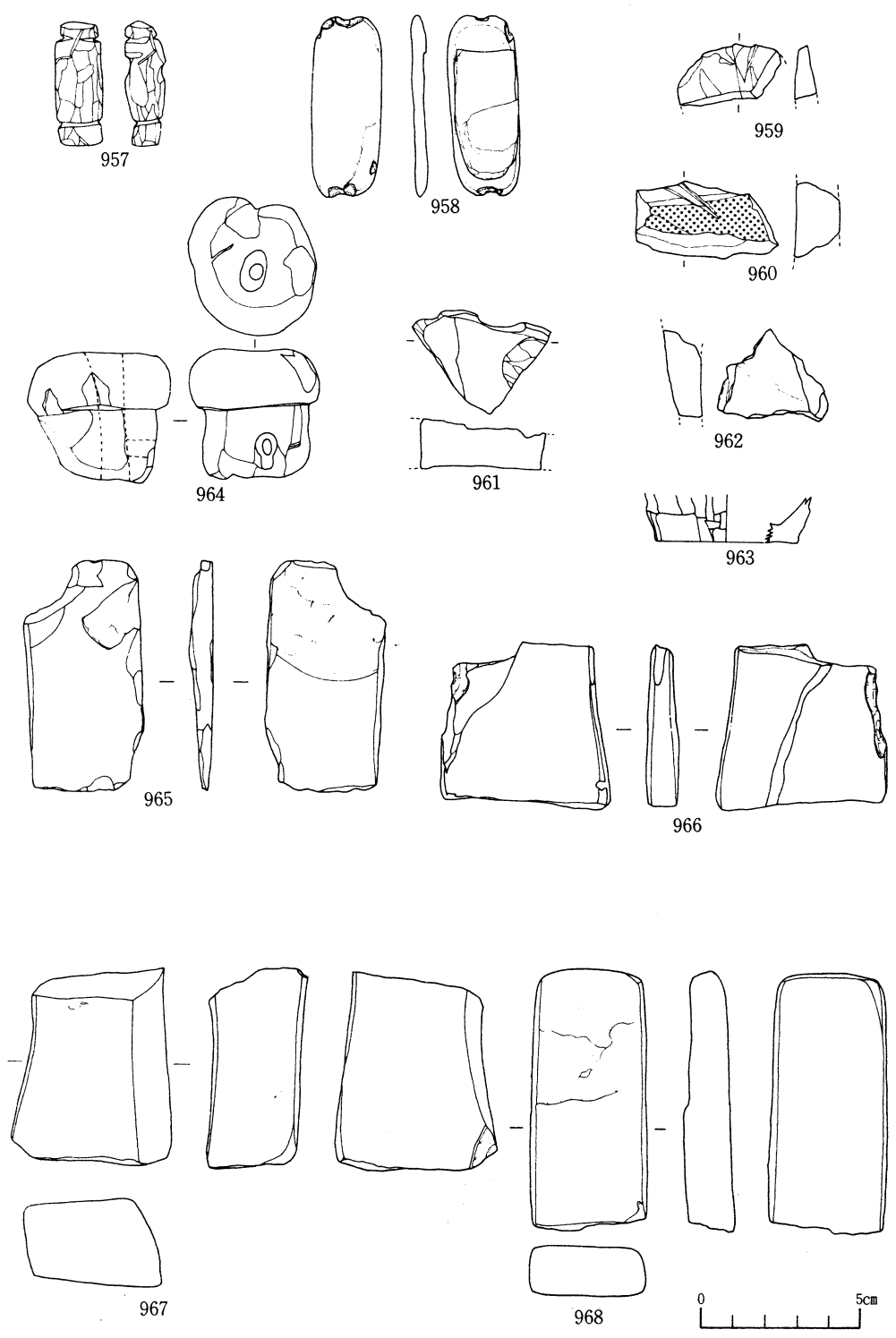
第24表 土錘一覧表

単位：cm・g

有孔円板 (952～956) 土師質に焼けたもの5点が出土している。いずれも精製した胎土を用いており、焼成はふつうである。953は両面の内側がややくぼんで特別につくっているようであるが、他は坏あるいは碗の底部を2次加工しており、956は内黒土師器の碗である。両面および周辺ともていねいに磨いており、元の調整等は不明である。952がD3・E3・E4区の2層、953・954がC12区の1層、955がC11区の土坑、956がE3区の2下層で出土し



第90図 土製品



第91圖 石製品

ている。

ふいご口 堀2とC-12区1層より各1個出ている。堀から出たものは外面にスラッグが大量に付着しており、小礫を多く含む土を用いている。C-12区のもは黒色を呈し胎土中にわらのような繊維痕を多く残している。

⑧ 石製品 (第91図)

石錘 (957・958) 957は長さ3.9cm、幅1.5cmの方柱状を呈し、長軸の両端付近に一周するくり込みがある。滑石製でF-12区の2層より出土している。958は扁平な円礫の長軸端にくり込みのあるものである。一面には剥脱痕が残っている。粘板岩製でE-12区1層より出土。

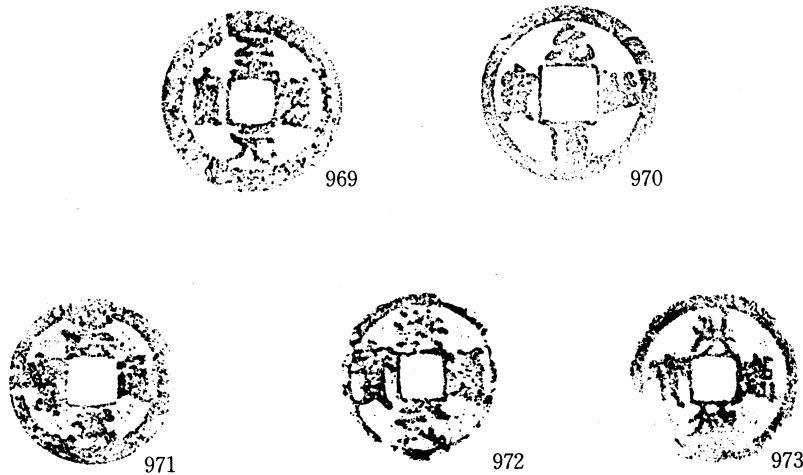
鍋 (959～962) 滑石製の鍋が7点ある。いずれも破片であるが、961は底部であり、図化できなかったが穿孔のあるものもある。960の外面にはススが付着している。959がF-12区2層、960がE-12区2層、961がE-3区2層下部、962がE-1区1層の出土で、他にE-10区とF-13区の2層より3点が出土している。

小壺 (963) 底径4.4cmを測る壺である。滑石製。F-8区の1層出土。

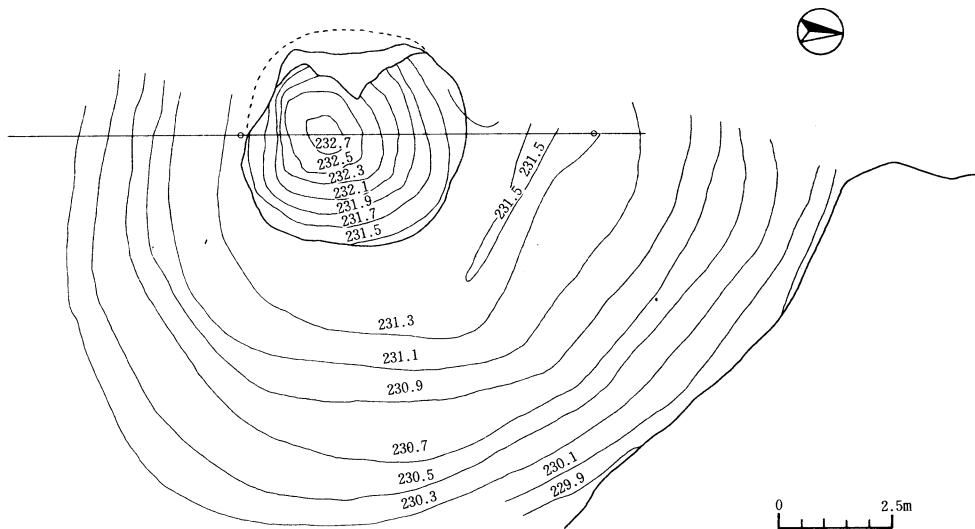
蓋状石製品 (964) 滑石製で、縦方向に両方から穿った孔があり、この孔に直交してひとつの孔がある。つまみ部は角がとれているが、挿入部は断面が方形を呈している。つまみ部には斜方向に削った痕跡もみられる。E-3区の2層下部出土。

⑨ 古銭 (第92図)

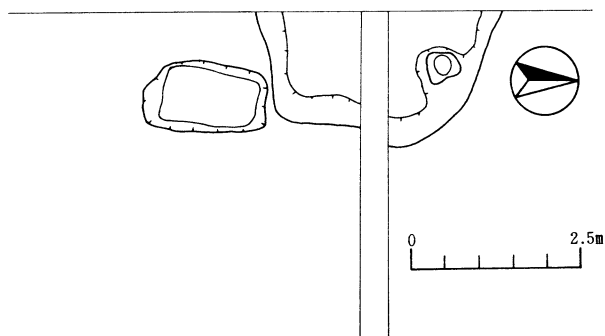
4種5枚が出土している。それぞれの初鑄年は至直元宝が995年、元祐通宝が1086年、洪武通宝が1368年、洪徳通宝が1470年である。



第92図 古銭



第93図 塚状遺構コンタ図

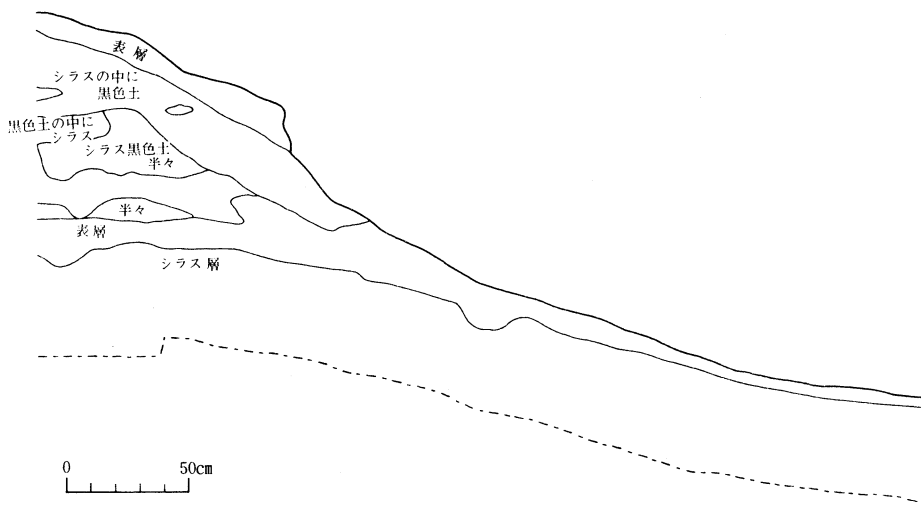
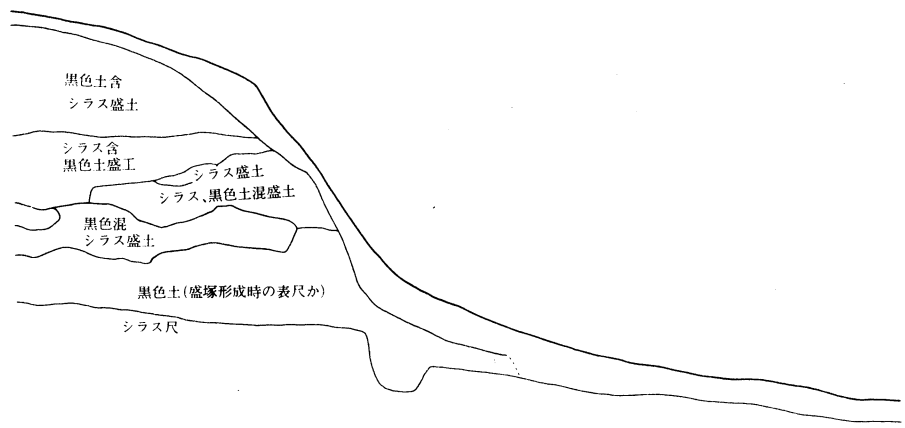
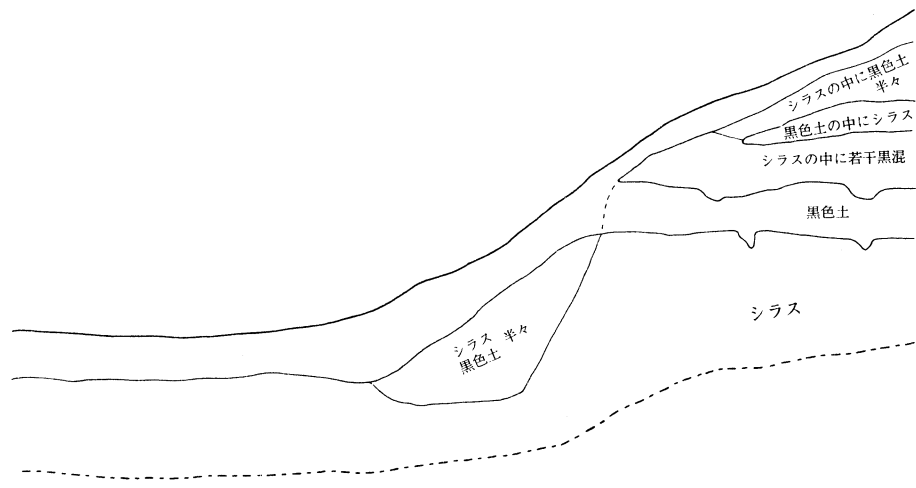


第94図 遺構図

塚状遺構（第93～94図）

また、遺跡の西側にある岡の上に第93図の様な塚があり、調査をおこなったが、塚はシラスと黒色土表層の土層を積みあげたものであり、塚の内部、下部にも遺構と思われるものは何ひとつ発見されなかった。この塚は周辺の岡の上にもみられ、頂度

項夾にあること等から郷境等とも考えられるが、いまのところはっきりとしたことは述べられない。



第6章 まとめ

発掘調査の結果、山崎B遺跡は縄文時代早・前期と中世を中心とした長い期間にわたる複合遺跡であることが判明した。時代ごとに若干まとめておきたい。

旧石器時代

砂礫層からの出土であり、細石刃・細石刃核・その他剥片等が出土している。ローリングされ磨滅したものが多い。川内川流域には、麦生田遺跡・木場A遺跡・木場A-II遺跡等多くの旧石器を包含する遺跡があり、川内川の氾濫によって移動してきたものと思われる。黒曜石原石も一か所でなく何種類かの原石があり、広易範囲を調べるうえで貴重なものとなった。

縄文時代

遺構として集石・土壇が検出された。主に第Ma層、第Mb層にみられる。挙大の礫を集めたもので17基検出した。礫の周辺に炭化物等の直接火をうけた形跡はみられないが、赤化した礫の存在から炉としての性格も考えられ、今後検討されなければならないものである。周辺での類例として山崎A遺跡^①、花ノ木遺跡^②、木場C遺跡^③等にも見られ、花ノ木遺跡では平椀式土器・塞ノ神式土器に伴うとされ、当遺跡でも吉田式・前平式・塞ノ神式土器と共伴することから、縄文時代早期～前期に属すると考えられる。土壇は第VI層面にて明確な輪郭を確認できた。第Va層の時期のものともみられる。E～G-12～15区にかけて6基点在している。吉田式土器片や黒曜石剥片等を含むが意味は不明である。

遺物は、土器・石器とも多量に出土した。平椀式・塞ノ神式土器は縄文時代前期に想定されるが、加治屋園遺跡の塞ノ神式土器が検出されるVa層の放射性炭素年代によって7550±130Y.B.P. (7330±125Y.B.P.)^④という結果が測定されており、年代より縄文時代早期に位置づけられるという考えもある。

古代～中世

近年、本県では土器編年の細分化が盛んに行われており、古墳時代以前については除々に固まりつつある。ところが、奈良時代以降の土器編年は全くといっていいほど出来ておらず、この小節の見出しを古代～中世としたのもこうした理由による。

ところで、九州縦貫自動車道は栗野平野の東側台地を貫くように走っているが、栗野周辺では山崎A～C遺跡、木場A～C遺跡の6遺跡が路線内に存在し、これらの遺跡ではそれぞれに古代から中世までの遺物が出土している。この中には多量の中国製磁器も含まれており、重要なものもある。したがって、これらの遺跡は相互関係をみていかねば全体像はつかみきれないし、とりわけ山崎A～C遺跡と木場C遺跡は連続する台地上にあり、一連の遺跡群ともいえる。そこでここでは、これらの遺跡をも含めて、古代から中世について若干のまとめを行ないたい。

古代～中世とした遺物の中でも、周辺地域などの研究からみて奈良・平安時代のものであるものに土師器・黒色土器・須恵器・磁器・石鍋などがある。土師器には開きながらまっすぐ口縁へのびるヘラ切離しの杯・皿・碗やかめがある。黒色土器のほとんどは内黒土師器の塊

・坏・皿であるが、当遺跡では内外面とも研磨したのものもある。須恵器はほとんどが9世紀のもので、その産地は熊本県北部が予想される。磁器では越州窯系青磁がこの時期にあたる。本県で、この種の青磁を出土した遺跡は、他に5遺跡があるのみである。この5遺跡はいずれも墨書土器などを出しており、国府・国分寺あるいは郡衛などの官衛が予想される所である。石鍋の中には2次加工をし、フタあるいは錘として用いているものもあり、これらは時代が降るかもしれない。この時期の遺構は7棟の建物がある。しかし、中世の堀等で壊されている可能性があり、その全容は不明である。また、土人形等の出土した土壇は、従来本県では蔵骨器等に共伴するものしか知られていなかった土人形が、こうした遺構からも出土するという新しい事例を示してくれた。この祭壇遺構のもつ意味は、当遺跡群の性格とも関連して考えねばならない。

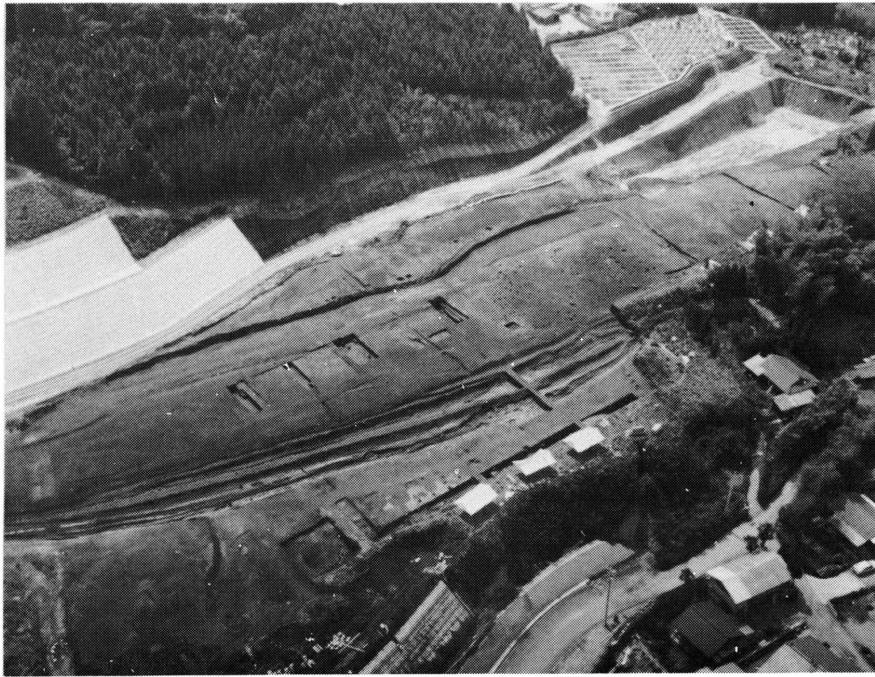
鎌倉時代以降についても土師器・須恵器・磁器・陶器・瓦質土器・土製品・石製品などがある。土師器には糸切離しの坏・皿・碗やかめ、火舎などがある。磁器は多量に出土しており、これは大きく3期に分かれる。Ⅰ期が白磁Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ類、青磁Ⅱ～Ⅳ類、青白磁の四耳壺で、12世紀初頭～14世紀前期にあたる。Ⅱ期は白磁Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ類、青磁Ⅴ～Ⅹ、Ⅻ～ⅩⅢ類、青白磁の碗、備前焼で、14世紀中頃～15世紀のものである。Ⅲ期は白磁Ⅸ類、青磁Ⅺ類、Ⅻ類、染付および陶器、瓦質土器などで、15世紀末～16世紀のものである。土製品・石製品も多くはⅢ期にあたると思われるが、近世のものがまざっている可能性もある。この中で有孔円板については紡錘車、あるいは祭祀用具の二者の可能性をもつが、ここでは断定しがたい。中世の遺構と考えられる堀は二時期に分かれ、またこれに直交する小溝もあり、その性格等については、はっきりしない点が多い。ひとつの可能性として考えられる山城は、その囲まれる領域があまりにも狭いということがあり、積極的に考え難い。今後、周辺地域の調査を待つ必要がある。

古代～中世の山崎B遺跡は、今後周辺調査も含めて慎重に検討を加える必要がある。

①	鹿児島県教育委員会	「山崎A遺跡」	鹿児島県埋蔵文化財調査報告(17)	1981
②	〃	「花ノ木遺跡」	〃	(1) 1975
③	〃	「木場C遺跡」	〃	(17) 1981
④	〃	「加治屋園遺跡」	〃	(14) 1981



1. 遺跡遠景 (航空撮影)



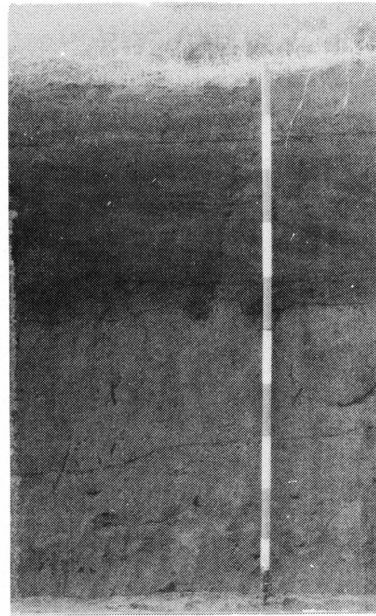
2. 遺跡遠景 (航空撮影)



1. 調査前遺跡近景（東から）



2. 確認調査風景（西から）



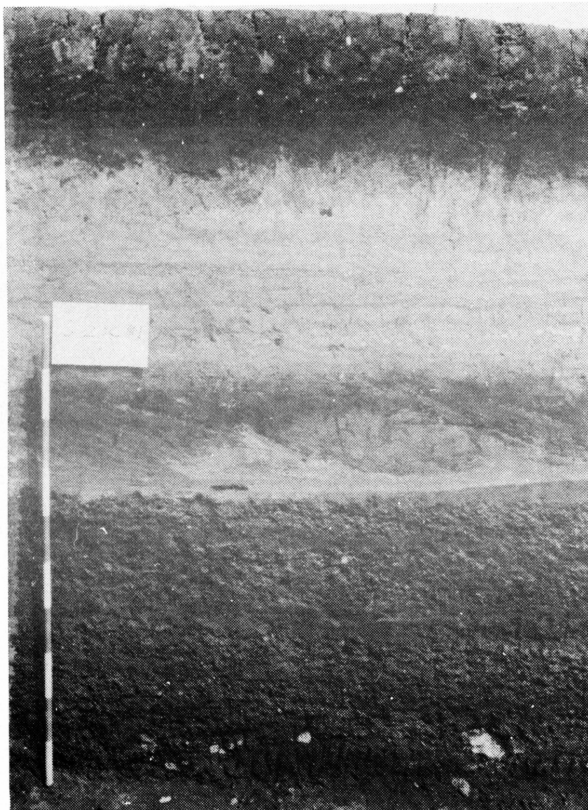
表層

第II層

第III層

第IV層

層 序



第V層

第VI層

第VII層

第VIII層

層 序



層序（シラス層直上まで）



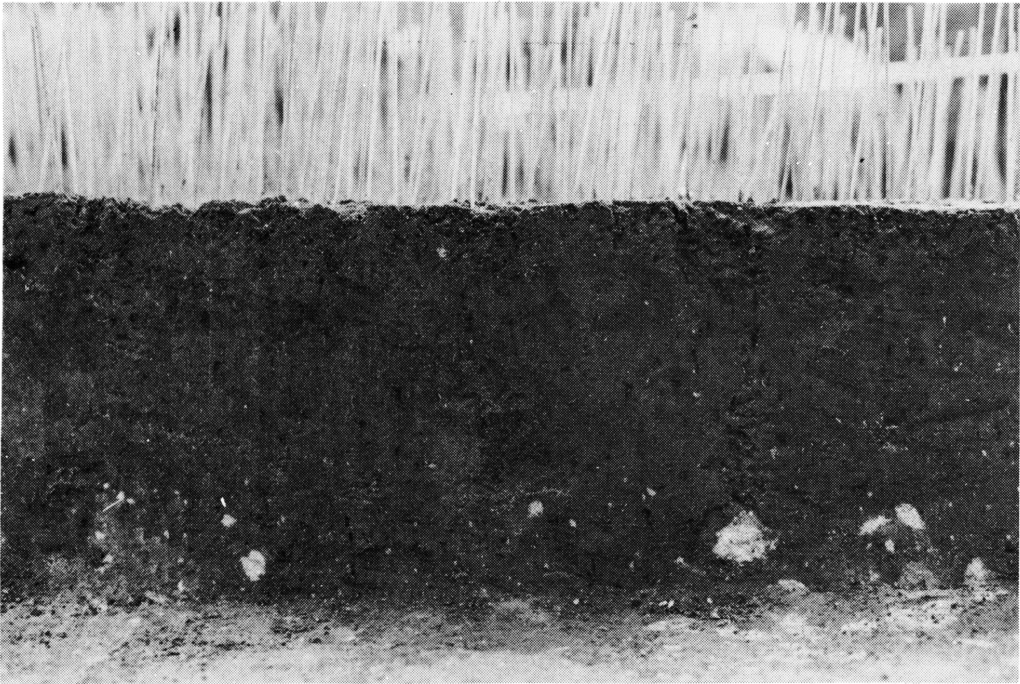
1. 調査風景



2. 調査風景と層序



1. 第IV b層炭化物出土狀況



2. 同上断面



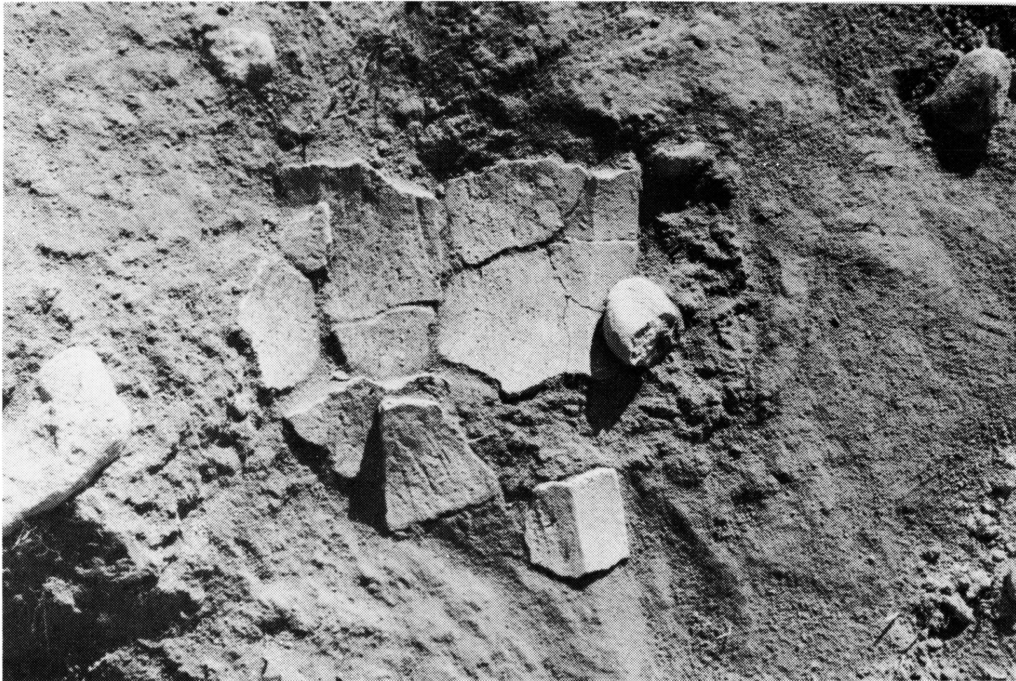
1. 集 石 3



2. 集 石 5



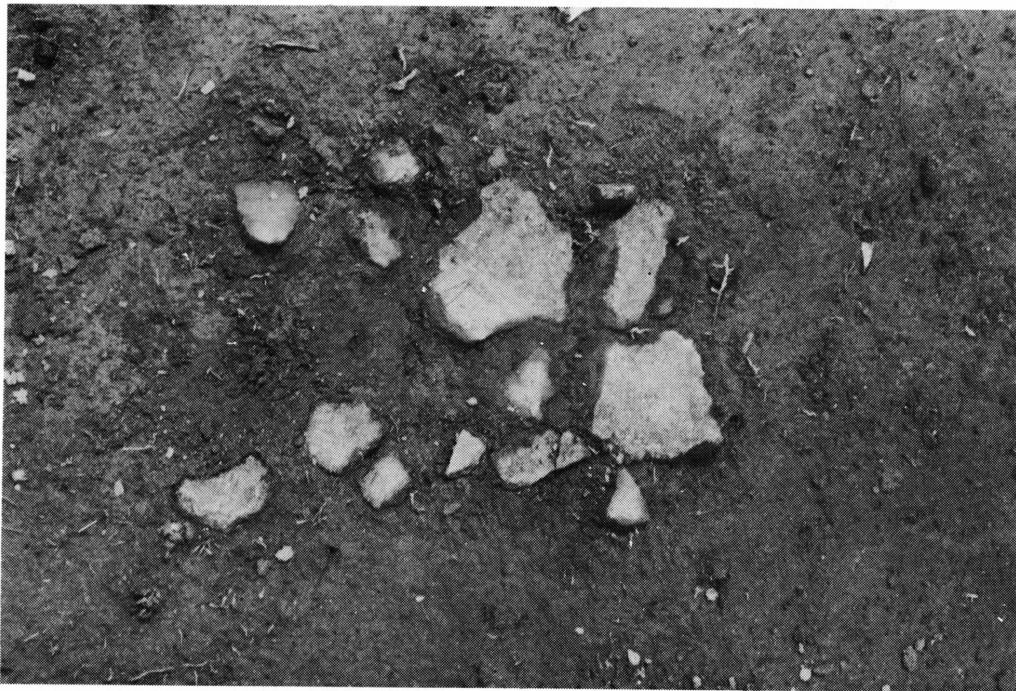
1. 集 石14



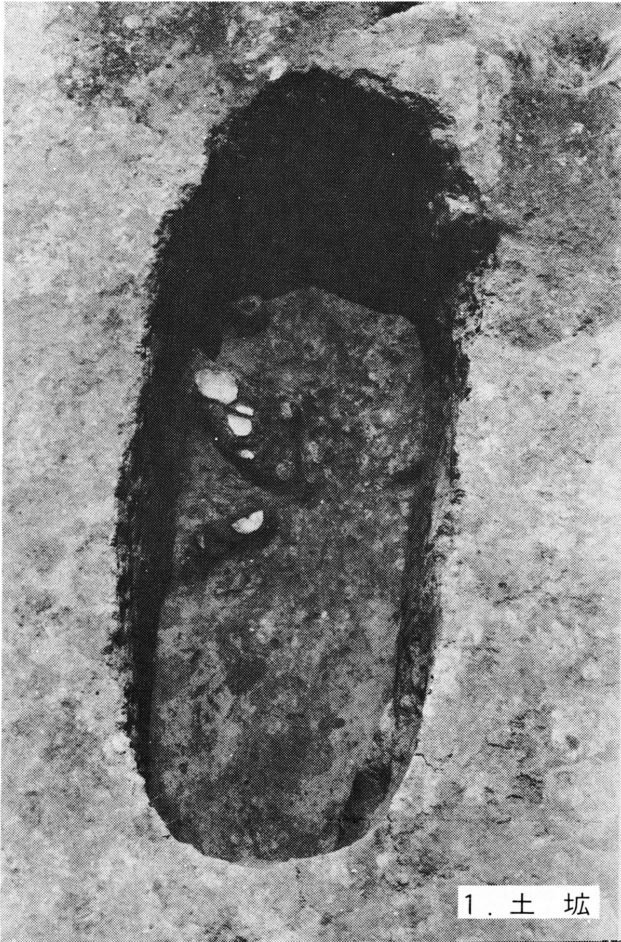
2. 146 土器出土状況



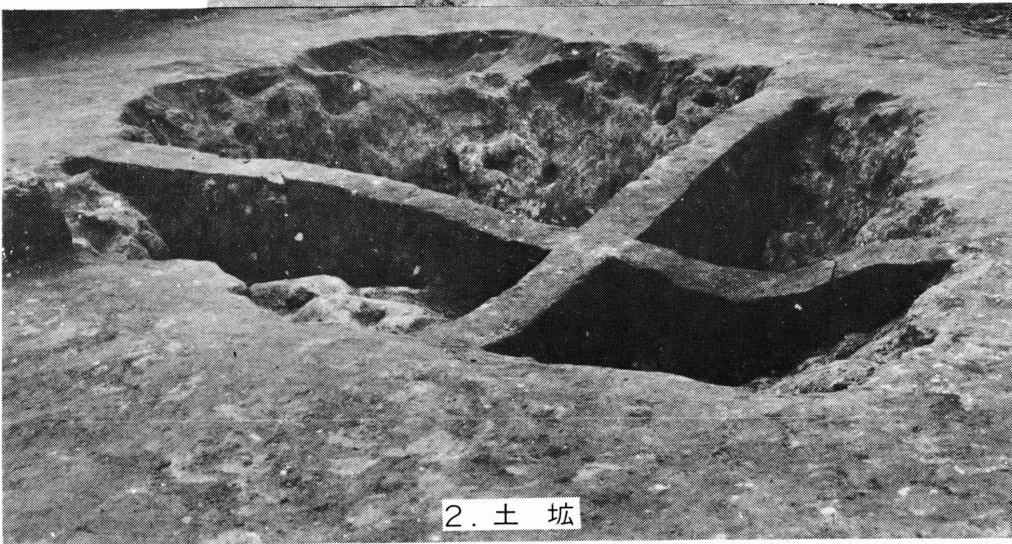
1. 159 土器出土状況



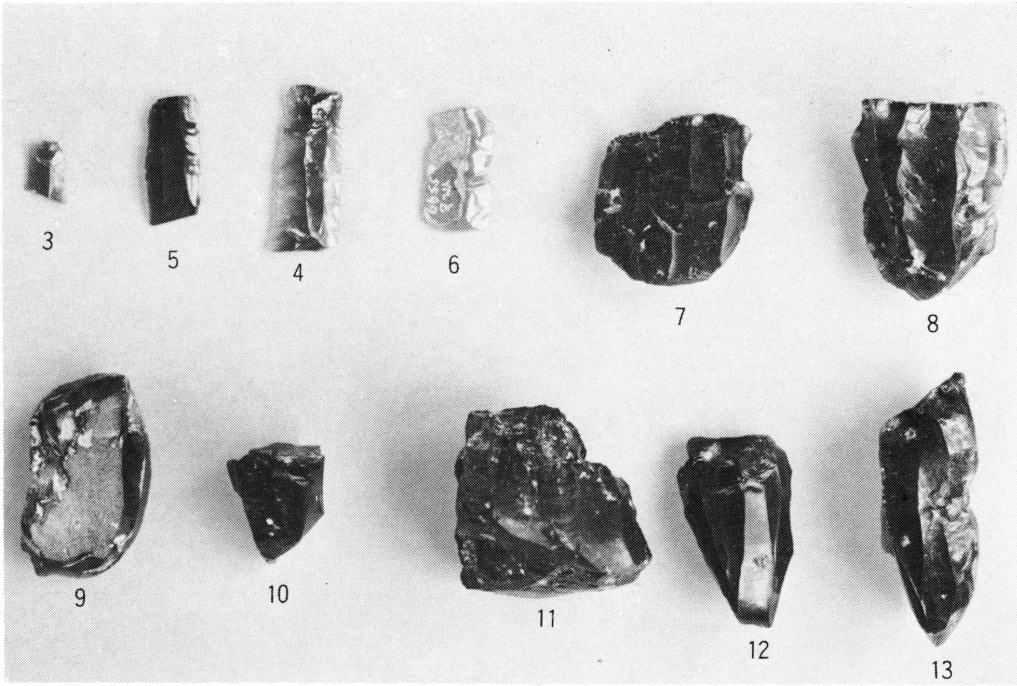
2. 160 土器出土状況



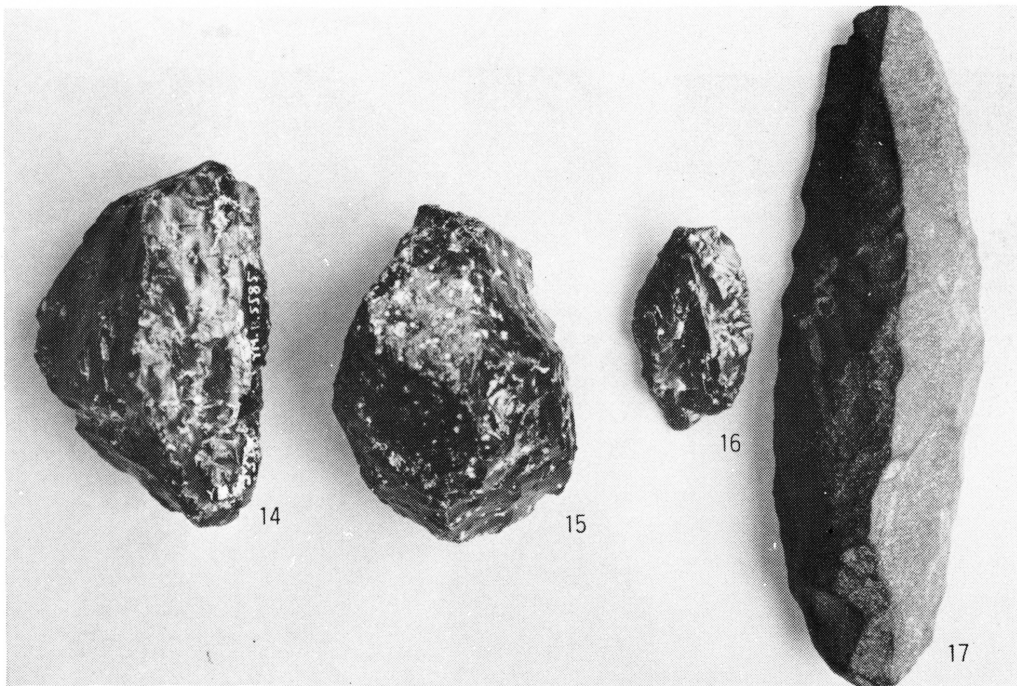
1. 土 塚



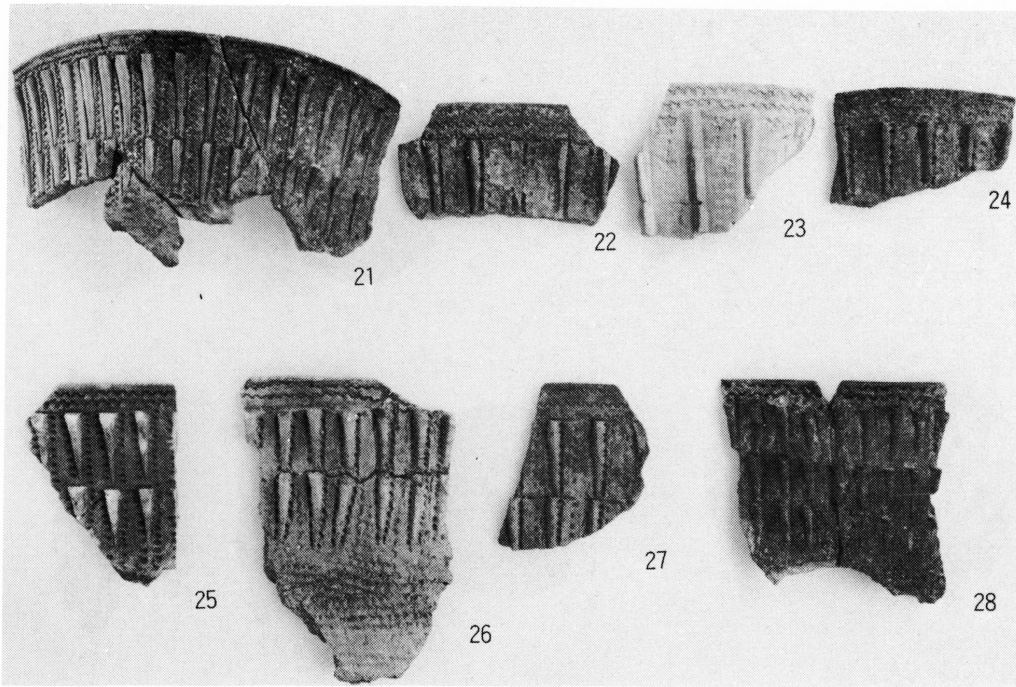
2. 土 塚



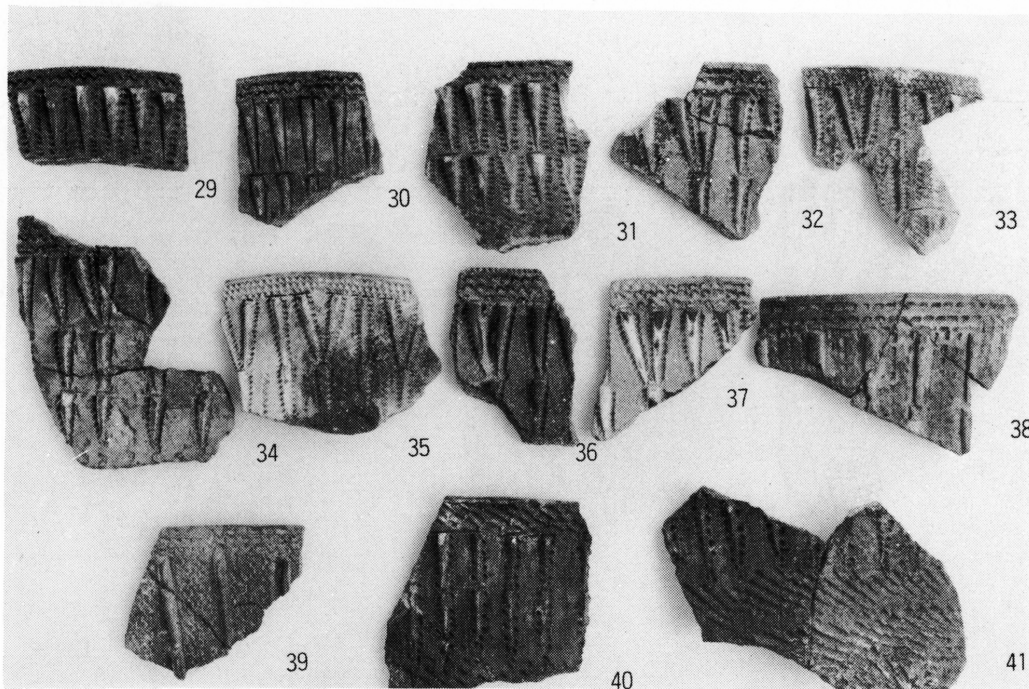
① 旧石器時代石器



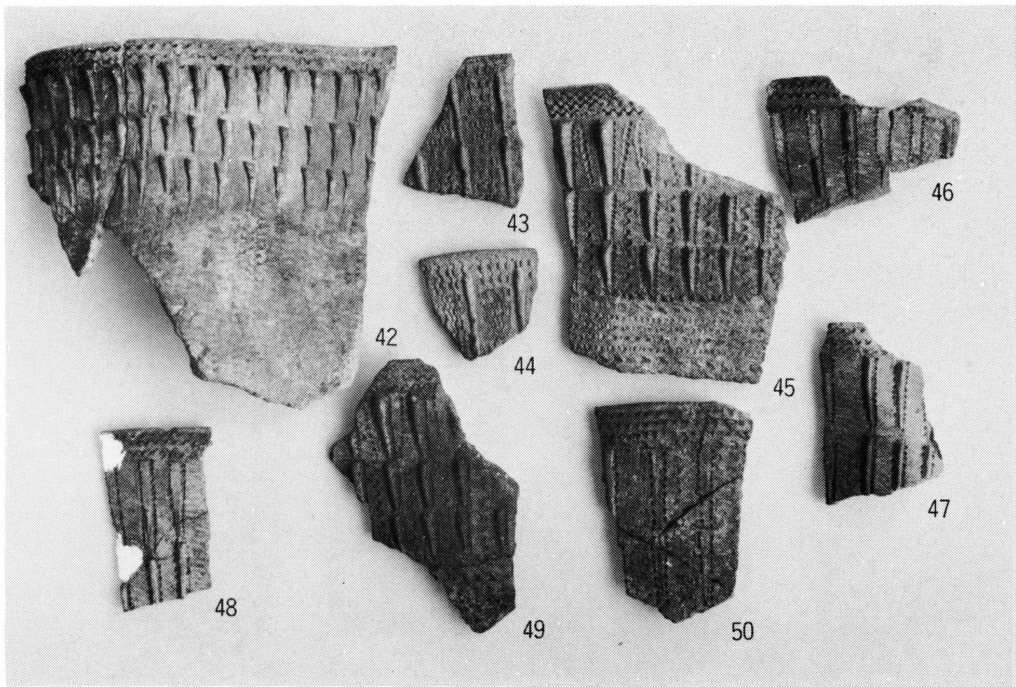
② 旧石器時代石器



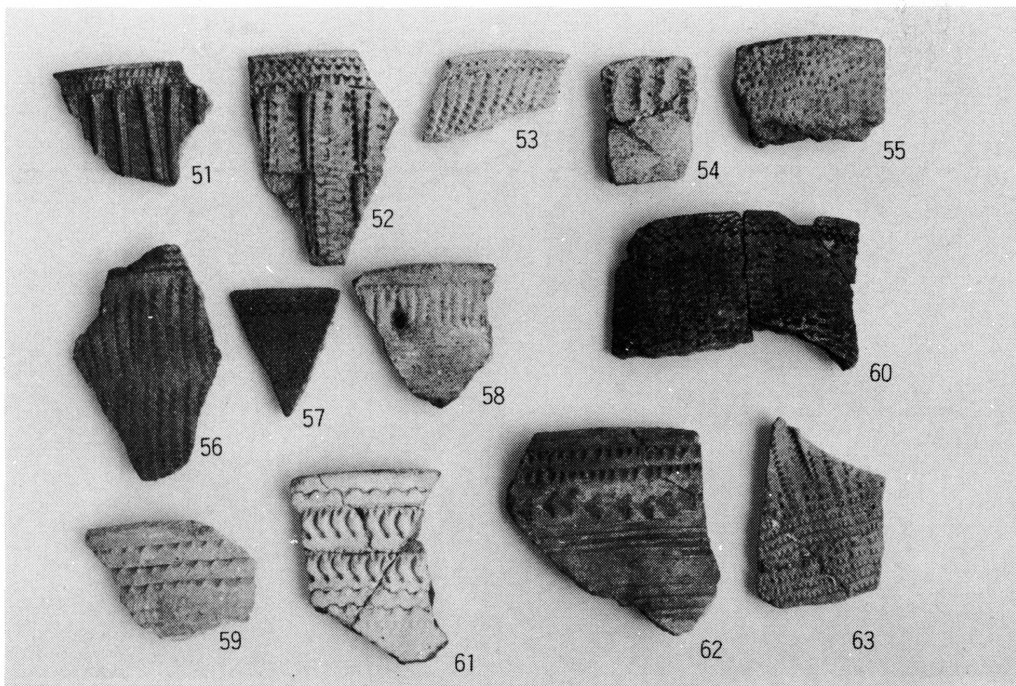
① 縄文式土器



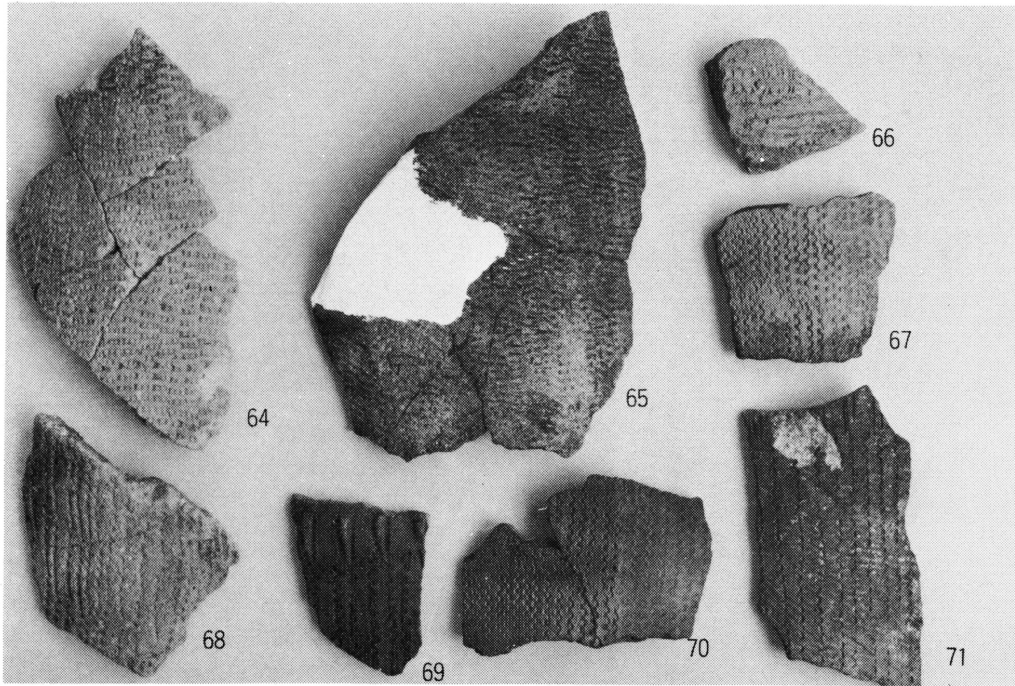
② 縄文式土器



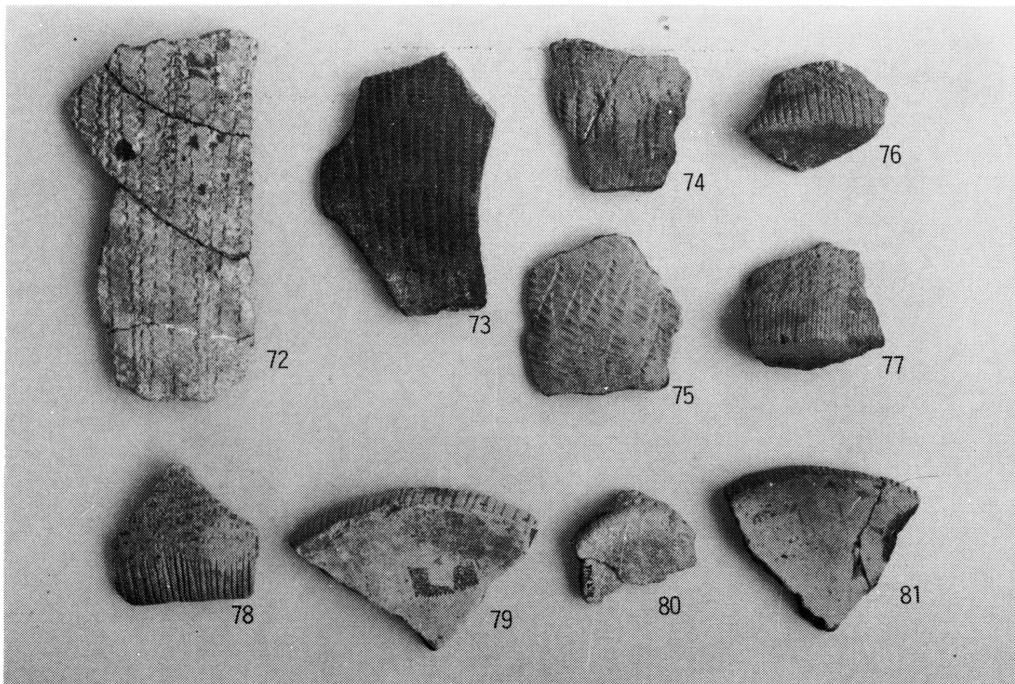
① 縄文式土器



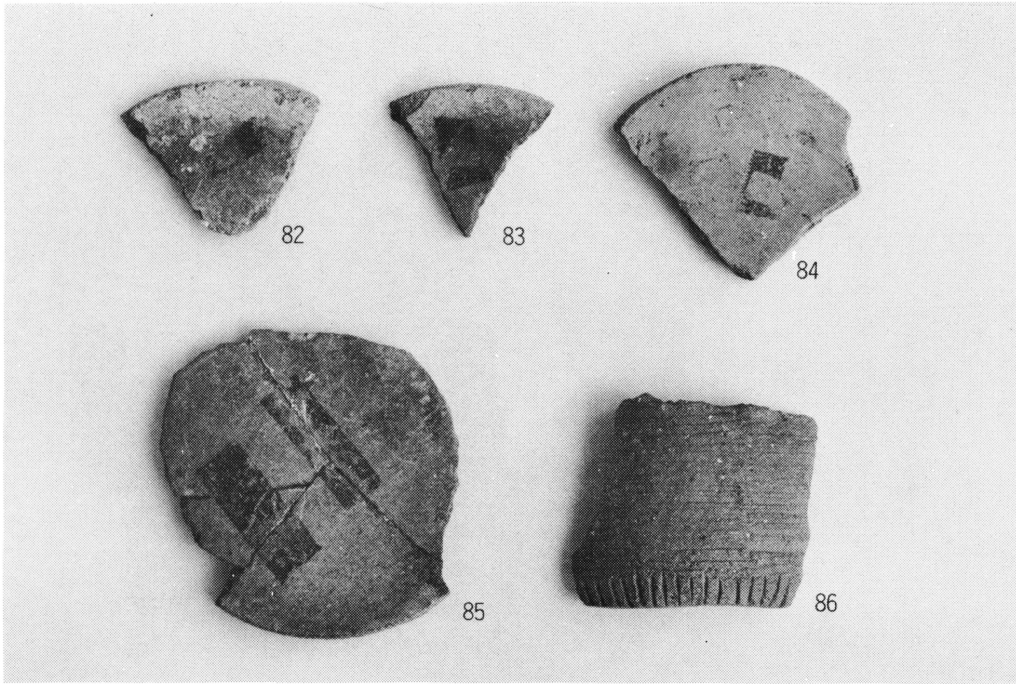
② 縄文式土器



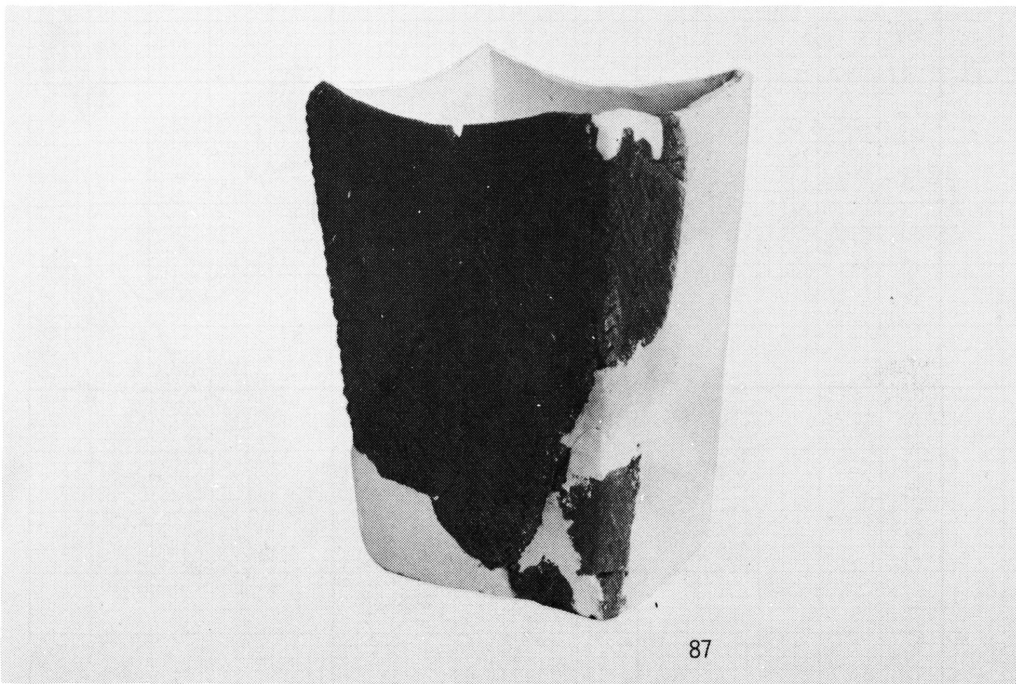
① 縄文式土器



② 縄文式土器



① 縄文式土器



② 縄文式土器